

世界の人々の宝島

濟州の物語

濟州特別自治道
濟州發展研究院

世界の人々の宝島 濟州の物語

세계인의 보물섬

제주 이야기

표지 題字 : 한국 현명찬 선생

2012 濟州WCC生態・文化探訪の道連れ

世界の人々の宝島
濟州の物語

 濟州特別自治道
Jeju Special Self-Governing Province

 濟州發展研究院
Jeju Development Institute

<<済州島物語>>

目 次

プロローグ

200万年の歴史が造った新しい火山島/13

2万5千年前の人の歴史が残る島/14

済州島の自然にまつわる物語

ハンラサン

<漢拏山>

天の川が流れる神々の庭/18

ヨンシル

神霊の部屋、霊室/20

花が波打つ山上の花園、ソングジャクジワツ/21

希少植物の展示場/22

ノロジカと鳥の楽園/24

漢拏山の悲しい記憶/25

漢拏山に出会う道/27

古藪牧馬の故郷、オリモクコース/28

ヨンシル

神仙が宿る谷間、霊室コース/29

ソングバナク

世界唯一、チョウセンシラベの森を貫く城板岳コース/30

グアヌムサ

陰しいがゆえに美しい観音寺コース/30

ベンロクダム

白鹿潭の砦を巡る天上の道、ドンネココース/31

オスンセンアグ

オルムの波の展望台、御乗生岳コース/32

ヒノキが迎える幻想の森の道、漢拏山ドゥルレ道/33

漢拏山国立公園 探訪案内所/33

<オルム>

済州火山地形の花/34

済州の暮らしの舞台/35

説話に現れるオルム/36

神々の宿るオルム/36

暮らしの拠り所だったオルム/36

四季とともにあるオルム/37

亡骸も安らかなオルム/38

済州の歴史を見守るオルム/39

済州オルムとの出会い/40

アブオルム(亜父岳) / ドンゴムンオルム / ダランシオルム / ヨンヌニオルム / タラビオルム /
/ サングムブリ / ブルグンオルム(赤岳) / セビオルオルム(暁星岳) / ノッコメオルム /
ダンオルム(堂山峰) / セミソオルム / ジョジオルム(楮旨オルム) / ソンアクサン(松岳山) /
ソンサンイルチュルボン(城山日出峰) / ゴムンオルム(拒文岳) / スウォルボン(水月峰) /
ジョンムルオルム(井水オルム) / ビョルドボン(別刀峰)/イダルオルム(二達峰)

<島>

島を持つ島/52

島の島との出会い/53

ボムソム(虎島) / ムンソム(蚊島) / ソプソム(森島) / セソム / チャギド(遮鼻島) /
ウド(牛島) / ビヤンド(飛揚島) / ガパド(加波島) / マラド(馬羅島) / チュジャド(楸子島)

<海岸>

済州火山島、海と出会う/60

済州には海にも畑がある/61

石の網で魚をとる、バダバツのウォン/62

貴重だったソグムバツ/62

ともに耕し分かち合う海の畑、バダバツ/63

男の海藻と女の海藻/64

済州の海岸との出会い/65

西帰浦層の貝類化石 / ウェドルゲ / ファンウジ12洞窟 / ドンベナンゴル / ソッゴル /
ジサッケ柱状節理帯 / ゲツカク柱状節理帯 / ソプチコジ / 南元のクンオン / 山房山と竜頭
/ 沙溪海岸 / ジャグネ浦口 / 挾才海水浴場 / 済州オルレ7コース / 済州オルレ9コース

<洞窟>

溶岩洞窟の宝島/74

溶岩洞窟のすべてを有する総合展示場/75

溶岩洞窟との出会い/77

ギムニョングル

マンジャングル

ヨンチョンドングル

グル

スサングル

金寧窟 / 万丈窟 / ダンチョムル洞窟 / 龍泉洞窟 / ベンディ窟 / 水山窟 /

ハルリム

ビルレモツ洞窟 / 翰林溶岩洞窟地帯

<河川・溪谷・滝>

済州の水を操る美しいひだ/83

済州河川のハイライト/84

美しく、あるいは常に流れ/84

済州島の生命の源/85

動く彫刻、滝/86

済州の河川・溪谷・滝との出会い/87

シンレチョン

ソジュンチョン

チョンジヨンボッポ

ジョンバンボッポ

サンジチョン

ドンネコ溪谷 / 新礼川 / 西中川 / セソカク / 天地淵滝 / 正房滝 / 山地川 /

アンドク

ハウォン

安德溪谷 / ソングェツネ / 河源スロギル

<ゴッチャワルと森の道>

美しい済州島の息吹きの源/94

ゴッチャワルの母、オルム/96

ハンギョン アンドク

翰京-安德ゴッチャワル地帯/96

エウォル

涯月ゴッチャワル地帯/97

ジョチョン ハムドク

朝天-威徳ゴッチャワル地帯/98

グジャ ソンサン

旧左-城山ゴッチャワル地帯/98

ゴッチャワルに染み込んだ済州の暮らし/98

牧畜文化の息吹き/99

石を掘り、木を切ってつくったチンバツ/99

最高の狩猟地/99

生活道具/100

思いがけない水の贈り物/100

炭の生産地/101

済州島の森の道との出会い/102

ビジャリム サリョニの森の道 / ギョレジャヨンヒュヤンリム 榧子林 / ジャンセンエスブギル 橋来自然休養林 / ジョルムルオルム長生の森の道 /
ハンナム 漢南試験林

<湿地>

生命と調和の地/106

済州島の湿地との出会い/107

チョンベク 千百湿地 / ドンベクドンサン ムルヨンアリ / 冬柏東山湿地

5万年のタイムカプセル、ハノン/110

<植物>

済州は驚くべき植物の宝庫/112

植物の系図を見てみると…/113

どんな植物がどれだけあるか/114

さらに驚くべき漢拏山の植物世界/115

海が陸地だったときに入った貴重な種/117

世界唯一のチョウセンシラベの森/118

ユネスコ生物圏保護区の植物/119

漢拏山天然保護区域の植物/120

ヒョドンチョン

孝敦川の植物/121

ソブソム ムソソム ボムソム

森島、蚊島、虎島の植物/123

<動物>

島が育む野生動物の世界/124

小さな動物が棲むようになったわけ/126

済州島の野性動物との出会い/126

漢拏山を代表するノロジカ/126

耽羅国の存在を知らしめたタカ/127

他の鳥を気使うオオアカゲラ/127

済州在来種ジェジュウグイス/128

風とともにやってきたカラス/129

済州島での時間旅行、歴史の物語

<上古史>

済州島に残された不思議な足跡/132

旧石器時代の足跡/133

新石器時代の足跡/134

青銅器時代の足跡/136

タムナ

済州島の特別な古代歴史、耽羅時代/137

羅耽はどのように始まったのか/137

羅耽はどういう国だったのか/139

<前近代史>

韓国の中のもう一つの韓国/142

耽羅国時代が終わった後/144

モンゴルと出会った100年/145

朝鮮時代の済州/147

朝鮮時代の済州に出会う/150

邑城の中にはどのような官衙があったのか/150

朝鮮時代の国立教育機関、郷校/151

グァンドクジョン

武芸を修鍊した観徳亭で済州の歴史に出会う/152

済州の歴史・文化の中心、済州牧官衙/153

ジョンイヒョンソン

済州の東南地域を管轄した旌義県城/154

チカサ

テジョンヒャンギョ

秋史を偲ばせる大静郷校/155

<近・現代史>

- 済州人、近代に会う/156
- 済州のもう一つの近代、日本統治時代/157
- 現代史の最大悲劇、済州4・3事件/159
 - 北村、ノブンスンイ4・3慰霊聖地/160
- 再建と開発、試練と挑戦/161
- 未来に向けた道のり/163

<済州の歴史の波>

- 流刑の島として600年/164
 - 朝鮮時代の済州は島流しの一番地/165
- 流人と済州文化/166
- 済州に流された人物に会う/167
 - グァンヘグン ソヒョン チュンアム ギム ジョン ドンゲ チョン オン ウアム ソン ショル
光海君 / 昭顯世子の三人の息子 / 沖菴・金淨 / 桐溪・鄭蘊 / 尤庵・宋時烈 /
チュサ ギム ジョンヒ ジョン ナンジュ ハンジュク シン イム ソジェ イム ジンハ サンスホン グォン ジンウン
秋史・金正喜 / 丁蘭珠・マリア / 寒竹・申鉦 / 西齋・任徵夏 / 山水軒・権震応
ジョ ジョンチョル ギム ユンシク
/ 趙貞喆と金允植

<済州歴史の中の香り>

- イム ジェ
朝鮮の天才詩人、林悌の済州遊覧/176
 - 済州海岸を一周する/177
 - 430年前の漢拏山はどんな姿だったのか/180
- ギム マンドク
「ノブレス・オブリージュ」の実践者・金万徳/184

<済州歴史の中のエピソード>

- 朝鮮時代の済州を世に知らせた外国人/186
 - オランダ人、ハメル / ドイツ人、ゲンテ / フランス人、タケ

<済州歴史の暗い記憶>

- 傷と渴望が産み出した平和の島/192
- 済州ならではの防御遺蹟を築く/194

別防鎮/194

戦争の傷跡に苦しむ済州/196

野外戦争博物館を連想させるアルトゥル/198

ソダルオルム旧日本軍弾薬庫跡が虐殺の場になる/199

済州島の香り、文化の物語

<口承する/神話>

一万八千の神々の故郷/202

済州の神話に会う/203

宇宙を創造した天地王 / ソチヨングクとグムベッジュ /

ソチヨン花畑の花監官、ハルラッゲンイ / 3千年を生きたサマン /
ヨンドウシ

運命の神、ガムンジャンアギ / 風の神、燃灯ハルマン

セギョン 美しい世経神、ジャチョンビ 自請妃 / ドケビ神話 / 耽羅の開国神話

<口承する/伝説>

痩せた土地を耕した島の人々/212

済州自然の二つの顔と悲劇の人物/213

一つが足りず/213

この島の脈を切ってしまうと…/214

非凡な人物の悲劇的な結末/214

<口承する/民謡>

山を越え、海を渡った済州女性のハンプリ(恨の解消)/216

粘り強い生命力で伝えられた唄/217

<口承する/済州の方言>

韓国人も不思議に思う独特な韓国語/219

独特の音がある/220

独特に分化した語彙/221

独特に作られた語彙/221
韓国語の古語の多くが残る/222
文章構造は現代韓国語と変わらない/223

<風習で伝える/巫俗信仰>

済州文化の根/224

済州の巫俗を知る/225

ボンヒャンダン ワフル ボンヒャンダン イルレッダン ヨドゥカレッダン ヘシندان
本郷堂 / 臥屹本郷堂 / 七日堂 / 八日堂 / 海神堂

どんな堂グッがあるのか/228

ヨンドウシ シマンゴク
神過歳祭 / 霊登グッ / マブルリム祭 / 新万穀大祭

グッの絶頂、グッノリ(巫祀) /230

セギョンノリ(世経遊び) / ジョンサンノリ/ ヨンガムノリ(令監遊び) /
サンシンノリ(山神の遊び)

星への信仰/232

村々で行われる村祭/233

家を司る神のためのグッ/234

定期的な家内信仰/234

不定期な家内信仰/235

<風習で伝える/歳時風俗>

生活リズムと季節情緒が溶け合う/236

先祖と子孫のための祭祀、歳時名節/237

神々も新しく始める日、立春/239

神が留守の間に引越しする、新旧間/240

体を保護する知恵、歳時の食べ物/241

安寧と豊穡を祈る歳時儀礼/242

一生の通過儀礼/244

<暮らしで伝える / 石文化>

ありふれているが、蔑ろにできない石/246

石文化の化身、石垣/247

済州石文化の鑑賞ポイント/249

済州石文化の精髓を知る/250

ハガリ

防邪塔 / 下加里の石垣 / 済州石文化公園 / ドルハルバン公園

<暮らしで伝える / 海女の文化>

海を生活の基盤としたエコフェミニスト/252

古文献に現れる済州の海女/253

済州伝統文化を収める器/254

済州海女の舞台は済州の海だけではなかった/256

歴史の自尊、済州海女の抗日運動/256

海女文化との出会い/258

ギムニョンリ

ボプファンドン

金寧里の海 / 城山日出峰のウムツゲ / 西帰浦市法環洞のジャムニョ村 /

ハンスプル海女学校 / 海女博物館

<暮らしで伝える / 地場産業>

自然順応型の産業/261

中山間草原の産物、済州馬と黒牛/262

済州馬放牧地/263

苦痛の特産物、ミカン/263

済州式農機具、犁先/264

ドクス

徳修のブルミ工芸/264

活発な生産活動の舞台、海/265

ソグムバチ

塩田とソグムバチ/266

グオム

旧巖の岩塩田/266

オンギ

済州の土で甕器を生産/267

済州産の馬尾でカッを生産/268

商業中心地、五日市場/269

ドンムン

済州・西帰浦の五日市場 / 東門在来市場 / 西帰浦毎日オルレ市場 /

済州陶芸村 / カッ展示館

<暮らしで伝える / 衣文化>

一切れの布も無駄にしなかった/272

済州島の衣文化を知る/273

ボッディチャンオッ / ソジュンイ / 頭巾とゴヌンデグドク / ムルオッ / カルオッ / 雨装 /
ホサンオッ

<暮らしで伝える / 食文化>

長寿の島、済州の料理/277

長寿の源、済州の食文化/278

長寿料理の秘訣、家庭菜園のウヨンバツ/279

海が好き、ヘルシー汁とヘルシー粥/280

アマダイの汁 / ウニの汁 / タチウオとカボチャの汁 / ボマルの汁 / アワビの粥 /
カニの粥 / アマダイの粥

夏の食欲をそそる料理、スズメダイ/283

八転び九起き、子供の手に似たワラビ/284

エコリサイクリングの豚の国、豚肉料理

ドムベゴギ / モムグク / ドッスエ / 豚肉入り温そうめん

苦難と試練の克服、馬肉を食べる文化/287

渇きの解消、エネルギーの補給… 伝統的な飲み物/288

酒の熟成する町、城邑のオメギ酒、ゴソリ酒/289

<暮らしで伝える / 住文化>

独特の暮らしの空間/290

済州の伝統文化をそのまま残す城邑民俗村/291

多彩な風景のある村/292

済州の伝統的な村はどうだったのか/293

済州民俗村/294

済州島あれこれ

<気候と土壌>

一つの島、いろいろな表情/296

なぜ地域によって天気が異なるのか/297

風に敏感な島/297

火山と天候のため、地域によって異なる土壌/298

土壌によって異なる文化/299

<人口と集落>

歴史の浮き沈みの中で/300

揺れ動いた朝鮮時代の済州の人口/301

出陸禁止令、数万人が島を離れ/301

人口が半減した日本統治時代/302

人口成長が始まる/303

歴史とともに発達した集落構造/304

都市化する/305

水に沿って村が形成/306

村のムルトン/307

水の貴重な島、済州/308

韓国の名水100選のうち、八つが済州名水 / 済州初の水道

<産業経済>

数値で見る済州経済/310

全国を席捲する農産物/311

FTAの波にさらされる済州ミカン産業/311

日増しに成長する観光産業/312

観光客 1 千万人の時代に向かって/313

済州の産業経済を知る/314

一年中休みなく働く済州の農家/314

農繁期より忙しい農閑期/315

済州経済生活の基盤、海女の「潜り」/316

ミカン産業が済州に与えた贈り物/317

<近代芸術活動>

済州の創作舞台/318

文学芸術活動 / 美術芸術活動 / 音楽芸術の世界 / 演劇芸術活動 / 写真芸術活動

<テーマで体験する済州>

目で見えて、耳で聞いて、心で感じて/327

国立済州博物館 / 済州特別自治道民俗自然史博物館 / 思索する庭園 / オソルロク /

アホプグッ椅子の村 / 母・父・祭りの村 / 仏塔寺 / 薬泉寺 / 天王寺 / 法華寺 /

山川壇 / 節婦岩 / 納邑里暖帯林(錦山公園) / 如美地植物園 / 翰林公園 /

ノロジカ生態観察院 / 金永甲ギャラリー「ドゥモアク」 / 日出ランド / 済州4・3平和公園 /

済州三多水工場 / スマートグリッド広報館 / 杏源風力発電団地 /

済州市環境施設管理事務所

エピローグ

風を受けて息づく自然環境の宝庫/342

済州生物圏保護区/343

済州世界自然遺産/343

済州、世界自然遺産への登録まで/345

世界自然遺産「済州火山島と溶岩洞窟群」/346

済州・世界ジオパーク/346

世界でも珍しい済州世界ジオパーク/348



プロローグ

200万年の歴史が造った新しい火山島

済 州は海から始まった。その胎動は200万年前に遡る。済州は粘土と砂の層を抱き、浅い海の中で眠っていた。

ある日、海底の地下深く眠っていた熱いマグマが弱い地層を突き抜けて海水と出逢い、強烈な爆発を引き起した。済州誕生のプロローグ、水性火山活動の始まりだ。

度重なる水性火山活動でできた多くの火山体が、長い時間をかけて波に削られ、海洋堆積物と混ざり合い、厚い堆積層を形成する。このようにしてできる堆積層が海水面よりも高く積み重なった。60万年前からは、高く盛り上がった堆積層を突き破って溶岩が噴出し、流れる溶岩は堆積層を覆い、溶岩台地を造った。

30万年前からは、あちこちで溶岩台地を貫いて溶岩が噴出し、単成火山体を造った。火山活

動は次第に島の中心部に移り、吹き出た溶岩が蓄積し、楯の形をした楯状火山が形成された。この頃には、流れ出る溶岩が多くの単成火山体と洞窟を造り出した。

楯状火山体の頂上から溶岩が噴出したのは16万年前のことだ。この時、溶岩ドームが形成された。2万5千年前、楯状火山体の頂上にできた溶岩ドームで再び火山が爆発し、噴火口が

ハンラサン

形成された。このようにして今日の漢拏山ができあがった。

済州は海で形成されたが、常に島だったわけではない。氷河期と間氷期を経て、海水面が上下することで、ある時期は海に囲まれ、また、ある時期は大陸とつながっていた。

済州が完全に島になったのは、1万8千年前の最後の氷河期以後、海水面が現在の高さとほぼ同じになってからだ。その後も火山活動は続いた。5千年前には島の東側と西側の海岸地帯で水性火山活動が起きた。そして、1千年前の火山活動を最後に済州島は現在の姿を整えた。

このように、済州は約200万年前に生まれ、1千年前に完成した島だ。遙か遠い昔に生まれ、長い期間をかけて造り上げられたが、地球の歴史から見れば、つい昨日のことだ。

宇宙に抱かれた地球という緑の星が生まれたのは、46億年前のことだ。地球の歴史を24時間として計算すれば、1秒は5.3万年だ。済州が生成され始めた200万年前は38秒前になる。

このように計算すれば、済州は一日の未明から朝、昼、夕方を過ぎ、翌日の午前0時になる直前、深夜11時59分22秒に地球上に現れ、つい先ほど完成した島ということになる。怒久なる地質時代に比べれば、できたばかりの火山島だ。

済州火山島はできたばかりの島だが、その誕生から完成までの過程をそのまま刻んだ地形を保全している島でもある。済州の島全体が神秘的な火山活動の痕跡を残した生きた地質博物館なのだ。

2万5千年前の人の歴史が残る島

➤ の新しい火山島にはいつから人が住み始めたのか。済州島には2万5千年前の後期旧石器時代の遺跡がある。この島で生活した最も古い人間が残した跡だ。その次は最後の氷河期が終わる頃、済州が大陸とつながっていた1万年前に、この島に来て暮らし始めた初期新石器の人々の遺跡だ。彼らが子孫を産んで定着する間に、済州は徐々に島になっていった。

5千年前には、相当数の人々が生活していた。その頃、東西の海岸で済州の最後の水性火山活動が起きたため、多くの人が火山の爆発を目撃したことだろう。彼らは火山が噴火する光景を見ながら何を思っただろうか。

済州には数多くの説話が伝えられている。その中には天が開き、地が生まれたという話、巨大な女性神が島をつくる話、漢拏山の噴火口が形成される話もある。そして、人間の世界を管掌する神々の話も多い。これらの物語はいつできたのだろう。数千年前の火山活動を見守った人々の心から始まったのではないだろうか。済州島の説話は、神の手でなければ造り上げることのできない偉大な自然の物語を伝えており、我々の想像力を刺激する。

済州島は新石器時代以後、青銅器、鉄器時代を生きた人々の足跡も所々に残している。その痕跡をたどる時、済州島は先史時代の時間を順を追ってたどるタイムマシン^{タムナ}に変わる。

タイムマシンが2千年前に到着すれば、この島の人々が築いた古代王国耽羅の物語に出会う。耽羅はこの頃に形成され、千年の歴史を築いた独立国だ。海路を開き、朝鮮半島、中国、日本と活発に交易した海上王国だった。

千年前まで耽羅国だった済州が、独立国としての地位を失ったのは高麗時代だ。この島が「地方」という意味の「済州」になったのは1200年代のことだった。

その後、モンゴル族の元の干涉を受けながら100年の歳月を過ごし、朝鮮時代の500年間は嘆かわしい流刑地の歴史、過酷な徴租の歴史、出陸禁止で海路が閉された閉鎖の歴史を経ながら桎梏の歳月を送らなければならなかった。

日本統治時代には、旧日本軍が済州島を主要軍事基地とし、島全域に軍事基地を設置したため、済州の人々は軍事施設工事に動員され、辛苦をなめた。済州の人々の多くは旧日本軍の戦時総動員令により、徴兵、徴用などの名目で賦役を課され、また戦地に送られた。第二次大戦直後の韓国現代史では、朝鮮戦争の次に多くの犠牲者を出した悲劇的な済州4・3事件が起きた。7年7か月にわたった4・3事件は、国際的な冷戦、南北の分断、左・右翼の理念対立、中央政府の済州に対する認識などが複雑に絡み合って起きた総体的な事件だった。

済州には、日本統治時代の末期に旧日本軍が造った巨大な軍事施設が散在している。済州4・3事件と関連した遺跡は海岸から山間地帯と漢拏山の山奥まで、済州島の全域に数多く残されている。痛々しい教訓として残されたこれらの遺跡は、再び起きてはならない悲劇の歴史を伝え、平和の尊さを悟らせる。

済州が「観光」の島として注目され始めたのは1970年代に入ってからのもので、わずか40年前のことだ。

済州は島そのものが観光資源だ。島を形成する自然環境、そこに刻まれた人々の歴史、その中に溶け込んでいる文化、済州で育てられる生産物など、観光の対象にならないものがない。それら全てに共通するのは「独特だ」という点だ。そして、それらは互いに結び付いている。独特な自然環境が、独特な歴史を刻み、その自然環境と歴史が独特な文化を造り上げたのだ。さあ、済州島が聞かせてくれる独特な物語の世界に旅立とう。



濟州島の自然にまつわる物語



ハンラサン

漢拏山

オルム

島

海岸

洞窟

河川・溪谷・滝

ゴツチャワルと森の道

湿地

植物

動物



漢拏山

天の川が流れる神々の庭

済

ハンラサン
州島の真ん中にそそり立つ巨大な楕状火山である漢拏山。この山は遠くから見れば単なる山だ。しかし、近づけば近づくほど異なる姿で我々に迫り、知れば知るほど驚きと感動を感じさせる不思議な山だ。



済州で生まれ育った人にこう尋ねてみよう。

「どの町から見た漢拏山が最も美しいですか」

その答えは十中八九、その人の生まれた町のはずだ。済州の人々はそれぞれ、自分の町から眺める漢拏山こそが最も美しいと語る。漢拏山は済州島のどこから眺めても美しいということだ。

ベクトウサン

漢拏山の高さは1,950mだ。朝鮮半島では白頭山の次に高く、大韓民国では最高峰だ。韓国最大の島である済州島に、やはり韓国最高の山がそびえているのだ。

この山の名である「漢拏」は、山が高いことから付けられた。天の川に手が届くというほどで、これは並の高さではない。神仙の宿る山という意味で

ヨンジュサン

「瀛州山」とも呼ばれる。

山の形から付けられた名前もある。峰が平らであるこ

ドウムアク

ウォンサン

とから「頭無岳」とも、峰が高く丸いことから「円山 別名トウリメ」とも呼ばれた。峰の中が釜のように窪んで

ブアク

いることから「釜岳」という名前もある。これは漢拏山の頂上の噴火口を指している。

噴火口の周りも独特だ。噴火口は一つだが、その東

西は明らかに異なる2種類の岩石が囲んでいる。これは2度の噴火の痕跡だ。最初は16万年前、粘性の高い粗面岩質の溶岩が吹き出し、遠くまで流れることなくドーム型に固まった。2万5千年前には頂上にある隙間を割って粘性の低い玄武岩質の溶岩が再び噴き出し、現在の火口ができあがったのだ。

この噴火口の形成に関する興味深い説話がある。漢拏山に神々が宿り、畏れ多くも人間がこの山に登ることができなかった昔、獵師が一人、禁忌を破って頂上を目指した。獲物を発見した獵師は、獲物を目掛けて矢を射ようとしたが、手元が狂い、玉皇上帝の尻をかすめてしまった。これに憤った玉皇上帝が漢拏山の峰を抜き取り、それを放り投げたため噴火口ができ、飛ばされた峰は山房山になったという。

サンバンサン

ベンロクダム

噴火口には白鹿潭という湖ができた。空が降りて憩い、上り疲れた雲が宿るこの頂上の湖には

神仙が白鹿に乗って現れるという伝説がある。

ヒョルマンボン

漢拏山でも最も高い場所、その絶頂の名は「穴望峰」だ。白鹿潭を眺めていれば、白鹿に乗った神仙が穴望峰の上を流れる天の川をつかもうとする姿を目にするかも知れない。

白鹿潭を囲む峰を中心に、済州の人々が「オルム」と呼ぶ単成火山体が東西南北に群がり、壮観を成す。

サラ

ソンノルオルム

フクブルグンオルム

ムンジャンオリ

白鹿潭の東側には紗羅オルム、城板岳、土赤岳、水長兀などのオルム群が波のように続く。

オスンセンオルム

そして、西側にはジャングモク、クントウレワツ・チョグントウレワツ、ウイツセオルム、御乗生岳が半

ワンガンヌン

サムガッボン

月を描いて並び、幻想的な風景を醸し出す。また、南北には王冠稜、三角峰、バンアオルムが扇のように広がり、ひと味違う風情が感じられる。

タムナ

これらのオルムの間には、耽羅溪谷、Y溪谷、ソンボルルンネのような済州最大の河川もある。

漢拏山の溪谷は壮観を成すだけでなく、重要な役割を担っている。普段は水無川だが、漢拏山に雨が降れば、全ての雨水を首尾良く流す天然の排水路の役割を果たす。済州の地質とこのような漢拏山の河川のおかげで、大雨が降っても洪水の恐れがない。

ヨンシル

神霊の部屋、靈室

漢拏山はどこから見てもすばらしく、どこから登っても美しい。最も代表的なのは「神霊の部屋」

ヨンシル

と言われる靈室だ。名前に神秘さが漂うここは、古くから漢拏山で最も美しいとされるほど、秀



ヨンシルキアム

漢拏山の絶景に数えられる靈室奇巖

麗な景観を抱いている。

オベクジャングン

頂きから数百メートル下の谷間まで、済州の人々が五百將軍と呼ぶ数百の石柱が立つ。

一度に見渡すことのできないほど巨大なこの絶景は、季節ごとに異なる風景を見せてくれる。

春はチョウセンヤマツツジ、カラムラサキツツジがさまざまな形の奇岩怪石と調和して、水彩画のような風景を描き、秋には山全体を焼き尽くすような濃艶なモミジが鮮やかだ。緑深き夏、大雨の後に絶壁を流れ落ちる滝は暑さを忘れさせる。

靈室を訪れた昔の人々の言葉が興味深い。「層を成す岩々が玉のような屏風をつくり、その間を三筋の滝が流れ落ちる。島の中で山川に囲まれた風景の最も美しい所」という評もあり、

「並んでいる奇岩怪石の形が、腰に刀をさした將軍、髪を結った美女、僧が跪いて拝む姿、踊る神仙の姿、トラが腰かけている姿、空を飛ぶ鳳凰など、さまざまな姿をかたどっている。漢

ブンアク

グムガンサン

拏山は石でできた山で、山裾も莊嚴だが、特にこの靈峰は玉を並べたような楓嶽秋の金剛山を指すに似ている。また、城壁のようでもあり、実に味わい深い」とも描写された。

美し過ぎたためか、悲しい説話も伝わる。

ある女性が五百人の息子を産んだ。凶年のある日、成長した息子たちは獵に出かけ、母親は息子たちのために粥を炊いた。五百人分の粥を炊く釜がどれほど大きかっただろうか。粥を炊いていた母親はグラグラ煮え立つ釜の中に落ちて死んでしまった。獵から帰った息子たちは母親が釜に落ちたことにも気づかず、粥をたいらげた。末の息子が母親を捜し回っている時、釜の底に骨が見えた。それを見て母親を食べてしまったことを悟った息子たちは、あちこちに立ったまま慟哭し、とうとう岩になってしまった。五百將軍と呼ばれる靈室の奇岩怪石がこの息子たちだ。末の

チャギド

息子は済州の西の端の遮帰島で、済州を守る守護神になった。

五百人の息子たちが流した血の涙はどれほど濃かっただろう。春になると今でもカラムラサキツツジやチョウセンヤマツツジが漢拏山を覆い、赤く染めると伝えられている。

花が波打つ山上の花園、ソンジャクジワツ

靈室の奇岩を越えた1600高地一帯には、漢拏山で最も広い野原、ソンジャクジワツが広がる。

「ジャクジ」は小さめの岩を、「ワツ」は野原を意味する済州の方言だ。ソンジャクジワツは、小さめの岩が人のように並ぶ広い野原という意味だ。この岩は周辺の岩より白く「ソルダ熟していないの意」という意味の「ソン」とジャクジワツが結合して地名になったという見解もある。

白鹿潭を抱く漢拏山の主峰が巨大な王冠のように横たわる広い高原に、火山の噴火で飛び上がった溶岩の塊が所々に落ち、その岩々の間にカラムラサキツツジ、チョウセンヤマツツジ、ガンコウラン、ハイバクシンが群生している。



春のソンジャクジワツではピンクの花が波打つ

冬の間に積もった雪が溶け、野原いっぱいにカラムラサキツツジやチョウセンヤマツツジが咲けば、ソンジャクジワツの秘境は最高潮に達する。見渡せる風景の半分は青い空で、半分はツツジのピンク色だ。ヨンシル オベクジャンゲン 霊室の五百将軍が流した涙だという伝説のとおり、ツツジは絶えることなく咲き続け、花の波を打つ。

ソンジャクジワツに広がるピンク色の海は、我を忘れるほど美しい。しかし、その色は目にはまぶしく、その香りに酔えば、心が痛む。五百将軍の悲しい伝説のためではない。鮮やかでありながら、どこかもの悲しく、美しいけれども胸をときめかせてばかりいられない神妙な秘境が、ソンジャクジワツで波打つピンクの花の海だ。

ソンジャクジワツにはカラムラサキツツジ、チョウセンヤマツツジばかりでなく、イブキジャコウソウ、サクラソウ、タカネシオガマ、コケリンドウのような名前も可憐な野花があちこちに咲き乱れ、この山上の花園を天然の色で織り上げている。

希少植物の展示場

標高により、さまざまな植生が分布する漢拏山は植物の楽園であり、各種の希少植物の展示場だ。亜熱帯植物から亜高山植物まで2,000種以上が漢拏山に育つ。朝鮮半島に分布する植物は約4,500種であり、その半分が朝鮮半島の面積の1%にもならないほど狭い、この地域に

植生しているのだ。

漢拏山には特産植物が多い。その中でも韓国語で「漢拏」「済州」「島」という言葉の付く名前が多く、日本語名では「タンナ」「チョウセン」「サイシュウ」などの言葉が付いている。それは、済州の植物が火山島の地質と強い風、海洋性の気候に適応し、本来の性質とは異なる種に分化したためだ。サイシュウウスユキソウ、タンナシラタマソウ、タンナトリカブト、チョウセンノギク、サイシュウヤクシソウ、タンナショウマ、タンナカンスゲ、チョウセンオウギ、タンナシャジクソウ、タンナミネヤナギ、サイシュウメギ、サイシュウハタザオなどが代表的な済州特産の植物だ。これらは高山植物でありながら、背は低く、色合いの深い花を咲かせ、見る者を魅了する。

漢拏山は地球上で最も小さい植物であるイワウメの北方限界地だ。高さが2cmのこの植物は、韓国環境省が指定する1級絶滅危惧種であり、韓国では漢拏山頂上の岩壁にだけに植生する。

漢拏山でも最も厳しく痩せた環境に根をおろし、夏の初めに、ウメに似た5枚の花びらを開く。青々とした葉の上に咲いた花の姿はすがすがしく、風に揺れる姿は美しいというよりいじらしい。



チョウセンノギク

漢拏山はソメイヨシノの自生地でもある。ソメイヨシノの自生地は日本だとされていたが、研究の結果、漢拏山が自生地であることが明らかになった。他にもエドヒガン、オオヤマザクラなどの15種のサクラが漢拏山に植生している。これらのサクラは春に薄桃色のはなを一度に咲かせ、山全体を華やかに染める。

漢拏山の数多くの特産植物の中でも目を引くのは、チョウセンシラベだ。標高1,400mの高地から頂上まで群落を形成するチョウセンシラベは、地球上で韓国にだけ植生する固有種だ。チョウセンレンギョウ、ショウコウミズキとともに世界の植物系の系譜に「Abies Koreana」という学名が記された韓国を代表する植物だ。

ドクユサン チリサン

徳裕山、智異山高山地帯でまばらに育つチョウセンシラベとは異り、漢拏山のチョウセンシラベは600haにもなる広い地域に群生している。漢拏山は世界唯一のチョウセンシラベの純林を育てているのだ。



ソメイヨシノ

森林浴にも適した植物だ。

漢拏山のチョウセンシラベの森を歩きながら、葉に手を触れれば、その香りで身も心も爽やかになる。

一年中、緑の葉をつけたチョウセンシラベの森は真夏でも苔が生え、自然の神秘を感じさせる。

ノロジカと鳥の楽園

うっそうとした原始林を誇る漢拏山には、ノロジカ、アナグマ、チョウセンイタチのような陸上動物と両生爬虫類が数多く生息している。このうちノロジカは漢拏山を象徴する動物で、この山でよく目にする。一時期は無分別な乱獲で、絶滅の危機に追い遣られたが、ノロジカの保護運動により、その数が再び増えている。

1918年、プラントハンターとして知られるイギリスのアーネスト・ヘンリー・ウィルソン Ernest Henry Wilson:1876-1930が、漢拏山で採取したチョウセンシラベをイギリスのアーノルド樹木園の研究報告書に載せた。それにより、漢拏山が世界で唯一のチョウセンシラベの自生地であることが世界的に認証された。ウィルソンは韓国の多くの植物の中でも最も興味深い種としてチョウセンシラベを選んだが、それほどこの植物は独特な植物なのだ。

ウィルソンが採取した漢拏山のチョウセンシラベは、クリスマスツリーの元祖になった。当時、ヨーロッパではこの木を改良し、クリスマスツリーの市場を掌握しようというブームが巻き起こったのだ。今だったら一株売れるたびにロイヤルティーが支払われて当然だが、時代的な状況のゆえ、主なき英雄になった漢拏山のチョウセンシラベは、今日もハーバード大学のアーノルド樹木園で孤独にその威容を誇っている。

すらりとした円錐形の美しいチョウセンシラベは、まっすぐに上に伸びる独特な実を結ぶ。実の色も黒、青、赤などさまざまだ。常緑の針葉樹で、フィトンチッドの含量が多く、



漢拏山のノロジカは個体数が増え、あちこちで見られる。

それよりもよく見られる動物はハシブトガラスだ。黒い羽と鋭い目つきが魅力的なこの鳥は、五色の羽色を持つアカゲラとともに漢拏山に生息する代表的な留鳥だ。アカゲラは木の害虫を食べ、ハシブトガラスは森の掃除をしてくれる。最近では漢拏山の登山客が与える食べ物の味を覚え、登山客の訪れる時間になると、数十羽のハシブトガラスが群れをなして集まっている。ユーラシア大陸と北太平洋をつなぐ飛び石のように海に浮かぶ済州は、大陸と海洋を飛び交う渡り鳥の経由地にもなるが、漢拏山はサンコウチョウやヤイロチョウのような希少渡り鳥が越冬する場所でもある。

漢拏山の悲しい記憶

日本統治時代、旧日本軍は済州島を日本本土を防御するための戦略的な要衝地とし、一名「決7号作戦」を立てて済州全域に軍事基地を建設した。漢拏山も例外ではなかった。御乗生岳には当時の陣地洞窟や対空砲陣地などがそのまま残っている。

このような軍事基地は、第二次大戦後に済州全域を恐怖に陥れた済州島4・3事件で、遊撃隊の本拠地となり、血生臭い戦場にもなった。今も漢拏山には遊撃隊と討伐隊の駐屯所として利用された石垣、隠れ処、遺物が、当時の痛々しい傷跡として残されている。済州島4・3事件により、漢拏山には1954年まで入山禁止令が敷かれた。

韓国で初めて山岳遭難事故が起きたのも漢拏山だ。日本統治時代は登山家が訓練のために



ムルジャンオリ

水長兀オルムに残る旧日本軍の陣地洞窟

山に登ったが、1936年、当時の日本京城大学山岳部の学生だった前川智春氏が下山の途中、竜鎮閣溪谷で雪崩れに遭い死亡した。

ヨンジンガク

チョン・タク

また、第二次大戦後、韓国山岳運動の先駆者だった韓国山岳会の田鐸隊員が、漢拏山登山で遭難し、死亡した悲運の場でもある。

漢拏山でこのような遭難事故が起きた理由は、当時の劣悪な装備が原因でもあるが、根本的には漢拏山独特の気象と地形のためだ。高山地域に発達した平原と垂直な谷、変わりやすい

ヨンジンガク

天候、強い風と積雪量の多さなどが原因になった。漢拏山頂上付近の竜鎮閣やジャングモクなどでは、ヒマラヤの雪山のように雪崩れがよく発生する。このような悪条件により、漢拏山はヒマラヤなどへ遠征登山に向かう登山家が必ず登る山岳コースのメッカになった。毎年冬になると、韓国内の登山家が吹雪の中、険しい雪山を登りながら闘志を燃やしている。

漢拏山に出会う道



漢拏山の登山道は城板岳、観音寺、オリモク、霊室、ドンネコ、御乗生と六つある。そのうち白鹿潭まで登ることができるのは城板岳、観音寺コースだ。城板岳コースは観音寺コースに比べて距離は長い
が、傾斜が緩やかで登りやすく、観音寺コースは傾斜はあるが、竜鎮閣、ジャングモク、三角峰、



ベンロクダム
白鹿潭の登山客

ワンガンヌン

ヨンシル

王冠稜などの雄大な眺めを楽しめる。オリモクと霊室コースは、標高1,700mの高地にあるウィッセオルムを
ベンロクダム
経て、白鹿潭噴火口の南壁分岐点を過ぎ、ドンネココースにつながる。御乗生コースは、オリモクコース
の入り口にある標高1,169mのオルムに登る短距離コースだ。
六つの登山道以外にも漢拏山の原始林を歩くドゥルレ道がある。

ゴスモンマ

古薮牧馬の故郷、オリモクコース

オスンセンアグ

登山道の始まりであるオリモクコース一帯は、御乗生岳、クントウレワツ、チョグントウレワツなどのオルムに
囲まれた山中の平原で、朝鮮時代には名馬の産地として知られた所だ。登山のためでなくても、一度は
訪れたい済州の観光名所の一つだ。

ドンヤン マンセドンサン

オリモクコースは、ここからオリモク溪谷を過ぎ、サジェビ丘、万歳丘を経てウィッセオルムまで続く。サジェ
ビ丘まではクヌギやモミジの森になっている。登山道を歩いていると、樹齢500年にもなるクヌギが見える。そ
の昔、凶年になると人々がこの木のドングリで飢えをしのいだことから「頌徳樹」という名前が付けられた
木だ。樹齢のためか現在は葉を付けず、形だけを維持している。

ソンドクス

頌徳樹を過ぎてサジェビ丘に至り、漢拏山の高山地帯に入ると、目の前に景色が広がる。海岸線まで



ジャングモクの夕焼け

ベンロックダム

広がる済州の西側の風景だ。さらに万歳丘まで行くと、漢拏山の主峰である白鹿潭噴火口の外壁と穴望峰が目前に広がり、登山客はそのすばらしさに感嘆する。この野原で牛や馬を放牧した頃の風景を「古藪牧馬」といい、済州の10大絶景を意味する「瀛州十景」の一つに数えられている。

万歳丘からオリモクコースの終点であるウィッセオルムまでは、約2kmの起伏のない平原であり、歩くことそのものが楽しめる瞑想の空間だ。登山道の周辺はこの山の象徴であるノロジカと出会え、鳥のさえずりも聞こえる自然動物園だ。

ヨンシル

神仙が宿る谷間、霊室コース

春の花の波、夏の新緑、秋のモミジ、冬の樹氷など、霊室コースでは一年中、絶景が楽しめ、訪れる人々を感動させる。漢拏山によく登る人々に、どの登山コースが最も美しいかと問えば、ほとんどの人が霊室コースと答える。朝鮮時代、漢拏山に登ったソンビ朝鮮時代に学問に勤んだ人々たちが選んだのも、やはり霊室コースだった。

標高1,280mの登山道の始まりにあるアカマツの森がすばらしい。韓国の美しい森大会で表彰された森の道を歩いて行くと、視野が開け、荘厳な奇岩怪石が屏風のように立ち並ぶ。霊室コースの一番の見どころで、古くから「霊室奇巖」と呼ばれ、「瀛州十景」に数えられる風景だ。真夏のにわか雨の後に絶壁を流れ落ちる滝もまた壮観だ。漢拏山が抱く神の庭と言われるソングァクジワツも霊室コースにある。緩



ヨンシル

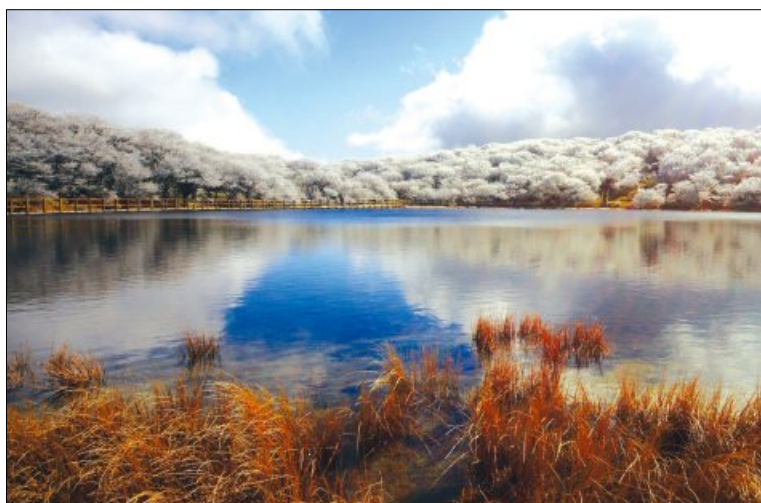
雪化粧した霊室

やかに隆起するウィッセオルムの三つの稜線と、突き出すように雄大な火口壁を背景にしたソングジャクジワツは、チョウセンヤマツツジとカラムラサキツツジが波打つように咲き乱れる春の風景が見る者を圧倒する。早朝や夕暮れ、登山客の姿がなくなる頃には、数十頭のノロジカが高原を駆け回る風景も見られる。

ソンバナク

世界唯一、チョウセンシラベの森を貫く城板岳コース

城板岳コースは9.6kmで、漢拏山の登山道のうち最も長いコースだ。傾斜は緩やかで、ほとんどが森の道であるため、登山しながら奥まった静けさを味わうことができる。



サラ

冬の沙羅オルムの山上湖の周りを霧氷が覆っている。

このコースには紗羅オルムがある。360以上ある済州のオルムのうち、山上に湖のあるオルムは数少ない。頂きに湖のある紗羅オルムは、それだけでも端正で優雅だが、漢拏山の山肌に包まれた周辺の風光も一見に値する。

標高1,500mのチンダルレバツ待避所から頂上までの区間は、一年中緑の美しいチョウセンシラベの森の道だ。全世界で唯一、漢拏山だけに植生する貴重な森だ。チョウセンシラベから漂うさわやかな香りが体全体に

染みわたり、心もリフレッシュする。森林浴をしながら登山を楽しむことができるコースだ。

ペンロクダム

イルチュルボン

ウド

白鹿潭噴火口の東側の稜線の近くからは遠くに日出峰や牛島を望み、済州の東側のオルム群が一望できる。

グアスムサ

険しいがゆえに美しい観音寺コース

ソンバナク

ハンラサン

城板岳コースとともに漢拏山の頂上まで登ることができる観音寺コースは、最も険しいコースとして有名だ。

観音寺コースの名前は、登山道の入り口近くにある観音寺という寺の名から付けられた。東西に分かれ

タムナ

た済州最大河川の耽羅溪谷にある稜線が、アリの背中のように膨れ上がっていることから、ケミドウンメン

ソニアリの背の稜線とも呼ばれた。済州の登山家は今もこのコースをケミダウンコースと呼んでいる。

登山道の始まりから耽羅溪谷までは、昔、焼畑を営んだ人々が炭を焼いた窯跡やシイタケの栽培場などが復元されており、頂上まで登らなくても子供たちとトレッキングを楽しむことができる。1.5km地点にあるグリーン窟は、絶滅危惧種のクロアカコウモリが生息する洞窟だ。

耽羅溪谷を過ぎて標高1,200mの高地に近づくと、高くそびえるアカマツの姿が観賞できる。アカマツは標高1,200～1,400m地帯に群生している。

ワンガンヌン サムガッボン

観音寺コースは、頂上付近のジャングモク、王冠稜、三角峰など秀麗な山の姿がヒマラヤを連想させる地形で、韓国各地の登山家たちの海外遠征登山の訓練コースとして知られている。

ヨンジンガク

竜窟閣の一带は窪んだ地形と削り上げたような絶壁に囲まれており、昇天しようとする竜が横たわっているよ

ワンガンヌン

うだ。王冠稜、または王冠岩と呼ばれる所は、夕方になると金色に輝く。王冠岩の向かい側には、トビの

サムガッボン

鋭い嘴に似た三角峰が、漢拏山の頂上を守る前衛峰のように天に向かってそそり立っている。

傾斜の険しい観音寺コースは、冬に幻想的な雪景色を描き、モミジの色づく秋には溪谷の全ての木々が燃え上がるように赤くなる。

白鹿潭の砦を巡る天上の道、ドンネココース

ヤブツバキ、イヌツゲ、ユズリハ、ハマヒサカキが群落を成すドンネコの暖帯樹林は、緑の香りがすがすがしい所だ。登山道の入り口には、年中清らかで氷のように冷たく澄んだ水が流れるドンネコ溪谷があり、真夏には西帰浦の江汀川とともに、済州道民の避暑地として脚光を浴びる。

ガンジョンチョン

緑の森を通してサルチェギドとピョンゲ待避所を過ぎれば、漢拏山のもう一つの風景が広がる。高度が上



漢拏山南壁の冬

がるにつれて現れる漢拏山の南壁の景観と、歩きながら視界に入る西帰浦の青い海に手が届くようだ。

ソブソム

ピョンゲ待避所から南壁分岐点を過ぎ、ウィッセオルムに至る道は漢拏山亜高山帯の平原で、森島、

ムンソム

ボムソム

マラド

蚊島、虎島などが浮かぶ西帰浦沖の風景や、遠くに馬羅島も見られる。

漢拏山の頂上のすぐ下にあるバンアオルム一帯の野原には、ソングジャクジワツやウィッセオルムよりも先に春が訪れる。頂きの残雪と野原に咲き乱れる花の波が調和し、異なる季節が共存する神秘的な風景を描き出す。

オスンセンアク

オルムの波の展望台、御乗生岳コース

御乗生岳コースは、オリモクコース入り口の西側にある御乗生岳を登るコースだ。標高1,169mのオルムである御乗生岳は、下部と頂上の比高が約350mあり、済州の西側のオルムのうち最も大きい。

マンセドンサン

マンチェアク

漢拏山の頂上、クントウレワツ、チョグントウレワツ、万歳丘、望休岳などの漢拏山高地帯と、ふたまたに分かれたY溪谷が一望できる。

イルチュルボン

日出峰をはじめとする東側のオルム群が広がり、西側のオルムの波も見渡せる。

このように優れた眺めの御乗生岳には、日本統治時代、旧日本軍が米軍砲撃機を撃ち落とすため築い



オスンセンアク

御乗生岳の噴火口

た対空砲陣地の跡が残っており、歴史教育の場になっている。

ハンラサン

ヒノキが迎える幻想の森の道、漢拏山ドルレ道

漢拏山のドルレ道は漢拏山に登る道ではなく、周囲を回り横切る道だ。標高600～700mの間に続くこの道は、日本統治時代につくられた。旧日本軍が軍事物資の調達のため切り開いた兵站線だった。漢拏山に育つ木を切って運び、森のシイタケ栽培場の生産物をこの道を利用して運んだ。漢拏山の周りをハチマキを結ぶように道が造られていることから「ハチマキ道路」とも呼ばれた。

ボブジョンサ

ドスンチョン

シオルム

ナムソンデ

法井寺、道順川、雄岳のすそ野を過ぎて南星台登山道入口に至る道に石を敷いて整備した跡が、今も残っている。

シオルム

この道の間地点には雄岳がある。噴火口がなく、こんもりと隆起しているため、スツヅの意オルムとも呼ば

アックンチョン

れる。雄岳の山すそには道順川よりも小さい川が流れているが、この川を岳近川という。元の名は「アクネ」であり、これは小さな川という意味だ。

雄岳一帯にはスギ、ヒノキがすき間のないほど立ち並んでいる。スギの太さは大人が二人手をつなげるほどで、スギより成長速度が遅いヒノキもうっそうと茂っている。これらの木々は日本統治時代だった1930年代後半から第二次大戦終結の直前まで日本人が植えたものだ。

ヒノキの中には樹齢70年を越すものもあり、韓国で最も古いヒノキに数えられる。ヒノキの群生地として名高い全羅南道の長城郡、慶尚南道の南海郡にある群生地より古く、優れた樹林とされている。

ジャンソン

ナムヘ

ヒノキは木材としての価値も高く、テルペンという物質を多量に発生する植物で、ヒノキの森林浴で優れた効果を発揮する。

漢拏山国立公園 探訪案内所

オリモク探訪路の入口にある漢拏山国立公園探訪案内所は、探訪情報の提供をはじめ、漢拏山の誕生と歴史、伝説、地形地質、自然の生態などについて知ることのできる無料の展示空間だ。漢拏山の誕生と物語、生命の森・漢拏山、漢拏山探訪白書をタイトルとした1～3展示室と子供たちの体験学習の場である創作教室、動画を観覧できる映像室がある。漢拏山を背景に写真を撮れるフォトゾーンも準備されている。

ハンラサン



ソンサンイルチュルボン ウド

漢拏山の頂上から見た済州東部地域のオルム群落。遠くに城山日出峰と牛島が[※]見える

オルム

済州火山地形の花

済 州島は、毎日登っても1年以上かかる368の小型の火山体を有している。この火山体を済州の人々は「オルム」と呼ぶ。それほど大きくない一つ島に、これほど多くのオルムのある所は、地球上でこの島だけだ。済州は世界的なオルムの島なのだ。

済州のオルムはそれぞれに独特の形をしてるが、その形成の過程によって噴石丘、水性火山タフコーン、タフリング、マール、溶岩ドームに分かれる。

噴石丘はマグマが爆発、噴出し、多量の噴石、溶岩、火山灰が積もって形成された円錐形

の火山体だ。一般的に直径数cmの多孔性のスコリアで構成されているが、赤みがかったこの石を、済州の人々は「ソニイ」と呼ぶ。済州のオルムのうちの334が噴石丘だ。

島全域に溶岩台地が形成された後に生成されはじめた噴石丘は、楕状火山体の漢拏山が形成されると、山すそや山腹で頂きをつくりながら山肩まで迫り、隆起した。島のあちこちで打ち上がる花火のように生成される噴石丘の誕生は、想像するだけでも幻夢的だ。

高温のマグマが地表に向かって噴き上がり、地下水や地表に出くわすと、マグマは急激に冷え、水は煮え立って気化し、強烈な爆発を起す。このような水による爆発的な噴火で形成された火山を水性火山という。済州のオルムのうちの24が水性火山だ。

水性火山のうち、火口の大きさに比べて高さの低いものをタフリングスウォルボン凝灰環、高いものをタフコーンイルチュルボン凝灰岩丘という。済州島のタフコーンとタフリングは海水と出逢うことで生成された火山体だ。

日出峰は典型的なタフコーンで、水月峰は波の侵食でタフリングの一部が残ったものだ。済州島が海の中で始まった水性火山活動で生成されたため、これらは済州島創造の秘密を握ったオルムなのだ。

マールは、地下水がマグマの熱で急速に気化しながら地表の物質を吹き飛ばしてできる火山体だ。アブオルム 垂父岳とサングムブリはマールであり、ハノン噴火口はマール型のタフリングだ。

粘性の高い粗面岩質の溶岩は、噴出の時に遠くまで流れず、火口の上で固まる。こうして形成された粗面岩サンバンサンの塊を溶岩ドームという。済州の10のオルムは溶岩ドームであり、これを代表するのが山房山だ。

済州火山活動の歴史を伝えるオルムは、済州火山地形の花だ。海岸から漢拏山の山肩まで、島全域に散在するオルム。済州は島全体が美しく輝く火山の展示場だ。

済州の暮らしの舞台

済 州島はどこを見てもオルムがある。オルムに始まり、オルムで終わる。そのため、この島で生まれ育った人々はオルムを目と心に刻みながら暮らしてきた。オルムを除いて済州の人々の暮らしを語ることはできない。

オルムは数多い済州の説話の舞台であり、信仰の対象だった。また、済州の歴史の現場であり、済州の人々の生活の拠り所であり、亡骸を抱く永遠の安らぎの場であった。

説話に現れるオルム

オルムが最も多く登場する説話は、済州の島を創造したという女性神ソルムンデの話だ。

巨大な女性神であるソルムンデはある日、チマ韓服の下衣に土をいっぱい入れて海の真ん中に運んだ。何度も土を運ぶと島ができ、島の真ん中に大きな漢拏山ができあがった。土を運ぶ間に、破れたチマの穴から落ちた塊がオルムになった。ソルムンデはそれがよさそうに見えたのか、わざと一握りの土を落としてオルムをつくった。高くなりすぎたオルムはこぶしで土を払い落としだが、これがダランシオルムだった。

オルムよりずいぶん高くなった漢拏山をそのままにしておかず、峰を折って投げてしまった。峰は飛んで西南側の海岸で山房山サンノバンサンというオルムになった。

ソルムンデはとても大きく、漢拏山を枕にして横たわれば冠脱島グァンタルソムに足が届き、座れば、片足は山房山イルチュルボンに、もう一方の足は日出峰にかかるほどだった。その大きさを自慢していたソルムンデは、島中の水のある場所で深さがどのくらいかを確かめた。ある日、漢拏山の水長兀の頂きにある湖に入り、帰らぬ人となった。水長兀は底のない湖だったのだ。ソルムンデはこうして水長兀で溺れて死んでしまったという。ムルジャンオリ

神々の宿るオルム

済州の村には必ず本郷堂ボンヒャンダンがあった。本郷堂はマウルを守る神の宿る家で、シン今も残っている所が多い。

済州の多くの堂は、マウルから少し離れた所に置かれるが、これは人の往来が少く、神が静かに休むことができる場所だからだ。そのため、オルムの麓に位置することが多い。

オルムの名に「堂」がよく用いられるのも、特別な名のなかったオルムに堂が置かれていたことに由来する。代表的なのは旧左邑松堂里にある堂オルムだ。このオルムの北西側の麓には済州マウル神堂の元祖とされる松堂本郷堂ソンダンがある。

暮らしの拠り所だったオルム

尾根を呈するオルム地帯の多くは地形が緩やかで、質のいい天然の草地であるため、昔から牛や馬の放牧地として利用された。オルムは農地にもなった。牧場になったオルムの周辺や噴火口、石が少く、土のやわらかいオルムの尾根を開墾したり、焼畑をつくるなどして穀物を耕作

した。今も牧場になっている亜父岳には噴火口の一部を開墾し、耕作をした跡が残っている。オルムの北側から西側の稜線まで、細長い道が伸びているが、これは農作業のために使われた道だった。

木の多い高地帯にあるオルムはシイタケの栽培に使われた。済州で採れるシイタケは、1453年に
セジョンシルロクチリン
編纂された『世宗実録地理志』にも記録されるほど昔から有名だったが、本格的な栽培が始まったのは1905年以後、日本人によって山刀式胞子接種法が伝えられてからだ。シイタケの栽培
ハンラサン
場は一時、標高600mの高地を中心に76か所にもなったが、漢拏山が国立公園に指定され、その多くは取り除かれた。現在は標高200～600m地帯に22か所の栽培場が運営されている。

四季とともにあるオルム

オルムが近くにある村の人々は、幼い時からオルムとともに育つ。朝起きてオルムを眺めて天気を確認かめ、その日の日程を組む。

オルムは村の子供たちの友であり、遊び場だった。春、緑の草が生えれば、子供たちは牛や馬を引いてオルムに登り、草を食ませた。かくれんぼうもオルムでした。この時期に大人たちは草



冬のダランシオルム

を掻き分けワラビを採るのに忙しい。春から秋にかけてオルムで採れる木の実や山菜は、子供たちばかりでなく大人にありがたい食べ物だった。

薪が少くなる季節には、オルムでマツの葉や枯れ枝、牛や馬の糞を集めて火を焚いた。

冬にはキジやイタチを捕るための罠を仕掛けにオルムに登った。木々が茂り、石の多いオルムにはアナグマの穴もあった。猟犬をかりだしてアナグマを捕るために騒ぎ立てたりした。

亡骸も安らかなオルム

オルムには所々に墓がある。村に近いオルムには必ず共同墓地がある。日当たりがよく、端正なオルムには石垣で囲まれた墓が集まっている。これは済州独特の埋葬文化で、自然、歴史、土俗信仰が融合したものだ。

火山島である済州はあちこちに岩石がころがっており、高麗・朝鮮時代には広い土地が国営の牧場として利用された。朝鮮時代の中期から済州島に埋葬文化が発達し、風水地理を信じる後孫は福を呼ぶ土地に墓を置いたので、墓が寄り集まっているのだ。

人が死ぬと、地相師風水説によって土地を見る人を選んでよい土地を選び、亡骸を埋めて周辺の石で垣根をつくった。済州で墓を「サン山の意」というため、墓の石垣は「サントム」と呼ばれる。墓を死んだ者の棲む家と考え、石垣で牛や馬から墓を守ったのだ。サントムはまた、放牧地帯に火を放つ「バンエップルノッキ焼畑の意」で、墓が火で焼けないように守る役割も果たした。バ



オルムのすそ野の日当たりのいい場所に集まった墓

ンエップルノッキはダニのような害虫を駆除し、枯れた草木を焼き払い、質のいい新しい草が生えるよう、毎年春に行う風習だった。セビョルオルムの野焼き祭りは、このバンエップルノッキに由来する。

サンタムに囲まれた墓を横たえたオルムの風景は、温かく穏やかだ。オルムはこのように亡骸も抱き、済州の人々の永遠の安らぎの場になった。

済州の歴史を見守るオルム

オルムには、13世紀にモンゴル族の元が牧馬場を設置し、朝鮮時代は国営牧場として活用されるなど、馬の故郷といわれる済州の歴史を見守ってきた。

朝鮮時代、オルムは島を守る見張りの役割も果たした。島を回るように位置する25か所のオルム

ボンス サラボン ウォンダンボン ソウボン イアサンボン ジミボン スサンボン
に烽燧が設置されたのだ。沙羅峰、元堂峰、犀牛峰、笠山峰、地尾峰、水山峰、
ドクジャボン トサンボン イエレマン サンメボン モスルボン ドドウボン
独子峰、兎山峰、礼村望、三梅峰、摹瑟峰、道頭峰など、名前に「峰」や「望」のつく
オルムのほとんどは過去に烽燧が設置された。どれも展望が良く、烽燧では一日中、番兵が
周囲を監視し、煙とたいまつで交信した。

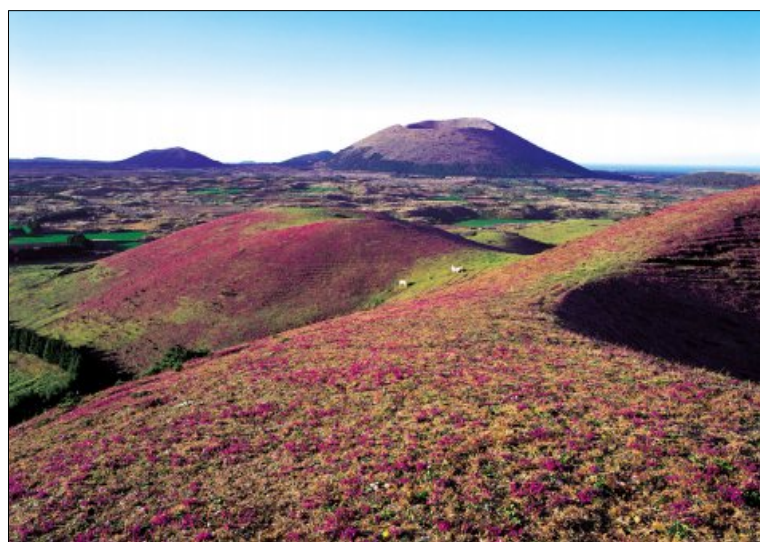
日本統治時代には旧日本軍が軍事施設を築くために洞窟を掘り、多くのオルムが苦難を強い

ソンサンイルチュルボン ソンアクサン サンメボン サラボン ビョルドボン ガマオルム オスンセンアク
れた。城山日出峰、松岳山、三梅峰、沙羅峰、別刀峰をはじめ、釜岳、御乗生岳、
ソウボン モスルボン
犀牛峰、摹瑟峰、ソダルオルムなどには今も当時の爪痕が深く残っている。

オルムは済州4・3事件で武装蜂起を知らせるのろしを上げる場所にもなった。それだけでなく、
当時の住民が避難所とした場所も、武装隊が隠れ処とした場所もオルムだった。また、討伐隊
サラボン
がラッパを鳴らしたり、棹を高く上げ、討伐を知らせる場所にもなった。沙羅峰、ソダルオルムは

モライアク ノッカジアク
虐殺の現場にもなった。済州4・3事件の討伐が最終段階に入り、帽羅伊岳、鹿下旨岳、
シオルム サルオルム スアク
雄岳、米岳山、水岳と続く漢拏山南側の中腹のオルムは、生き残った武装隊の活動を遮断す
るための拠点としても利用された。

オルムとの出会い



ダランシオルム

済州のオルムはそれぞれの姿を誇り、互いに調和しながら波打つように連なる。近づいて一つ一つを探っても、遠くからその群れを眺めても、その美しさはこの上ない。

「オルム」という名は「登る」という意味の「オルダ」からついた。遠くから眺めてもいいが、その名のとおりオルムに登れば、すばらしさが分かる。季節ごとに、時間ごとに異なる姿を現わし、感動を与えてくれる。

アブオルム(亜父岳)

アブオルムは隠れた宝石のようなオルムで、高さは51mだ。それほど高くないので楽に登ることができる。オルムの中腹まで登ると、驚くような光景が目に入る。このオルムはローマのコロッセウムのような巨大な噴火口を抱えているのだ。噴火口の周囲は約1,400mで、深さはオルムの高さよりも深い84mだ。

アブオルムは標高300mの中山間にある草原地帯に位置する。火山が噴火した時、ここは溶岩地帯が広がる高山湿地だったのだろう。その湿地で水性火山活動が起こり、マール型の噴火口だけで構成された独特な形をつくったと推定される。近くにはケンイモル、ソスモル、デモルドンサンと呼ばれるマール型の地形が、侵食されたまま残っており、この事実を裏付けている。

噴火口の中に丸く植えられたスギが、特有の風景を醸し出す。以前は噴火口の中で耕作をした。噴火口にある火山石で畑を囲み、その回りに植えたスギが大きくなったものだ。珍しい風景を呈するアブオルムは、映画「イジエス李在守の乱」1999年制作のロケ地にもなった。

アブオルムにはスギの他にも、オニイボタ、マツ、クヌギ、アキグミなどが植生し、イノバラ、コゴメウツギ、サルトリイバラも所々に群生している。



アブオルム
亜父岳

ドンゴムンオルム

オルムに性別があるとすれば、このオルムは男性だ。それも躍動的な力強い男性だ。このオルムを中心にダランシオルム、ヨンヌニオルム、ソンジオルム、ノップンオルム、ベギギオルム、ジャボミオルムが取り囲み、周辺の風景にも目を奪われる。

ドンゴンオルムは噴石丘だが、深い円形噴火口と、火口の一面が崩れた馬蹄形噴火口も持ち合わせて

いる。周辺の小さな丘と噴火口の跡も観察される。いくつかの火口が移動しながら噴出した珍しい複合型火山体だ。

急傾斜の火口と、緩傾斜の稜線が絶妙な調和を成し、噴石丘の多様な地形が観察できる。

このオルムは春になると、幻想的な花の饗宴を繰り広げる。その度にこのオルムは星の降りた緑の草原に変わる。「ケミンドウレ」と呼ばれるブタナの間を金色の糸で縫うように、オカオグルマ、キジムシロ、ニガナなどが咲き、シロツメクサは白い花をつける。カラノアザミ、チョウセンオキナグサ、タテヤマリンドウは恥ずかしそうに紫の花で草原を色づける

オルムの東側のすそ野に上り、南東の斜面を眺めれば、石垣で囲まれた墓が所々に寄り集まっている。北西斜面にはアカシデ、エゴノキ、ヤマボウシなどが茂っている。

ダランシオルム

ダランシオルムは「オルムの女王」といわれる。誰が見ても、このオルムの優雅で端正な山容はその名にふさわしいと思うだろう。また、このオルムは済州の噴石丘を代表するほど、美しい円形を保っている。噴



ダランシオルム

石丘の典型を保存するダランシオルムは、済州のオルムの火山活動史の研究になくてはならないもので、火山地質学的な価値が高い。

このオルムは、全体の高さである比高が227mと高く、噴火口の深さは115mもある。頂上からは、はっきりとしたロート状の噴火口が見える。斜面の傾斜も急で、火山噴火の状況が想像できる。

このオルムは現在、済州のオルムのランドマークになっており、

探訪客がオルムについて学ぶことのできるさまざまな施設が整えられている。

秋のダランシオルムはススキで覆われる。その間に野花が顔をのぞかせ、ススキに寄生するナンバンギセル、そら色のチョウセンマツムシソウ、紫色のヨメナ、シマシャジン、イチゲフウロ、白いウメバチソウのほかにも、ヒゴタイ、ママコナなどが見る者をたのしませてくれる。

オルムの麓には痛々しい歴史の教訓を伝える済州4・3事件の遺跡がある。

ヨンヌニオルム

曲がりくねった尾根が竜の横たわる姿に似ているオルムだ。登山コースが平坦で歩きやすく、約30分で頂上まで登れる。見どころが多いため、頂上で時間を過ごす人が多い。

頂上の東西に長く、深く窪んだ三つの噴火口が見る者を圧倒する。噴火口が長く連なって形成されているのは、噴火の時に火口が横に移動したためだ。

ヨンヌニオルムは一年中美しい。



ヨヌヌニオルム

春はカントウタンポポ、キジムシ

ロ、ウマノアシガタ、オヘビイチゴ、タチカタバミ、オカオグルマが黄色の花をつけ、ユキワリソウ、ムラサキケマン、ヤハズエンドウ、スマレ、エヒメアヤメ、チョウセンオキナグは赤紫の花をつけ、探訪客を誘う。

夏はヤナギダテ、セキチク、ナンテンハギ、タヌキマメなどが花を開く。最も美しいのはやはり秋だろう。ニシキコウジュ、ミコシグサ、イチゲフウロ、ムラサキセンブリ、リンドウ、メハジキ、キセワタ、キクタニギク、ヨメナ、ツリガネニンジン、ウメバチソウなどが花の饗宴を繰り広げる。

冬の雪景もオルムの魅力の一つだ。噴火口の底は冬でも緑をたたえ、神秘さを増している。

タラビオルム

こじんまりとした三つの噴火口と流麗な曲線美を誇るタラビオルムは、ススキが銀色に揺れる秋が最も美しいオルムだ。なだらかな尾根に咲くススキがそよぐ姿に心を奪われる。雨の後、霧の中の噴火口が水をたたえた姿は幻想的でさえある。

このオルムは南西斜面に形成された馬蹄形噴火口が噴火後、火口が移動しながらさらに爆発し、三つの噴火口ができた。東北側に続く峰も噴火口の跡だ。

オルムの噴火口周辺にある小さな火口を、済州の人々はアルオルムと呼ぶ。「アル」は卵という意味で、オルムが卵を産んだと考え、そう呼んでいるのだろう。このようなアルオルムは、噴火の時、噴火口の周辺で溶岩の爆発が起きて火柱が上がった位置にある。タラビオルムの北東側に続くアルオルムもやはり、このような火柱の跡だ。そのため、オルムの傾斜は緩やかだが、峰が六つ見える。



タラビオルム

「タラビ」というのは、学術的に証明されたものではないが、「タンエハラボジ地のおいさん」という意味に解釈でき、周辺の「モジオルム」を母、「ジャンジャオルム」を息子、「ソンジオルム」と「セキオルム」を孫と解釈したりもする。周辺のオルムが家族を構成していることになる。

サングムブリ

「サングムブリ」は「噴火口を指す済州の方言だ。また「噴火口だけでできた山」という意味もある。サングムブリは地表面から頂上までの高さが20～30mに過ぎないが、噴火口は200m以上も地中に入り込んでいる。名前のとおり噴火口だけでできている火山体で、マール型の噴火口の典型といえるオルムだ。

噴火口の中は自然のままの湿地が保存されている。ここには合計450分類群の植物が分布しており、栽植したものを除いて442群だと調査された。木本植物90分類群、常緑樹17分類群、草本植物318分類群、蔓植物34分類群だ。この数は済州道の植物、約1,800種のうちの4分の1に当たり、地形地質学的な価値が高く、植物の宝庫と呼ぶのにふさわしい。



サングムブリ

ブルグンオルム(赤岳)

済州にはブルグンオルムと呼ばれるオルムがいくつかある。これらは全てオルムを構成するスコリアの赤い色から名前が付けられた。この赤い石を済州の人々は「ソンイ」と呼ぶ。このオルムも山体がソンイでできている。昔はソンイの赤い色が表われていたが、現在はうっそうとした木々で覆われている。

ブルグンオルムではソンイとともに火山弾も多く観察される。大規模な噴火口は完璧な円形を描いている。以前は噴火口の底に湿地があった。今では湿地が乾き、アキグミ、ハリグワ、ガマズミなどが植生している。

オルムの周囲と外側のすそ野には、スギ、マツが植えられ、尾根と内側の斜面には自然林が茂っている。エゴノキ、アカシデ、ヤマボウシをはじめ、ノグルミ、クマノミズキ、アズキナシ、シラキ、シロダモ、ヤブニツケイなどが生い茂る。ブルグンオルムのこのような自然資源を活用して、休養林が造成されている。

セビョルオルム(曉星岳)

セビョルオルムは力強さと優しさを兼ね合わせた曲線美が特徴だ。最高峰を基準に南側に滑り落ちる南斜面には力強さが感じられる。北側の峰に伸びる稜線をさかいに、左右に窪んだ後に描かれる曲線には、繊細さと優しさが表われている。

セビョルオルムは西側の斜面に広く開いた馬蹄形噴火口と、北側斜面に小型の馬蹄形火口を抱いている。最初の火山噴火で東側の小さな峰の外輪ができ、その後、中央でもう一度噴火が起きて現在の形になったと見られる。オルムのすそ野に続く広い草原地帯にビルレモ洞窟がある。

セビョルオルムは、毎年行われる小正月野焼き祭りで有名なオルムでもある。

ノッコメ(ノコメ)オルム

ノッコメオルムは済州のオルムの多くの特性を持ち合わせており、済州のオルムのランドマークとして管理されている。

平地と傾斜、空を遮る森のトンネル、視野が開けるアシの森道など、さまざまな難易度と景観が楽しめる

ハンラサン

「リトル漢拏山」だ。このオルムは標高が834m、オルム自体の高さは234mで、これだけでも漢拏山によく似た特徴を備えていることが分かる。北東側にあるオルムはノッコメジャグンオルムと呼ばれる。

ノッコメオルムは噴火口から溶岩、スコリア、火山灰を同時に噴出した。他のオルムより相対的に多くの溶



ノッコメオルム

エウォル

岩を噴出し、涯月コッチャワルをつくったオルムだ。ノッコメオルムの馬蹄形噴火口の前に形成された涯月

グムサン

コッチャワルはここから始まり、地形の傾斜に沿って9km先の金山公園まで続く。

ノッコメオルム一帯にはノロジカ、チョウセンイタチ、アナグマなどの哺乳類と、オオタカ、チョウゲンボウ、ヒヨドリ、シジュウカラ、エナガ、ヨタカ、カケス、ヤマガラ、ウグイスなどの鳥類、マムシ、ヤマカガシ、チョウセンヤマアカガエル、カナヘビなどの爬虫類が生息する。植生は豊かで、122科469種の植物が分布していることが調査により明らかになった。

ダンオルム(堂山峰)

豊満なオルム斜面の草原を登ることのできるオルムだ。このオルムは見る角度によって円錐形にも、馬蹄形にも見える。オルムの頂上に登ると、その理由が分かる。頂上には完璧な円形の噴火口が残っている。ダンオルムは最初に馬蹄形の噴火口が形成され、その後で円形の噴火口が形成されたオルムなのだ。頂上から見える中山間地帯の広い牧場が、気分を爽快にさせる。

ダン

以前はここに堂があり、ダンオルムと呼ばれるが、今はその跡はない。オルムから近いサンバックソク村の本郷堂があったが、村は済州4・3事件で焼失してしまった。

また、北側の頂上付近には日本統治時代につくられた5～6の陣地洞窟が残っている。済州の辛い歴史を見守ってきたダンオルムのため息が聞こえるようだ。

セミソオルム

セミソオルムはオルムに泉韓国語でセムがあることから、こう呼ばれている。噴火口の中に水をたたえた池がある。

セミソオルムはタフリング凝灰環に分類される水性火山だ。近くに大型のタフリングで形成されたヌウンオルムがある。セミソオルムは、このヌウンオルムと関連する火山活動の産物だ。

セミソオルムの周辺は、標高350mの中山間地帯の広い火山平地だ。火山活動でここに広い湿地が形成されたものと推測される。

現在、セミソオルムの湿地化した噴火口の湖に、カトリック教会が「セミ恩恵の丘」を造成し、聖所として活用している。もともと池のあった場所は拡張してロザリオ祈祷の場として、峰の登る道は十字架の道として整備され、多くの人が巡礼に訪れている。

ジョジョオルム(楮旨オルム)

ジョジョオルムは、遠くから見れば普通のオルムだが、近づくたびに驚かされるオルムだ。このオルムには、

2007年の「全国美しい森大会」で「最も美しい森」に選ばれた森がある。頂上の展望台に登れば、心が冴えわたる。済州西部地域の景観が四方に広がる。さらに驚かされるのは、噴火口だ。深さ62m、直径255m、周囲800mの噴火口の中には木や蔓が絡み合うように茂っている。ジョジオルムは噴火口の形が完全に残るオルムの一つだ。その中には260段の急な階段が設置されており、噴火口の中が見学できる。

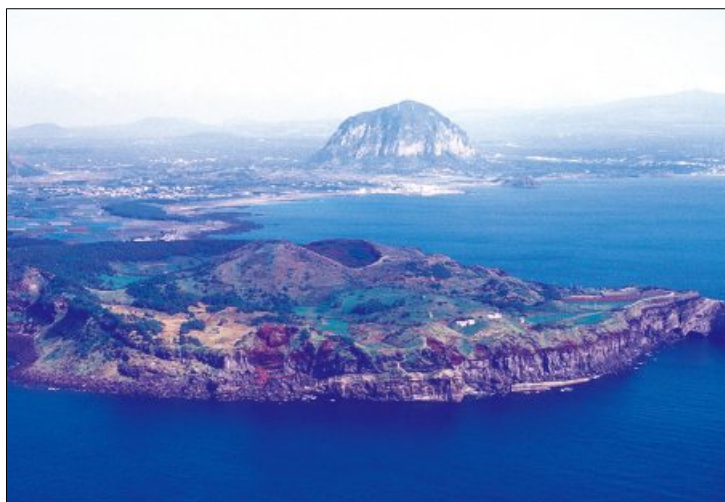
ソnakサン(松岳山)

ソnakサンは、およそ5,000年前に起きた済州島の最後の水性火山活動でできたオルムだ。火山体は独特だ。第一次の水中爆発で広い火口を持つタフリング凝灰環が形成された。その後、火山活動が陸上に移動したため、火口の中に火口を持つ二重火山体になった。直径500mのタフ凝灰岩の外輪の中

に、スコリアでできた深さ69mの噴火口が陥没している。スコリアの噴火口は、今にも噴火しそうな迫力ある姿だ。

ソnakサンは済州島の海岸に分布する水性火山のうち、二重火山の形態を最もよく残している。さらに、人の足跡と鳥の足跡の化石が発見され、火山地質学、古生物学的な価値が非常に高いことでも知られるオルムだ。

ソnakサンのタフリングの堆積層が見られる海岸の断崖の下には、海に向かって掘られた洞窟があり、見る者の心を暗くする。これは、日



ソnakサン
松岳山

本統治時代に旧日本軍が済州の人々を強制的動員してつくった軍事施設だ。ここには、このような地下壕が15か所ある。

ソンサンイルチュルボン(城山日出峰)

ソンサンイルチュルボン

済州島の東の端に位置する城山日出峰はその名前からも分かるように、昔から日の上るオルムとされ、秀麗な景観でも有名なオルムだ。

ソンサンイルチュルボンは5千年前、浅い海底で起きた水性火山活動によって形成された火山だ。高さ182m、噴火口の直径600m、地層の傾斜角度は最大45度、噴火口の底は標高90mの典型的なタフ



ソンサンイルチュルボン
城山日出峰

コーン凝灰岩丘だ。

世界的には類似した水性火山活動が多くあるが、ソンサンイルチュルボンはタフコーンの地形がよく表われており、海岸の絶壁に沿って多様な内部構造をはっきりと残す大変珍しい火山体だ。

また、ここには83科187属226種の植物が分布している。その中にはミツデウラボシなどの8種の希少植物と、イシカグマなど9種の植物種があり、韓国環境省の法定保護植物であるフウランも植生している。

ソンサンイルチュルボンは韓国の天然記念物第420号に指定されている。また、ユネスコの世界自然遺産であり、世界ジオパークの代表的な名所でもある。

ゴムンオルム(拒文岳)

ゴムンオルム

世界自然遺産地区にあるオルムだ。このオルムから噴出した溶岩が海岸まで流れ、「拒文岳溶岩洞窟系」という美しい溶岩洞窟が形成された。それだけに神秘的なこのオルムは、ありありとした火山活動の痕跡と豊かな生態環境を誇る。常緑樹林、落葉樹林、灌木林、シダ植物の群落、スギとクロマツの森、草地帯など、さまざまな植生構造を成し、留鳥や渡り鳥、ノロジカ、アナグマのような野性動物の安全な生息地になっている。

炭を焼いた窯跡、日本統治時代の軍事施設の遺跡、済州4・3事件の遺跡などが残っている。



ゴムンオルム

拒文岳

スウォルボン(水月峰)

スウォリとノッコという姉弟の悲しい伝説が伝わるオルムだ。病床に伏した母親に良いと言われるあらゆる薬草を試したが、病状が回復しないので、この姉弟は悩んだ末、僧侶に薬の処方を探ねた。姉弟は山川を駆け巡って僧侶から聞いた薬草を集め、最後の一つがスウォルボンの絶壁にあるのを発見した。姉弟

が手をつないで絶壁にぶら下がり、薬草を手にしたその瞬間、スウォリの手が離れ、崖下に墜落してしまった。姉の名を呼びながら泣き続けたノッコの涙がノッコムルになったという悲しい伝説だ。

スウォルボンは水性火山のタフリング凝灰環だ。火成碎屑層の厚さは約70mで、端に近づくにつれて薄くなる。スウォルボンの絶壁ではさまざまな堆積構造が観察されているが、特に、非常に大きな玄武岩の塊で構成された角礫岩層が目さ



スウォルボン

水月峰の弾囊

れる。その他、弾囊構造の火山角礫岩、塊状の火山礫凝灰岩、層状または波動相のタフ凝灰岩、巨大な斜層理連痕を持つタフ、板状層のタフなどで形成されている。

スウォルボンの火成碎屑層は火砕乱流の堆積モデルとされ、海外の火山地質学の文献でも代表的な模式地として紹介されている。タフの年代調査の結果、1万9千年前の最後の氷河最盛期に噴出した火山であることが分かった。このような学術的価値と重要さが認められ、2009年に天然記念物に指定された。

ジョンムルオルム(井水オルム)

ジョンムルセム

ジョンムル

ハンリムウブ グムアクリ

井水泉があることから井水オルムと呼ばれている。翰林邑今岳里に位置し、標高466m、比高151mの

ダンオルム

北西に広がった馬蹄形噴火口だ。オルムの南東に堂岳が隣り合わせており、二つのオルムの間は、済州市と西帰浦市の境界になっている。険しい円柱型の南斜面を背中だとすれば、北の斜面は低く落ち込んで両腕を広げた形だ。オルムの西側麓の斜めの火口前に卵岳があるが、これを「ジョンムルアルオルム」という。火口内の斜面の麓には、昔、飲み水として利用した井水泉

アルオルム

サントワンセム

アンギョンセム

双子泉または眼鏡泉ともいうがあり、牛馬用の泉がいくつかある。ジョンムルオルムは草畑と草地でできており、クロマツ、スギがまばらに植生し、北西斜面の頂上部には一部カマツカなどが生えている。イシドル牧場があるジョンムルオルムは、平和路に沿って走り、ブラックストーンゴルフクラブの支道に入ると、ダンオルムの次に見えてくる。

ビョルドボン(別刀峰)

ファブクドン

済州市禾北洞の北側の海岸地帯にあるビョルトボンは、峰が急峻な崖になっている。標高136m、比高

サラボン

92mの円錐形のこのオルムは、西側の紗羅峰と西斜面が向かい合い、尾根がつながっている。紗羅峰に続く斜面と海岸の絶壁に沿って絶景が広がり、市民の散策路として知られている。

イダルオルム(二達峰)

エウォルウブ ボンソシリ

済州市涯月邑奉城里にあるイダルオルムは、北側にあるイダルチョッデボンと肩を並べた円錐形の火山体だ。イダルチョッデボンの頂上には溶岩流出の痕跡である火山岩が露出している。このオルムは全体が草むらで覆われており、所々にマツとスギの森の道が続いている。チョッデボンの南側の崖下にはノイバラ、イヌツゲ、ヒサカキなどの広葉樹林が生い茂っている。

イダルオルムの「ダル」は「高い」または「山」を意味し、イダル→イダリ→イダルオルムと変化し、北側のイダルチョッデボンとともに「二つの山」という意味を持つと解釈される。

ハンラサン

ビヤンド

イダルオルムに登れば、南側に漢拏山とブクドラジンオルムなどが、北側には飛揚島などのオルムが見渡せる。



ソアソム ムンソム ホムソム
森島、蚊島、虎島

島

島を持つ島

済州は63の大小の付属島を持つ。済州の本島周辺の海域にある21の島と、楸子群島^{チュジャ}42の島だ。

済州本島の周辺の海に浮かぶ島々は、済州火山活動に関連して形成された。その一方で、楸子群島は朝鮮半島の南海岸に続いている。楸子群島の島々は朝鮮半島の南海岸の島と同じく、8千400万年前に遡る長い期間の地質構造的な運動と風化作用で形成された。済州島の火山活動が起こる遥か以前に楸子島は存在していたのだ。

済州本島^{ホムソム}の周辺の海では、どの島が一番先に形成されただろうか。西帰浦沖にある虎島、蚊島、森島だ。粗面岩でできたこれらの島は、山房山の粗面岩とともに済州島の火山活動初期である80万年前に形成された。玄武岩質粗面安山岩で構成される加波島もやはり、山房山

ウド ビヤンド マラド サンチュジャド

ハチュジャド フェンガンド チュポド

イオト

済州の人々は実在する島ではない、想像の島である「離於島」を胸に抱いて生きる。済州民謡に登場する島、離於島は、済州の南海のどこかに存在する。そこは蓮の咲く黄泉の国で、一度着いたら二度と帰ることができないが、心配や不安を忘れることのできる場所として描かれる。海女の唄にはワカメやアワビの豊かな島として歌われている。痩せた火山灰の土地で苦難を強いられた済州の人々にとって、離於島は理想郷だった。生活の苦境や挫折を克服するため、現実を超越した別世界を済州の南海の離於島として描いたのだ。

The map displays Jeju Island with its major cities and towns: Seogwipo (서귀포), Jeju City (제주시), and Seogwipo (서귀포). It also shows the location of Jeju International Airport (제주국제공항) and the Jeju National University (제주대학교). The map includes a scale bar and a compass rose. An inset map in the top left corner shows the location of Jeju Island within the Korean Peninsula, with labels for the Korean Peninsula (한반도), North Korea (북한), and South Korea (남한).

ボムソム(虎島)

ボムソム

虎島を遠くから眺めれば、トラがうずくまっている姿に似ている。その姿から名前が付けられた。高さ80mの絶壁が取り囲み、粗面岩の柱状節理と規模の大きな海食洞が発達しており、美しい景観を誇っている。その中でも「コックモン^鼻の穴」と呼ばれる海食洞は、済州島をつくった巨大な女性神であるソルムンデの足の指が当たってできたという説話がある。

島の西側には小さな島を従えている。虎島の岩石と同じ粗面岩の溶岩で構成されたこの島は、斜めに削られた侵食面の上に現れた柱状節理の断面が美しい。

島の頂上は平地で、南側には井戸がある。過去、人が住んでいた残痕だ。

歴史的には、高麗末に元の残党勢力が済州島で反乱を起し、最期まで抗戦した場所でもある。

ムンソム(蚊島)

昔は、何も生えていない禿げた島という意味で「ミンソム」と呼ばれたが、名前の音が変化して「ムンソム」と呼ばれるようになった。島の横に帆船の帆を連想させる小さな島を連ねている。島を構成する粗面岩が海面と接触する部分に、平均4～5mの波蝕棚と、岩石の表面にさまざまな模様を刻んだ風化穴が特色ある景観をつくり上げている。

ソプソム(森島)

粗面岩の柱状節理が特に美しい島だ。柱状節理の岩盤下の波蝕棚と、岩石の表面に穴のあいた風化穴が巨大な彫刻のように見える。

この島にまつわる興味深い伝説がある。昔、この島には竜になることが願いだった蛇が棲んでいた。切実な蛇の願いに心を打たれた竜王は、沖に隠された玉を見つけ出せば願いを叶えてやると言った。蛇は100年間、海の中を探しまわったが、玉を見つけることができず、死んでしまった。ソプソム^沖にはよく霧がかかるが、これは竜になれなかった蛇の恨のためだという。

ソプソムにはスタジイやホルトノキをはじめとする常緑広葉樹が茂り、その下にマツバラシ、ハウビシダ、イワヒトデ、コクモウクジャクなど、他の地域ではめったに見られない珍しい植物が、オオタニワタリとともに植生している。ソプソムが北方限界地であるオオタニワタリは、韓国語でバチョイルヨプ、またはノプコサリと呼ばれるが、化石時代から3億5千年の間、さまざまな悪条件を乗り越えて現在まで植生を続けている。

セソム

済州の茅葺きの家を覆うチガヤを済州では「セ」というが、この島にはこのセがたくさん生えていることからセソムソムは島の意という名がついた。

西帰浦港の前に位置し、港の防波堤の役割を果たしている。この島のおかげで西帰浦港は天恵の要塞チョンジョンのような形体を備えている。天地淵粗面安山岩で構成されるこの島は、上部は平らな岩盤の波蝕棚になっており、クロマツが茂っている。近年、セヨン橋という橋が架けられ、歩いて行ける島になった。

チャギド(遮帰島)

済州道の最も西に位置する島だ。チャギドだけではなく、ワドとチュクトもある。その中で一番大きな島であるチャギドは、島を支える絶壁の上に平坦な野原が広がっている。1911年に2世帯がこの島で生活を始め、1970年まで人が住んでいた。今も島の中心部にある石垣と白などが、その頃の生活の様子を伝えている。

島の周りにある海に落ちるタフ巖ジャングンバワイの傾斜は見応えがある。島



チャギド
遮帰島

の南側には「將軍岩」と呼ばれる大きな岩があるが、漢拏山靈室の五百將軍の末の息子だという伝説が残っている。

ウド(牛島)

済州の周辺の島のうち最も大きな島だ。名前のとおり島の形が、頭を上げて横たわる牛に似ている。牛の頭に当たるセモリオルムが島の南にあり、それ以外の地域は平坦な溶岩台地を築いている。ウドの地質は玄武岩が基盤で、水性火山体のセモリオルムから流出した溶岩流とタフ巖ジャングンバワイで構成されている。

ウドに人が住み始めたのは1844年からだ。それ以前にも人の往来はあった。ウドの海産物を採るために、また、1697年に国有の牧場が設置され、国馬を管理、飼育するために人々の往来が頻繁になった。



ウド
牛島

など、見どころの多い観光地として脚光を浴びている。

それよりも昔、人が生活した痕跡もある。ドルメンや貝塚など、所々で先史遺跡が発見されている。先史遺跡以外にもアシの化石が出土し、注目を集めた。

ウドには4つの里と12の村がある。ラッカセイ、アワビ、トコブシ、サザエ、イワカメ、テングサ、ホンダワラなどの特産物と、牛島八景に数えられる秘景、サザエ祭り、洞窟音楽会

ビヤンド(飛揚島)

水石の作品が海に浮かんでいるような美しい姿の飛揚島。この名前は「飛んで来た島」という意味だ。

ビヤンドにまつわるおもしろい説話がある。昔、ある妊婦が遠くから流れて来る島を発見した。どれほど驚いたろうか。妊婦は島を指さして「あっ、島が流れてくる」と叫ぶと、その島はそこにとどまった。

島の真ん中には標高114mの飛揚峰がそびえている。島の全体面積のほとんどを占めるこのオルムは、ス



ビヤンド
飛揚島

コリアでできた噴石丘だ。オルムの中央には二つの噴火口があるが、そのうち一つは韓国で唯一のイワガネの自生地、文化財に指定されている。噴石丘だけでなく、海岸に沿って多様な火山生成物が分布しており、島全体が火山博物館といえる。

済州火山活動が記録された過去の文献によれば、ビヤンドは高麗時代だった1002年と1007

年に起きた火山活動でできた島だという。この島に人が住み始めたのは、朝鮮時代の1876年に「徐」という苗字を持つ人が、初めてこの島に住んだと伝えられる。しかし、高麗末に海上防御の目的で望守見張りの意を置いたという記録から、それより以前から人の往来はあったと見られる。また、この島の南西側海岸の断崖にある表土層で4千～5千年前の新石器時代の土器の破片が2点発掘された。これはどういうことか。

ともあれ、2002年に島の誕生1千年を記念する行事を行ったビヤンドは現在、世帯70、160人の住民が暮らしている。

ガパド(加波島)

遠くから眺めた加波島は、薄く切って海面にそっと置いたように見える。船に乗ってさらに近づけば、波に流されてしまうようにも見える。この島の本来の名は「ドウソム」で、これは波が重なる様子を表したものだ。現在の名である「ガパ」も「加える」に「波」で、波とともにある島ということだ。上洞、下洞の二つの村に130世帯、約300人が暮らしている。

この島の特徴は発達した平坦な海岸段丘だ。島の基盤になっている粗面岩の上をスコリアの堆積層と海浜礫岩層が覆っている。この島の海岸段丘は間氷期の海水面の上昇を反映したもので、済州道の代表的な段丘地形だ。

北西側の海岸に直径5mほどある丸い粗面安山岩がある。住民が「ワンドル」と呼ぶこの石に上れば、波風が起きるといわれている。西側の「ムルアップ」と呼ばれる海岸には20～40cmの大きさの石の海岸がある。石の表面には丸い穴が空いているが、驚いたことに、これは貝によって空いた穴だ。

済州島の他の島々と異なり、開発による環境破壊が少ないガパドは近年、青麦祭りが開催され、オルレ道もできるなどし、多くの観光客が訪れている。2010年には、誰もが行きたがる「名品の島ベスト10」に選ばれた。



ガパド
加波島

マラド(馬羅島)

マラド

韓国の最南端にある馬羅島は多くの観光客が訪れる島だ。北側から見れば、韓国の最終地点になるが、南側から見れば、韓国の始まりだ。

この島は南北に少し長い楕円形で、東側は高く、西側は低い地形だ。海岸線に沿って波食崖、海食洞が発達している。特に、東側海岸にある高さ34mの波食崖、西側海岸に密集する海蝕洞のうち

ナムデムン

「南大門」と呼ばれるアーチ型の海食洞は有名だ。



マラド

馬羅島

人が住み始める前のこの島は、ひと抱えほどの木々がうっそうと茂る森だったと伝えられる。人が移住し、生活するために森を焼いて畑をつくったが、森が大変大きく、焼くのに100日もかかったという。その時、この島にいた蛇は海を泳いで済州本島に逃げたと言われる。そのためか、現在、マラドに蛇や蛙がない。

ここには島の人々が守ってきた

チヨニョダン

処女堂があるが、悲しい説話が言い伝えられている。人がまだ住んで

モスルボ

いなかった頃、慕瑟浦の海女たち

が海女漁をするため、海女の子供と子守りの少女を連れてマラドにやって来た。作業を終えて慕瑟浦に帰ることになったが、波風が強く、船を出すことができなかった。これが何日も続いたある日、一人の海女が子守りを島に残して船を出せば、無事に帰ることができるという夢を見た。海女たちは、仕方なく子守りを残して島を発ってしまった。船は無事に慕瑟浦に着いたが、子守りの少女は泣きつかれ、死んでしまった

ダン

シン

という。その後、村の人々はその場所に堂を築いて少女の魂を慰めて祀り、少女は村を守る神になった。

チュジャド(楸子島)

チュジャド

サンチュジャド

済州本島と全羅南道の間位置する楸子島は「済州島の小さな多島海」と言われる。上楸子島、

ハチュジャド

フェンガン

チュボド

下楸子島、横看島、秋浦島の四つの有人島と、38の無人島の合わせて42の島々からなり、「楸子群島」または「テソム群を成する島」とも呼ばれる。

行政区域上は済州道に属するが、済州島と楸子島は異なる形成過程を経ており、地形の特性や地質、

景観も異なる。

ワンド

言語や風習も違う。楸子島は1896年に全羅南道莞島郡に編入されたが、1910年に済州道の管轄に入り、現在に至っている。済州道でありながら言語や風習は全羅南道の色の濃い「もう一つの済州」と言える。

上楸子島と下楸子島の距離は約100mで、昔は島の間にオニグルミが茂り、木をつたって往来したという。伝説によれば、もともとこの二つの島は遠く離れていたのだが、竜になりたがっていた大蛇が良い行いをしようと、離れていた島を現在の距離まで近づけたという。それでも船で行き来しなければならなかったのだが、今では長さ340m、幅8.6mの橋が架けられ、上楸子島と下楸子島をつないでいる。

下楸子島は上楸子島より3倍以上大きいが、人口は426世帯、約900人で、上楸子島の907世帯、約2,000人の半分よりも少ない。面事務所などの各種行政施設も上楸子島に集中している。横看島は現在、12世帯、約20人の住民が暮らしているが、過去は麦づくりやカタクチイワシ漁により、楸子で最も裕福な地域だった。楸子群島の有人島のうち一番小さい秋浦島には3世帯、6人が暮らしているが、20年前に島に入ったヤギが繁殖し、島の主のように振る舞っている。

楸子は磯釣りの天国だ。島を取り巻く全ての岩が釣りのポイントで、一年中釣りのマニアが島を訪れる。磯釣りとは、楸子十景に数えられる絶景、トレッキングコースのオルレ道、韓国の名品とされる楸子チャムクルビイシモチの塩干しなどの特産品を誇っている。



チュジャド

楸子島



海岸

済州火山島、海と出会う

済 州島を取り囲む海岸線の長さは530.09km陸地419.99km、島嶼110.10km。この海岸線をつくる地形と岩石は済州火山活動の歴史をありありと刻んでいるばかりか、青く澄んだ済州の海と溶け合って済州だけの独特な風景を描く。

済州の海岸を一回りすれば、黒い岩が時には滑らかに、時には荒々しく、その岩肌を現わし、絶壁や石柱になって海にそそり立っている。また、波に揺られて浜の小石にもなり、眩しく輝く白い砂浜や神秘的な黒い砂浜になって、数多くの美しい景観を織り成す。

済州で一番多く見られるのは玄武岩の海岸だ。玄武岩は済州の海岸線の最も多くを占めており、つい昨日の出来事のようにくっきりと溶岩の流れた跡を残す。これは玄武岩質の溶岩流が海岸に流れ、現在の海岸線をつくっているからだ。

玄武岩質の溶岩はパホイホイpahoehoe溶岩とアアaa溶岩に分けられ、異なる海岸を形成する。パホ

イホイ溶岩は表面が滑らかで、広く平坦な岩盤海岸をつくる。表面が尖り、素足で歩けないほど荒れた岩の海岸はアア溶岩によってできたものだ。アア溶岩は厚さが10～20mにもなり、断崖の海岸をつくることが多い。

傾斜が緩やかな一部の海岸には玄武岩質の岩盤の上を覆う堆積物の種類によって、砂利、砂、干潟の海岸に分けられる。これらの海岸は概ね規模が小さく、それだけに美しい。

砂利の海岸は済州島の河川と密接な関係がある。大きな河川のほとんどは海に流れる河口の周辺に存在する。

砂の海岸は海と風がつくった作品だ。海から風が運んだ海洋性の砂が緩慢な海岸を覆い、丘を築いたものがいくつかある。貝殻の破片でできた白い砂の海岸は、この砂の丘の前に広がっている。黒い砂の海岸は、近くにある水性火山体のタフ凝灰岩が砕けてできたタフの産物、いわば石屑でできている。

ソンアクサン スウォルボン ソンサンイルチュルボン

絶壁の海岸は絶景に数えられる所だ。松岳山、水月峰、城山日出峰一帯の海岸ではタフでできた絶壁が、アンドク 安徳と西帰浦一帯の海岸では粗面岩の絶壁が、ナムウォン エウォル 南元と涯月の一部地域では玄武岩の絶壁が見られる。

済州の海岸線が海水に浸る、その水中は溶岩が流れた形のまがつながっている所が多いが、済州の人々はこれを「ゴルバダン」と呼ぶ。これは、溶岩が流れていた当時、ここが海ではなかったことを伝えている。

済州には海にも畑がある

国語辞典はその国の人々の言語と文化を集大成した本だ。韓国の国語辞典にある「畑」の意味はどれもよく似ている。「水を溜めず、野菜や穀物を栽培する土地」あるいは「植物が自然に生い茂る土地」だという。

しかし、済州の人々はそれにとらわれず、海辺や海の中にも畑があると考える。ワカメ韓国語でミョクの多い所は「ミョクバツワカメ畑」、済州の方言でクジェンイというサザエの多い場所は「クジェンイバツ」だ。スズメダイ韓国語でジャリの多い所は「ジャリバツスズメダイ畑」という。陸に畑があるように海にも畑があるということだ。

バダバツ海の畑の意は干潟の状態によって区別される。「ビルレバツ」というのは平坦な岩盤が広がっている所だ。陸でも海でもこのような状態の場所を「ビルレ」と呼ぶ。大きな石でできた所は「モフルバツ」、砂利が多ければ「ジャガルバツ」という。「モサルバツ」は砂のある所で、砂と泥地の干潟は「ボルモサルバツ」だ。

バダバツは、周辺の地形によっても分けられる。溶岩が長く伸びた形の海岸を「コジ」といい、その反対に入り江のように入り込んだ形の海岸を「ゲ」という。「ネッカク」は河川の下流地点を指す言葉だ。「カク」は「終わり」という意味の済州の方言だ。ネッカクは海水と淡水が出会う所で、豊かな漁場でもある。

陸の畑は特定の人物の所有物だが、バダバツは海を生業の糧とする海辺の人々の共同の所有物だ。済州島のバダバツには有・無形の文化遺産が隠されている。

石で網を打って魚をとる、バダバツのウォン

ジョチョンウブ

入り江になった海岸に石垣を積み、魚の群れを囲って捕る「ウォン」というものがある。朝天邑

ジョチョンリ

グジャウブ

ハドリ

朝天里から旧左邑下道里までは、これを「ゲ」と呼ぶ。ウォンは漢字の「垣」から、ゲは入り江のように入り込んだ海岸という意味から、このように呼ばれる。



ウォン

済州島のウォンは村の共同所有物だ。自然にできたウォンもあり、石垣を積んでつくることもある。自然のウォンより、人工のウォンのほうが多い。自然のウォンの中に入った魚は、最初に発見した者が取っているが、人工のウォンに入った魚は、ウォンを造るのに加わった地域の人のものになる。

済州島のウォンの石垣は適当に積まれたものではない。形は直線、または曲線で、断面は直角三角形や

長方形に造られるが、直角三角形のほうが多くの人手を要する。

波の影響を受けにくい海辺では、直線またはジグザグで、断面を長方形にしたウォンダム石垣が多く、波の影響を受けやすい所では曲線で、断面を直角三角形にする。

済州のバダバツが培ってきた有形の文化遺産、ウォンは「自然の摂理に従って生きるべきだ」と、我々に伝えているようだ。

貴重だったソグムバツ

済州は海に囲まれていながら、塩を得ることが簡単ではなかった。ソグムバツ塩の畑の意、いわゆ

る塩田をつくりにくい火山島だからだ。しかし、二種類のソグムバツ、ビルレソグムバツとモレソグムバツがあった。

濟州島の伝統的な製塩はビルレソグムバツだけで行われる。平坦なこの塩田では鹹水と天然塩エウォルウブ グオンリをつくる。涯月邑旧巖里がその代表だ。窪んだビルレソグムバツでは鹹水をつくる。その鹹水を釜で煮立てて塩をつくるのだ。

このようにビルレソグムバツだけで塩をつくっていたが、ある時期に朝鮮半島からモレソグムバツの方法を取り入れた。濟州島に導入されたモレソグムバツでの製塩時期は導入期、定着期、拡散期、消滅期に分けられる。導入期は1498年から1702年までの約200年間で、この時期のグジャウブ ジョンダルリモレソグムバツは旧左邑終達里



グオンリ
旧巖里の岩塩田

にある。定着期は1702年から1874年までの約170年間で、ハンギョンミョン ドゥモリ デジョンウブ イルグァリ

翰京面頭毛里、大静邑日果里、旧左邑終達里にこの時期のモレソグムバツがあった。1874年から1930年までが拡散期で、この時期のものは20か所に増えた。

このように二種類のソグムバツがあったにもかかわらず、塩は貴重だった。拡散期に入った1910年頃でも自給率が24%に過ぎなかったのだから、濟州で塩は長い間、貴重品だったのだ。ソグムバツの建設と生産拡大の計画が立てられた1930年から、ソグムバツ専売法が発効された1956年までの間に、濟州のビルレソグムバツとモレソグムバツは消滅してしまった。

ともに耕し分かち合う海の畑、バダバツ

火山島の海は褐藻類が豊富だ。そして、これを食べて育つアワビやサザエなども多い。これが濟州のバダバツの本来の姿だ。

濟州島のバダバツはそのレベルによってゲッカ、ゴルバダ、ゴルバウイ、ポルバダに分けられる。このレベルによって生産される海産物やそれを分ける方法が異なる。

ゲッカは満潮の時は海面下に沈み、干潮では海面上に現れる。濟州の人々はこれをさらにウツバツ、ジュンガンバツ、アルバツに分ける。

ゲッカでは海藻類と貝類が育つ。そして、波に寄せられた海藻類、風藻も上がる。そのうち肥料用の海藻類と風藻は地元の人々が共同で所有する。地元住民が管理し、日を選んで共同で採取し、配分する。

ゴルバダは、引き潮の時に海面上に現れる部分の終わりから岩盤、石が積まれた部分、砂地のバダバツをいう。岩盤と石が積まれた部分をゴルバダ、ゴルバダの上に砂が覆っている所をモサルバダという。モサルバダもゴルバダの一部だ。

ゴルバダは地元の共同所有区域だ。水産業法上の「共同漁場1種」に当たる。

ゴルバダの海産物のうち、肥料用の海藻類、商品価値のある海藻類、商品価値のある貝類は地元住民の共同所有物だが、住民が個別に採取する。例えば、ワカメは共同管理し、日を決めて採取するが、地元の海女たちは自由にワカメを採取し、採取した個人が所有する。これが済州島の一般的なバダバツの所有構造だ。

ゴルバウイはゴルバダが終わる地点を指し、ポルバダはゴルバウイから水深約100mまでの干潟のある海をいう。ゴルバウイとポルバダはどの地域にも属さない公有の海域だ。誰でも自由に海産物を取ることができる。

男の海藻と女海藻

ゲッカとゴルバダでは海藻が育つ。済州の海辺の地域住民はここで海藻を採って生計を立てている。人々はここで共同で海藻を採り、配分するが、男性が採る海藻と女性が採る海藻は異なる。

済州でシルゲンイとノランジェンイと呼ばれる海藻は男性が採る。細く長く、大きさが3mほどあるため、岩場では採りやすいが、海女が海に潜って採ることは難しい。シルゲンイにはオニオコゼが産卵する。オニオコゼの卵には毒があり、海中でシルゲンイについた卵に触れると痛みを伴う。そのため、海女はシルゲンイの採取を嫌がり、男性が採取する。男たちは船の上で、アシ、ドウムブクナツ、コンジェンイと呼ばれる済州の伝統的な器具でこれらの海藻を採取する。

ワカメ、カジメ、ホンダワラ、テングサ、ミルなどは女性が採る海藻だ。ワカメ、カジメ、オオバモクは太く、大きさは1mほどで、海女が水中で尖った器具を使って切り取る。

ホンダワラはシルゲンイやノランジェンイのように細長い、女性が採る海藻だ、これは1mほどの大きさのものを食用にするため、海女がジョンゲホミと呼ばれる鎌を使って水中で採取する。テングサ、ミルは5cmほどなので、水中で素手で採ることができる。

男性がノランジェンイやシルゲンイを採る間、女性はこれを補助する雑多な用を足し、反対に女性がワカメ、カジメ、オオバモクなどを水中で採取する間、男性は女性の補助をする。

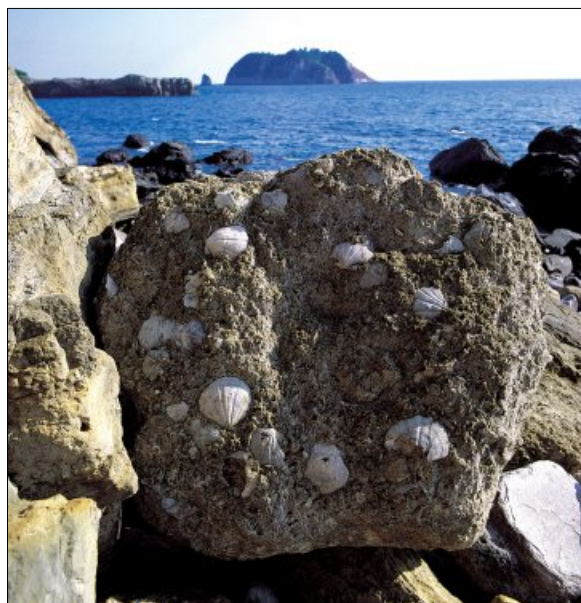
濟州の海岸との出会い



西帰浦層の貝類化石

チョンジョンボツボ

天地淵滝の南側にある海岸絶壁に西帰浦層の貝類化石がある。西帰浦層の貝類化石は韓国で化石としては初めて天然記念物第195号、1968. 5. 23に指定された。西帰浦層は済州が火山活動を始めた初期につくられた地層で、済州島形成の歴史が刻まれた大変重要な地質資源だ。新生代第4期の更新世初期に形成された海洋堆積層からは、軟体動物の化石だけでなく、有孔虫、介形虫、腕足類、珊瑚、クジラの骨、サメの歯、生痕化石など、多くの化石が発見されている。韓国で唯一の新生代第4期の堆積層で、海外でも知られる有名な地層だ。



貝類化石

ウェドルゲ

ウェドルゲとは「岩が一つ孤独に立っている入り江」という意味だ。昔は漁夫が船をつなぎ留めた小さな



ウェドルゲ

入り江だった。

いつの頃からかウェドルゲは、海岸の絶壁と海を背景にそそり立つ磯の岩を指す言葉になった。この岩は高さ23m、上部の幅7m、下部の幅10mだ。巨大な石柱の先端には草木が生えており、物珍しい。ウェドルゲは、周辺の見食洞が崩れてできた内湾形波食崖が発達していることから、波の当たる見食洞の面ごとに差別侵食が起きて形成されたものと推定される。

その昔、仲の良い老夫婦がいたが、海に漁に出た夫が高波に遇い、帰らぬ人となった。毎日海辺で夫を待っていた妻は、泣きつかれて岩になってしまったという伝説が伝わる。

ファンウジ12洞窟

ウェドルゲの東側海岸の絶壁にある階段を降りていくと、大きめの砂利の海岸がある。ここには、水性火山噴出によって堆積したタフ凝灰岩堆積物層に沿って、旧日本軍が掘った12の海岸坑道がある。この堆積層は玄武岩の岩屑が水平層理を築いており、水性火山活動で形成された堆積の同時性断層が発達したものだ。この海岸に掘られた洞窟は「ファンウジ12洞窟」という。東側の削り上げたような垂直の絶壁を、海岸線に沿って越えれば、西帰浦層上部が海岸線に露出したファンウジ海岸に行くことができる。

ドムベナンゴル

「ドムベ」は「まな板」、「ナン」は「木」を表わす済州の方言だ。昔ここにはまな板をつくる木がたくさん生えていたため、ドムベナンゴルという名がついた。済州のオルレコースのなかで最も人気のある7コースが、ここを通っている。

海岸線に沿って、高さ15～20mの柱状節理の断崖が長く続いている。玄武岩質の溶岩でできた柱状節

理の表面には、蜂の巣の形をした大きな孔穴がきれいに並んでいる。絶壁に沿って海岸に下りれば、海辺に広く岩盤の潮間帯が広がる。引き潮に広く現れる岩盤の潮間帯で貝を採る人々の姿が叙情的でもある。

サンメボン

この海岸から三梅峰までは高さ40mのそぎ取ったような絶壁で、人の近寄れない急傾斜の垂直断崖が続く。海岸の断崖と所々に海食洞が発達している。



ドムベナンゴル

ソッゴル

ソッゴルは一年中豊かな水が海に流れている谷間だ。その下流に直径1mの大きさの石が海岸をつくっている。この海岸は1km以上にわたっている。この海岸ではさまざまな岩石と火山岩層を見ることができる。海岸の東側の端から海岸線の底に貝類化石のある西帰浦層の露頭が確認できるが、この層は約500mにおよぶ。また、最大の厚さが10mにもなる火山碎屑性堆積層も見られる。

マンパッ火山体に由来するこの堆積層は西帰浦層、タフ凝灰岩、玄武岩の破片を含んでいる。堆積層の下部は風化された粗面岩の露頭が海岸線に沿って現れており、その上部を玄武岩質の溶岩流が覆っている。

マンパッは、海中で噴火した水性火山だ。朝鮮時代、敵の侵入を防ぐための見張りをした丸い煙台が復元されている。

ジサッゲ柱状節理帯

この海岸を見る人は誰でも賛嘆を惜しまない。神の彫刻作品のように美しい柱状節理に言葉を失う。

西側の海岸線に向かって下りれば、ジサッゲ柱状節理帯の海岸にたどり着く。柱状節理の絶壁が削ったように垂直にそそり立ち、海水面に接する部分には直径1mの岩々が横たわる。柱状節理の下部との間には二つの海食洞が見える。洞窟の入り口には数多くの小石がつまっている。

海にそそり立つ柱状節理の前には、柱状節理が崩れ落ちてできた岩礁が水面に見え隠れする。

柱状節理は溶岩流でできた岩柱で、平行に伸びた多角形の岩の塊を節理という。高温の溶岩が冷える過程で収縮が起き、その時に隙間がつくられる。隙間は一定した多角形で、ほとんどは六角形だ。これは収縮点で作用する安息角が120度のために起きる現象だ。



ジサッケ

この柱状節理の高さは最高で25mにもなり、上部の層に移るほど柱状節理が消滅し、アア溶岩流のクリンカーが現れているのが観察される。

デボドン

この溶岩流は大浦洞玄武岩で、25万～14万年前に形成された岩石だとされる。柱状節理帯海岸に沿って散策路が整備されている。柱状節理帯を東側の入り込んだ部分から見れば、異なる醍醐味が味わえる。

ゲッカク柱状節理帯

ゲッカクの河口から東の海岸線に沿って歩くと、丸くて黒い小石の海岸が200mほど続く。他では見られない風景だ。この海岸の柱状節理帯は高さが約40m、海に突き刺さるような垂直の海岸断崖を形成している。

この海岸では高さ15mの壮麗な海食洞を見ることができる。済州の海岸に沿って形成されている海食洞のうち、規模と発達の状態が最も良好なものに数えられる。特に、この洞窟は柱状節理の岩盤を間に置き、両側に洞窟が形成されていて珍しい。



ゲッカク

この海岸断崖の間には檣達洞の岩陰遺跡がある。高さ4～5m、幅8～9m、深さ約30mの海食洞だ。洞窟を形成する岩石は粗面安山岩で、床は厚い堆積層が平らに積もっている。洞窟遺跡地から東側の海岸に向かって、約40mの高さの柱状節理が、堂々とした海岸の断崖を築いている。

この海岸では柱状節理を直接見られるだけでなく、柱状節理の下部に形成された海食洞の形成過程も知ることができる。また、柱状節理が形成されてから、海に崩れ落ちて海岸の岩石に変わる柱状節理の消滅過程を、順を追って観察できる所でもある。

ソプチコジ

「コジ」とは突き出した地形を指す済州の方言だ。海に向かってその体を突き出したソプチコジは細長い首で陸地とつながっている。風で堆積した砂の丘が陸につながったのだ。

ここは絵に描いたような丘と青い海が美しく、映画やドラマでよく目にする場所だ。

ソプチコジの南側の海に位置する絵のような丘はプルグンオルムと呼ばれるが、これは火山体が波に削られて現われたスコリアの赤い色から付けられた名前だ。オルムの西側の海岸では赤と黒のスコリアが斜交層理を築いており、異色の景観を呈している。オルム上には朝鮮時代に周辺の海を監視した煙台があ

ヨンデ



ソプチコジ

る。この俠子煙台は円形がよく保存されている。

ブルグンオルムの中心は海の中になる。中心だった場所には円筒形の溶岩の柱が立ち、打ち寄せる波を迎えている。「チョッテバウイろうそく立ての岩の意」「ソンニョバウイ天女の岩の意」と呼ばれ、高さが23mのこの岩にまつわる伝説がある。昔、竜王の息子がこの場所で天から降りた天女を見て、心を奪われてしまった。竜王の息子は天女について天に上ろうとしたが、これを知った竜王の怒りを買って、岩になってしまったという。

ナムウォン

南元のクンオン

「オン」は岩が崖をつくっている地形を指す済州の方言だ。「クンオン」は名前のとおり、約20mの高さの巨大な岩が集まってできた絶壁が、海にそびえている。この岩は針の形の長石が多く、橄欖石の斑紋を持つ針状長石橄欖石玄武岩だ。

絶壁の下には規模の大きな海食洞が発達しており、溶岩はのし餅を重ねたような形をしている。

絶壁の上に設置された散策路を歩いていくと、海にそそり立つクンオン海岸の威容と美しい翡翠色の海が一望できる。

サンバンサン ヨンモリ

山房山と竜頭

サンバンサン

ハンラサン

ベンロクダム

山房山は本来、漢拏山の峰だったという伝説が伝わるオルムだ。不思議なことに白鹿潭の噴火口と山房山の周囲の長さが同じくらいで、構成する岩石も似ているため、山房山は漢拏山のできる80年以上も前にできたオルムだ。

山房山は、粘性の高い粗面岩質の溶岩が遠くまで流れずに、こんもりした状態で固まった溶岩ドームだ。韓国でも珍しい火山地形で、ドームの形が鐘に似ているため、鐘状火山ともいう。風化穴が蜂の巣の形

サンバンダク

ヘイル

を描いたような中腹には山房窟寺と呼ばれる石窟がある。高麗時代に有名な僧侶だった慧日がここで修行し、入寂するなど、昔から修道僧の修行の場として利用された石窟の寺だ。石窟の内部は岩壁で囲まれ、天上からは一年中、水滴が滴り落ちる。薬水とされるこの水は、山房山を守る美しい女性神である山房徳が流す涙だという伝説が伝えられる。

高さ398mの山房山は、海洋性の暖流が流れる海岸に位置しているため、地形的な特性と気候の要因により、固有の生態環境を維持している。特に、済州島で唯一、チョウセンヒメツゲが自生し、環境部日本の環境省に当たる指定保護植物のムカデランが群生するなど、植物学的な価値が高く、天然記念物第376号に指定されている。



サンバンサン ヨンモリ
山房山と竜頭

ヨンモリ

山房山の南側にある竜頭は、山房山よりずっと以前にできた火山体だ。済州で見られる最も古い火山体で、タフリング凝灰環の一部だけが残っているため、竜が頭を上げ、今にも空に飛び上がろうとする姿に見える。三つの地層が形成されていることから、三つの火口から溶岩が噴出したことが分かる。噴出の途中で火山体が崩れて噴火口が詰まり、火口が別の場所に移動した痕跡が見られる。

興味深い伝説が伝えられている。世を治める人物が済州島に生まれるというわさを聞いた中国の王が風水師の胡宗旦を送り、風水の穴を遮るように命じた。胡宗旦は山房山の一帯を調べて竜頭を見つけ、尾と背に当たる部分を刀で切った。すると、岩から赤黒い血が吹き出し、山房山に呻き声が響いたといわれる。

ヨンモリ

サゲ 沙溪海岸

サゲリ

沙溪里海岸は済州島をつくっている自然が美しく調和する所だ。砂浜を中心に海と島、奇妙な岩石と山が連なり絶景を造り出す。

サンバンサン ソンアクサン

海岸の両側に山房山と松岳山が海岸を取り巻くように立ちはだかっているためか、沙溪海岸はいつも静かで平穏だ。そして、心を安らかにする。

ヒョンジェソム

マラド

海岸の前に広がる海には、兄と弟の姿をした兄弟島が語り合うように立ち並び、遠くには馬羅島がぼんやり浮かんでいる。



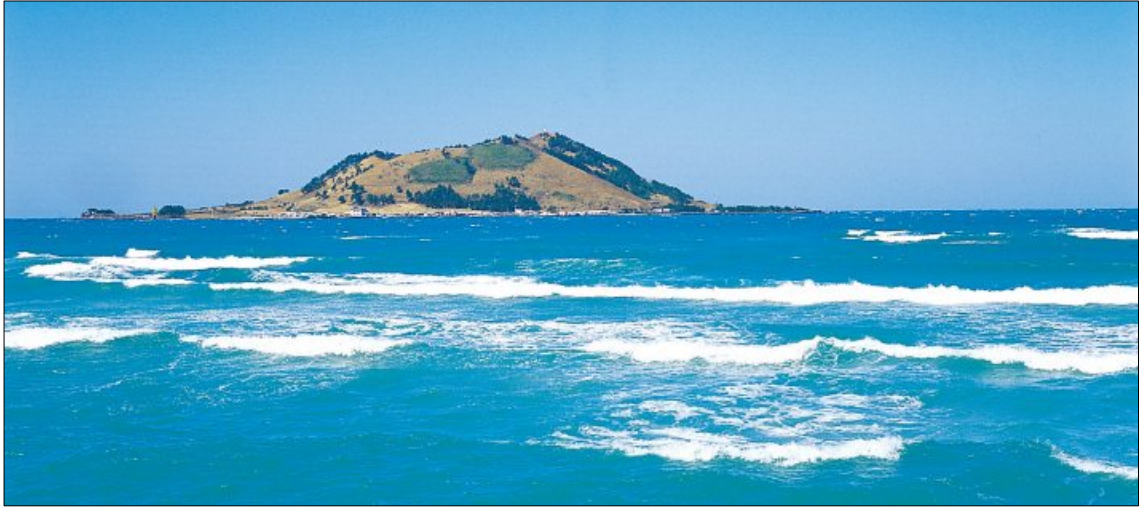
ヤグ
沙溪海岸

ボグ ジャグネ浦口

ハンギョンミョン ゴサンリ ボグ スウオルボン
 済州市翰京面高山里に位置するジャグネ浦口浦口は入り江の意は、水月峰を過ぎると見えてくる。済州島で最も西に位置するジャグネ浦口の端に立てば、遮帰島と海岸絶壁が織り成す絶景が観賞できる。ジャグネは高山平野から海に注ぐ河川の名前だ。ジャグネ浦口から船で10分の距離に遮帰島があり、ジャグネ浦口からは遮帰島を一周する高速艇が随時運航されている。ジャグネ浦口の絶景は海洋水産省の「美しい漁村」に指定され、さらに有名になった。日本統治時代に建てられた灯台「ドデブル」が昔の姿をとどめており、美しい眺めを背景に船釣りを楽しむ旅行客が数多く訪れている。

ヒョプジェ 挟才海水浴場

ヒヤンド
 挟才海水浴場には、透き通ったエメラルド色の海と白い砂が織り成す長く美しい砂浜がある。日没の景色が幻想的で、沖には飛揚島が浮かび、島の島、海と漢拏山の眺めを楽しめる。浅く青い海に映る白い砂浜を見ていると、飛揚島まで歩いていけそうな錯覚に陥る。



ヒョプジュ ヒヤンド
挟才の海辺から見た飛揚島

済州オルレ7コース

ウェドルゲを出発して法還浦口と済州風林リゾートを経由し、月坪浦口まで続くオルレ道だ。ウェドルゲ、ファン
ウジ海岸、暴風の丘、ドンノブンドクなどを過ぎ、散策路があるドムベナン道を過ぎるとソッコルに到着する。こ
この区間は西帰浦市でも屈指の憩いの場で、各種のドラマや映画の撮影地にもなった。最近韓流観光の一
番地として有名だ。ここを過ぎると自然生態路の「スボン路」に出る。さらに、ドウモニムル〜ソゴンド海岸区
間である「イルカンジョン海のオルレ」、モンドル海岸にある「風林オルレ橋」へと道は続く。そして、アックンネ
のある風林リゾートを過ぎると江汀川と江汀浦口が見え、イルカンジョンを過ぎて月坪浦口に至る。

済州オルレ9コース

こじんまりとした大坪浦口から始まり、馬が通った「モルジル馬道の意」に沿って歩くと、絶壁の上に広い草原「バ
クスギジョン」が目の前に広がる。質のよい済州馬をバクスギジョンで育て、モルジルで大坪浦口まで運び、船
で元の国に送ったという。バクスギジョンはアキグミが生い茂るボルレナン道に続く。月羅峰に登る道はなだらか
ではないが、至るところで美しい眺めが楽しめる。イングンニム王様の意展望台とネムノキの森の道を過ぎると、
安德溪谷に出る。済州の原始の姿をとどめる安德溪谷は、済州の隠れた美しさを見せる秘境で、済州で最も
美しい溪谷とされている。さらに、黄狗川、ドンファ洞、ポンナンを経て和順金の砂海岸に至るオルレ9コースの
距離は比較的短い。しかし、バクスギジョンと月羅峰への登り道があり、容易ではないコースだ。



ダンチョムル洞窟

洞窟

溶岩洞窟の宝島

洞 窟には自然にできた天然洞窟と、人が掘った人工洞窟がある。済州島には日本統治時代に旧日本軍によって造られた陣地洞窟が所々にある。

天然洞窟はまた、大きく海食洞、鐘乳洞、溶岩洞に分けられる。

海食洞は海岸絶壁の岩石が波に削られてできる洞窟だ。済州島の傾斜の急な海岸で多く見られる洞窟で、現在、30余りが確認されている。

鐘乳洞は、石灰岩地帯の隙間に染み込んだ地下水が石灰岩の主成分である炭酸塩の成分を溶かしながら、長い歳月をかけてつくられる洞窟だ。現存する鐘乳洞はこの過程をこの先も続けていく。朝鮮半島の陸上に形成された天然洞窟のほとんどは鐘乳洞だ。済州島には鐘乳洞はない。

溶岩洞は、名前のとおり火山活動で噴出した溶岩が流れる過程でつくられる。溶岩洞は溶岩が流れて固まることで洞窟の形成が完了する。

ハンラサン

濟州島の地勢を遠くから見ると、漢拏山を中心に南と北は傾斜が急で険しく、西と東の地形は緩慢だ。南側と北側の地域は溶岩洞があまり発達していないが、東側と西側は漢拏山の山腰から海岸まで溶岩洞が発達している。特に、東北地域と西北地域に濟州道を代表する溶岩洞が集中している。これらは火山活動で噴出した溶岩が玄武岩質で、低い地帯である海岸までよどみなく流れたためだ。

濟州には多くの溶岩洞があり、現在まで140の洞窟が発見されている。この島の地下にはまだどれほどの溶岩洞が隠れているのか、それは誰も知らない。濟州は溶岩洞の天国なのだ。

では、溶岩洞はどのように形成されたのか。

火口から噴出した熱い溶岩は、地表の傾斜を川のように流れる。空気に触れた溶岩噴泉の表面は両端から固まり、溶岩の屋根をつくる。溶岩噴泉の流れは高温を維持しながら、溶岩の屋根の下を低い方へと流れ続ける。火口から溶岩の供給が跡絶え、溶岩が全て流れ出れば、そこに長い空洞ができる。こうして溶岩洞が形成される。

溶岩洞の形成のためには、いくつかの物理的な条件が満たされなければならない。まず、火山活動で噴出した溶岩の量が多くなければならない。溶岩は高温を維持し、粘性は低くなければならない。そうでなければ地表に沿って遠くまで流れていけないからだ。主に玄武岩の溶岩がこれに該当する。さらに、地表面がある程度の傾斜を維持した緩慢な平面であるか、長く平らな谷間でなければならない。

濟州島の溶岩洞は、30万～10万年前に流動性が大きく、粘性の低い玄武岩質の溶岩が噴出してできた。そのため、鮮度が高く、原形がよく保存されており、世界的に景観的、学術的な価値が高いと評価される洞窟が多い。濟州道が溶岩洞の宝島だといわれる所以だ。

溶岩洞窟のすべてを有する総合展示場

濟 州の溶岩洞窟は数が多いばかりでなく、規模も形も多様だ。それだけでなく、溶岩洞窟が持つ特徴、すなわち微地形と洞窟生成物を十分に有している。

溶岩洞窟の微地形は、洞窟内部に熱い溶岩が連続して流れてできた独特な形態の小規模な地形をいう。洞窟入り口、溶岩棚、縄状構造、溶岩石柱、熔岩柱石、チューブ・イン・チューブ、溶岩橋、溶岩流線などだ。

溶岩洞窟生成物は、熱い溶岩が流れる過程で天井、壁、床につくられたさまざまな形の固形

体をいう。溶岩鍾乳、溶岩石筈、溶岩曲石、溶岩標石、溶岩球、溶岩の泡、溶岩サンゴなどだ。

溶岩棚は洞窟の内部を流れる熱い溶岩が壁面に貼り付いたり、壁面が熱侵食作用を受け、溶け落ちて棚の形になったものだ。

縄状構造とは、冷え始めた溶岩の表面が、続いて流れる溶岩によって流動方向に縄状に曲がった構造をいう。

溶岩石柱は、洞窟の天井に形成された溶岩鍾乳が流れ落ち、床の溶岩石筈につながって柱状の石柱になったものだ。また、天井から供給される溶岩が床に流れ落ち、柱状に固まったもの

をいう。

溶岩石柱は、内部を流れる一筋の溶岩が障害物によって二筋に分かれ、再び一筋になりながら柱状になったものをいう。

チューブ・イン・チューブは、一度形成された洞窟の中に溶岩が流れたもので、表面が固まった溶岩の内部に溶岩が流れてできる洞窟の中の洞窟だ。

溶岩橋は、洞窟の内部に橋をかけたように、両側の壁面から洞窟を横切るように形成された地形をいう。



マンジャングル
万丈窟

溶岩流線は、内部を流れる溶岩が低くなりながら壁面に痕を残したもので、多くは縄状の構造だ。

溶岩鍾乳は、内部を流れる溶岩の熱で天井が部分的に溶け落ちながら、空中で固まったもので、溶岩鍾乳石とも呼ばれる。丸く、長い管状のものを溶岩鍾乳管という。

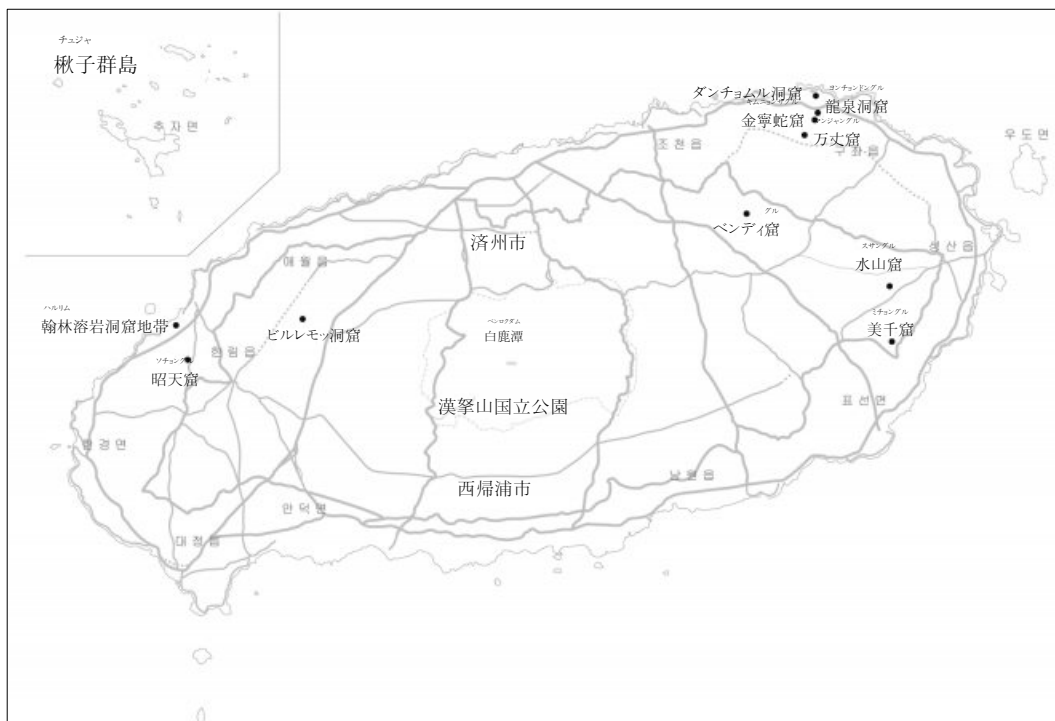
溶岩石筈は内部に溶岩が流れる時、天井や壁面で固まった溶岩が溶けて水滴のように床に落ち、筈のように積み上がって固まったものだ。

溶岩曲石は、溶岩鍾乳管が歯磨き粉を絞り出したように、曲がりくねった形になったものだ。

溶岩標石は、天井で固まっていた溶岩の表面が、内部を流れる溶岩の上に落ち、溶岩とともに流れている間に固まったものをいう。

濟州島の溶岩洞窟は、その全てを惜しみなく示してくれる溶岩洞窟の総合展示場だ。

溶岩洞窟との出会い



済州は溶岩洞窟の宝島という名のとおり、天然記念物に指定された溶岩洞窟が11か所もある。そのう

ち、拒文岳溶岩洞窟系というのは、済州島の東北地域に位置する単成火山体の拒文岳から噴出した

溶岩流が、地表の傾斜面を海岸まで流れて形成されたもので、この洞窟系に属する五つの洞窟は世界自然遺産だ。

済州島の溶岩洞窟を直接見るのは簡単ではない。一般に公開されているのは四つだけだ。他の洞窟は、探訪客の安全上の問題もあるが、何よりも洞窟生成物の破壊や損失が懸念され、一般には公開されていない。

拒文岳溶岩洞窟系のうち公開されてい

る洞窟は万丈窟の1km区間だけだ。そ



ミチヨングル
美千窟

ヒョプジュグル

サンヨングル

ミチヨングル

の他、公開されている洞窟は、西北地域の挾才窟、双竜窟、東部地域の美千窟だ。

ギムニョングル

金寧窟

ギムニョングル

金寧窟は済州で最初に観光用の洞窟として開発され、また、韓国の洞窟のうち最初に天然記念物第98号、1962年12月に指定された洞窟だ。

ギムニョンサグル

金寧蛇窟とも呼ばれているのは、洞窟がまるで大きな蛇が蛇行するようなS字の形をしているためだ。

その形のためか、おもしろい伝説が残っている。この洞窟の中には大蛇が棲んでいた。そして、毎年、この大蛇に少女を供え物として捧げなければ、凶年に加えて災害も起きるため、住民は苦しんでいた。朝鮮

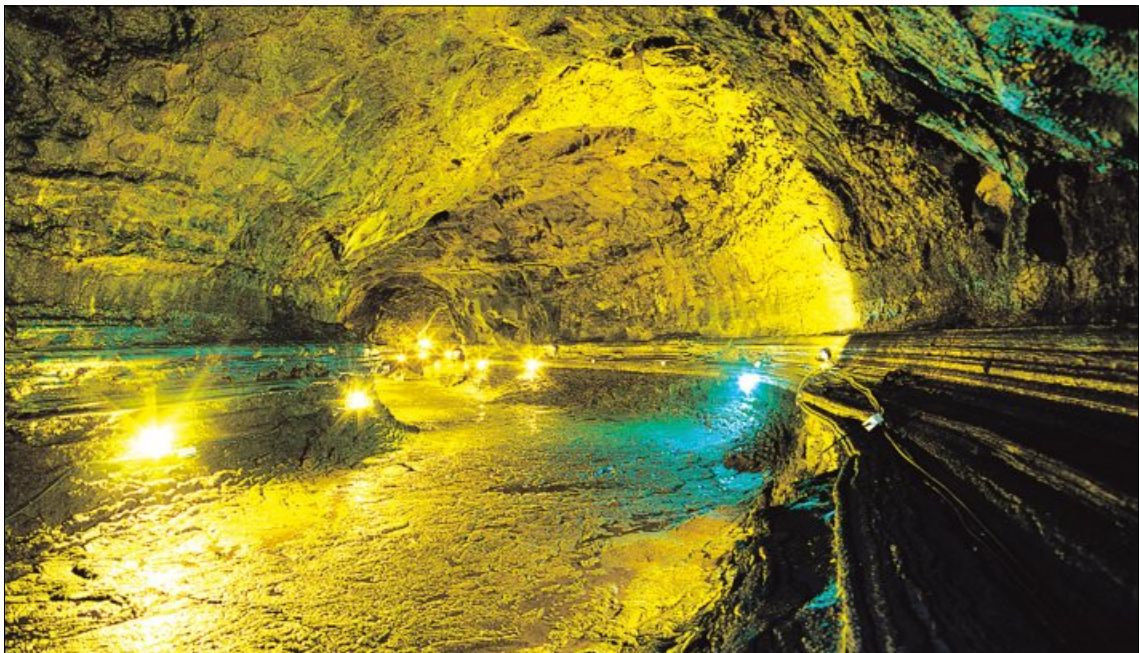
ソリン

時代に済州に赴任した徐燐という19歳の判官が、この大蛇を退治した。金寧窟の入り口に「済州判官徐燐公事蹟碑」という碑が建てられており、この洞窟の伝説に華を添えている。

マンジャングル

万丈窟

金寧窟の隣にある万丈窟は、1970年3月に金寧窟に編入される形で金寧窟とともに天然記念物第98号



マンジャングル

万丈窟

に指定された。

万丈窟は、溶岩の流出した方向の海岸へ、くねくねと曲がって形成された大規模な主洞窟の長さが5.3km、上層窟と下層窟を合わせて合計7.4kmだ。最大幅18m、高さは最高23mで、2階、3階からなる上層窟と下層窟など、多層構造が発達している。済州島を代表する洞窟で、世界的にも大型洞窟に属する。洞窟内部の構造と形態、洞窟の微地形と洞窟生成物が多様に発達し、保存状態も大変良好で、学術的価値、景観的価値が高いと評価されている。

万丈窟は天井の3か所が崩れ、三つの入り口ができたが、現在は第2入口から溶岩石柱までの1km区間が一般公開されている。洞窟内部の温度は一年中15～16℃で、夏は涼しく、冬は温かいため、探訪客の人気を集めている。

万丈窟の公開区間に入れば、まず、その雄大な規模に驚かされる。そして、さまざまな洞窟微地形や洞窟生成物を見ることができる。

洞窟の両側の壁から、グツグツと煮え立つ真っ赤な溶岩がどれだけ大量に流れていたかが分かる縄の模様は、溶岩流線だ。壁面に付着し、棚やテーブルのように突き出した部分は溶岩棚という。万丈窟で有名な「ゴブギバワイ亀の石の意」は溶岩標石だ。これは洞窟が形成された後に溶岩が再び流れ、この時に溶岩の熱で天井や壁から溶岩の塊が剥がれ落ちる。落ちた塊が溶岩とともに流れているうちに、溶岩の量が減ったり、速度が遅くなって現在の場所で固まったものだ。サメの歯やつらの形をしている溶岩鍾乳は、主に天井の高さが低く、狭い洞窟でよく見られる。流れる溶岩の表面が先に固まり、続いて流れる溶岩に押されてできる縄状構造も見ることができる。また、表面が固まった溶岩の隙間から、その中を流れる溶岩が押し出されたラバトjava toeも好奇心をそそる。

最も目を引くのは、高さ7.6mの威容を誇る世界最大規模の溶岩石柱だ。これは、洞窟が形成された後、地表を流れる溶岩が天井の隙間から洞窟の床に流れ落ち、柱の形に固まった洞窟生成物だ。

韓国国内最大のユビナガコウモリの生息地でもある万丈窟には、60種以上の洞窟生物も生息している。

ダンチョムル洞窟

ダンチョムル洞窟は、1996年12月に天然記念物第364号に指定された。

長さは110mと短く、天井までの高さが0.3～2.7m、洞窟の幅5.5～18.4mの単純な構造の洞窟だ。洞窟の内部は炭酸塩成分が数千年をかけて沈殿し、積み重なった石灰装飾の洞窟生成物が、特異な景観を呈する驚くべき洞窟だ。

溶岩洞窟の内部に石灰洞窟の特徴を有しているものは世界でも例が少ないと洞窟専門家が評価している。

洞窟地帯の上に白い砂の丘が形成されている。海岸から貝類の破片が集まった白い砂が風に運ばれ、長い期間をかけて砂丘堆積層を築いたものだ。雨水に溶けた砂の炭酸塩成分が洞窟の隙間から染み込み、内部に一滴ずつ溜る。この過程が続き、溶岩洞窟の中に石灰洞窟で見られる炭酸塩洞窟生成物が現われる

ヨンチョンドングル 竜泉洞窟

ヨンチョンドングル

龍泉洞窟は2006年2月に景観的、学術的価値の高さが認められ、天然記念物第466号に指定された。洞窟の終わりの部分に巨大な湖があり、龍泉という名前が付いた。溶岩洞窟で巨大な湖が発達しているのは、現時点でこの洞窟だけだ。

地表面から深さ9mの垂直の入口を持つ龍泉洞窟は、全長が3.4kmの大型洞窟だ。140mにもなるラバロールlava roll、溶岩台地lava terrace、溶岩棚、溶岩滝、溶岩流線、溶岩溝、チューブ・イン・チューブなど、洞窟生成物と微地形が発達しており、溶岩洞窟の典型的な形態を現わしている。それだけでなく、さまざまな種類の炭酸塩洞窟生成物が、洞窟の内部を美しく装飾している。

龍泉洞窟では統一新羅時代の土器をはじめ、鉄器、動物の骨、貝殻、炭、洞窟の壁面に刻まれた文字と各種の模様など人為的な痕跡が発見され、神秘さとともに好奇心をそそられる。

グル ベンディ窟

2008年1月に天然記念物第490号に指定されたベンディ窟は、標高300～350mの溶岩台地に発達している。中山間地域の広々とした平野を意味する「坪垈」を、済州の方言で「ベンディ」といい、そこから名前が由来した。名前のとおり広大な溶岩地帯に形成された洞窟だ。洞窟の内部は2層構造、3層構造で、多数の支窟が上下左右、四方八方に蜘蛛の巣のように発達する複雑な迷路型の洞窟だ。

スサングル 水山窟

スサングル

済州道の天然記念物に指定されている溶岩洞窟のうち、最も東に位置する水山窟は、2006年2月に天然記念物467号に指定された。全長は4.5kmだ。済州島の溶岩洞窟のうち、ビルレモツ洞窟、万丈窟について3番目に長い洞窟だ。洞窟の入り口から底までは深さが10mを超す垂直入口になっている。

ビルレモツ洞窟

平らな岩盤地帯を意味する済州の方言「ビルレ」と、池を意味する「モツ」を合わせた「ビルレモツ」という名で呼ばれている。洞窟の入り口から北西方向に約100mの地点に池がある。この洞窟は1971年に発見され、1984年8月に天然記念物第342号に指定された。

全長9kmで、韓国の洞窟のうち最も長く、世界中の溶岩洞窟の中でも9位に記録されている。洞窟は主窟より支窟のほうが3倍以上長い網状の迷路窟だ。洞窟が枝分かれし、再び合流する区間には溶岩柱

石が発達している。洞窟の床から68cmの高さに発達した溶岩石筈、高さ28cmの珪酸鍾乳、長さ7m、高さ2.5mの溶岩球などは世界的な規模の溶岩洞窟生成物として評価されている。

1973年、大陸に生息するヒグマの顎骨と関節骨の化石、旧石器時代の遺物である剥片石器、骨角器、火を使った痕跡である木炭などが発見された。このように、ビルレモッ洞窟は旧石器時代の編年と、当時の生活様式を研究するのに貴重な資料となる洞窟だ。この洞窟が濟州島で最も古い人の棲みかではないだろうか。



ビルレモッ洞窟

ハンリム

翰林溶岩洞窟地帯

ハルリムウブ ヒョプジュリ

1971年9月に天然記念物第236号に指定された濟州翰林溶岩洞窟地帯とは、翰林邑挾才里に位置する昭天窟、黄金窟、挾才窟の三つの溶岩洞窟をいう。挾才窟の延長線上に双竜窟もある。

ソチョングル ファングムグル ヒョプジュグル

サンヨングル

昭天窟はその名前が洞窟の特徴を表している。1968年から1970年に初の学術調査が行われたが、当時、洞窟の入り口に緑色のシダ植物の群落があった。その姿が輝くように美しかったことから「明るく照らす」という意味の「昭」と「天」の文字を取り「昭天」と名付けられた。

全体の長さは3kmで、240mにもなるチューブ・イン・チューブ、その上部が裂けてできたコフィンcoffinなど洞窟内部の小さな地形は、世界的にも希少で、昭天窟だけの特徴でもある。地表面に砂丘層を形成した地域の洞窟の内部には、炭酸塩動物生成物が分布する。

黄金窟、挾才窟、双竜窟は、翰林公園内にある。挾才窟は洞窟のある村の名前に肖ったもので、双竜窟は洞窟の内部の形態が、二頭の竜が通り抜けたような形であることから名付けられた。黄金窟は洞窟内部の炭酸塩洞窟生成物が、黄金で飾られた宮殿を思わせるとして、付いた名前だ。

長さは、挾才窟が99m、双竜窟393m、黄金窟180mと短い、洞窟内部にある炭酸塩洞窟生成物の景観的、学術的価値が高いと評価されている。

三つの洞窟のうち、観光用に公開された洞窟は挾才窟と双竜窟だ。

双竜窟は三本に分かれた水平洞窟だが「地下の大橋脚」と呼ばれる溶岩の柱が人気を集めている。この石柱に人の精神を正し、頭を良くする智恵の神が宿るという伝説があり、ひと回りすれば、頭が良くなると言われている。



河川・溪谷・滝

済州の水を操る美しいひだ

済

州は韓国で降水量が最も多い所だ。年平均の降水量は2,000mmで、朝鮮半島の1.5

ハンラサン

倍だ。済州でも漢拏山地域の降水量が多い。冬は雪が多く、夏は雨がたくさん降る。しかし、済州では洪水の被害がほとんどない。雨や雪がもたらす多量の水はいったいどこに流れるのだろうか。

済州島を創造した巨大な女性神ソルムンデはこの島を美しいだけでなく、巧みに造り上げた。どんなに多くの雨が降っても、この島が雨水を巧くさばけるよう、水を素早く流し、吸収する火山岩と火山土でつくったのだ。

ベンロクダム

済州島は、漢拏山の白鹿潭を頂点とし、北側と南側の斜面は傾斜が急で距離が短い、東側と西側の斜面は緩慢で長い楕円形だ。構成する岩石も異なる。南・北の斜面は比較的粘性の高い粗面岩、粗面質安山岩、玄武岩質粗面岩の溶岩流が分布し、東・西の斜面は粘性の低い玄武岩質の溶岩流が分布している。

済州島の水の流れをさばく溪谷と河川は、このような済州島の地形と地質によって形作られている。溪谷や河川は南・北の斜面で発達しており、東・西の斜面では貧弱だ。漢拏山の頂上地域に降る大量の雨水が傾斜の急な南・北に集まって流れるため、侵食谷が発達したのだ。一方で東・西の斜面は緩慢で、水はけの良い地質のため、雨水はまず地下に染み込む。したがって、河川は発達せず、貧弱だ。

済州の土壌も、河川の形成と発達過程に影響を与えた。済州道に広く分布する火山灰土は土壌の粒子は軽く、保水力にも優れており、内部排水が早い。水はけが良いため、水が溜らないのだ。

済州には大小の河川が140以上あるが、ほとんどは長さが短く、浅い。そして、多くは普段、水が流れない水無川だ。済州の河川は梅雨や集中豪雨などで、一日平均50～80mm以上の雨が降れば、水が流れる。だが、これも2～3日以上は続かず、再び水無川に戻る。

済州島に降る多量の雨は、水はけの良い地形と地質の特性により、地下に染み込んで地下水になる。済州島の降水が地下水に含有される割合は、半島部の10～20%より、最高で4倍以

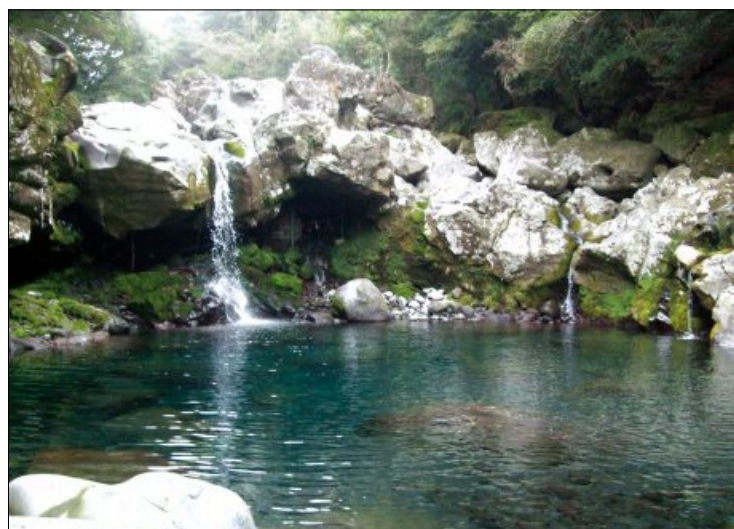
上も多い46%だ。地下に染み込まず、余った水を溪谷や河川がさばいて海に流すのだ。
このような済州島の地形と地質の特性により、大雨が降っても洪水の被害が出ないのだ。

済州河川の白眉

溪谷とは地表に長く刻まれた谷間のことだ。山と山の間、または絶壁と絶壁の間に形成された地形をいう。済州のほとんどの溪谷は河川に続いている。済州の河川の源流であり、流れの要所にも、河川の終わりに也成了り、河川のハイライトを演出している。

美しく、あるいは常に流れ

済州にはすばらしい景観で知られるいくつかの溪谷がある。漢川の源流である耽羅溪谷をはじめ、光令川の上流であるY溪谷、オリモクの尾根を挟む漢拏溪谷、倉庫川の下流である安德溪谷、孝敦川の中流にあるドンネコ溪谷、新礼川の中流地帯の水嶽溪谷などは、溪谷



ウォナンボッポ
ドンネコの鴛鴦滝
ヨンシル

谷、靈室、Y溪谷など、一部の河川は湧き水が短い距離を流れ、再び地下に流れ込んでい
る。このうち、Y溪谷の湧き水は御乗生貯水池の主な水源になっている。また、ドンネコ溪谷の

の美しさを備えた代表的な名所
だ。

溪谷は形成の初期には雨が降った時だけ水が流れる水無溪谷を形成する。次第に削られ、地下水面に至れば、水の流れる溪谷になる。済州島は地下水位が非常に深く、水の流れる溪谷が少い。

年中水の流れる河川もある。河川の近くから湧き出る湧き水があるからだ。

漢拏山の中腹のドンネコ溪

湧き水は、夏の「ムルマジ水に打たれ健康を促す行為」として愛用されている。

サンジチョン ウェドチョン オンボチョン チャンゴチョン チュンムンチョン ドスンチョン ヨンウェチョン ドンホンチョン

山地川、外都川、瓮浦川、倉庫川、中文川、道順川、淵外川、東洪川の海岸近くは、一年中水が流れている。これらの河川沿いでは多量の湧き水が流れ出ているためだ。上水道が各世帯に供給されていなかった頃は河川の水を食水、洗濯や沐浴、家畜への給水、農業用水として利用した。江汀川、瓮浦川の湧き水は現在も上水道源になっている。

濟州島の生命の源

濟州の河川は濟州の人々の生命の源であり、生活の場でもある。濟州の河川のほとんどは水無川だったが、所々で湧き水が湧き出、溜ったり、流れたりした。食水が出るこの地域に人々が集まり、村を形成した。このように、火山島濟州の河川は、村の歴史の源流であり生活の場として認識されていた。

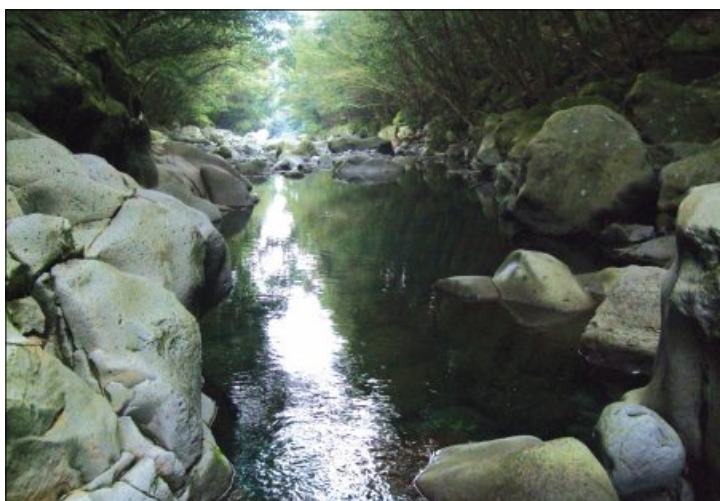
河川が生活空間として利用された例は、食水と生活用水を提供したいた水タンク、居住空間だった

河川沿いの岩陰遺跡、農業用水路の跡などから知ることができる。

河川沿いから出る湧き水を食水にしていた所は少くない。濟州島で最初に簡易水道1926年が設置された正房川をはじめ、外都川、江汀川、孝礼川、瓮浦川、山地川などから湧き出す水は濟州の人々が生命水として利用した代表的な場所だ。

河川沿いの湧き水を利用し、水田耕作をするための農水路を造った所もある。倉庫川の下流のファンゲ川、中文川の水をソンチョン里まで引いた水路、江汀川の水を利用した水田農耕水路、靈室の水を河源貯水池に集めるための水路などがある。

河川は昔から村と村の間の境界の役割もし、本郷堂を置いて村の安全と豊作を祈る場所でもあった。奇岩怪石と常緑樹林帯などの絶景を背景に、風景を楽しむ人々の憩いの場所でもある。



ドンネコ上流

チョンバンチョン

ヒョイエチョン

ヨンシル

ハウォン

動く彫刻、滝

河川の水が垂直や急斜面を落ちて滝となる。滝は地盤の形態と地質構造によってその形が異なる。河川を流れる水が絶壁から垂直に落ちるもの、比較的緩慢な傾斜の上から急流に乗って滑るように流れ落ちるもの、いくつかの段に分かれて落ちるものなど、いくつかの種類がある。

滝は一般的に、断層作用で生じる階段形の基盤岩の上に流れる河川によってできる場合が多い。



ジョンバンボッポ
正房滝

い。上段には硬い棚のような岩石があり、下段の岩石が上段より弱ければ、上段の硬い地層は侵食に耐えられるが、下段の柔らかい地層は侵食される。こうして急斜面や絶壁が形成され、垂直に落ちる滝になる。

滝の下側と後ろに滝壺が形成され、続いて上段の硬い帽子岩が崩れる。河床の侵食が続くほど滝は上流に押され、下流には溪谷が形成される。

ジョンバンボッポ

最も代表的なのは天地淵滝だ。この滝の周辺の岩石は上段が硬い溶岩で、下段は西

帰浦層の軟弱な堆積岩だ。したがって天地淵滝は滝の下と後ろで侵食が起き、上部の溶岩が崩壊によって長期間にわたり滝が上流に後退して現在の位置に滝ができたのだ。

また、火山の噴火で厚く吹き出した溶岩の温度が急激に下がり、収縮する過程でできた柱状節理の岩壁によっても滝が形成される。柱状節理が波食崖の発達した河川や海岸の近くに形成される場合、柱状節理の下部が先に侵食され、柱状に崩れ落ちる。残った岩壁は垂直な絶

ジョンバンボッポ

壁をつくり、その上に水が流れれば、海岸が滝になる。代表的なのは正房滝だ。

済州の河川・溪谷・滝との出会い

済州島の水の流れをつくる溪谷、河川、滝は、絶景が多い。水の力がそうであるように、これらは全て生命を育み豊かな生態系をつくる。



ドンネコ溪谷

ヒョドンチョン

ドンネコ溪谷は漢拏山の南側にある最大の河川、孝敦川の支流だ。漢拏山の頂上から始まり、セソカクを経て海に注ぐ孝敦川は、2002年にユネスコの生物圏保護区に指定された価値の高い河川だ。生態と休養を兼ねた公園として開発されたドンネコ溪谷は、誰もが高く評価する最高の避暑地だ。溪谷の中間地点から1.5km続くウッドデッキの探訪路を20分ほど歩いていくと、溪谷の両側に押し合うように茂る常緑樹が見える。その間に高さ5mの二筋の鴛鴦滝と小さな池が現われる。空を遮るように茂る天然の森を涼しい風がそよぐ。

ウォナンポッポ

「ウォナン」とはオシドリを、「ポッポ」は滝を意味する。一対の滝が仲よく流れる姿をオシドリに見立てて名付けられたこの滝は、その名のとおり美しい。こじんまりとしているが勢い良く白い泡を描く滝と滝壺を見ると、水に飛び込んで暑さをしのぎたくなる。



ドンネコ溪谷周辺の散策路

新礼川の水源は、最も高地帯にある標高1,750mのチンダルレバツ、山頂に湖のある沙羅オルム、
ソンノルオルム
 城板岳として知られるソンノルオルムなど5か所だ。新礼川はこの他にも数多くの支流河川が本流につながり、高さが100mを超える水嶽溪谷などを経て海にそそぐ。



シンレチョン
新礼川

ペフンシチ
 ウォナンポッポの周辺は毎年旧暦の7月15日 韓国では百中
 という。道教に由来する年中行事の中元のこと、済州の人々がムル
 マジをする場として有名だ。ムルマジとは、氷のように
 冷たい滝水に打たれれば、神経痛などの痛みが改善
 するという民間療法で、真夏に涼を取る良い方法でも
 ある。

ドンネコ溪谷は環境樹種であるヒサカキの天然林があり、趣きの異なる森林浴ができる場所でもある。韓国観光公社はここを、澄んだ空気と木の香りが都市生活で疲れた現代人に安らぎを与えるウェルビーイング観光地に規定し「おすすめ観光スポット」として紹介した。

シンレチョン 新礼川

流路延長17.35kmの新礼川は孝敦川のドンネコ溪谷とともに全区間が天然記念物第182号の漢拏山天然保護区域に指定されている。

サラ
 新礼川の最も特異な点は河口で河川の水流が二つに分かれ、その間に典型的な三角州が形成されていることだ。南北の長さが200m、東西の幅は約30m、面積は約1万㎡の三角州だ。住民はここを「ミョンサリ」と呼んでいるが、一般の住宅はもちろん、子供の遊び場や運動場、果樹園まであり、三角州であることを忘れるほどだ。

ソジュンチョン

西中川

流路延長22.43kmの西中川は済州

ナムウョンウブ

の東南部地域の南元邑を通過する

河川だ。河川の中流と下流は

ハンナムリ

ウイギリ

漢南里、衣貴里、南元里、

テファンリ

泰興里などの村をつくり、人々の生

活とともに流れてきた。

西中川の主要な水源は漢拏山の

標高1,280m一帯のフクブルグンオルムだ。西中川は城板岳登山道に

沿って南東方向に流れ、数多くの

細流が入り組んだ複雑な河系網に

沿い、再び本流を形成して南元里

と泰興里の海岸に流入している。

河川の水源一帯の上流渓谷から、周辺の村の下流渓谷に至るまで溶岩が流れる時に形成された多くの奇岩絶壁が神秘さを増している。スダジイ、アカガシ、アラカシなどの常緑広葉樹が生い茂っている。



ソジュンチョン

西中川

セソカク

セソカクは孝敦川の終わりから、海水に流入する区間に形成された河川地形だ。

セソカクは済州固有の地名で、

「セ」は孝敦の村、「ソ」は深い池を意味し、「カク」は接尾語で、終わりの地点を意味する。セソ

カクは名前のとおり神秘的で興味深い独特な地形だ。

淡水と海水が会ってできた淵は、水深の平均が3～4m、最も深い所は6m、幅10～30m、長さ250m



セソカク

だ。湖を思わせ、水底が見えるほど透き通っている。

溶岩がつくった奇岩怪石と樹齢150年を超すうっそうとしたマツの森が溪谷を飾り、海岸は粗面岩で形成された黒い砂浜がこれに調和し、絶景を呈している。村の青年会が運営しているテウ体験でセソカクの隅々まで見学できる。

ヨンソ

セソカクには竜が棲むとされ、龍沼とも呼ばれるが、昔、日照りが続いても雨ごいをすれば、ここに棲む竜が必ず雨を降らせるほど霊剣あらたかだったため、村では聖所として神聖視したと伝えられる。ここで大声で騒いだり、むやみに石を投げたりすると、竜が怒り、突然風が吹き天気が悪くなるという。

チョンジョンボッポ

天地淵滝

チョンジョン

天と地が会ってできた淵という天地淵は、済州で国内外の観光客が最も多く訪れる場所の一つだ。

天地淵は溪谷の下流から上流までが暖帯常緑樹地帯であり、生態資源の宝庫として有名だ。森が深く、真夏でも肌寒さを感じるほどだ。天地淵暖帯

常緑樹地帯は自然の原形をとどめた標本地域で、天然記念物第379号に指定されている。

暖帯林のうち滝の西側の水際に自生している5本のホルトノキは天然記念物第163号だ。ホルトノキは韓国では済州だけで植生する。済州島がホルトノキの北方限界地なのだ。

また、天地淵滝の下の池は天然記念物第27号に指定されている。ここにはオオウナギ ムナジヤンオ 韓国語で無太長魚 ムナジヤンオ といが生息しているからだ。オオウナギは「これより大きなウナギはいない」という意味の名前から想像できるように、成魚の長さが2m、重さ20kg以上の大型漁種だ。太平洋の熱帯区域、東部アフリカ、インド、台湾などに分布する熱帯漁種であるため、韓国では希少種に属する。

この池には昔から神聖な竜が棲んでおり、日照りの時にここで雨ごいをすれば早く効験があらわれると伝えられる。



チョンジョンボッポ

天地淵滝

このように、天地淵滝の一帯は神秘的な場所だ。

ジョンバンポッポ

正房滝

正房滝は名勝第43号に指定された国家指定文化財だ。天地淵滝、
ジョンジェヨンポッポ
天帝淵滝とともに、済州三大滝の一つに数えられる。

ドンホンチョン

正房川とも呼ばれる東烘川の流れがつくる正房滝は、韓国はもちろん東洋圏でも滝水が海に落ちる唯一の滝として有名だ。

滝の両側に柱状節理が発達した高さ23mの海岸絶壁から、幅10mの二筋の滝水が垂直に落ちる。岩に



ジョンバンポッポ

正房滝

ソブソム ムンソム

たたきつけられる滝水の音は爽快だ。西帰浦沖を守る森島、蚊島に手が届くようで、滝の周りに生い茂る老松と常緑の亜熱帯植物が、美しい風景を織り成している。

ヨンジュ

そのためか、正房滝は古くから「正房夏瀑」「正房観瀑」といわれ、瀛州十景に数えら、多くの探訪客が訪れた。「正房夏瀑」は、壮大な滝と打ち付ける滝水の水しぶきが日の光に反射してできる虹、そこに青い海が絶妙に調和した絶景を、夏に眺めれば最も美しいという意味だ。

絶景のためか、興味深い伝説がある。中国の秦の時代、徐福または徐市と呼ばれる方士天文、医学、神仙術、占トを研究する者が不老長寿を願う秦の始皇帝の命を受け、済州島に不老草を求めて来たが、正房滝の絶壁に「徐市過之徐福がここに来た」という磨崖銘を残し、西中国のことに帰ったというものだ。西帰浦という地名はこれに由来している。滝の上の西側に徐福展示館がある。

サンジチョン

山地川

ハンチョン ビョンムンチョン

山地川は漢川、屏門川とともに済州市の都心を貫く三大河川の一つだ。流路延長11.35km、漢拏山の標高720m地点から始まって済州市我羅洞、二徒洞、一徒洞を順に抜け、河口である健入洞の済州港から海に流れている。

アラドン

イドン

イルドドン

ゴニブドン

古くから山地川は済州で最も名高い河川だった。上流是水無川だが、下流区間とその周辺はきれいな湧き水が一年中流れ、食水の供給源としても大きな役割を果たしてきた。上水道が本格的に敷かれる前の1960年代初めまで、済州市民の食水源だった。

朝鮮時代の山地川の河口は魚釣りをする人の姿が美しく、「山浦釣魚」として瀛州十景に数えられるほど



サンジチョン
山地川

の中心商業圏を築いてきた。

しかし、覆蓋工事後、汚染はさらに深刻になり、覆蓋区間は災害危険地区であると判断された。このため、山地川に文化と歴史が生きる昔の姿を取り戻そうと、市民が力を合わせ、1996年から2002年までの6年間に、474mの覆蓋区間が生態河川に復元された。山地川は市民の憩いの場となり、済州道内最大の在来市場である東門市場も活気に満ちている。

アンドク

安徳溪谷



アンドク
安徳溪谷

趣きのある場として有名だった。

今は済州港となり、貿易港としての施設が拡大されているが、1960年

ゴニブボ

代以前は下流の海岸には健入浦と

サンジボグ

いう山地浦口があり、各種船舶が

入出港する済州の関門だった。そのため、自然と済州地域の商業圏が形成された。

産業化が進んだ1960年代、住宅が密集しはじめ、下水やゴミによる汚染が深刻になったため、660m区間を覆蓋して店舗用建物を建て、

ドンムン

東門ロータリーを中心とした済州市

安徳溪谷は、漢拏山の1100道路の耽羅閣休憩所から東西に立つ

サムヒョンジェオルム

三兄弟岳の高山湿地が源流で、安徳面の七つの村を経て河口のファンゲ川に至る、倉庫川の下流にできた溪谷だ。

安徳溪谷の形成にまつわる伝説がある。高麗穆宗10年1007年の火山噴火で、天と地が揺れ動き、霧が立ち込めた。七日目に、近くにある

グンサン

ウォルラボン

軍山高さ335mと月羅峰高さ210m、倉庫川ができあがったという。この話は安徳溪谷が東側は軍山の北斜面が、南側は月羅峰の西斜面が切

断されて形成された溪谷だということを裏付けており、興味深い。

「安德」という名は、大きな山々が立ち並び、巨大な岸壁の間に川が流れる治安治徳の場だとしてつけられたという。

そのためか、安德溪谷は済州島にある溪谷のうち、最も美しい溪谷の一つとして知られている。溪谷の奥深くまで粗面岩の屏風のような奇岩怪石が威容を呈し、平らに続く岩盤を休みなく流れるせせらぎと、深く茂る常緑樹は安德溪谷の風致を神秘的に演出している。

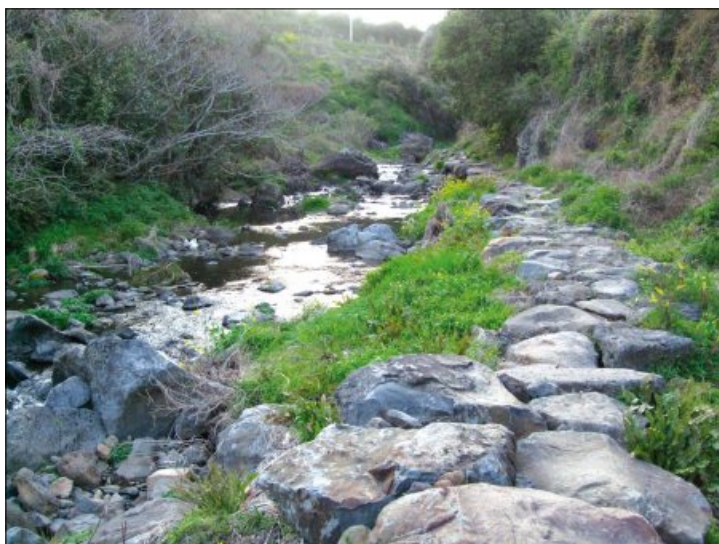
安德溪谷の常緑樹林帯は、絶壁と溪流の岩のすき間に希少植物が多数植生しており、溪流の斜面と絶壁の上までが自然の植生を保つ暖帯原始林だ。そのため、学術的な価値が高く、天然記念物第377号に指定されている。

ソングェツネ

ソングェツネの地名は、ソングェに由来している。「ソン」は立っていることを意味し、「グェ」は岩窟を意味するヤクチョンサ済州の方言だ。現在の薬泉寺の近くに小さな岩窟があるが、昔からこれを「ソングェ」と呼んだ。したがってソングェツネは、その岩窟の前を流れる河川のことだ。

ソングェツネは大きく二つの流れから始まっている。漢拏山の1100道路沿いにある西帰浦休養林西側のコリンサスムと、南側のゲッコリオルム一帯から流れ出す。そして、下流地帯である薬泉寺の南側のクシモクで合流し、南側の海岸のソングェツネカクにそそぐ。

ソングェツネの下流は一年中、豊かな湧き水が流れ出している。その豊かで、透き通った水にアユ、カワニナが生息している。河口であるソングェツネカクの西側一帯にはジサツゲより規模は小さいが、多様な柱状節理が形成されており、目を楽ませる。



ソングェツネ

ハウオン

河源スロギル

ハンラサン ヨンシル

河源スロギルは、西帰浦市河源洞山1番地の漢拏山靈室から村まで続く昔のスロギル水の流れに沿った道だ。この道は以前、河源方面から漢拏山に登るコースでもあった。近年、この道を整備、復元する作業が進められている。特に、河源周辺にある仏教の遺跡に関連する仏教探訪路にしようという計画で、ゾンジャム ボブジョンサ ボッファサ ヤクチョンサ 靈室尊者庵-河源の法井寺-法華寺-大浦の薬泉寺を結ぶ河源スロギルが整備されている。



ゴッチャワルと森の道

美しい済州島の息吹きの源

ゴ ッチャワルは済州の方言で、地域によってゴッ、ゴジ、ゴルバッ、スドク、ジャワル、ジャウォル、スムボル、ソムボルなどと呼ばれる。

『済州語辞典』によれば「ゴッ」は「森、山の下に木々が茂る所」だ。「ジャワウル」は「木や蔓が絡み合って、森のようにうっそうとした所」だというから、「ゴッチャワル」がどのような場所か理解できる。ゴッチャワルは木々がうっそうと茂る森で、その森にはさまざまな植物が自然に、競うように育っているというのだ。

アナムオサ

ギム・サンホン

朝鮮時代だった1601年宣祖34、済州に按撫御史として派遣された金尚憲は、済州島を見回って

ナムサロク

記した『南槎録』に、ゴッチャワルについてこう伝えている。



「奇岩と怪石は、彫り刻み、磨き、削ったように並び、あるいは鋭くそそり立ち、あるいは傾き、あるいは互いに語り合い、互いに見守りながら列を組んでいるようだ。これは造物主が能力と思いを込めてつくりあげたものだ。美しい木と奇異な木が青々と山林を成し、手をつないで立ち並び、背を合わせて立ち、寝そべり、傾いているようでもある。だれが一番大きいか、だれが最も美しいか競っているようだ。無秩序に踊り、あるいはひれ伏し、あるいは行列をつくっているかのようだ。これは土地神が力を尽して植えたものでなくて何だろうか」

金尚憲の言葉のように、ゴッチャワルは地の神の作品といえる所だが、済州では昔から、農耕のできない場所とされてきた。大きな岩から小石までさまざまな大きさの石で覆われているためだ。そのため、ゴッチャワル地帯は長い間、人の手が及ばないまま天然の森を維持してきた。ゴッチャワル地帯には、火山の噴火で多様な大きさに裂かれた玄武岩質の溶岩流が、平均10m以上、積み重なって広く分布している。溶岩が流れてできた洞窟が崩れたシンクホール sink holeも少なくない。雨が降れば、雨水がその隙間から素早く地下の岩盤の下に染み込む。済州の人々はこの水の流れを「スムゴル息をする穴の意」と呼ぶ。済州は火山島であり、島の全域にこのスムゴルが分布しているが、ゴッチャワルは重要なスムゴル地帯だ。済州の生命の水といえる地下水をたっぷりと蓄えている貴重な空間なのだ。ゴッチャワル地帯のスムゴルはまた、夏には涼しい風が吹き、冬には温かい温度を保つ風穴の

役割もする。ゴッチャワル地帯に深く広がる溶岩流の下部は、一年中温度の変わらない洞窟のように一定の温度を保つ。シンクホールなどのスムゴルから出る地下空気の温度と外部の温度の差により、ゴッチャワル地帯は、夏は21℃、冬は12℃くらいの一定の温度が保たれ、湿度も飽和状態で維持される。

このように地下水の量が豊富で、優れた保温、保湿効果を持つゴッチャワル地帯では、世界でも唯一、熱帯北方限界植物と寒帯南方限界植物がともに植生するという非常に珍しい現象が見られる。そのため、冬には漢拏山の寒さを避けて集まる野生動物の越冬の場所にもなる。

ゴッチャワル地帯は木々がうっそうと茂る森だ。森の大切さは言うまでもない。地球温暖化の主因である二酸化炭素を吸収する優れた機能を持ち、森が人間の免疫力を増進する森林浴の場、癒しの空間を提供することを知らない者はないだろう。

このようにゴッチャワルは済州島の生命の水である地下水をつくり、絶滅危惧種の野生動物の生息地であり、南方・北方限界植物が共存する世界的な生態系の宝庫でもある。また、気候変動による温室効果ガスを吸収する炭素吸収源であり、自然の癒しの空間でもある。ゴッチャワルは済州島の息吹きの源であり、生命の地なのだ。

ゴッチャワルの母、オルム

ゴッチャワルは済州島の東部、西部、北部にわたり広く分布している。ゴッチャワル地帯をつくる溶岩流は、火山活動をした近隣のオルムから流れてきた。オルムが吹き出した溶岩によって、大きく四つの地域に分けられる。

ハンギョン アンドク

翰京-安德ゴッチャワル地帯

済州の西部地域は、ドノリオルムゴッチャワル溶岩流とビョンアクゴッチャワル溶岩流に分けられる。

ハンリムウプ グムアグリ

翰林邑琴岳里の標高330mに位置するドノリオルムから流れ出たドノリオルムゴッチャワル溶岩流

ウォルリョンリ デジョンウプ ヨンラクリ

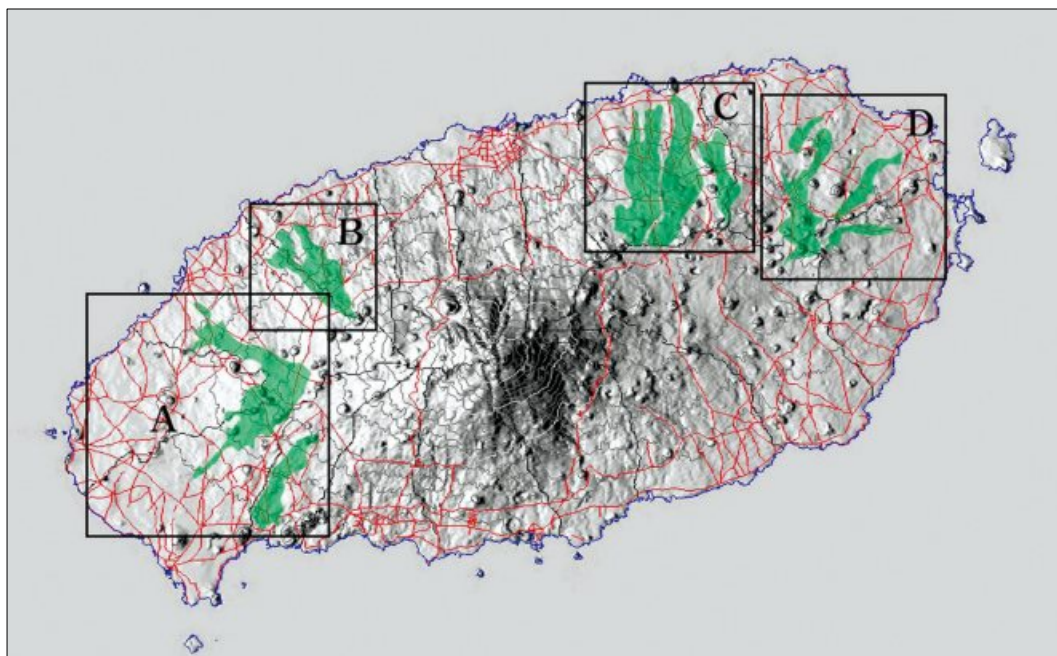
は、翰林邑月令里と大静邑永楽里の標高20mの地域まで、二つに分かれ広がっている。ドノリオルムから永楽里方向に分かれたゴッチャワル溶岩流の最大延長距離は12.5kmで、月令里方面に進むゴッチャワル溶岩流の延長距離は11.5kmだ。

ファスンリ

ビョンアクゴッチャワル溶岩流は標高492mのビョンアクから始まり、和順里方向に9kmのわたり分

サンバンサン

布しており、平均1.5kmの幅で山房山の近くの海岸地域まで伸びている。



ハンギョシ アンドク
 A: 翰京-安德ゴッチャワル地帯
ジョシヨシ ハムドク

エウォル
 B: 涯月ゴッチャワル地帯
アジャ ソンサン

C: 朝天-威徳ゴッチャワル地帯

 D: 旧左-城山ゴッチャワル地帯

和順ゴッチャワルはビョンアクゴッチャワル溶岩流で形成され、標高492mのビョンアクから始まり、和順里方向に全長9kmにわたる。平均1.5kmの幅で山房山近くの海岸地域まで続き、イチイガシ、エビネ、オリヅルデンダ、ヒヨドリなど約50種の動植物が生息している。

新坪ゴッチャワルの森の道は1.2kmほど続き、森を通り抜けるのに約40分かかる。済州オルレ11コースのハイライトで、動植物の緩衝地帯の役割を果たすゴッチャワルには、済州で最初に発見された済州産シダ植物、韓国未記録種、環境省指定保護野生動物と稀少植物が生息し、生物多様性の宝庫といえる。

エウォル

涯月ゴッチャワル地帯

エウォルウブ ナブウブリ

涯月ゴッチャワル地帯は、標高839mのノッコメオルムから始まり、標高90mの涯月邑納邑里とウォンドン地域まで9kmにわたり分布している。標高200mまでは2～3kmの幅で続き、納邑里と下加里方向に分かれる。地形の傾斜が急なノッコメオルム周辺で幅が狭まるが、標高200～300mの傾斜の緩やかな地域では最大幅が3.2kmにもなる。

ジョジ

楮旨ゴッチャワルは、涯月ゴッチャワル地帯に含まれる。ここにはゴッチャワルの特性を知るため、多くの旅行客が訪れている。

ジョジョン ハムドク

朝天-咸徳ゴッチャワル地帯

デフル

ワサン

済州北部地域に広がるゴッチャワル地帯で、朝天-大屹ゴッチャワル溶岩流、咸徳-臥山ゴッチャワル溶岩流、ソゴムニオルムゴッチャワル溶岩流に分けられる。

ミンオルム

標高500mに位置する敏岳の周辺から始まる朝天-大屹ゴッチャワル溶岩流は、クンジグリオルム、ジャグンジグリオルム、針岳周辺を経て、朝天里の標高20m地点まで11kmにわたり分布している。このゴッチャワル溶岩流が始まるミンオルムの周辺には、五つ噴石丘がおよそ一定の幅で並んでいる。

バヌルオルム

咸徳-臥山ゴッチャワル溶岩流は、ドムベオルムの北側の標高486m地点から咸徳海水浴場付近まで、平均2~3kmの幅で12kmにわたって分布している。このゴッチャワル溶岩流の幅は標高200~300mの間で最も広く、末端の咸徳里の付近で次第に狭まっている。

ゴムンオルム

アルバムオルム

標高454mの拒文岳から始まるソゴムニオルムゴッチャワル溶岩流は、下栗岳とブクオルムの間を抜け、標高80~100m地点にある「善屹ゴツ」まで延びている。全長は7km、幅は1~2km程度だ。

ソソフル

グジャ ソンサン

旧左-城山ゴッチャワル地帯

済州東部地域にあるゴッチャワル地帯で、ドンゴムニオルムゴッチャワル溶岩流、ダランシオルムゴッチャワル溶岩流、ヨンヌニオルムゴッチャワル溶岩流、ダランシオルムゴッチャワル溶岩流、ベギヤギオルムゴッチャワル溶岩流に分かれる。最大延長距離は25.8kmで、標高382mから30m未満の間に広がっている。

ゴッチャワルに染み込んだ済州の暮らし

ゴッチャワル地帯はゴッチャワルが持つ環境的特性により、風の影響を受けにくい。また、暑さや寒さの影響もあまりない。

牛や馬を放し飼いにする済州では、一年中、安全で食べ物も豊富なゴッチャワル地帯を牧場

にした。そればかりでなく、1970年代以前は家や農機具の材料や薪を、また、挽き臼やオンドルサンシンジェの材料になる石を確保する場所だった。さらに、野生動物を狩猟する場でもあり、山神祭を営む信仰生活の場でもあった。

木々が深く茂り、地形が複雑なゴッチャウル地帯は、済州4・3事件が起きると、地域住民が生命の危機から逃れるための隠れ処にもなった。

牧畜文化の息吹き

ゴッチャウル地帯には今も牛馬給水場、ジャッソン、テウリドンサンなどの牧畜文化の遺産が残っている。

「テウリ」とは、牛飼いや馬飼いを指す済州の方言だ。テウリドンサンは、テウリが放牧している牛馬を確認したり、休憩するための重要な拠点だ。周辺を見渡す必要があるため、小高い丘になった所が多い。ゴッチャウル地帯のテウリドンサンは岩屑なだれ層の一部だ。噴石丘の不安定な部分が崩れ、堆積した地層で数mmから数mの岩屑が小さな丘を形成している。

朝鮮時代に築かれたジャッソンは、牧場を区分する境界の石垣であり、空間分割線でもある。ゴッチャウル地帯の至る所に高さ1～2mの一重、二重の長いジャッソンがある。

石を掘り、木を切ってつくったチンバツ

ゴッチャウルは古くから農業のできない土地だとされてきた。石だらけで木や蔓が絡まり合ってぎっしりと生えているからだ。そんな土地を耕した所が「チンバツ」だ。

チンバツとは木や蔓を切ってつくった畑だ。タビと呼ばれる農機具を利用し、石を掘り起こし、イバラを焼いて肥料にし、農作物を栽培した焼畑だ。ゴッチャウルとともに暮らさなければならなかった済州の人々はチンバツを耕すことで農耕作への意欲を高め、汗を流したのだった。ゴッチャウルのチンバツには不毛の地を開拓し、農地をつくった済州の人々の強靱な精神が染み込んでいる。

最高の狩猟地

イヒョンサン

朝鮮時代に済州牧使として赴任した李衡祥がつくった画帖『耽羅巡歴図』『橋来大獵』は、国王に献上するためにゴッチャウル地帯で行った狩りの様子が描かれている。当時、狩猟の対象になった動物はシカ、イノシシ、ノロジカ、キジなどだった。

1970年代以前は、済州の人々にとってゴッチャワルはノロジカ、アナグマ、キジなどを捕る狩りの場だった。

ゴッチャワル地域のうち、済州の方言で「ビルレ」と呼ばれる平坦な地帯は、罾を仕掛けてイノシシを捕った場所だった。

「ビルレ」は大きな岩、または、岩盤地帯を指す済州の方言だ。平坦な岩盤が表出し、広がっているビルレ地帯は、亀裂のほとんどない溶岩流が広がっているため、木が育たない。このようなビルレ地帯は人や牛馬、荷車も通れる平らな地形で、人々の憩いの場、移動のための通路として利用されてきた。

深い森のゴッチャワルは、済州で「ゴ」と呼ばれる罾を仕掛け、ノロジカ、アナグマ、キジを捕獲する場所でもあった。このような獲物はゴッチャワルが人々に与える最高の贈り物でもある。

ゴッチャワルでの狩猟の方法は、罾や槍などの道具を用いた集団猟と、道具を使わず、猟犬とともに獲物を追って捕まえる追い猟があった。そのうち、罾を用いた狩猟が多く行われた。罾では主にノロジカやキジを狩り、ノロジカの罾を「ノルコ」、キジの罾を「クォンコ」と呼んだ。

生活道具

ゴッチャワルの森で育った木は家屋、農機具、漁具などの材料や薪として利用された。

アラカシ、ケヤキ、サクラ、スダジイなどでは家を建てたり、漁具をつくり、ケカマツカ、イスノキ、ネムノキ、サイシウイネエンジュなどは農機具をつくるのに使われた。その他の木は薪や炭をつくるのに用いられ、チガヤは茅葺きの屋根の材料に、草は牛馬の餌になった。

ビルレを形成する溶岩流はのし餅を重ねた形をしており、厚さは10cmから2mを超すものもある。済州の人々は薄いものをオンドルの材料として用い、厚いものは挽き臼などの生活用品をつくるのに利用した。

思いがけない水の贈り物

ゴッチャワルが分布する地域は、降った雨がすぐに地下に染み込む。これはスムゴル息をする穴の意の役割をする地質上の特性によるもので、地表に水が溜らない。

しかし、ゴッチャワルが人々に与える意外な水もある。溶岩が波打つように流れる時、その流れが止まると、波の曲線が地表にそのまま残る。こうしてできた曲線の地表をスタンディングウェーブといい、この地形のくぼみに水が溜るのだ。

また、溶岩流と溶岩流の間から泉が湧き出ることもある。このような泉は大変珍しく、地域の住

民は「ボンゲンムル」と呼ぶ。

「ボングダ」というのは「拾う」という意味の済州の方言だ。ゴッチャワルで偶然見つけた水を「拾った水」という意味で「ボンゲンムル」と呼んだという、その発想がおもしろい。

「大きな容器の中の水」という意味で「ジャントンムル」ともいう。



スムゴル

炭の生産地

ゴッチャワルは炭の生産地でもあった。炭は冬の暖房のための重要な燃料だったので、農閑期にはゴッチャワルで炭を焼く人の姿を、1970年代までよく目にした。今もゴッチャワル地帯のあちこちで炭焼き窯の跡を見かける。特に大静地域のゴッチャワルにあるスックブグエは、ここだけで見られる炭焼き窯だ。この窯は原形のまま残っており、当時、炭を焼いた過程を知ることのできる重要な生活文化遺産だ。

アベマキ、クリ、ハリグワ、ヤマボウシ、アキグミなどの喬木と、ナツハゼ、ガマズミ、イヌツゲなどの灌木、さらに蔓や茎などが炭をつくる材料になった。

炭焼きの作業は、規模が小さければ2～3人、規模が大きければ10人以上の共同作業で行われた。

炭は窯の中に20～30cmの木を丸く積み上げ、よく燃えるように、乾いた草を覆って焼き上げた。窯の内側は土を塗り、内部の空気が外に漏れないようにしたと伝えられる。



炭焼き窯

済州島の森の道との出会い



済州には、歩くだけで心と体が健康になる多くの森がある。森のおかげで健康になるのは人だけではない。済州島を、国を、世界を、さらには地球を健康にしてくれる「癒しの世界」で、自然の大切さや偉大さを肌で感じてみたい。貴重で独特な森を有するこの島は、山登り、キャンプ、森林浴などの保健休養を目的に整備された自然休養林も所々にある。俗世を離れ、森に心酔してみるのもいい。

スプギル サリオニの森の道

サリオニの森の道は、済州市の境界に位置するジョルムルオルムの南側にある榧子林路からマルチャッオルムを過ぎ、西歸浦市の境界にあるサリオニオルムまで15kmも続いている。この森の道は緩慢で平坦なため、歩く足取りも軽くなる。

標高500～600m、典型的な温帯山地であるサリオニの森の道には、自然林のコナラ、アカンデが茂り、ヤマボウシ、エゴノキ、モミジなども自生している。スギ、ヒノキは植栽されている。周辺にはマルチャッオルム、マルチャッオルム、グエピョンイオルム、マウンイオルム、ゴリンオルム、サリオニオルムや、川尾川溪谷、西中川溪谷などがある。

マウンイオルム一帯に形成されていた火田民焼畑農業を行う農民の村、炭焼き窯、牧場の境界であるジャッソンなどの痕跡が残っており、済州島の山林文化を知ることができる。ここはまた、済州のシイタケ生産のメッカとしても知られる所だ。1980年代の中頃まで7か所の栽培場があった。現在その跡はなく、栽培場を造成するために整備した林道だけが残っている。

近年、森づくり事業、林産物の生産、山火事防止など公益的管理の必要性、森の道を利用した癒しや自然学習活動に対する欲求が増大し、これにより、シイタケ栽培場に続く森の道を再整備してサリヨニの森の道を造成した。

サリヨニの森の道は人々に山林文化体験や健康増進の場を提供し、森の価値を伝えている。また、炭素吸収源である植林を通して自然を愛する心を養う生態の宝庫として活用されている。



スズギル

サリヨニの森の道

ビジャリム 榧子林

済州島の森林浴場の第1号である榧子林は、単一樹種の森としては世界最大規模を誇る珍しい森だ。天然記念物第374号に指定されている。

樹齢500～800年のカヤが2,800株以上自生していることも驚きだが、カヤに寄生するナゴラン、フウラン、マメヅタラン、コ克蘭、ヨウラクランなどの希少植物も見ることができる。クロマツ、サンゴジュ、ヤブニツケイ、タブノキなどの常緑樹、カナクギノキ、エノキ、ネムノキ、アカメガシワ、エゴノキ、ニワトコなどの落葉樹も自生している。カヤは木ごとに番号が付けられ、その他の木には名前が表示されており、木の名を学ぶ楽しみもある。

一年中深緑のカヤの森での森林浴は、豊富なフィトンチッドが血管を柔軟にし、心と体の疲れをほぐす。また、体調を安定させる滋養強壮、癒しの効果もある。

カヤの森には約40分の短いコースと、1時間20分の長いコースがある。短いコースはベビーカーや車いすでも利用でき、老若男女誰もが散策を楽しめる。

森にある最高齢のカヤは、カヤの先祖といわれる「千年のカヤ」で、樹齢800年以上、高さ25m、幹周りは6m以上だ。

カヤの実は今から虫下しなどの薬として用いられており、貴重な貢ぎ物だった。カヤは材質も優れているため、高級家具や碁盤としても利用され、カヤの碁盤は最高の名品とされる。



ビジャリム

榧子林の「千年のカヤ」

ギョレジャヨンヒュヤンリン

橋来自然休養林

済州石文化公園の大規模な敷地の70%がゴッチャワルの天然林だ。ここに造成された橋来自然休養林は、美しい牧場地帯と自然林を原形のまま保存している。生態系の宝庫であるゴッチャワルと昔の馬牧場地帯の一部を利用、郷土性と芸術性を加え、周辺の環境とも調和する済州ならではの山林休養空間を設置した。

橋来自然休養林は、連続しない陥没地と突出地によって形成されているため、暖帯樹種と温帯樹種が共存する独特な植生とさまざまな植物相が見られる。典型的な二次林地帯とは異なり、森が安定しており、植物種が多様で原始林の植生の特徴と共通する点を多く有している。

散策路の一部区間には1940年代に山畑をつくった跡や、1970年代以前に炭を焼いていた窯跡がそのまま残され、人文学的な価値と生態環境的な価値の高い所でもある。

韓国で初めてゴッチャワル地帯に造成された橋来自然休養林は230万㎡の広い面積に、森の茅葺きの家、野外公演場などのある休養地区と、キャンプ場、野外ステージ、フットサル競技場などを備えた野営地区、ゴッチャワルの生態が観察できる生態体験地区、3.5kmのオルム散策路を歩きながらクンジグリオルムに登る森林浴地区の4つの地区がある。



ジョルムル自然休養林

ジャンセンエスブギル

ジョルムルオルム長生の森の道

「済州市の隠れた秘景31」の一つであるこの森の道は、スギの茂る森の道が続くジョルムル休養林にある自然のままの土の道だ。うっそうとした木々の間を抜けて、くねくねと伸びる森の道は全長11kmで、約3時間を所要する。

森の道に沿って、あちこちに休憩所が設置されている。森の道の終わりの折り返し地点に、二手に分かれる道があるが、一方は折り返して森の道に戻る道で、もう一方は探訪者のための広い休憩所に続いている。

ハンナム

漢南試験林

国立山林科学院暖帯山林研究所が管理する漢南試験林は、漢拏山南東斜面の標高300～700mに位置し、サリヨニの森の道が終わる地点にある。1,191haの敷地にアカガシ、スダジイノキ、イヌガシ、ユズリハなど常緑広葉樹と、コナラ、エゴノキなどの落葉広葉樹が混生しており、スギ造林地が随所に残っている。探訪2日前までにインターネットでの予約が必要だ。探訪は水曜日～日曜日に可能で、一日探訪人数を平日100人、週末200人に制限して受け付けている。



ムルジャンオルの火山湖

湿地

生命と調和の地

済州は湿地も独特だ。火山島だという地質的な特性により、湿地もやはり内陸とは異なる独特な生態的特性を持つ。渡り鳥の渡来地、潮間帯湿地もそうだが、オルムを中心に形成された湿地はさまざまな動植物を育んでいる。

漢拏山には白鹿潭などの火山湖、千百湿地、スムンムルベンデェ、ムルカマワツ、仏来岳一帯、ソングジャグジワツ一帯の大規模な湿地帯と、王冠稜一帯、万歳丘一帯、ゲミドゥン一帯、城板滝一帯などの小規模な湿地帯、Y溪谷、靈室溪谷、仙女滝などの湿地が分布している。そのうちムルヨンアリ、ムルジャンアル、千百湿地、冬柏東山は湿地保護地域、または、ラムサール湿地に登録されている。済州道はムルチャッオルム、スムンムルベンデェの保護地域指定に向けて準備を重ねている。

漢拏山が育む湿地は自然の原形を留めているものが多く、保存の状態も良好で、済州生態系の重要な枢軸となっている。

済州島の湿地との出会い



cheonbyeok

千百湿地

千百湿地は1100高地休憩所のある道路の東側に広がる湿地だ。名前のとおり標高1100m地帯に位置する。

ラムサール湿地に指定されたこの湿地の半分は常に水を湛えており、半分は陸上植物が育つ乾湿地だ。このような地形はさまざまな動植物が生息できるため、生物の多様性に関する研究の最適地だといえる。

damusa

湿地を構成する岩石は耽羅層とプルレオルム。仏来岳溶岩で形成されている。耽羅層の上部には有機物を含有した



cheonbyeok

千百湿地

泥炭層が発達している。湿地の土壌は耽羅層の河成堆積層を形成する泥質砂岩で、厚さは1mほどだ。また、局地的に有機物を含んでいる。

千百湿地は周辺から地表水が流入して形成され、地表水が移動する区間と、そうでない区間がはっきりと分かれている。流入する地表水量によって、周辺の堆積物の運搬にも影響を及ぼすが、堆積物が積もった所は湿地の中の生態的な島になっている。

湿地の周辺には大きな岩石とチョウセンヤマツツジ、イヌツゲなどの灌木類が分布している。平素も高度の高い所から水が流れ込み、所々に水溜まりができています。その周辺にはイヌホタルイ、イゴザサなどの水草も自生している。

フルレオルム

千百湿地は東側の仏来岳とオスロンオルムの間から始まり、西側のスミンムルベンデェまで続いているものと推定される。

湿地とその周辺には106科207種の植物が分布することが調査で明らかになった。湿地の植生はイトイヌノヒゲ、コイヌノハナヒゲ、イヌホタルイ、オニスゲ、サイシュウヤマラッキョウ、ハイチゴザサが主要優占種で、周辺部にはタンナザサ、イヌシデ、アカシデ、コナラ、モミジが生息していることが確認された。

また、コセアカアメンボ、アメンボ、クロマメゲンゴロウを含む11科149種の昆虫が確認され、キイトンボ、ヒメアメンボ、ヒメタイコウチ、マツモムシ、マルチビゲンゴロウ、カラフトゴマフトビケラ類の確認も追加された。さらに、ヒル類、チョウセンヤマアカガエル、チョウセンズガエル、チェジュサンショウウオなどの両生類も多数確認されている。

高度が1km上昇すれば、気温が6.4℃下がるというのが一般的な理論だ。だとすれば、春や秋でも水温の低い1,100高地の湿地は、生物の生息地として適さないはずだ。そうした条件下でも、さまざまな生物が生息するという点で千百湿地は注目を集めている。

ムルヨンアリ

ムルヨンアリは、オルムの頂上の火口がいつも水を湛えていることから、その名がつけられた。このオルムの東側のオルムは、火口に水が溜らないので、「ヨムロッタ完成度が高い」という意味でヨムンヨンアリと呼ばれる。

ナムウォンウプ スマンリ

ムルヨンアリが水を湛えるようになった理由が伝説になっている。南元邑水望里に人が住み始めた頃の話だ。野原に放し飼いにしていた牛が見つからず、若者が牛を捜してオルムの頂上までやってきた。若者は空腹でのもも渇き、とても疲れていたため、気を失うかのように寝入ってしまった。夢の中に白髪の老人が現われ、こう言った。

「牛が見つからなくても落胆してはいけぬ。牛の代価として、私がこの山に頂上に大きな池をつくろう。今後、日照りが続いても牛が飢渴することはないはずだ。おまえはこれまでどおり一生懸命牛を飼いなさい。そうすれば富を得、暮らしが豊かになるだろう」

目を開けると、既に夕暮れだった。昼間は天気もおだやかだったが、急に空が暗くなり、雷が鳴って強い雨が降り出した。若者は慌てたが、不思議なことに自分の服が全く濡れていないことに気づき、夢に現わ



ムルヨンアリ

れた老人の言葉を思い出した。その時、空が二つに裂け、割れるような音とともに稲妻が走った。若者はその場で気を失い、翌日の朝、意識をとり戻した。何事もなかったように青空が広がっていた。若者が倒れていた山の頂上は大きくぐれ、波打つように水が溜っていた。若者は山を下り、村の人々にこのことを伝え、一生懸命に牛を飼ったという。このオルムの水は、干ばつの時も決して乾かず、ムルヨンアリと呼ばれるようになった。

ムルヨンアリは、起伏のある丘陵地の中央に大きく構えるように立っている。頂きには碗のような火口湖がある、内周約300m、深さ約40m、外周約1,000mだ。

オルム全体がアカメガシワ、シロダモ、エゴノキなどの常緑落葉樹の深い森で、森の中にはムサシアブミ、ジエビネ、キエビネ、ミヤマウズラなどが自生している。野性動物のノロジカ、アナグマ、毒蛇も生息している。

火口近くにはオタカラコウの小群落が、周囲にはノイバラが垣根を築き、その中にミゾソバ、ミズオトギリ、アギナシ、スズメノテッポウ、サンカクイなどの湿地植物も育っている。

ムルヨンアオルムは湿地保護区域で、ラムサール湿地にも指定されている。標高504m、噴火口の底は468mで、全体面積は554,281㎡だが、このうち約300,000㎡が湿地保護地域になっている。

湿地の学術的価値は相当なものだ。湿地植物群落のうち、造成および空間的分布パターンが、非常に原始的な状態で発達しており、済州島の暖温帯と冷温帯山地湿地の典型的な構造と機能を備えている、ムルヨンアリ沼は人間の干渉を受けず、約2,600年間、原形のままの姿が保たれていることが明らかになった。

教育的な価値も非常に高い。済州の自然生態系を理解するモデルを提供しており、人間の干渉による連続的、非連続的な生態系の分布パターンを学ぶ優れた野外学習場だ。さらに、島嶼生物地理学的な観点からも、生物の多様性と生物種の交流などに対する島嶼生物地理分布の研究地域としても最適の条件を備えている。

資源としての価値も見落とせない。希少種および主要特産植物種が生息し、それに伴う生態系の独特な食物連鎖が発達してきたため、生物の多様性の保全という観点からも自然資源と生物遺伝資源を保存する保管庫のような役割を担っている。

ムルヨンアリ湿地の植生は、その種類が多いというだけでなく、保全価値が高い自然植生を育ててい

る。単一面積での両生爬虫類の種多様度が、韓国内で最も高いと評価されている。

ドンベクドンサン

冬柏東山湿地

朝天-咸徳ゴツチャウル地帯内の善屹ゴツの一部地域であるドンベクドンサン済州道記念物第10号は、コショウノキとコタニワタリの群落済州道記念物第18号を含む、済州島の平地に残る広い面積の暖帯性常緑広葉樹の天然林で、学術的研究価値が高く、文化財に指定されている。

ここは、本来ヤブツバキが多く、ドンベクドンサンツバキの丘の意と呼ばれたが、この地域の植生は、主にスダジイ、アラカシ、ウラジログシ、タブノキ、サカキ、ヤブツバキなどの暖帯性樹種だ。特に、カゴノキ、コショウノキの下にはコタニワタリ、エビネ、シュンラン、ミヤマウズラなどの希少植物が自生している。

済州ならではの特殊な地形であるゴツチャウル溶岩地形と、ビルレツ溶岩が混ざり合った善屹ゴツは、善屹、金寧、徳泉一帯にわたる広大な面積に分布している。

マンジャングル

善屹ゴツは、楮旨ゴツより数は少ないが、イチイガシの植生地でもある。万丈窟の終わりの部分である洞窟の陥没地周辺で、オオカナワラビ、サイゴクペニシダが発見された。これらはドンネコなどの極一部地域で観察されていた希少植物だ。未記録植物であるヒトツバイワヒトデも植生している。善屹ゴツで特に注目すべき植物はタンナハナワラビだ。タンナハナワラビは近頃、韓国内の学者によって発見され、韓国特産属の植物として記録された。

「モッムルカク」と呼ばれるドンベクドンサン池は、過去、牧畜用に用いられた。水はゴツチャウルから流れて溜っているが、安定した水量を確保するために人為的に手を加えた痕跡も残る。周辺に民家など環境汚染の要因のないドンベクドンサンは、天然の自然条件を備えており、湿地生態系の研究のための重要な場所になっている。

ドンベクドンサン湿地は、絶滅危惧種の野性動物の生息地でもある。絶滅危惧種1級のハヤブサや、同2級のジュンサイ、ヤイロチョウ、クメジマハイ、サンコウチョウ、ハチクマなど合計9種が観察された。このほか、オシドリ、タガメ、ミズニラなどの絶滅危惧種も生息している。

大きな岩盤地帯の上にできた池の面積は約500㎡、水深の平均は1～2mだ。代表的な植物はガガブタ、ヒルムシロ、ヘラオモダカ、リュウノヒベモ、ヒシ、カンガレイ、ホソバノウナギツカミ、ミクリなどだ。確認された動物はコサギ、ゴイサギ、ヤマカガシ、ジムグリ、マウシ、トノサマガエル、チョウセンヤマアカガエル、チェジュサンショウウオなどだ。特に、済州道で最も多様な水棲昆虫が生息しており、アメンボ、タイコウチ、ゲンゴロウ類、ガムシ類の姿も見られる。

ドンベクドンサン一帯は、ゴツチャウル、洞窟、湿地などの多様な自然条件を備えており、自然生態系の観察、環境教育、休養のための最適地といえる。

5万年のタイムカプセル、ハノン

ハノンは巨大な円形競技場を連想させる。済州で最大規模のマール地形の特徴を持つタフリング 凝灰環

火山体だ。

噴火口を取り巻く火口輪が原形を残しており、火口の中央にはスコリアの火山円錐丘がある。平地の全体面積は21万6千㎡だ。

このように広い平地を持つうえ、火口の北側斜面のすそに泉が湧き出ているため、昔から田として活用されてきた。名前も「大きい、多い」の意味の済州の方言「ハダ」と、「田」を表わす「ノン」が結合し、「田の多い所」という意味で「ハノン」と呼ばれている。



ハノン

ハノンの地形は風水説の大きな図を

連想させる。周辺のカクシバウイは鶴の頭、その左右の尾根は鶴の羽、ハノンは鶴が卵を産む巣で、ハノンを囲う三梅峰をはじめとする周辺の稜線は、鶴の卵を狙う蛇の形をしているというのだ。

伝説も興味深い。昔はここが完全なフロンノン「フロン」は沼を意味する済州の方言だったため、農耕には向かなかった。ある日、ここを通りかかった地相師が村人に、酒をごちそうしてくれれば、水田で農耕できるようにしてやると言った。そこで、村人は贅沢な酒膳で地相師をもてなした。地相師は「東側の丘を掘って水穴を見つければ、楽に水稻耕作ができる」と語った。そこで、現在のハノンの入口の東側に水穴を掘り出し、農耕が楽になったという。

ハンラサン

ハノンの噴火口は全体的に漢拏山の粗面岩と対比される地質層序を有する。ハノンは湖の低湿地が広く発達した低地帯の湿地平原だったのだろう。火山が噴火した時、マグマが比較的深い所にあり、火山灰の噴出初期には水量が充分にあった。しかし、末期には湖水がなくなり、火山活動が陸上火山活動に移って噴火口内部に噴石丘を築いた。過去、ハノンの火口は低湿地の形態をしていたはずだ。数万年間の堆積作用で、現在は噴火口の底が埋まり、湿地の姿を失ってしまった。

噴火口内部の湿地堆積層は、火口形成後3万年間の気候変動の記録を刻んだタイムカプセルだ。ハノンが世界的な関心事である地球温暖化を研究する良い資料を提供するものと期待される。

ハノンの東側にはソムバンネが流れ、噴火口内部の豊かな湧き水はハノンを潤している。湿地の生物は主に湧き水が溜る小さな池と、水が流れる排水路に生息する。代表的な動物はサギ、アオサギ、トノサマガエル、ヤマカガシ、ドジョウ、フナ、モノアラガイなどで、湿地植物はタヌキモ、マコモ、コガマ、アシ、オランダガラシ、ウキクサ、セリ、ミズオオバコ、イネ、ヒエなどだ。



植物

済州は驚くべき植物の宝庫

朝 鮮半島の地質の歴史は1億年を超えるが、済州は200万年前に誕生した島だ。朝鮮半島の地質年齢とは比べものにならないほど若い済州島の土地面積は1,849km²で、朝鮮半島面積の1%にも満たない。ところが、朝鮮半島全体の植物種の25%に相当する1,990種が植生し、済州は「植物の宝庫」と呼ばれている。済州は、どのようにしてこの驚くべき植物世界を有するに至ったのだろうか。

済州は、北半球・中緯度地域の大陸東岸に位置しており、季節の変化が明確で、東岸気候の特徴がはっきりと表われる島だ。

しかし、四方が茫々たる海に囲まれているうえに、島の中心に漢拏山があるため、地理座標や山岳地勢、東シナ海からくる暖流の影響を受ける。気候帯は標高によって暖帯、温帯、寒帯の垂直分布を示している。また、体感率と降水量も標高によって異なる。

済州は、また風の島だ。四季を問わず頻繁に風が済州を駆け抜けるが、特に夏には強い台風が島を直撃し、冬には冷たく、乾燥した北西風が長期間吹きつける。済州島の冬の季節風は、夏の季節風である台風より風速は弱い、長時間にわたり吹き荒れる。初冬や晩冬には、3～4日、時には一週間も吹くことがあり、西高東低型の気圧配置では特に強くなる。このように様々な要因が、生態系にも強い影響を及ぼしている。

済州島は、全北植物区系界の東アジア植物区系に属する。そのうえ独特な地理的、地史的にあるため、東シベリア植物区系のみならず、インド・マレーシア群島区系要素の分布境界でもある。

このため済州島の植物は、大陸から南下した植物群、中国と済州島そして日本にかけて分布する植物群、熱帯と亜熱帯起源の植物、済州島と台湾そして日本から分化した植物群など、多様な要素を反映して構成され、面積に比べ数多くの種が分布している。

また、島の中央に標高1,950mの漢拏山がそびえており、標高による植物の垂直分布がはっきりしている。高地帯には、寒帯性または高山性の植物が多く分布する。これらのうちのほとんどは
ベクトゥサン
白頭山、満州、シベリア、モンゴルなどに共通して分布する大陸系の植物だ。

済州は海に孤立した島であるため、それに適応した特産植物も多く分布している。これは氷期と間氷期に海の進退により、かつて中国、朝鮮半島、済州島が陸地とつながっていた時期と、島となって孤立していた時期が反復したためだ。陸地とつながっていた時期に大陸から入ってきた植物が、島となって孤立した後、島の環境に適応して生き残り、済州だけの特産植物になったのだ。要するに、済州の独特な植物世界は、済州の位置、地形、地質、気候などがつくり上げた総合作品なのだ。

植物の系図を見てみると…

植 物にも系図があるが、意外に複雑だ。まず、大きくは、水分や養分が通過する維管束をもたない蘚苔、いわゆる「コケ植物」と、維管束をもつ「維管束植物」に分けられる。維管束植物はさらに、無性生殖をするため形成される生殖細胞の胞子で繁殖する「シ

ダ植物」と、種をつくって繁殖する「種子植物」に分けられる。そして、種子植物は、「被子植物」と「裸子植物」に更に分けられる。

植物の系図がこんなに複雑なのは、進化の過程に起因する。植物は地球上にその姿を現してから4億年以上も経った生物で、その始まりは水中の緑藻類だった。それが長い歳月をかけて、陸地の環境に適応すべく進化したのだ。

水中の緑藻類が、陸に上がって進化したのがコケ植物だ。湿気が多くなければ植生できないコケ植物を乾いた地面でも生きられるようにしたのが、維管束組織だった。最も早く維管束植物に進化したのがシダ植物だ。シダ植物がコケ植物よりも先に出現したとの主張もある。

いずれにせよシダ植物は種子植物に進化した。乾燥した環境で効率的に繁殖するため、幼植物を保護し、養分を供給できるよう、種をつくって繁殖したのだ。種子植物の中で最初に登場したのは、裸子植物だ。これがより効率的に繁殖するため、雌と雄に分化した生殖器官を発達させたのだが、それが「花」だ。裸子植物の被子植物への進化だ。被子植物への進化を起点として数多くの種が繁殖し、現在に至っている。

どんな植物がどれだけあるか

シダ植物は、古生代デボン紀以降二畳紀までの間に繁殖し、長い歳月をかけて地表面を覆ってきた植物だ。現在、1万3千種以上が発見されているのだが、主に熱帯と亜熱帯に分布し、亜寒帯にも領域を広げて自生している。

韓国に自生するシダ植物252種のうち、78%を占める197種が済州に分布している。そのうち、韓国では済州にだけ分布する種は60種で、済州島が北方限界線になるものが21種、南方限界線になるものが6種だ。また、ナガバスギラン、タンナハナワラビ、アオガネシダ、コバノヒノキシダなど5種は、済州の特産種だ。

裸子植物は進化の過程で種子を作るようになった最初の植物で、草ではない木だ。裸子植物は中生代に繁茂した植物で、現在、約900種が残っているが、地表面の多くの部分を占めて森を覆っている。アカマツ、ソテツ、チョウセンマツ、モミノキ、イチョウノキなどだ。

韓国には約50種の裸子植物が自生しているが、そのうち10種が済州で自生する。漢拏山に分布する裸子植物は、イチイ、カヤノキ、アカマツ、クロマツ、チョウセンシラベ、ミヤマビャクシン、ネズミサシなどだ。

花を咲かせ、花で実を結び、その中に種を作る被子植物は、1億2,500万年前、中生代後期の白亜紀に初めて出現した植物だ。幅広い適応能力で速く繁茂し、6,500万年前の新生代から地球を覆いはじめ、今日に至っている。現在、地球上で目にするほとんどの植物種はこの部

類に属する。

被子植物は世界的に約26万種が知られており、熱帯地域からツンドラまで幅広く適応して生きている。韓国で記録された被子植物は約3,000種、そのうち1,783種が済州に分布している。

被子植物は、また単子葉植物と双子葉植物に分けられる。

済州の単子葉植物は、492種だ。そのうちタンナザサ、ボソバカモジグサ、ヤダケ、エナシヒゴクサ、タンナカンスゲ、ネムロホシクサ、ヒメイズイ、アマドコロ、チャボゼキショウ、チェジュエンシス、エビネ、オレオルキス・パテンス・コレアナの12種は済州特

産種だ。また、済州島が北方限界線に該当する種が2種で、南方限界線に該当する種が22種だ。

双子葉植物は、1,072種だ。そのうちタンナミネヤナギをはじめ79種は、済州特産種だ。また、済州島が北方限界線になる9種、南方限界線になる89種がある。

ここでもう一度整理すれば、済州にはシダ植物が197種、裸子植物が10種、被子植物のうち単子葉植物492種、双子葉植物1,072種の合計1,990種が植生している。また全植物種のうち、済州特産種が96種、北方限界分布種が32種、南方限界分布種が118種という特殊な植物世界をつくり出している。

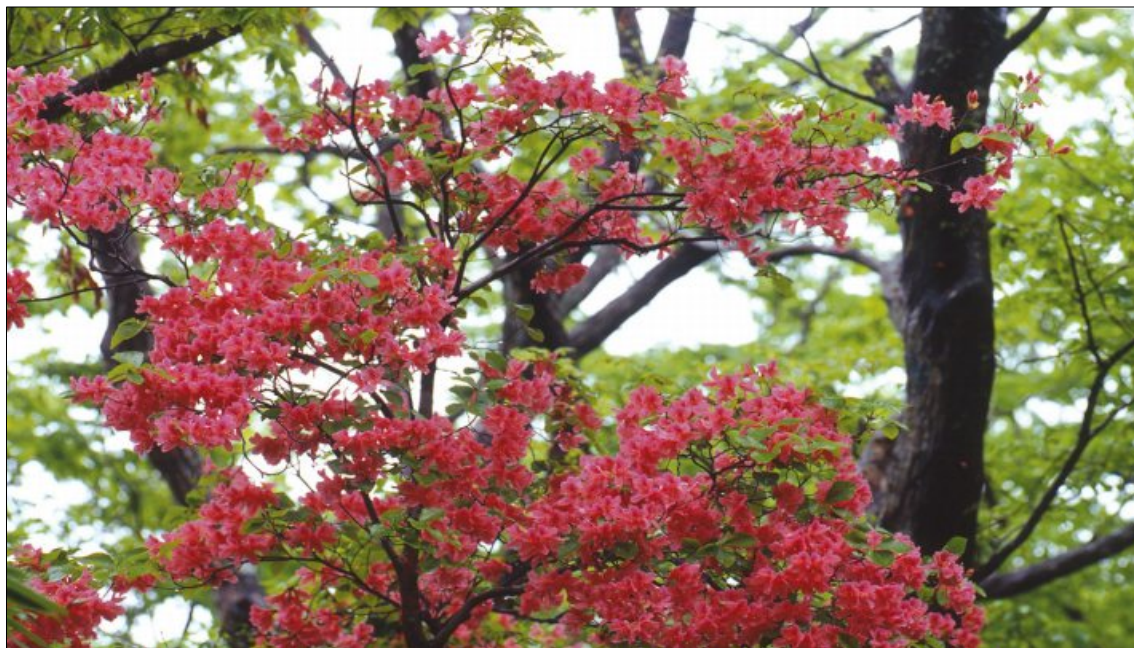


クロマツ

さらに驚くべき漢拏山の植物世界

漢 拏山の植物垂直分布図は方位によって多少の差はあるものの、概して標高600mまでは暖帯常緑広葉樹林帯、600～1,400mは温帯落葉広葉樹林帯、1,400～1,950mは亜高山帯だ。

暖帯常緑広葉樹林帯に分布する常緑広葉樹は、スタジイノキ、キヅタ、ツバキ、ユズリハなど



サツキツツジ

約90種にのぼる。この分布帯に国際自然保護連盟IUCNのレッドリストに記載されているヤブニツケイとミズニラが自生している。また、韓国のレッドリストといえる環境部指定、滅亡危機保護野生植物としては、カンラン、フウラン、ナゴラン、ムカデラン、ナギラン、マヤラン、ツチアケビなど欄科の植物をはじめ、マツバラシ、ジュンサイ、センリュウ、ミヤマトベラ、オオタニワタリ、イチイガシ、ハマナツメ、ルリミノキ、ハマボウ、シマモクセイ、ハンゲショウ、タンナハナワラビなどが分布する。

温帯落葉広葉樹林帯に分布する主要樹木種は、コナラ、イヌドクサ、モンゴリナラ、トウハウチワカエデ、ガマズミ、タンナザサなどだ。環境部指定保護野生植物であるハクウンラン、ベニバナヤマシャクヤク、ムラサキミカキグサと、済州特産属であるディプロラベルム・コレアヌムがこの分布帯に植生する。

亜高山帯には主に針葉樹林と灌木林が自生する。針葉樹は、主にチョウセンシラベが群落をつくり、一部イチイが混生している。

漢拏山天然保護区域は、チョウセンシラベ林を除けば、ほとんどが亜高山灌木林または草原で形成されているが、その面積は844haにおよぶ。この植生は、カラムラサキツツジ-チョウセンヤマツツジの群集、ミヤマビャクシン-カラムラサキツツジの群集、ガンコウラン-ヤマヌカボの群集で構成されている。

カラムラサキツツジ-チョウセンヤマツツジの群集は、チョウセンヤマツツジとゲンカイツツジをはじめ

ミヤマコメススキ、ハリアザミ、タンナザサ、カワラマツバ、トゲアザミ、イタドリ、ミヤマタイゲキ、ケアクシバ、ヤマヌカボなどが高い頻度で出現する。

ミヤマビャクシン-ゲンカイツツジの群集は、イブキとゲンカイツツジをはじめ、ミヤマコメススキ、カワラマツバ、チョウセンヤマツツジ、ミヤジャコウソウ、タンナヤハズハハコなどが高い頻度で出現する。

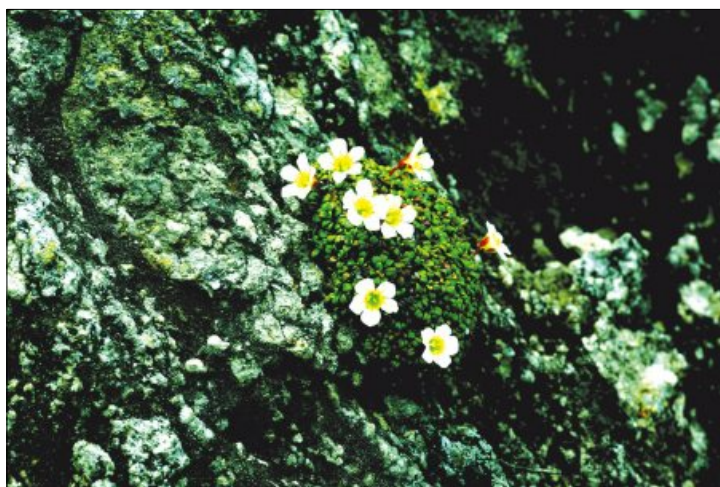
ガンコウラン-ヤマヌカボの群集は、ガンコウランとヤマヌカボをはじめ、タンナザサ、タンナフウロ、トゲアザミ、タンナヤハズハハコ、アキノキリンソウなどが高い頻度で出現する。

海が陸地だったときに入った貴重な種

漢拏山亜高山帯地域には、146種の極地高山植物が自生している。この種のほとんどは極東シベリアと満州、北海道をはじめとする日本の北部など、東北アジアの北部地域にも分布している。しかし、漢拏山は緯度上、最も南に位置する周極高山植物の主たる分布地だという意義を持つ。

146種のうち、タンナミネヤナギ、タンナシラタマソウ、サイシュウメギ、タンナシャジクソウ、タカトウダイ、ヒメナギナタコウジュなど33種は済州特産種で、南方限界線分布種が56種、北方限界分布種が3種だ。

イワウメは緯度上、済州島が最南端に属する。テガタチドリ、クロマメノキなどその他の種も、ガンコウランやイワウメなどと類似した分布様相を示しているが、シベリア、北米のアラスカ、カナダなど周北極地域のほとんど全地域に分布する種だ。しかし、漢拏山天然保護区域は植物地理学的には暖帯地域であり、亜北極地域とは連続地域ではない島であり、これらの分布地が東北



イワウメ

アジアの最南端に属するというのは重要な意味を持つ。言い換えれば、済州島が東北アジアの極地高山植物の分布限界地であることを示すと言えるだろう。

漢拏山天然保護区域が面積に比べ特に特産種が多いということは、氷河期以降、約1万年にわたる隔離と、気候変動などの特殊な環境的要因による種の分化が、非常に活発に行われたということを立証する。

これらの高山植物は氷河期の遺存種であることから、済州島が一定の期間、陸地とつながっていたことの強力な生物学的証拠だ。海が陸地だった氷河期に東北アジアから朝鮮半島を経て、済州島に入ったのだ。

朝鮮半島では漢拏山の山頂部にだけ自生するイワウメは、周極植物だ。朝鮮半島では、
ベクドゥサン グァンモボン ドゥリュサン ブクスベクサン ハンラサン
白頭山、冠帽峯、頭流山、北水白山、漢拏山にだけ分布しているガンコウランもやはり周極植物だ。特に漢拏山にだけ分布しているガンコウランは、変異量が相当大きかったことが明らかになった。氷河期に入って孤立したが、その後、気候変動の時期を経て現在の自生地環境によく適用し、安定した集団を維持するに至った。

これら高山植物が最初から漢拏山の頂上部にだけ存在したのではない。氷期の間は、山地を中心に連続的に分布したが、後氷期になり気温が上昇するにつれ、平野と低山帯は暖帯性あるいは温帯性植物が占めるようになり、高山植物の分布領域は次第に山頂部分に移動していった。したがって、漢拏山の亜高山帯に自生する極地高山植物は、氷河期に済州に入り、済州火山島の環境に適応して生存し続け、56種は南方限界分布種となり、33種は分化を通して済州だけの特産植物になった、非常に貴重な種といえる。

世界唯一のチョウセンシラベの森

チョウセンシラベは、マツ科に属する針葉喬木だ。マツ科は10属約250種が主に北半球に分布しているが、朝鮮半島にはマツ属、モミ属、カラマツ属、エゾマツ属、ツガ属など5属16種が自生しており、北方の国境地帯に植生するハウサンハリモミとチョウセンシラベなど2種の特産種がある。

チョウセンシラベが属するモミ属は、世界的に45種が知られているが、韓国にはモミ、トウシラベ、チョウセンシラベの3種がある。

モミ属の植物は亜極地または亜高山帯に分布しており、世界で約40種にのぼるが、制限された地域に特産種として分布する種は、チョウセンシラベを除いては稀だ。この種は、ロシアのシホテアリン山脈から韓国の高山地域に沿って済州島まで分布している。しかし、ほとんどの地域では分布面積がとて狭く、ごく少数の個体が分布しているだけで、IUCNのレッドリストに登録されている。

にもかかわらず漢拏山の天然保護区域では、チョウセンシラベが広大な面積に純林を形成している。漢拏山のチョウセンシラベは斜面によって多少の差はあるが、標高1,300mから頂上まで分布しており、その面積は603haにもなる。これは世界でも最大規模のチョウセンシラベ群生林だ。

南方に分布中心地があり、北上するにつれ分布が減少する傾向があるモミ属の植物では、チョウセンシラベが世界的にも唯一の事例だ。モミ属植物では唯一チョウセンシラベが東北アジアの最南端に隔離された島、済州に集中的に分布しているということだ。



漢拏山の南斜面のチョウセンシラベの群落

漢拏山のチョウセンシラベ群生林は、ほとんどが純林を形成しているが、具体的に細分するとチョウセンシラベの群集、チョウセンシラベ・タンナザサの群集、チョウセンシラベ・モンゴリナラの群集で構成されている。

チョウセンシラベの群集は、漢拏山の頂上を中心に東・西斜面の標高1,590mから頂上にかけて主に分布する。この群集内にはミヤマザクラ、サイシュウメギ、ベニバナヒョウタンボク、カニコウモリ、ミヤマタニタデ、ツバメオモト、ヒメマイヅルソウ、オオサクラソウなどが共に自生している。

チョウセンシラベ・タンナザサの群集は、標高1,550～1,840mにかけて散在しており、ミヤマザクラ、サイシュウメギ、ワタゲカマツカ、イヌツゲ、ムシカリなどが共に生息し、地表には全域にわたりタンナザサが生い茂っている。アツバカンアオイ、ケタガネソウなども多く自生している。

チョウセンシラベ・モンゴリナラの群集は、標高1,370～1,700mに分布しており、ほとんど北側斜面に偏重している。この群集には、モンゴリナラとタンナザサが全域にわたり生息しているが、トウハウチワカエデ、オオヤマレンゲ、ムシカリ、エゾイタヤ、チゴユリ、ツルアリドオシなども共に自生している。

ユネスコ生物圏保護区の植物

ユ

ネスコ生物圏保護区は、中核地域、緩衝地域、移行地域に区分、構成されている。

ヨンチョン

ヒョドンチョン

ソブソム

済州の中核地域は、漢拏山国立公園、霊泉・孝敦川天然保護区域、森島・

蚊島・虎島天然保護区域だ。漢拏山は頂上部と河川地域の91.9km²で、この地域は天然記念物第182号の天然保護区域に指定されており、漢拏山国立公園151.35km²と重なり合っている。また、森島のオオタニワタリ自生地天然記念物、蚊島と虎島の天然保護区域文化財保護法、2000年は、



漢拏山の北斜面の植生

森島、蚊島、虎島の西帰浦海洋道立公園1999年指定と重なっている。

緩衝地域は、陸上では漢拏山国立公園隣接の国有林と国立公園北側の一部、海洋では西帰浦市立海洋公園の一部が含まれる。

移行地域は、標高200～600mの中山間地域、川岸ヒョドンチョン孝敦川およびヨンチョン霊川両側500m区間、西帰浦市立海洋公園と孝敦川河口前の海上だ。

漢拏山天然保護区域の植物

漢拏山天然保護区域に分布する特産植物は53種だ。

そのうち韓国特産植物は14種で、チョウセンシラベ、タンナカンスゲ、タンナヤナギ、エゾノタケカンバ、アツバカンアオイ、ミツバハンショウヅル、ヘパティカ・インスリス、モデミソウ、ムラサキカラマツ、ダイモンジソウ、チョウセンイワキンバイ、コウライヤブウツギ、ミヤマトウマツムシソウ、ツリガネニンジンだ。

済州特産植物は39種だが、32種は漢拏山天然保護区域にだけ分布する植物であり、残りは漢拏山天然保護区域内外に共通的に分布する。漢拏山天然保護区域に分布する済州特産植物は、ヒメカラクサシダ、タンナミネヤナギ、ツボハシバミ、タンナシラタマソウ、イワキンポウゲ、サイシュウメギ、サイシュウハタザオ、コガネネコノメソウ、タンナショウマ、ソメイヨシノ、チョウセンオウギ、タンナシャジクソウ、ヒメナンテンハギ、タンナフウロ、ミヤマタイゲキ、サイシウクロツバラ、シラネセンキュウ、サイシュウツツジ、サイシュウハナナギナタコウジュ、ヒメナギナタコウジュ、トゲコゴメクサ、サイシュウゴマノハグサ、オオヒナノウスツボ、カノコソウ、キバナカワラマツバ、カノコソウ、ヤチシャジン、ミニツリガネニンジン、タンナミネヨモギ、カンナノギク、ハリアザミ、サイシュウヤクシソウ、サイシュウウスユキソウ、ミヤコアザミ、イワタンポポなどだ。

漢拏山天然保護区域の分布上、北方系もしくは南方系の限定分布種のうち、北方系種は4

種、南方系種は53種だ。そのうち北方系種は、サカバイヌワラビ、フサスゲ、シマシャジン、タンナヤハズノハコだ。

南方系種は、エゾヒメクラマゴケ、ケミヤマシダ、ミヤマウラボシ、チョウセンシラベ、クロヌカボ、ミヤマコメススキ、カワラスゲ、ルリネギ、ツバメオモト、ホソバキスゲ、ヒメマイズルソウ、テガタチドリ、アリドオシラン、タンナヤナギ、エゾノタケカンバ、アツバカンアオイ、ホソバイブキトラノオ、タンナトラカブト、ミツバハンショウズル、ヘパティカ・インスラリス、モデミソウ、ムラサキカラマツ、ヒメウメバチソウ、チョウセンザリコミ、ダイモンジソウ、ミヤマキンバイ、タフリアフウロ、ガンコウラン、クワノハシナノキ、カラフトニンジン、タンナボウフウ、ミヤマニンジン、イワウメ、エゾムラサキツツジ、ゲンカイツツジ、チョウセンヤマツツジ、ケアクシバ、クロマメノキ、オオサクラソウ、ユキワリソウ、シロヒナリンドウ、エゾセンブリ、ハナムグラ、エゾノヨツバムグラ、ケヨノミ、クロミノウグイスカズラ、コウライヤブウツギ、トウトツリガネニンジン、マルノバシャジン、ツリガネニンジン、キクヨモギ、ミミコモリなどだ。

ヒョドンチョン

孝敦川の植物

孝敦川は漢拏山の頂上に源を発し、山の南側斜面を下って西帰捕市と南元邑の境界をつくりながら、孝敦洞と新礼里の海岸に注ぐ河川だ。孝敦川の植物帯は、常緑広葉樹林帯0~700m、落葉広葉樹林帯700~1,400m、亜高山帯1,400m~頂上に区分される。

この河川が海に流入する地点の東側は、ハマゴウ群落が広範囲に形成されており、岩間にはハマボスやツルナといった済州島内でよく見かける海岸植物が多様に自生している。

河川の下流ではクロマツが優占種だ。しかし、東側斜面の一部はスダジイの林が生い茂り、西側斜面もアラカシ、ヒサカキ、スダジイ、ツバキなど暖帯常緑広葉樹種が自生している。漢拏山の南側にだけ分布しているオオアリドオシのような植物も河川の岩間に見られる。特徴を持って自生する植物が残っているが、生活排水や近隣の耕作地から流入する除草剤などの農薬による被害が憂慮されるため、持続的な保護が必要だ。

ヒョレギョ

ハレリ

孝礼橋から下礼里までは溪谷の幅が広く、50~100mだ。両側の斜面、特に下礼里側の斜面は直



ヒョドンチョン

孝敦川溪谷の南内沼

壁で、比較的保存状態がよく、土深の深いところもあれば岸壁が露出している所もあり、河上の岩石の形態が多様で、植物の種数が非常に多い。スダジイが優占種で、ツバキ、トビラ、サンゴジュ、ネズミモチなども生い茂る。この区間にも良好なホルトノキが多く分布し、ホルトノキの自生地として遜色がない。このような高木には、チョウジカズラ、ヒメイタビ、イタビカズラ、マメツダなどのツル植物が厚く覆っている。下層植生には、フウトウカズラ、ツルコウジ、オオマンリョウ、ナンカイイタチシダ、マルバベニシダ、ペニシダなどが多い。岩壁には、ホラシノブ、タチシノブ、ヒトツバ、カタヒバそして環境部指定保護野生植物1号であるマツバラシが自生しており、河上にはチョウセンヤマツツジ、オオアリドシ、ミツデウラボシ、ヤマアジサイ、クサギなどが自生している。

ナムネソ

この区間に位置し、景観の美しい通称南内沼には、水面から30m程度の垂直壁が東西両側に立っており、上部には主にスダジイ、ホルトノキ、ヒメユズリハ、ネムノキ、シロダモ、ホンツツジなどが群生している。岩壁にはチョウジカズラ、ヒトツバ、アオガネシダ、タチシノブ、ノキシノブなどが自生し、特異な景観を呈している。

ゴッセオルム

南内沼から傑瑞岳までは、樹高15m、直径30cm以上もあるスダジイが優占種で、モチノキ、シロダモ、イスノキ、ヒメユズリハ、ホルトノキなどの多様な高木で構成された暖帯常緑広葉樹林が群落をつくっている。下層植生ではツルコウジ、ヤブコウジ、オオマンリョウ、ジュズネノキなど暖帯性低木と、カタヒバ、トラノオシダ、ヒメイタビなどの着生植物、さらに、マルバベニシダ、ナンカイイタチシダ、カタイノデなどのシダ植物が数多く分布している。また、岩壁にはヒトツバ、ミツデウラボシ、アオガネシダなどの着生植物が高い密度で群生している。河上の岩間にはオオアリドシをはじめ、ホラシノブ、チョウセンヤマツツジなどが生えている。

この地域の植生の特徴は、暖帯性常緑広葉樹林が溪谷の両斜面に沿ってよく形成されており、種の多様度が非常に高いことがあげられる。この地域ほど雄大な暖帯林は韓国でも稀だ。ゴッセオルムからドンネコを経て標高700mまでは、孝敦川暖帯常緑広葉樹林の中心地帯だ。主要構成種はスダジイを優占種とし、アラカシ、アカガシ、イスノキなどの高木とエゾノタケカンバ、ヤブコウジ、オオマンリョウなどの低木、さらに、チョウジカズラ、ムベ、キズタなどのツル植物がうっそうとした森を成している。優占種のほとんどスダジイの群落だが、標高300mから500mまではウラジログシとアラカシがかなり多く、ここから標高700mまではアカガシの群落が形成されている。このアカガシの群落は雄大な孝敦川の両斜面に大規模に形成されているが、木の高さが15m、下部の幹周りが1mを超すもので、韓国最大のアカガシ群落だ。

済州に分布している常緑性のクヌギ科植物はアカガシ、アラカシ、ウラジログシ、イチイガシの4種だが、孝敦川ではこれら4種全てを見ることができる。この区間のアカガシ群落は孝敦川常緑広葉樹林帯の中でも最も高い地域に位置し、ツバキ、イスノキ、チョウセンクレミノなどの常緑広葉樹とともに自生している。標高が高くなるにつれ、コナラ、チョウセンヤマモミジ、アカシデ、アワブキなどの落葉広葉樹が多く、温帯落葉広葉樹林帯に進入していることが分かる。

標高1,100mから1,500mの温帯落葉広葉樹林帯には高木ではアカシデ、コナラ、チョウセンモミ

ジなどが優占しており、下層植生ではタンナザサをはじめヤマアジサイ、チョウジカズラ、ケタガネソウなどが多い。

孝敦川のソサンボルルンネ溪谷の源流に当たる漢拏山の頂上南斜面だ。

ソブソム ムンソム ボムソム

森島、蚊島、虎島の植物

森島は島全体がタブノキ、スダジイ、サンゴジュなどの常緑樹林地域だ。この島に済州の在来種であるタチバナが5本自生しており、韓国では唯一、柑橘類の天然自生地だという点で重要だ。さらに、重要なことは、ここがオオタニワタリの北方限界地だという点だ。オオタニワタリはシダ植物で、トラノオシダ科に属する。日本の九州南部、沖縄、台湾、中国上海以南、インドシナをはじめ東南アジアに広く分布する種だが、森島より北の緯度には分布していない。

蚊島には123種の植物が自生している。常緑樹は27種が生息する。ホルトノキ、ヒメユズリハ、ナンゴクウラシマソウ、オオムラサキシキブ、スダジイ、ホソバカナワラビなどだ。

虎島には、147種の植物が自生している。そのうちシダ植物12種、常緑広葉樹15種が自生している。
ゴムンド ヨンスリ ジョルブアム
韓国では巨文島と済州本島の竜水里節婦岩に4本に自生するサツマモクセイが、10余本自生していることが確認された。土深が深いところではハマビワ－オニヤブソテツが群集を、土深が浅いところではトビラーマサキが群集を成している。



ソブソム

森島の植生



動物

島が育む野生動物の世界

済州には哺乳類30種、両生類7種、爬虫類9種、鳥類380種、昆虫類約4,000余が生息している。

済州は島だ。鳥類と昆虫類には羽があるため、飛んで渡ってきたとしても、他の動物はどうやってこの島に入り、棲むようになったのだろうか。

氷河期は海水面が現在より100m以上も低く、済州は朝鮮半島はもちろん、中国大陆、日本列島と陸でつながっていた。その時期に鳥類をはじめ哺乳類、両生爬虫類が済州地域に入ってきた。最後の氷河期が終り、海水面が現在のようになったのは、約1万年前のことだ。その

後、済州は四方が海に囲まれた島となり、それと同時に陸上からの動物の移動はなくなった。海が陸地だった時期に渡ってきた動物が棲むようになったわけだ。海を渡ることができる昆虫類と鳥類は、今でも季節ごとに済州の島を往来する。

済州島が育む動物相は、過去の地質時代に動物の移動経路とその生息範囲を追跡し、特定種の生物進化学的段階を明かすのに、決定的な端緒を提供するばかりではなく、生息環境の変化に伴う生物相の変化を明確に示している。

済州島の動物相は、動物地理的に旧北区のシベリア亜区と満州亜区に属するため、朝鮮半島、中国、日本に分布する種と共通点はあるが、朝鮮半島最南端に位置することから、東洋区に属する動物相も表われる。

また、中心に1,950mの漢拏山が位置しているため、海岸低地帯から白鹿潭にかけて、気候と植生の差異により、動物相が異なっている。

海岸低地帯や常緑の溪谷林では、亜熱帯性に属する昆虫類やトノサマガエル、ヤイロチョ



クメジマハイ

ウ、レンカク、アカガシラサギなどの種が観察でき、漢拏山の高地帯では、タカネジャノメ、ストックフォートなどの寒帯性昆虫類が生息している。

さらに、四方が海に囲まれた島という特殊な環境により、朝鮮半島には分布していないサイシュウコガネムシ、*Anechura quelparta* Okamoto、*Chlaenius touzalini* Andrewes、*Curculio hallasanensis*などの特産種も見られる。両生類、鳥類、哺乳類は、同種類でも済州固有の種または亜種に進化したものを見ることができる。チェジュサンショウウオとチェジュセスジネズミは、朝鮮半島で生息する集団とは別の種として分類される。鳥類の場合、済州島にだけ唯一記録された種はないが、チェジュゴジュウカラ、ウグイス、オオアカゲラなど形態学的特徴により分類された亜種もある。また、済州島はチョウセンズガエル、ジムグリガエル、チョウセンカナヘビ、コナムシ、ジムグリの南方限界線でもあり、クメジマハイの北方限界線でもある。また、渡り鳥の中間経由地、繁殖地、越冬地になっている。

最近、拡散している地球温暖化は、済州に生息する鳥類の種多様性の変化も予告している。実際にここ数年、済州島で新たに記録される種は増える傾向にある。数年に一度しか来なかつ

たレンカクは出現するだけではなく、繁殖に成功しており、カワビタキ、オオグンカンドリ、*Centropus bengalensis* (J.F.Gmelin, 1788)などの亜熱帯性鳥類の出現が増加している。また、バン、カルガモ、ウミウなどの渡り鳥が次第に留鳥になりつつある。

小さな動物が棲むようになったわけ

済州の野性動物のうち、哺乳類はノロジカ、サナグマ、サイシュウイタチ、コウモリ類、ノネズミ類などの29種が漢拏山をはじめゴッチャワアル、オルム、溪谷、溶岩洞窟などに分布する。

以前はヤマネコ、マンシュウジカ、イノシシも生息したが、絶滅した。イノシシの骨が考古学的な発掘過程でよく出土することから、済州島全域に数多く生息したものと思われる。そのほかヒグマ、ノロジカなどの化石の記録もある。

この島に大型動物も猛獣もなく、小さな哺乳類だけが数多く棲むようになったいきさつが説話で言い伝えられている。

アファンアホアコク

「九九谷」という所がある。大小の谷がうねをつくり、連なった所で、その谷間があまりに多く「九九谷」と呼んだ。

ここは元来、百の谷間があった。その頃、済州には数多くの猛獣が暴れまわっていた。ある時、中国から一人の僧がやってきて、民を集め、人間を苦しめる猛獣たちをすべて追い払ってやると言い、大声で「大国動物大王入島」と叫ばせた。恐ろしい猛獣を追い払ってくれると信じ、皆は大声で言われたように叫んだ。すると、不思議なことに全ての猛獣が集まってきた。そこで経典を唱えた僧は、猛獣たちに向かって大声でこう言った。

「お前たちは皆、棲みよい所へゆけ。お前たちが出てきた谷は消えてなくなるだろう。もしまた現われたら、お前たちの種族は滅するだろう」

すると、トラ、シシ、クマはもちろん全ての猛獣が谷間に消えていき、その瞬間、その谷も消えてなくなった。その後、済州では猛獣が出なくなったという。

済州島の野性動物との出会い

漢拏山を代表するノロジカ

済州は漢拏山を中心に暖帯、温帯、寒帯に区分され、多様な植物が分布する。中山間牧場地帯のよ

うな草原地帯と、標高1400m以上の亜高山草原地帯があり、ノロジカのような草食動物が生息するのに適した自然環境を備えている。

ノロジカはシカ科に属する草食動物で、前足が後ろ足より短い。尾は痕跡があるだけで、角は雄だけが持つ。ノロジカの食物は、キズタ、テイカカズラ、エビネ、タンナザサなどの草本類や、灌木および喬木の幼木の葉と新芽で、特定植物や植物の一部分を選んで食べる。初冬や初春には、前足を利用して積もった雪を掘り返し、食物を得ることもある。

以前、済州では動物の皮や食糧確保のため、冬季に漢拏山中山間地域を中心に狩猟が盛行したが、主にシカ、アナグマ、イタチ、キジなどを捕った。

イ・ヒョンサン
朝鮮時代に済州牧使として赴任した李衡祥が残した「耽羅巡歴図」にも、シカの狩猟に関する記録がある。ギョレリ 1702年10月11日、現在の橋来里と加時里付近で行った狩りで、シカ177頭、ガシリ イノシシ11頭、ノロジカ101頭、キジ22羽を捕ったと記されている。当時の漢拏山には、相当数のイノシシ、シカ、ノロジカが生息していたものと推定される。

いつの間にか漢拏山にはイノシシもシカも姿を消し、1980年代前後にはノロジカも絶滅の危機にさらされた。それ以降、漢拏山を代表する動物を守るため、冬季の餌まき、密猟根絶、保護区域への出入禁止などキャンペーンが繰り返され、今ではノロジカを済州島の全域で観察できるほど、その数が増加した。

耽羅国の存在を知らしめたタカ

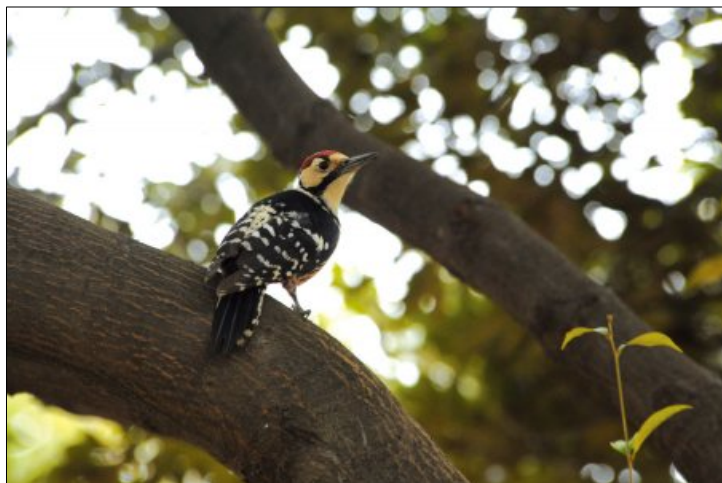
デジョンウブ マラド エウォルウブ シンオムリ ウドミョン チョイルリ
タカは韓国の代表的な猛禽類だ。済州島では、大静邑馬羅島、涯月邑新巖里、ナムオンウブ ナムウオンリ 牛島面朝日里、南元邑南元里などの海岸絶壁で繁殖する。タカは、タカ科に属する留鳥で、猛禽類の中で最も敏捷な鳥だ。ワシ科に比べ翼の幅が狭く、速く飛行する。普段は単独で飛行するが、繁殖期には雌雄が共に活動する。

済州にはタカに関連した説話がある。昔、中国の風水師だった胡宗旦が皇帝の命を受け、将来、世を治める人物が出現するという耽羅国の地脈を断ち切るため、済州を訪れた。胡宗旦が済州の主要な地脈を断ち切って、中国へ帰るため翰京面高山里にある遮帰島の沖合に差しかかった時のことだ。漢拏山の神がタカに姿を変え、遮帰島に飛んできた。そして、嵐を起こし、胡宗旦の一行が乗っている船を沈没させてしまった。それで「遮帰島」、「帰るのを遮った島」という意味の名前が付いたという。

他の鳥を気使うオオアカゲラ

キツツキ類は世界に216種が分布する。オーストラリアを除き、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカなどに生息しているが、分布地域によって種類が多様だ。韓国では計11種が報告されているが、済州にはオオアカゲラだけが生息している。

雌と雄によって羽の色が異なる。雄は頭頂が赤い羽毛で覆われ、雌は頭頂が黒い羽毛で覆われてい



オオアカゲラ

に指定されている。この鳥が済州道民の勤勉さやその犠牲精神を持っており、また、この鳥から、地理的条件や環境を克服し、夜昼たゆまず健康な済州をつくり上げた済州の人々の姿を垣間見ることができるからだ。

済州在来種チェジュウグイス

済州の方言で「ホビジャクセ」と呼ばれる。チェジュウグイスは陸地部で繁殖する個体群とは明らかに異なる。陸地部で見られるウグイスは夏鳥で、主に中国東部、韓国、ロシア沿海州、日本などで繁殖し、中国の揚子江以南、フィリピン、台湾、日本などで越冬する。

しかし、チェジュウグイスは移動せず、主に島で繁殖する留鳥で、済州島をはじめ韓国南西海岸の島嶼や、日本全域に分布している個体群と同一の集団だ。



ウグイス

る。オオアカゲラは、標高400m以上の落葉広葉樹林地帯に比較的広範囲にわたり分布しており、枯れたクロマツやクリノキなどに穴をあけ、巣をつくる。この鳥は済州島の特に漢拏山で一年中見ることができる留鳥で、木の害虫を食べる。森にとってはありがたい鳥で、朝から晩までせわしく餌を探しまわる。また巣立った後の木の穴は、翌年、再び使用するのではなく、他の山鳥が巣として使うよう気を配る。

オオアカゲラは済州道を象徴する鳥

ウグイスは、アルファとベータの鳴き声を持っている。ウグイスが出す「ホーホケキョ」というアルファ音は雌を誘い出す音で、「ケキョケキョ」というベータ音は自分の領域に飽食者や侵入者が現れたとき出す音だ。

ところが、チェジュウグイスは内陸から渡来するウグイスより多様なアルファ音を出す。島であるため面積に限りがあり、個体数の密度が高いため、雄同士の競争を勝ち抜き、

配偶者を得るため独特で多様な音を出すようになったのだ。ウグイスが島という特殊な環境に孤立して適応するため、留鳥化し、鳴き声も固有の「方言」に発展し、形態的特徴や習性が変化したと見られる。

チェジュウグイスは3月から鳴き始める内陸のウグイスとは異なり、2月の初・中旬から繁殖の為のさえずりを始めるが、その声がとても澄んでいて美しい。初めは漢拏樹木園、天地淵、天帝淵、新山公園などの低地帯の灌木林や溪谷林で聞くことができ、3～5月にはゴッチャウルやオルムをはじめ、漢拏山の溪谷周辺とウィッセオルム一帯でもよく聞くことができる。

風とともにやってきたカラス

昔から済州島には、夥しいカラスにまつわるさまざまな哀歓が伝えられている。流刑に処され済州島へ来た金楽行1708-1766の『耽羅鳥』を見れば、当時のカラスの群れがどれ程だったのか見当がつく。

「済州島に島流しになった時のことだ。カラスが群れをなしてきては、家の中はもちろんかまどにまで入り込んで、器の蓋を突っついては壊し、ごはん、魚といわず容赦なく食べつくしてしまった。こんなカラスの憎らしい行動に疲れ果て、恨みと呪いを浴びせるのが精一杯だった。鶏が卵を生んでも食べてしまい、雛すら孵化させることができなかった。我慢ができず、矢を放ってみても余りにも数が多すぎて役にも立たず、棒で叩いてもびくともせず、打たれている。夜は、木が黒くなるくらい枝に止まって寝ては、夜が明けるのを



ミヤマガラス

待って、カアーッ、カアーッと鳴きながら餌を求めて家の近くに集まってくる。」

今でも済州では数百数千羽のカラスの群れが見られるが、その種は、留鳥のハシブトガラスやハシボソガラスではなく、ミヤマガラスという冬鳥だ。済州の人々は、ミヤマガラスを「風のカラス」と呼んでいる。冬の風が吹く頃、群れをなして飛ぶ姿は壮観だが、済州の人々には陰悪な訪問客でしかなかったのだ。済州では、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ミヤマガラス、ニシゴクマルガラスの4種を見ることができる。ハシブトガラスとハシボソガラスは漢拏山を中心に生息する留鳥で、ミヤマガラスとニシゴクマルガラスは海岸低地帯の農耕地、中山間の牧場や草原地帯に渡来する冬鳥だ。

グジャウブ ウドミヨン

ミヤマガラスは、通常10月末から翌年の2月まで済州で越冬するが、主に、旧左邑、牛島面一帯のニンジン畑や麦畑で大群を観察することができる。越冬個体数が多過ぎて、農作物の被害が深刻だ。ニシゴクマルガラスは、ミヤマガラスの群れの中に少数が混ざっているが、小柄なので識別が可能だ。

済州島での時間旅行、歴史の物語



上古史

前近代史

近・現代史

済州の歴史の波

済州歴史の中の香り

済州歴史の中のエピソード

済州歴史の暗い記憶



上古史

済州島に残された不思議な足跡

—— 番最初に済州に足を踏み入れた人は誰だろう。当時、彼が眼にした済州はどんな様子だっただろう。ただ、疑問に思い、想像力を使って推測するだけで、いつ、どこで、どういう人々がこの火山島で歴史を始めたのか知るすべはない。ところが、この島に生きていた先人の足跡は島のあらゆる所で見つかっている。どれほど多くの足跡が埋まっているのか分からないが、今まで見つかった最も古い人の痕跡は後期旧石器時代のものだ。済州には少なくとも2万5千年前から人が住んでいた。

2万5千年前から1千年前まで済州に住んでいた先人の物語は、2万7千年前から1万2千年前までの「旧石器時代」、その後3千年前までの「新石器時代」、2千200年前までの「青銅器時代」、1千年前までの「耽羅時代」に分けられる。

旧石器時代の足跡

エウォルウブ

チョンジョン

済州の旧石器時代の遺跡としては、涯月邑に位置する「ビレモツ」洞窟と西帰浦市の天地淵溪谷にある「センスゲ」洞窟がある。

ビレモツ洞窟では、旧石器時代中期のスクレーパー類の石器や大陸性動物であるヒグマの骨（まだ公認されていない）が出土し、6万年前の中期旧石器時代の遺跡と言われてきた。しかし、石器は一概に道具のような形をしていない道具の不定形性、遺物の上を覆う堆積層が薄すぎるという層位の不明確性、クマの骨も人間の狩猟によるものか、それとも自然死したのか分からないという動物骨の分類における異論などが提起されている。

天地淵の溪谷にあるセンスゲ洞窟の遺跡では、石核、石刃、細石核、細石刃、スクレーパー、搔器、ノッチ、鋸歯縁石器などの石器類が多量出土した。特に、石刃と細石刃は後期旧石器の石器製作方式を明確にする遺物として評価され、朝鮮半島の内陸地方の石器とは異なる特徴を持つ。

年代測定の結果、センスゲ洞窟の遺跡は2万8千年前から2万5千年前までの遺跡だということが明らかになった。

済州の旧石器時代の遺跡は、この二つの洞窟遺跡以外は発見されていない。その頃から新石器時代が始まるまでの1万2千年前までは、1万数千年という長い期間だ。その間、済州で暮していた人は彼らだけだろうか。そして、2万5千年前より以前はだれも住んでいなかったのだろうか。

「済州地質形成史」を見ると、50万年前から30万年前までは済州島火山の最盛期だった。中期旧石器から後期へとつ



センスゲ

ながる10万年前から2万5千年前に単成火山群が活動し、最後の段階の済州島ができあがる。このような状況で、済州に30万年前より以前の前期旧石器の遺物が存在する可能性は非常に少ない。さらに、10万年前の後にも続く地質・地形の変化のため、当時、狩猟をしていた人にとって済州は人が住めるような所ではなかっただろう。もし、中期旧石器時代の人々が済州に住んでいたとしてもごく短い期間だっただろう。

センスゲ洞窟の遺跡を残した後期旧石器時代の人々が済州に住む頃には、済州は安定した地盤を形成していた。ところが、当時は漢拏山の頂上で二度目の火山爆発が起きた時期と重なる。彼らはその恐ろしい場面を眼にしただろう。世の中が根こそぎ揺らぐ恐怖を味わったのかもしれない。今もどこかに埋まっているのかもしれないが、頻繁だった火山活動が済州に旧石器時代の遺跡が少ない理由ではないだろうか。

新石器時代の足跡

済州の新石器時代の土器は、朝鮮半島南部地方の新石器土器の流れとは多少の差はあるものの、おおむねその軸をとともにしている。ただし、済州では新石器時代の代表の遺物とされる典型的な櫛目文土器がまだ発見されていないこと、また、1万年前を中心年代とする済州の高山里式土器の段階が朝鮮半島にはなかったことが大きな違いだ。

今まで済州で見つかった新石器時代の遺跡は、北村里、高山里、温平里、新村里、三陽洞、城邑里、下葦里、外都洞、竜潭洞・道頭洞、江汀洞、沙溪里、吾羅洞遺跡など、およそ70か所にのぼり、済州本島はもちろん、本島の周辺にある離島にいたるまで、あちこちで確認されている。

なかでも最も早い時期の遺跡は、済州の西側の翰京面の平坦で広い地域に埋まっていた高山里遺跡だ。ここから1,700点を超える石鏃類を含む9万9千点余りの石器や、1千点余りの土器の破片など、10万点余りにのぼる遺物が出土した。これは後期旧石器の末期から新石器初期に当たる遺物で、1万年前済州に住んでいた人々の痕跡だ。ここは済州はもとより、韓国でも最も古い新石器遺跡だ。

高山里の遺物を残した人々は、細石刃などの後期旧石器の伝統石器を製作して使っており、矢やモリを作って足の速い獣や鳥、魚などを捕っていた。特に注目すべきことは、彼らは植物の幹を混ぜた土で食器を作って使っていたことだ。このような繊維質の食器は朝鮮半島では見つかっていない。この「高山里式土器」が韓国で初めて作られた食器だと言えよう。つまり、高山里式土器を作った人々は朝鮮半島から入った人々ではないということになる。だとすれば、どこから来たのだろうか。



高山里式土器と同様の土器文化は、シベリアのアムール川の流域や沿海州などで見られる。その辺りのどこかに住んでいた人々が朝鮮半島を経由せず済州まで移動してきたのだ。これはどういうことなのか。

高山里の先人が済州に入ったのは氷河期が終わる頃だった。その時まで済州は大陸とつながっていた。当時、陸地だった今の黄海を通して移動したものと見られる。

そして済州に入り、暮らし始めたが、氷河期が終わって海水面が徐々に上昇し、1万年前に済州が島になってしまった。この高山里の先人が済州に初めて定着した住民集団といえる。

その後、高山里の初期新石器文化は済州全域に広がる。そして、8千年前には朝鮮半島の南部地方から入った新石器文化と融合する。

サミヤンドン

5千年前にはかなり多くの人々が済州に住んでいたと推定されている。済州市の三陽洞、

オドワンドン ギムニョンリ ガンジョンドン イェレドン サゲリ オンビョンリ

梧登洞、金寧里、そして西帰浦市の江汀洞、貌来洞、沙溪里、温平里などにその遺跡が点在している。そこに住んでいた多くの人々は東西で起きた済州の最後の水性火山活動を見守っていただろう。

新石器末期の3千年前は、より多くの人々が住んでいた。それ以前の遺跡が存在する地域はも

ちろんのこと、城邑里、北村里、下幕里、漢南里、月令里、牛島などにも新石器末期の遺跡が点在している。

さらに、この時期は本格的な貝塚が作られ、海岸の低地帯を中心に人口が増え、安定した生計パターンが形成されたと見られる。

済州で新石器時代を送った人々はどういう暮らしをしていたのだろうか。

新石器時代は人々が狩猟や採集、漁労活動をしていた時期だ。標高300m以下に広がる野原や、温かい気候が提供する野生の果実、火山島の恵みである海岸の豊かな海の幸、様々な種類の鳥が生息し、猛獣ではなくシカやノロジカ、イノシシなどの草食動物が多かった新石器時代の済州は、当時の人々にとって最高のパラダイスではなかっただろうか。

青銅器時代の足跡

狩猟や漁労生活が新石器時代から続けられた済州に、農耕文化を持つ集団が朝鮮半島から入ってくる。2,700年前にこの島に入り、大静邑上幕里の海辺に定着した人々によって済州で農耕生活が始まった。

上幕里の遺跡ではかまどや家の跡地と見られる遺構、貝塚とともに青銅器時代を代表する孔列土器などの遺物が発掘された。農耕や漁労を営みながら人口およそ200人の小さな村を形成していた跡だ。上幕里の先人は、済州初の農耕定着民であり、先進集団でもある。(最近、高山里遺跡では朝鮮半島で最も古い集団定住集落地とみられる資料が発掘され、関心を集めている)

上幕里の先人は、朝鮮半島の青銅器時代の人々とは違って、農耕だけでなく漁労にも励み、狩猟や採集生活を営みながら小さな村を作って定着していたと見られる。これは済州の自然環境によるものだ。済州の荒れた土地や強い風は農耕に有利な条件ではなかったが、海産物が豊富な海があったからこそ、済州を生活の基盤にすることができた。その後、上幕里の文化は済州のあらゆる所へ広がっていった。済州に農耕生活と共に



上幕里遺跡地

小規模な村を形成した定着生活が始まった。

ソングッリ

青銅器時代の末期には朝鮮半島から松菊里文化を持つ集団が入り始めた。従来の文化と新しい文化が出会うと、衝突あるいは交わり合って変化が現れ始める。そのため、この時期の社会的背景は文化的変動や複合の様相が目立ち、両集団間の利害関係も生じたと見られる。この時期は済州島の初期農耕を基盤に、海産物の採取に頼る生活をしていたと考えられる。

サムファ

済州の青銅器時代の遺跡は、大静邑上墓里を始め、済州市三陽洞の三和地区、済州税

ヨンダムドン

ウォルソンロ

グジャウブ

キムニョンリ

ハンリムウブ

ドンミョンリ

務署の敷地、竜潭洞、月星路、旧左邑の金寧里、翰林邑の東明里、西帰浦市の

ガンジンドン

ジョチョンウブ

ブッチョンリ

エウォルウブ

グアグジリ

江汀洞、朝天邑の北村里、涯月邑の郭支里などに点在している。

タムナ

済州島の特別な古代歴史、耽羅時代

農

耕生活や漁労生活をともに営むには海の近くに住まなければならない。海岸沿いを中心に集まって小規模な村を形成し、徐々に大規模な村へと拡大、合併する過程で誕生した国が耽羅だ。

タムナ

生した国が耽羅だ。

耽羅は2,200年前に形成され始め、1,000年前までおよそ1千年間も固有の体制を維持していた独立国だった。

済州の上古時代を区分する時、鉄器時代や原三国時代といった朝鮮半島の時代区分とは別に、あえて「耽羅時代」というのは、済州が耽羅形成期から朝鮮半島とは異なる強い地域色を帯び始め、当時、朝鮮半島でも、土着的な地方色ははっきりと現れていたからだ。

耽羅はどのように始まったのか

耽羅形成期は朝鮮半島の初期鉄器時代の後を次ぐ原三国時代の前半に当たる。当時、済州にはかなり大きな規模の村がすでに形成されていたか、もしくは新しく形成され始めていた。こ

ヨンダムドン

れらの古代村の遺跡の中で最も近年に発見されたが、最も古くて大きなものが竜潭洞遺跡だ。

済州市竜潭2洞に位置する竜潭洞遺跡は2011年1月に発見された。発掘調査の結果、竪穴住居、2階建ての倉庫、共同炊事と作業空間、様々な貯蔵穴、井戸、柱穴などが確認され、学界から大きな関心が集まった。同遺跡が耽羅国形成初期の最大聚落地区の中心部と推定されるからだ。



上墓里貝塚

もう一つ見逃せない耽羅形成期の大規模な村の遺跡は、
サミヤンドン
 三陽洞先史遺跡だ。三陽洞先史遺跡は、朝鮮半島の青銅器
ブヨ
 文化を代表する夫余の松菊里文化が2,300年前に済州島へ流入する過程を説明している。発掘調査の結果、大小の竪穴住居や倉庫、貯蔵穴、土器釜、調理場所だけでなく、村の空間を区画した石築や排水路、廃

棄場まであったことが確認された。土器や石剣、銅剣、銅鏃、鉄器、玉製腕輪などの遺物も多く出土した。

発掘区域だけで250余りの世帯の跡が確認されたが、住居跡のほとんどが中央に楕円形の作業穴を持つ円形竪穴住居、つまり「松菊里型住居跡」だ。そして、「単位住居群」を成していた。中央にある集会用のかまどを中心に小さな広場があり、その周囲に円形住居地が円を描くように置かれた。直径6 m程度の大型住居地1棟におよそ10棟の小型住居地が配置されている。

2千年前のこの村にはすでに権力者が存在し、身分によって居住地が配置されていたのだ。

このように2,300年前に形成された三陽洞先史村は、1,800年前に廃虚と化してしまった。村人が突然消えてしまったのだ。いったい何があったのだろうか。

竜潭洞遺跡の付近に竜潭洞古墳遺跡がある。いまだで発見された耽羅時代の遺跡の中で最も興味深い所だ。竜潭洞古墳遺跡では東西に長く連なる石列を境にして南側と北側に二つの墓域が現れ、この両墓域からそれぞれ時代が異なる遺物が出土した。

南の墓域では紀元前2世紀から紀元後1世紀頃のものと思われる楕円形の石槨墓3基と土器類が出土した。北の墓域では紀元後1世紀から2世紀頃のものと思われる7基の甕棺墓と1基の石槨墓、さらに墓の内部や周辺で1 mを越える長剣や矢鏃など、様々な鉄製武器やガラス玉が出土した。

つまり、2,200年前から1,900年前のものと推定される墓と、1,900年前から1,800年前のものと推定される墓が同じ場所に埋まっていたということだ。また、後期の墓に1 mを越える長剣などの鉄製武器がともに置かれていた。

竜潭洞古墳から出土した鉄製武器類は、古代支配階級の権力を象徴する重要な道具だっ

た。鉄製武器類の持ち主が埋蔵されていたと見られる石槨墓は、時代が異なる両集団の墓域の中に位置していた。その鉄製長剣の持ち主は誰だったのだろうか。ひょっとして耽羅国を開いた人ではないだろうか。

竜潭洞古墳遺跡と遺物は、すでに存在していた既存勢力と新しく登場したもう一つの勢力が統合したことをうかがわせる。

同じ時期に三陽洞先史村の人々が突然消えてしまったのもこれらの勢力に押されたか、もしくは吸収されたことを意味するのではないだろうか。

勢力間の衝突や葛藤は常に付きまとう。しかし、耽羅形成期の済州の人々は戦いより連盟や和合を選んだに違いない。このように同じ場所に墓域を築いた事実もあれば、済州には三神人が仲よく土地を分けて国を開いたという「耽羅開国神話」も伝えられている。

済州は耽羅形成期から海路を開拓し、外部と貿易を行っていた。この時期の遺跡から出土した

サンジハン

ほとんどの遺物は舶来品だった。特に、三陽洞先史遺跡から出土した玉製腕輪、山地港遺

ジョンダルリ

跡から出土した青銅製品や貨幣、終達里遺跡から出土した鏡や貨幣、細型銅剣などからは耽羅形成期の物資交流が他の地域に比べて頻繁だったことがうかがえる。この時から耽羅はすでに中国-韓国-日本をつなぐ北東アジア交易ネットワークに組み込まれ、当時のグローバル化のレベルに適応・変化していった。

耽羅はどういう国だったのか

耽羅が文献に初めて登場したのは、3世紀に書かれた中国の歴史書『三国志』だ。魏書の『東夷伝』に耽羅の対外交渉活動をうかがわせる部分がある。耽羅を指すものと見られる

ジュホ

「州胡」が登場するが、州胡人は船に乗って中韓と往来しながら商売をすると記されている。

だとすれば、中韓はどこなのだろうか。中韓とは、旧馬韓地域の南海岸一帯、すなわち3世紀

ヘナム

頃、今の全羅南道の海南地方に結成された29の小国連盟体を指すと言われ、この時期の交易の足跡は、済州と南海岸地域の遺跡から出土した遺物でも確認されている。

耽羅国を開いた主役はどういう人々だったのだろうか。紀元後の鉄器文化を持って済州へ移住した高句麗系統の北方民族か、それとも三韓系統の一つだったのではないかと考えられている。

5世紀から済州は様々な文献記録に「耽羅」という名で記され、外部に知られ始める。朝鮮半島では高句麗、新羅、百濟、加耶が古代王権国家としての体制を整える時期だ。耽羅が5～7世紀には百濟と、7世紀半ばに新羅が三国を統一した後は新羅と関係を持ち、日本と唐へ使者を派遣したという記録が文献に具体的に現れる。

600年代半ば頃、耽羅は活発な海上活動をし、勢威をふるっていた。新羅27代の善徳女王は
 ファンニョンサ
 新羅周辺の9か国を仏力で制圧するため、皇竜寺9層塔を建てたが、この9層塔の四番目が
 タクラ
 毛羅だ。耽羅は統一新羅時代に国際的にかなり高い地位を持っていたことがわかる。

唐の王朝正史である『旧唐書』にも600年代半ばの耽羅の地位が分かる記録が見られる。唐
 は新羅、百済、倭国とともに、耽羅を外交上の一国として待遇していた。この時の耽羅の序列
 は倭国より一つ上にあった。

耽羅の地位が分かる代表的な遺跡は「竜潭洞祭祀遺跡」だ。同遺跡から出土した遺物は全



耽羅形成期～耽羅前期の物資交流

て輸入品で、最高級品だった。食器は全て統一新羅時代に製作された高級な灰色の陶器だ。

ギョングジュ

ここで出土した金銅製の帯装飾は、現在まで慶州などの他の新羅地域では見つかっていない。耽羅が唐との直接交易を通じて持ち込んだ物品だからだ。中国の唐との交流を証拠づけるもう一つの遺物がある。それは、やはり竜潭洞祭祀遺跡から出土したもので、8世紀頃、中国浙江省の越州窯で生産された中国製青磁の茶碗とやかんだ。

耽羅は、周辺地域と個別に対応する独自路線を持つ交易中心の国家体制を備えた国だったのだ。

ユネスコ世界自然遺産に指定された旧左邑の竜泉洞窟遺跡も耽羅の最盛期をうかがわせる遺跡だ。洞窟の床や洞窟内の湖から、統一新羅時代8～9世紀代の印花文が描かれた土器類や鉄器類などが多量に出土した。これらの土器類もやはり慶州の王京、または全羅道の南海岸の釜で生産された舶来品で、最高級品だった。

ギョングジュ ワンギョン

耽羅は2千年前に形成され始め、対外交交易中心の活発な海上活動により財や富を蓄積し、独自に国の文物制度を整え、千年の歴史を築いた古代王国だった。

朝鮮半島の後三国を統一し、高麗が興った初期まで、耽羅は独立体制を維持していたが、12世紀以後、耽羅郡として高麗に併合されてしまう。「高麗史」に「済州」という名が初めて登場したのは1229年のことだ。この時期に「耽羅」は「済州」に変わったのだ。



旌義県城

前近代史

韓国の中のもう一つの韓国

済 州は韓国の一つの地方だ。しかし、他の地方とは異なるユニークな歴史を持っている。同じ韓国だが、韓国とは明らかに異なる、韓国の中のもう一つの韓国だと言わざるをえない。風と石、そして女性が多い三多の島、門と泥棒、乞食のいない三無の島、三つの災難が多い三災の島、神の故郷、伝説の故郷、民俗の宝庫、堂5百・寺5百、「人はソウルへ、馬は済州へ」など、昔から済州を表現する多くの言葉がその理由を物語る。済州は北東アジアの中央に位置する火山島だ。朝鮮半島、中国、日本に囲まれているという

地理的位置、火山でできているということ、四面を渺々たる大海に囲まれた島だということなどが関わり合い、済州ならではの独特な歴史を綴ってきた。

ともすると済州の人々を苦しめてきた三つの災難、つまり「風災、水災、旱災」は全て済州の地理的自然環境と密接に関わっている。四面が大海であるため台風の被害(四面大海風災)が多く、山が高く溪谷が深いため水害(山高深谷水災)も多く、石が多くて土質が荒れているため干ばつの被害(石多薄土旱災)も多かった。

北東アジアの中央に位置するこの島は、韓国、中国、日本が互に行き来する中で中継地の役割を果たし、島の周辺を流れる黒潮海流に乗って東南アジアや琉球列島などの南方海洋文化が運ばれていた。

モンゴル族の国「元」が済州島に直轄領を設置し、およそ100年間も干渉するようになった背景もこのような関係的位置に起因する。世界制覇を夢見ていた元が、日本や南宋を征伐するための中間基地として済州島を選んだのだ。

高麗末以来、倭寇の侵犯が頻繁だった理由も単に済州が海に囲まれているからではなく、倭寇の主な略奪対象だった中国へ向かう途中に位置していたからだ。倭寇は拠点の確保という理由で済州を頻繁に侵犯していた。

前近代史を生きた済州の人々の歴史は開拓精神と共同体意識へとつながる。

開拓精神は済州の地理的環境や厳しい自然環境を乗り越える過程で形成された。済州の人々にとって海は外界との断絶ではなく、それを開く道であり、外界に繋がる媒介だった。近隣諸国と活発に交易を行っていた耽羅の歴史もやはり、済州人の開拓精神に因るものだ。済州の人々が済州島を決して孤立した辺境として認識していなかったことは、済州に伝わる多くの説話に投影された宇宙中心の世界観にもよく表れている。

済州が独特な歴史を持つようになったもう一つの重要な特性は、共存共栄の共同体意識だ。共同体意識は前近代の韓国の農業社会でよく見られるが、済州は他のどこの地域よりもこの意識が強く、また独特な性格を持っていた。

済州の山村は半農半牧をし、漁村は半農半漁をする二重の生計手段を持っていた。そして、牧畜や漁業は村単位の共同牧場や共同漁場で行われた。したがって、共同体は血縁よりも村を中心に形成された。厳しい環境をともに乗り越えるには力を合わせなければならず、そのためには血縁の絆より村の構成員の絆を強めることが何よりも大切だった。災害に備えた様々な契互助の集まり組織、村の碾き臼、村単位の堂信仰などから済州のユニークな共同体の姿を垣間見ることができる。外部の権力や新しい文化の流入により、共同体が脅かされた時にも、それに対応する形で、共同体という形式が村単位で全島に素早く拡散した事実も、済州ならではのユニークな歴史の一部だ。

耽羅国時代が終わった後

千年の歴史を誇る済州の古代王国耽羅は高麗時代に入り、独立国の地位を失ってしまう。

後三国を統一した高麗は、耽羅国の支配勢力を懐柔して取り込む方策を執り、しばらくは独立体制を維持させた。しかし、王権の基盤がある程度整うと、耽羅への統治を強化し始め、耽羅は徐々に高麗の地方制度の中に組み込まれていく。

「高麗史」に「済州」が初めて登場したのは、高麗の高宗16年、つまり1229年の記録だ。独立国だった「耽羅」は地方を意味する名の「済州」になったのだ。しかし、海を挟んで遠く離れていたため、高麗の力が強力に及ぶことはなかったようだ。当時の済州はまだ独自のアイデンティティを保っていた。



三別抄の缸波頭里城

1231年、高麗はモンゴルの侵略を受け、以後40年余り根強く抵抗したものの、力及ばず屈辱的な和解を強いられる。高麗で対モンゴル抗争を展開していた三別抄が済州に入ったのは、モンゴルと高麗が講和を結んだ1270年のことだった。

世界制覇を夢見ていたモンゴルは当時、北側のロシアと西側の中央アジアにあるほとんどの国を征服したが、中国の南にある南宋と海に浮かぶ日本は征服でき

ずにいた。そのため、南宋と日本へ向かう海路の要衝だった済州に早くから目をつけていた。そのような状況の中で三別抄が済州で抗争を展開したため、モンゴルとしては三別抄の討伐が焦眉の問題だった。このようにして済州は高麗とモンゴル、そして三別抄の戦いに巻き込まれていった。

モンゴルと出会った100年

1273年、高麗軍とモンゴル軍で構成された麗蒙連合軍1万2千人が済州に入り、三別抄を鎮圧する。その後、済州はモンゴルが直接管理する直轄領になってしまう。

モンゴルは1279年に南宋の征伐を終えたものの、2度にわたる日本遠征はいずれも失敗し、遠征の推進と中止を繰り返していた。この時期に朝鮮半島の民衆は相当の辛苦を味わったが、済州の人々はさらに苦難を強いられた。モンゴルは済州を、三別抄を武力制圧して獲得した征服地と見なし、済州島民をまるで集団捕虜のように動員し苦しめたからだ。

モンゴルが日本遠征に失敗し、遠征に執着していた皇帝クビライが死亡すると、高麗がモンゴルに要請し、済州は高麗に戻されたこともあった。ところが、再びモンゴルに帰属するようになり、それからおよそ80年間、済州は、代わる代わる高麗とモンゴルの支配を受けることになる。しかし、済州にとっては設けられた支配機構の管轄権が高麗にあるか、それともモンゴルにあるかという現象的な変化に過ぎなかった。済州は100年間二重に帰属した状態でモンゴルの影響下に置かれていたのだ。その100年間、済州社会は大きな変化を経験することになる。

済州が経験した最も大きな変化は牧畜だった。それ以前から済州は馬の飼育が盛んな地域だった。古くから遊牧民族であるモンゴルが済州を「房星」、つまり「馬の守護神が宿る所」とするほど、済州は天然の条件を備えた馬の放牧地だった。



済州馬

モンゴルがモンゴル馬160頭を済州へ持ち込み、東側の水山坪一帯に放牧したのは1276年のことだった。この時、済州に牧馬場が初めて設けられたといえる。モンゴルから牧胡も入ってきた。牧胡は馬を飼育する牧畜の技術者だった。1300年頃になると、済州牧馬場はモンゴルの14の国立牧場の一つに位置づけられるほど牛馬の数が急増し、飼育施設や運営に関わる者の数も大きく増えた。

済州の人口も大幅に増加した。モンゴルが直轄領にした初期は1万223人だった済州島の人口が、1374年に至っては約3万人にのぼるほど増えた。

済州の人口は、モンゴルと関わる前から他の地域から人が流入し、徐々に増え続けていたが、モンゴル人と済州人との婚姻により、一層増加した。

100年にわたり、軍人や官人、牧胡などのかなりの数のモンゴル人が済州に入った。1273年から

ゴンミン

済州に入り始めたモンゴル人は恭愍王代(1352～1374)に至ると、彼らだけの部落を成すほど大勢の人々が定着、または長期間滞在していた。当時のモンゴル人は済州を楽土と考えていたことから、済州社会のモンゴル勢力がいかに強く、済州での暮らしがどうであったのか推測できる。

1370年、モンゴル族の国である元は衰亡し、中国大陸では明が建国される。明と国交を結んだ高麗は1372年、明に献上する馬を求めて済州に官吏を送るが、牧胡の反発や氣勢に押され馬を持って帰ることは出来なかった。

1374年、明は高麗に使者を派遣し、済州で質のいい2千頭の馬を選んで送るよう命じた。高麗が馬を持っていこうとすると、牧胡はモンゴルの皇帝であるクビライが育てた馬を明に献上することはできないとし、300頭だけ渡した。しかし、高麗に来ていた明の使者が2千頭を強く要求したため、恭愍王は済州を征伐しようと決心した。

チュ・ヨン

済州への出征軍は、崔瑩を総司令官にする2万5,605人の精鋭軍と314隻の戦艦で構成されていた。当時の済州の人口に匹敵するほどの大規模な兵力だった。高麗が、済州の牧胡勢力がどれほど強いと思っていたか推測できる。

済州の牧胡も出征軍に立ち向かう準備を整えていた。彼らは3千人余りの騎兵と数多くの歩兵を率いていた。牧胡軍が数千人にのぼったのは、当時、部落を成して暮らしていたモンゴル族、彼らと婚姻していた済州人の間に生まれ、半モンゴル族化した済州民、そして高麗官吏の度重なる収奪に反感を抱いていた済州の人々も加わっていたためだろう。

1374年、崔瑩の済州出征軍は済州に入り、牧胡軍と一か月間、昼夜の別なく熾烈な戦闘を続け、いわゆる「牧胡の乱」を鎮圧する。

「我が同族でない者が加わり、甲寅の変を起こした。剣や盾が海を覆い、肝や脳は地を覆っている。言葉にならない」

これは崔瑩の出征軍と牧胡勢力との戦闘の40年後、済州牧の判官として赴任していた河澹が、済州の人々から直接話を聞き、感想を述べたものの一部だ。当時の戦闘がいかに激しく凄まじいものだったかをうかがわせる。

崔瑩が出征軍を率いて済州に入った1374年8月28日から、鎮圧を終えて済州を去った9月23日までの25日間に起きた総力戦で牧胡勢力は影響力を失い、済州の人々も多大な犠牲を強いられた。こうして、モンゴルの済州支配100年の歴史に終止符が打たれた。

しかし、その後も済州には高麗と明に反発する気風が強く残っていた。崔瑩が行った鎮圧で、済州の多くの人々が犠牲になり、官吏の収奪や乱暴も依然として続いた。そればかりか、牧胡勢力の影響力から脱した後も、済州は以前より多くの馬を献上しなければならなかった。

崔瑩の牧胡鎮圧以後も明への済州馬の献上は続いた。1379年から1392年まで高麗が明に捧げた3万頭の馬のうち、2万頭以上が済州馬だったというから、それを見守らなければならなかった済州の人々はどれほどくやしかっただろう。

1386年、高麗は済州の反感を和らげるために、済州の土着勢力の子息を呼び寄せて慰めたり、職位を与えたりした。済州で高麗と明に対する敵意が治まり、高麗が済州の管轄を確かなものにしていったのはこの時期からだ。こうして済州は再び高麗に帰属する。しかし、その期間はそれほど長くなかった。高麗が滅び、朝鮮時代が始まったのだ。



楸子島にある崔瑩將軍の祠堂

朝鮮時代の済州

朝鮮は、牧馬場などのある済州を経済的に重要な地域として認識し、支配権を強めていく。1416年、済州には三邑、つまり済州牧、旌義県、大静県が設けられた。三邑の構造は、その後500年間、済州島内に地域による文化的な差をもたらし、特に、南北より東西間の文化の差が大きいという特徴を見せるようになる。

朝鮮時代の濟州島は、行政区域の上では全羅道に属していたが、全羅道の地域とは異なる差別的な待遇や統治を受けていた。

ヤンパン

両班貴族階級の勢力が絶対的に弱かった濟州島は、中央政治の外郭に位置せざるを得なかった。そのため、中央政治の舞台に進出した士族勢力よりも、郷村社会に居住する郷任勢力などの土着勢力が絶対的な権力を行使していた。濟州地域には、代表勢力として士官という特殊な制度も存在した。

朝鮮時代の濟州の歴史は中央と地方との絶え間ない葛藤の中で展開された。濟州は人が住めない所のように認識され、「子を生めばソウルへ、馬は濟州へ送れ」と言われるほどだった。朝鮮の中央政府は、濟州に派遣した濟州牧使などの官権を中心に濟州社会を中央に集中させようとし、一方で濟州の地方勢力は、中央政府や官権の過度な干渉から脱し、濟州郷村社会の独自性や自主性を中心に濟州社会を主導しようとした。濟州島の権力を掌握するための一連の動きは、甚だしくは独立国の建設運動として現れることもあった。

朝鮮時代の濟州歴史はまた、中央政府の濟州島民に対する過酷な経済的収奪とそれに対する抵抗という構造で説明することもできる。

濟州島は地理的に遠く離れているため、地方統治者に多くの統治権が与えられ、彼らへの中央の監督・統制もほぼ不可能だった。「濟州牧使を歴任すれば、3代は食べられる」という言葉があるほどだった。これは支配権力による構造的な収奪の他にも、官吏による恣意的な収奪が横行していたことを意味する。



濟州牧官衙

朝鮮の中央政府は済州島の中山間地域を全て牧場にし、開墾を許さなかった。済州の人々は海辺の一部の土地だけで農作を営まなければならなかった。ただでさえ農業環境が厳しいうえに耕作地も足りず、凶年が重なって頻繁に餓死者が出た。これは朝鮮王朝の500年間で済州の人口が5~6万人を越えなかった理由の一つでもあった。

済州特産物のミカンも朝鮮時代の済州の人々に大変な苦しみを与えていた。官吏は、ミカンが熟する前から木に生った実を一々数えて帳簿に記録し、これを徴収していた。島民は苦痛を与える木だと考え、夜中にこっそりとミカンの木に湯をかけて枯死させることも多かった。

アワビなど海産物の献上、漢拏山で採れる薬材の献上など、ありとあらゆる献上、雑役、雑税を強いられた済州島民は、一人が十人分働かなければ暮らしを維持することができなかった。

生まれたばかりの赤ん坊、老いて動けない老人にまで役が課せられたので、済州島民、特に男性は1人10役を果たすしかなかった。

ボジャク

牧馬を担当する牧者たちは頻繁に妻子を売り、アワビの献上を担当する鮑作人は「たとえ餓死をしたとしても鮑作人の妻にはならない」と言われるほど、その暮らしは悲惨だった。

痩せた土地で食べていくのも大変なうえ、課せられた租税が重すぎて島外へ逃げてしまう人も増えてきた。漁師、良民、軍人、奴婢などの多くが、様々な租税や賦役に耐えられず他の地方へ逃げてしまい、島民の数は減り続けた。1435年の済州の人口は6万3,093人だったが、1672年には2万9,578人に減ってしまう。200年間で済州の人口は半分以上減ったことになる。遂に1629年、済州島民は島の外へ出られないという出陸禁止措置が取られ、以後200年にわたり、済州島民は島を出ることができなくなる。朝鮮時代の済州で頻繁に起きた民衆による反乱のほとんどは、地方官吏や中央政府の収奪に起因するものだ。これは中央政府の過度な収奪に対する抵抗、つまり生存権闘争のレベルで展開された運動であり、辺境として残ることを拒む強い抵抗の表れであった。

一方で、朝鮮時代の済州は北東アジア周辺の多様な文化をつなぐ役割を果たし、中国や日本だけでなく、西洋の文化など、海外情報の中央への提供も担当していた。

その一例として漂流や漂島の記録が数多くある。1477年にミカンを献上するため朝鮮半島へ向かっていた金非衣ギム、ビイ一行の船が台風に遭い、琉球国の閩伊是麼に漂流した。これにより、琉球国についての詳しい情報が得られた。1653年にはオランダ人のハメル一行が乗った商船が済州の大静県地域に漂着し、西欧についての知識を入手するきっかけとなった。

朝鮮時代の済州に出会う

済州島には朝鮮時代の済州に出会える遺蹟が多い。最も代表的な遺蹟は済州を済州牧、旌義県、大静県の三邑に分けて設置した邑城とその中にあった官衙施設だ。

済州牧使の吾湜が赴任するまで、済州は17県に分けられていた。これを非効率的だと思った吾湜は1416年(太宗16)3邑を中心に吸収・統合すべきだと朝廷に建議し、済州は三邑に再編される。これを受けて邑城を築造し、その中心に地方行政を管轄する官衙を建てた。

新しく国を開けば、仕事をする人材が求められる。そこで、国家理念を教える教育機関を建て人材を養成した。朝鮮は儒教を政治理念として標榜し、それを学問として広げるため中央には成均館最高教育機関を建て、地方には郷校を建てた。済州牧には早くも1392年に郷校ができた

が、朝鮮太祖元年のことで、済州が3邑体制に分かれる前のことだった。

邑城の中にはどういう官衙があったのか

官衙は中央から派遣された守令が居住し、業務を行う空間だ。ただ、単なる事務空間ではない。官衙の形態、建物の配置には当時の政治理念や社会像が盛り込まれている。官衙を中心に文化が形成された理由だ。官衙の構造は地域によって多少の違いもあるが、基本的な枠組みは同じだ。

まず、客舎は王の位牌を祀ったところで、毎月一日と15日に国王への忠誠を誓い、望闕礼を行う。こうして国王は地方の郡・県を精神的に統制する。客舎はまた、王に命令されて来た官吏の宿でもあった。

暗行御史のような中央官吏は客舎に泊っていた。このように客舎は官衙内の他の建物よりも重要なため、紅螭門を前に建て、全ての建物の中で最も北側に置かれた。

東軒は、守令が執務を執っていた空間で、外大門と内大門を過ぎた官衙の内側に置かれ、建物も高くして守令の権威を示した。歴史映画や時代劇の裁判で、罪人がひざまづいている所が、この東軒の庭だ。踏み石の上に下級官吏が立ち、守令は縁側に座って判決を下した。東軒の堂号は地方官の施政方針に則ってつけられる。

郷庁は、地元の両班が地方政治に参加する空間だ。外地から来た守令は地元の事情を知らない場合が多いため、地元の両班や土豪勢力から助けを受けることが多かった。そのため郷庁を第2の権力機関だとし、忒衙とも呼んでいた。郷庁の長を座首といい、地元で影響力を持つ者を選任し、その下に数人の別監

を置いた。別監は守令の諮問、風紀の取締、郷吏の監督、守令任務の補座などを担当した。

ジルチョン

アジョン

イバン

ホバン

イエバン

ビョンバン

ヒョンバン

ゴンバン

秩序は、衙前の執務室だ。衙前は吏房・戸房・礼房・兵房・刑房・工房の6房と雑務を担当する郷吏を指し、地方行政の文書処理から雑用までほとんどの実務を行った。他に、妓生の宿である教坊や罪人を投獄していた牢などがある。

ギセン

ギョバン

モッサ

ジョンイヒョンガム

デジョンヒョンガム

朝鮮時代、済州に派遣された地方官は済州牧使、旌義県監、大静県監だ。派遣された守令の任期は通常5年を原則とするが、済州のような辺境地域の場合はその半分の2年6か月、つまり30か月に調整されたという。そのため、済州に赴任する牧使は家族を同伴せず単身赴任する場合が多かった。

朝鮮時代の国立教育機関、郷校

テジョ

済州牧には朝鮮太祖元年の1392年に済州郷校が設立され、1416年に3邑体制が整備された後は旌義県、大静県にも郷校が設立された。

教生を教える教授官は済州牧には

ギョス

教授(従6品)を、旌義県、大静県

フンド

には訓導(従9品)を派遣した。しかし、朝鮮時代の郡・県がおよそ330

か所にもなり、教授官の充員は困難だった。そこで、正式な官人では

ない教授官を下級官吏資格を持つ生員・進士から選んで充員することもあった。

センウオン

ジンサ

郷校は、孔子などの賢人の位牌を

サダン

祀る祠堂や、学生が勉強する場所で構成される。孔子の位牌を祀

デソンジョン

った祠堂を大成殿という。その両側下

ユヒョン

ドンム

ソム

に儒賢の位牌を祀る東廡・西廡がある。さらに、儒生が勉強する学舎である明倫堂と寮がある。

ミョンリョンダン

郷校で勉強した学生が科挙試験に及第すれば、朝廷の官吏になる。両班はもちろんのこと、庶民にも勉強

ソダン

強の機会が与えられ、身分上昇の契機となった。そのため、科挙試験は難しく厳しかった。また、書堂や

ソウオン

書院が自主的につくられた。本来、地方の儒学者らが聖賢の位牌を祀り、弟子を養成していた私立教育機関だったが、朝鮮中期以降は地方の土豪勢力を中心に強力な私学機関として変貌していった。

しかし、済州には他の地方に比べて儒者が少なかった。食べていくのが精一杯で余力もなく、科挙試験を



済州郷校



大静郷校大成殿

受けるための条件も悪いため、あえて学問をする必要性を感じなかったのだ。済州では牧使たちが初等教育機関である書堂を設立した。朝鮮初期には済州城の南門の中に郷学堂を、明月城の西側に月溪精舎

を、東側には金寧精舎を建て、後期には三泉書堂と旌義書堂、大静書堂を建てて学問を教えた。

賜額書院としては、済州に流され亡くなった沖菴・金淨の魂をなだめる祠堂が最初の書院であり、五賢の位牌を祀った橋林書院と済州の神話上の三乙那を奉る三姓祠があった。

グランドクジョン

武芸を修練した観徳亭で済州の歴史に出会う

スツジョン

1702年(肅宗28)、全島の文武仕官が観徳亭の庭に集まり、弓道大会を開いた。1901年の辛丑聖教乱では、観徳亭の前に民衆の乱の衝突で犠牲になった数多くの遺体が散乱していた。1910年の春には立春グッ祭が行われていた。観徳亭の周辺を埋め尽くした見物人の前で巫女が踊り、豊年を祈願する農楽隊が行列を作った。この後、観徳亭の庭から新作路まで続く街頭には市が立ち、記念式などの行事が行われる場所になる。そして、1947年3月1日、3・1万歳運動の記念式の途中、観徳亭前の済州警察署の望楼から発せられた銃声は、済州現代史の悲劇、済州4・3事件の引金となってしまった。このように観徳亭は、済

州の歴史を黙々と見守ってきた生き証人ともいえる建物だ。

観徳亭は1448年に済州牧使として

シン シュクチョン

赴任した辛淑晴によって建てられ

た。兵士たちを訓練するためだっ

た。観徳という名は、『礼記』の

「射儀編」にある「弓を射ることは徳を積むことだ」という節から取ったものだ。つまり、「体と心を正しく

ベクソン

て徳を積みば功德になり、国と百姓を楽にさせる」という意味だ。楼閣の扁額は安平大君から賜ったもの

だったが、残念ながら今は焼失

イ サンヘ

し、李山海の字に代っている。



観徳亭

観徳亭は設立後、数回にわたって改修を重ねてきたが、1924年、旧日本軍により軒が2尺ほど切り落とされ変形してしまった。1969年に完全に解体して補修したものの、正確に復元できずにいた。その後、2006年に今の形に復元された。正面5間、側面4間の平屋八作屋根の建物で、室内には中国の故事を描いた7点の壁画がある。観徳亭は韓国の宝物第322号に指定された文化財だ。

済州の歴史・文化の中心、済州牧官衙

「ムグンソン古城」、現在は旧都心または元都心と呼ばれ、他の地域に比べて低迷しているところだ。ところが、ここには耽羅時代から主な官衙施設が置かれ、かつては済州の政治・経済・文化の中心地だった。済州邑城を取り囲み、その内部を城内と呼んだが、その中心に済州牧官衙があった。

ヨンヒガク

官衙にはまず、守令が執務を執っていた東軒がある。済州牧東軒の堂号は延曦閣で、「王様の聖徳へ導く」という施政の方針から名付けられた。官衙の建物の中で最も北側にある客舎は王の位牌を祀る所で、牧使として赴任すると、最初にここを訪れ参拝をする。客舎の堂号は地元の旧名を取るしきたりがある。済州では漢拏山を瀛州山と呼んでいたことに因み、瀛州館と名付けられた。

ヨンジュサン

ジョルジュサ パンオサ

済州牧使は行政業務以外に軍事業務も行う節制使と防御使の職位を兼ねていた。そのため、済州牧に

グァンチャルサ

ヨンチョン

は観客使の業務を担当する営庁があった。ここは「王様の徳が百姓に及び福を受ける」という意味で弘化閣と名付けられた。

ホンファガク

マンギョナル

そして、「ソウルに向かって眺める楼閣」という意味の望京楼があり、夜明けと夕方に城門の開閉を知ら

せる鐘が、東軒の外大門である鐘楼にあった。他にも軍官がいた軍官庁やそれぞれの業務を行っていた
グンムチョン
勤務庁、様々な武器や穀物を保管していた倉庫などがあった。

済州牧官衙の全体的な構造は、観徳亭を中心に左側に当たる北側には客舎や東軒などの重要な施設があり、右側に当たる南側には判官に関連する郷庁や秩序などがあった。これらは儒教の位階秩序と風水地理に基づいて建設され、その意味が込められた配置だ。

済州牧官衙は度重なる増改築により原型を失ってしまった。そこで、本来の姿を復元するため、1991年から1998年まで4回の発掘調査を行った。その結果、官衙施設は大きく3度にわたって建築されたことが明らかに
ウヨンダン ギュルリムダン
になり、弘化閣・延曦閣・友蓮堂・橋林堂などの跡地や遺構が確認された。これを受けて1993年3月30日に済州牧官衙址一帯が国家史蹟第380号として指定された。

済州牧官衙は、発掘過程で確認された礎石・基壇石などを基にした事業により、外大門・弘化閣・延曦閣・友蓮堂等が復元され今に至っている。

ジョンイヒョンソン

済州の東南地域を管轄した旌義県城

ソンサンウプ ゴソシリ

ベッソン

本来は城山邑古城里にあったが、位置が東側に寄りすぎており、百姓が官庁を訪問するのに困難が多かった。また、城山の沖に倭寇がたびたび侵入し、官衙の位置には適していないという意見が出され、
セジョン
1423年(世宗5)に現在の場所である城邑里に移転した。



旌義県城

旌義県城は済州牧の判官である
チュ、チリョム

崔致廉によって築造されたというが、わずか5日で完成したという記録がある。3邑の住民が動員されたとはいえ、周囲が2,520尺、高さ13尺の城邑であり、これは驚くべき記録だ。

現在、復元された旌義県城は原型が大きく損なわれている。『耽羅巡歴図』などの記録によると、旌義県城には東門、西門、南門があったが、今は東門の跡地に家が建てられ、復元できず西門と南門だけが残っている。

ヒョンガム

ジョルジェドウィ

旌義県には従6品朝鮮時代の文・武官の官階の県監が任命され、節制都尉の軍職を兼ねていた。県監が業務を行っていた庁舎である東軒は、「王様を崇めるように正しい政事を行う」という意味で日観軒と呼ばれた。現在、
イルグァンホン

残っている建物は、本来の建物が焼失して式衙を建て直したものだが、これもまた間違っ
て復元されるなど、原型を見い出せずにいた。しかし、2011年の台風により日観軒の隣にあったエノキが倒れて建物の一部が破損し、これをきっかけに発掘専門家や関係専門家の考証を経、正確な復元が行われる予定だ。

チウサ デジョンヒャンギョ 秋史を偲ばせる大静郷校

デジョンウブ インソンリ ダンサン

大静郷校は大静邑仁城里簞山の裾に位置する。うら寂しい松の木と調和した姿が印象的だ。最初は、
テジョン ヒョジョン イ・ウォン
1416年(太宗16)に大静県の北城の中に建てられたが、何度も移転し、1653年(孝宗4)に李元鎮牧使によって今の位置に新しく建てられた。

郷校は、孔子をはじめとする多くの聖賢を祀り、地元住民の教育や教化を図る国立教育機関だったため、国の補助で管理された。朝鮮時代は国から土地や奴婢、本などの支給を受け、運営されていた。

ガボ
甲午改革の後、新学制の実施とともに教育の機能を失い、現在は春と秋に釈奠を祀り、毎月一日と15日に焚香している。

境内には南側に講学空間である
ミョンリュンダン

明倫堂が北に向かっており、その北

デソソジョン

側に大成殿に向かう三門があり、こ

の門を通ると南側に向かう大成殿が見える。明倫堂の扁額は1811年

スンジョ

ビョン・ギョソブン

(純祖11)に県監の邊景鵬が書いた

もので、寮である東齋の扁額は、

ギム・ジョンヒ

ここに島流しにされた秋史・金正喜

ウイムンダン

により「疑問堂」と書かれた。この

扁額は現在、済州秋史館に展示されている。

流刑に処され大静県城に來た秋史は、済州の至るところに足跡を残している。大静郷校で学生を教えた

サンバンサン アンドク

り、山房山や安德溪谷へも足を運んだりした。また、この間に「歳寒図」と「秋史体」を完成する。

「歳寒図」の松から郷校の前の松が思い浮かぶのは、このためかもしれない。

デソソジョン

ミョンリュンダン

ドンジェ

ソジェ

シンサンムン

デソソムン

現在、大静郷校には大成殿、明倫堂、東齋・西齋・神三門・大成門などがある。ところが、長い歳

月が経っているうえ、度重なる工事で本来の姿を徐々に失っている。大成殿には5聖、宋朝四賢と韓国18賢の位牌が祀られ、4月と9月に祭祀が行われる。



大静郷校



観徳亭前で行われた4月革命のデモ(1960. 4. 27)

近・現代史

済州人、近代に出会う

19 世紀末の済州島は近代社会へ移行するために動き始めていた。1876年の開港以来、済州は本格的な資本主義の世界システムの影響下に置かれるようになる。日本人漁師が済州島の漁場に入るため海辺の村に姿を現し、カトリックの宣教師は島に入り西欧の宗教や文化を伝えていた。1894年の甲午改革により、済州島の人々が中央に献上していた馬・ミカン・アワビなどの貢ぎ物が廃止され、近代の行政システムや教育制度が

設けらるなど、新しい行政管理システムや新学問が登場した。

開港と開化政策の施行により、済州島は新たな機会を迎えた。出陸禁止令が敷かれる流刑の島という朝鮮王朝の辺境ではなく、資本や文明が国境を越える世界資本主義のシステムに組み込まれていった。

タムナ

「耽羅」という独立国から、高麗時代には地方の一つの郡・県に転落し、以来800年間済州島は高麗と朝鮮の両王朝の地方に変わってしまった。その変化は、朝鮮時代を経て、済州島が中央の強力な執権体制に一層従属されていくプロセスだった。朝鮮後期や大韓帝国末期に多発した一揆は、そのような従属に対する強い抵抗だったといえる。

イ・ジェス

1901年の「李在守の乱」は、済州が近代社会に進入する過程における中央と地方との葛藤、伝統と外来文化との衝突によって起きた民衆の反乱だった。同事件でフランスと日本の軍艦が出動し、済州島をめぐって武力衝突の緊張が高まった。

済州の人々は伝統文化を排斥する外来の宗教や文化に強く抵抗し、しばらくは近代化に対する反発が続いていた。しかし、外部の人々の島への出入りが自由になり、郷吏や庶民階層が成長するにつれ、20世紀の済州社会の主導権は徐々に新しい文化を受け入れる勢力に移っていった。

新しい地域社会の支配エリートたちは、時代の変化に注目し、島外へ留学して近代教育の恩恵をこうむった。全国的な近代教育の普及を受け、義信学校、済州公立普通学校、晨星女学校などの近代学校が次々と設立された。

イシン

シンソソ

開港は交通や産業の変化をもたらし、新しい交通手段を利用して多くの済州島民が新しい仕事を求めて内陸地方や日本などへ出稼ぎに出始めた。1880年代後半から始まった海女たちの内陸地方への出稼ぎは、朝鮮後期の出陸禁止令に縛られていた済州女性が、海洋遊牧民の気質を発揮するユニークな現象だったといえる。

開港によって済州島民は、それ以前には想像もできなかった新しい外部の文明と文化に出会い、済州島の歴史は新たな転機を迎えた。

済州のもう一つの近代、日本統治時代

日本の植民地となった36年間、他民族である日本の支配下で、韓国の歴史は大きく歪められた。この時期、済州の社会は、韓国の他地域と同様に、植民地としての多大な収奪や搾取、民族差別的な弾圧を受け、以前よりも強く隷属させられた。

ドサ

植民地支配体制が構築され、1915年に済州には島制が実施されたが、初代の島司として日本人の

今村軈が赴任した。島司は、済州警察署長を兼ね、行政や警察を一元的に統治する強い実権を持つ。全ての官公署に日本人が配置され、教育機関の校長はもとより教師も日本人で充員された。



済州海女抗日運動記念塔

1913年から始まった土地調査事業は、国・公有地が多かった済州島に大きな影響を及ぼした。かつて牧場土や駅屯土を耕作していた貧農と火田民は、土地調査事業と焼畑耕作禁止により、耕作地が得られず、外地に生活基盤を求めざるを得なかった。済州島民のほとんどが貧窮や飢餓に陥り、その状況から抜け出すために日本などへ渡って、炭鉱や紡織工場の劣悪な条件下で働くしかなかった。特に、1923年に済州島と大阪との間に直航路ができ、済州島民の多くが日本へ渡航した。1920年の夏にはコレラが発生して4か月間も蔓延し、4,134人の島民が死亡するという大惨事もあった。

日本は、1912年から1918年まで島民を強制動員し、島の海岸に一周道路を作る。海岸一周道路は、済州の様々な産物を山地・翰林・城山浦・西帰浦などの港へ容易に輸送し、外

地への搬出を促した。島民の間では新作路と呼ばれていた一周道路の開通により、朝鮮時代から規模の大きかった城邑・洪炉・明月・大静のような村は衰え、城山浦・西帰浦・翰林・慕瑟浦などが中心地になった。日本からの資本の流入により、済州島民の生活がある程度向上したともいえるが、済州島の自主的な発展とは程遠いものだった。

日本統治時代、済州の人々は積極的に抗日運動を行っていた。1918年には早くも、法井寺を中心に中文地域の住民の多くが参加する抗日闘争を展開し、3・1万歳運動以前の韓国初の大衆的な抗日闘争として記録された。1919年の朝天万歳運動以後降、済州島の抗日運動は、社会主義の青年運動家たちが主導していった。青年運動家たちは、1925年に「新人会」を結成し、1930年代半ば、日本の弾圧で地下活動を始めるまで島内運動の主流を成していた。この時期、最も活発だった抵抗運動は海女による闘争だった。海女による抵抗運動は、1931年か

ら1932年まで旧左面・城山面の6か村の海女たちが、官制化した海女組合の横暴に抵抗し、日本人の島司を相手に展開した。同闘争への参加者は延べ1万7千人にのぼり、検挙者だけでも100人以上になる、済州島では最大の抗日運動であり、さらには韓国最大の女性運動・漁民運動だった。しかし、日本の過酷な弾圧により、運動勢力は地下に拠点を移さざるを得なかった。1930年代以降、戦時体制下で、済州島を主要軍事基地として認識した日本は、島全域で軍事施設の拡充を図った。軍事施設の工事には多くの済州島民が動員され、過酷な労働を強いられた。済州島内には旧日本軍が造った巨大な軍事施設があちこちに点在している。多くの済州島民は日本の戦時総動員令に従い、徴兵・徴用・挺身隊などの名目で賦役を課され、戦場に送られた。侵奪や抵抗の歴史で綴られた日本統治時代にも、済州社会は着実に内部の変化を続けていた。人口は急増し、資本主義の影響を受けた多くの済州島民は、大阪の工場で働くために海を渡った。海女は集団で朝鮮半島の南海岸、東海岸、日本沿岸などへ出稼ぎに出た。このように済州の人々は、済州島の中に閉じこもるのではなく、島の外で各自の人生を開拓していった。一方で、済州島内でも、大韓帝国末期以来の新興勢力が、日本と手を結んで資本を蓄積し、新興資本家として成長した。彼らが中心になり、有志勢力が形成された。同勢力は1920年代以降、様々な邑・面の協議会を主導し、朝鮮人に与えられた邑・面長の職位に就いた。彼らは徹底して日本に協力する親日派に転じたものの、他方で、地元の住民の信望を得て島民の側で様々な利権問題も解決した。彼らの子女の中には経済力に支えられ、ソウルや日本へ留学した青年エリートが多かった。その中から社会主義、自由主義、アナキズムなどの西欧理念を受け入れた民族運動家を多数輩出した。

日本統治時代に済州島民は以前とは異なる近代を経験した。異民族による植民地支配を受けながら初めて民族意識を抱き、民族教育や夜学が行われ、その結果、活発な抗日運動が繰り広げられた。また、資本主義の直接的な影響を受け、新たな人生の在り方を島の外で模索し始めた。朝鮮時代には想像も出来なかった島外への活発な進出は、済州にとって非常に大きな意義を持つ。数百年間、島の中に閉じ込められた済州島民にとって、日本統治時代は抑圧と搾取の時代であり、同時に朝鮮半島との単線的な関係に縛られた拘束から抜け出し、自分を見つめ直す機会の時代、つまりもう一つの近代でもあった。

現代史の最大悲劇、済州4・3事件

済 州4・3事件は韓国現代史において、朝鮮戦争の次に犠牲者の多かった悲劇的な事件だ。

1945年の独立後、米軍政在朝鮮アメリカ陸軍司令部軍政当局の政策失敗や社会問題の発生などにより、民心は極めて不安な状況にあった。1947年3月1日、警察の発砲で6人の住民が死亡する事件が起きた。済州島民は官民ゼネストで抵抗し、米軍政は支援警察や右翼の西北青年団のメンバーを済州島に派遣してテロや拷問を行った。

1948年4月3日に南朝鮮労働党の武装隊は、警察や西北青年団の弾圧に対する抵抗と、南側だけの単独選挙・単独政府反対を掲げて武装蜂起し、5月10日の総選挙で済州島の二つの選挙区だけが、投票数が過半数に満たず無効となった。

1948年8月15日に大韓民国政府が成立し、韓国政府は済州に軍を増派し鎮圧を強めた。同年、11月17日に済州島に戒厳令が敷かれ、中山間の村を焦土化する大々的な鎮圧作戦が展開された。その過程で、済州島の全域で武装隊に協力したという理由で多くの住民が集団虐殺された。1950年に朝鮮戦争が勃発すると、予備検束者や内陸地方の刑務所の在監者などが再び犠牲になるなど、済州4・3事件は数年にわたって済州島を根こそぎに揺さぶった。

1954年9月21日、漢拏山の禁足地域が全て解除された。武装隊と討伐隊間の武力衝突や討伐隊の鎮圧により、2万5千～3万人の犠牲者を出した済州4・3事件は、7年7か月で幕を閉じた。

米ソ冷戦状況や朝鮮半島の分断体制の固着化の過程で起きた済州4・3事件は、国家の公権力による集団犠牲として結論づけられた。その後、半世紀を越えて初めて真相説明作業が可能になり、名誉回復を通した和解と共生の解決プロセスをたどってきた。

ブッチョン

北村、ノブンスンイ4・3慰霊聖地

セファリ

1949年1月17日の早朝、村の入口の坂道で二人の軍人が死亡する事件が発生する。細花里に駐屯し

ハムドク

ていた第2連隊3大隊の中隊の一部兵力が、軍の車両に乗って大隊本部のあった咸徳へ向かう途中、武装隊の奇襲を受けた事件だ。済州4・3事件当時の単一事件としては最多の犠牲者を出した事件の発端だった。

事件に対する報復として、午前11時、武装した軍人が村に入って村中に放火し、住民を学校の運動場に集結させた。

証言によると、当時、軍の指揮官が住民を運動場に集めて会議を行っていた。ある将校が、敵を射殺した経験のない軍人がほとんどなので、敵を射殺する経験を積むため、数人ずつ銃殺してはどうかと提案したという。それを受けて、周辺の「ダンパッ」「ノブンスンイ」「テッジルパッ」などへ40～50人ずつ住民を連行して無差別に射撃し、350人余りの命を奪った。住民が畑仕事からの帰り道に休憩した広場だった「ノブンスンイ」が虐殺の現場と化したのだ。400軒余りの家屋も瞬間に焼失してしまった。

翌日、生き残った人々は咸徳里に疎開したが、そこでさらに「アカの家族の洗い出し作戦」に巻き込まれ、再び数十人が犠牲となった。この事件により北村は子孫がとだえた世帯が多く、一時は「無男村」

とも呼ばれた。毎年旧暦の12月18日、北村里では村中の人々が集まって祭祀を行っている。

軍警の弾圧を避け、近くの里山や洞窟に隠れていた多くの住民は、討伐隊の銃に倒れた。ある者は転向すれば殺さないというビラを見て下山したが、残酷な拷問の末に濡衣を着せられてジョントウル飛行場で集団虐殺され、また、ある者は海に投げ込まれ、あるいは本土の刑務所へ送られたりした。



北村ノブンスンイ4・3慰霊聖地の『順伊おばさん』文学記念碑

1993年に村の元老会では、済州

4・3事件の真相解明のために被害調査に着手し、439人の犠牲者や財産の被害状況を調査しており、遺族会では数年前から合同慰霊祭を奉行してきた。

さらに、ノブンスンイに慰霊碑を立て祭壇を設け、罪もなく犠牲になった英霊を慰め、平和の時代の生きた教育空間になるよう記念館を建てた。ノブンスンイ4・3慰霊聖地は敷地2,532㎡、建物面積294㎡で、
ヒョン ギヨン
慰霊碑や映像室、展示館のある4・3記念館、散策路、玄基栄の『順伊おばさん』文学記念碑、休憩所、防邪塔などがある。散策路の途中に見える小さな墓は当時の残酷さを物語っている。

再建と開発、試練と挑戦

1950年に朝鮮戦争が勃発し、大勢の避難民が済州に入った。済州島は数万人の済州4・3事件の被災者や本土からの避難民でひしめいていた。戦争勃発後10か月が経った1951年5月半ばには避難民が15万人余りにのぼり、島民の半分以上を越えるほどだった。避難民と済州島民の間の衝突も頻繁だった。

1950年代の済州島の社会経済は、朝鮮戦争による避難民の流入、1954年の済州4・3事件によって疎開した中山間地帯の住民の元住居地への復帰などにより、混乱や定着が錯綜した。経済は済州4・3事件による被害の復旧事業が中心となり、開発は次の時代の課題となった。

イ スンマン

1960年4月19日の四月革命により李承晩大統領が下野し、韓国社会は民主的な市民社会へ進むことになる。済州島でも4月27日から三日間、大規模な学生や市民によるデモが起き、済州4・3事件以来初めて社会運動が展開された。当時、学生たちは自由党側に不正選挙の責任を取って退陣することを要求した。7月29日の選挙では、政府の樹立以来初めて革新系

の韓国社会党の金星淑(抗日運動家)が自由党出身の玄梧鳳を破り、南済州郡選挙区の議員に当選した。また、済州大学の法科学学生らは、済州4・3事件の真相解明に取り組んでいた。しかし、このような社会的な雰囲気は5・16軍事クーデターによって頓挫してしまう。

1961年の5・16軍事クーデターからおおよそ30年間、軍部政治・軍事文化が20世紀後半の韓国歴史を貫いていく。朴正熙政権は1972年10月の維新により、行政機構や安保機構などを中心に、国家体制や社会の全てを掌握する強力な権威主義の統治を実施した。一方では、近代化

を通じた経済繁栄という最高の目標が設けられ、成長一辺倒の経済政策を推進していった。

朴正熙時代の済州道民は高い与党支持率を示し、それに答えるかのように大統領は済州島の開発を積極的に支援した。1966年に済州を特定地区として指定、1971年には済州道総合開発の10か年計画が立てられ、1973年には済州道特定地域を対象にする観光総合開発計画を立て、本格的な済州道の開発



1970年代に茅葺きの家を取り壊される様子

が推進された。そして、1960年代半ばから本格的に始まったミカン栽培は、当時の済州道民の収入増大に大きく寄与し、これにより、この時期の済州道民の所得は全般的に向上した。この時期から水や電気・通信の普及、道路の整備、航空路の開設といった20世紀の文明の恩恵を本格的に享受し始め、いわゆる「ポリッゴゲ食糧事情の悪い端境期」という言葉は徐々に消えていった。1971年から始まったセマウル運動セマウルとは「新しい村」という意味で、韓国独自の地域開発運動で道路が整備され、茅葺きの屋根が改良されるなどの農村近代化のブームが起きた。セマウル運動の過程で済州島の全ての村は外形を変えたが、それとともに土俗的で伝統的な文化まで破壊されてしまった。

韓国社会は1960～70年代を通じて世界でも類のない短期間での爆発的な産業化、つまり資本主義の発展を経験し、根本的に変わっていった。さらに、新しい市民階層となった中間層の成長により、権威主義の政権に抵抗する民主化運動が活発に起きた。世界的には、1980年代後半の旧ソ連の解体や東ヨーロッパ諸国の脱社会主義が冷戦構造の崩壊をもたらし、韓国社会にはグローバル化・開放化の波が押し寄せ、様々な文化的な価値観が流行するようになった。

1990年代に復活した民選自治の施行により、住民が参加する自治の機会が一層拡大し、市民団体の活動が注目を集めるようになった。民選自治は地方の自主性や競争力を高めたが、他方で、短期的なばらまき行政に陥りやすいという弊害もあった。

90年代の濟州島の経済は、それ以前とは異なり、明らかに危機に陥っていた。開放化政策の標榜により、濟州島の経済を支えてきたミカン産業が危機に直面し、濟州道開発特別法の制定の過程で形成された「持続可能な道民中心の開発」の機運は危機を迎えていた。

90年代後半の通貨危機により、濟州島の発展政策は根本的な見直しを強いられた。現在、その政策的な代案である国際自由都市のプランが進められている。環境保全と開発の対立、開放と伝統保持の対立など、20世紀末の濟州社会は試練と挑戦に直面していた。

未来に向けた道のり

20世紀の濟州歴史は、辺境の寂しい島だった濟州が孤立から開放へ、外からの圧力から自主的な共同体へと前進するプロセスだった。開放は濟州の人々に大きな試練をもたらした。「李在守の乱」を通じて外来文化の影響が波及し、漁場の侵奪に端を発した日本の濟州進出は植民地支配に転落し、36年にわたり苦難を強いられた。日本の強圧的な支配の後に訪れた独立後の空間に、今度は米・ソ冷戦構造の犠牲といえる濟州4・3事件が発生した。さらに、1960年代以後は、資本の流入による本格的な開発で経済的な福利を享受したものの、長い間公有地だった中山間地帯の土地が没収され、環境破壊は必至となった。ミカンも韓国市場を独占して大きな収益を上げてきたが、今後、外国商品との競争は避けられない。だからといって、開放が濟州の人々を縛り付けてきたわけではない。島外から流入する資本や技術、人が経済的な福利をもたらし、外部の文化を濟州に適した形で受け入れることで、濟州文化が豊かになった。さらに、濟州の人々は本土や日本へ進出し、各地で活動しながら濟州文化を外部に知らせ、愛郷心を育んでいる。

このように濟州の近・現代史は、濟州島を取り巻く外部の人間・環境と絶え間なく関わり、抵抗または順応してきた過程だった。この100年間で、濟州社会が世界と出会い始めたとすれば、新しい100年はこの出会いが画期的に前進する時間になるだろう。また、20世紀の濟州島が外部との出会いを避けてきたとすれば、新しい21世紀は世界とともに、より積極的に知識・情報・文化を分かち合う時代になるだろう。



秋史流配址

濟州の歴史の波

流刑の島として600年

遠 悪島は濟州のもう一つの名だ。ソウルから最も遠く離れ、海で遮られて孤立していたの
で、濟州島は、早くから遠くて険しい島という意味の「遠悪島」ウォンアクトと呼ばれていた。その
ため、高麗時代から朝鮮時代に至るまで数百人の流人がこの島に送られた。
濟州島に島流しになった人物は単なる犯罪者ではなかった。政治的信念のために、また、本人
が考える正義のために、最高権力者や主流政治集団から排斥され、隔離された人々だった。
言い換えれば、一種の政治犯または、良心犯だといえる。彼らは家族から、また志を同じくする
学問的同志から隔離され、慣れない土地で一人暮らしを強いられた。流罪、すなわち島流しと
いう刑罰制度のためだった。

濟州島を流刑の島とした最初の国は、韓国でなくモンゴル族の国、元だった。高麗末、濟州に入り、対蒙抗争を展開したサンビョルチョ
三別抄が鎮圧された1273年、濟州を直屬領とした元は、他国の王族や勢力を持つ大臣など、モンゴルに置くには厄介な人物を濟州島へ島流しにした。

アモック
1317年の魏王阿木哥がその最初だった。その後、1340年に索蘭奚大王を流刑に処すまで170人余りが濟州に送られた。



秋史流配址の囲籬安置

韓国で初めて濟州に流人を送ったのは、高麗28代忠恵王の1343年からだ。靑仙を始め
ジョ、ドゥック、ギム、ヨン、ソッキ
趙得球、金鏞、釈器などが濟州島に流された。しかし、高麗時代には数多くの人が送られたわけではなく、期間も比較的短かった。

朝鮮時代の濟州は島流しの一審地

テジョン
朝鮮時代の濟州への流刑の歴史は、朝鮮王朝3代の太宗の時から始まる。
テジョ シンドク ガン ガン ヨン ハムドクリ
1402年(太宗2)に太祖の王妃、信徳王后康氏の親戚である康永が濟州島咸德里に流され、
ウォンギョン ミン ムグ ミン ムジル
1409年には太宗の王妃、遠景王后の二人の弟の閔無咎と閔無疾兄弟が後を継いだ。1637
グァンヘグン イ スンファン
年には王位を追われた光海君が濟州に送られたこともあった。その後、1911年の李承薫の島流
ソヒョン
しまで500年間、200人余りの主要人物が濟州に入った。1647年に昭顯世子の三人の息子が
イ ソッキョン
濟州に流され、三男である四才の李石堅は最年少の流人になった。一方、1721年に島流しに
シン イム
された申鉦は84才で最高齡の流人だった。

王族から当代の著名人や文化芸術家、そして宗教家に至るまで、中央政界の変動により、遠くて陰しい濟州へ追い遣られた。彼らは来る途中で、あるいは到着後、詩文を作って自分の境遇を詠んだ。流人は漢拏山や濟州の海を眺めて慰めを受け、自分の境遇を嘆いてその志や

理想を吐露していた。

スリョン

流人が済州に送られた場合、済州牧使などの守令が誰かによって彼らの待遇は千差万別だった。彼らは中央政界で活動した主要人物だったので政敵に出会うこともあり、親しい間柄の場合も多かった。そのため、流刑にされた慣れない土地で一層の苦しみを味わうこともあったが、良い待遇を受けてゆくり過ごす場合も少なくなかった。

ソンジョ

インモク

ノ

一例として、宣祖の後妻である仁穆王後の母親だった盧氏は、光海君の時代だった1618年に

ヤン ホ

済州に流され、当時の牧使だった梁護の虐待を受けて厳しい生活を強いられた。ところが、

インジョ

1623年の仁祖反正で光海君が廃位すると、盧氏夫人はソウルに戻って名誉回復を遂げ、

ヤン ホ

梁護牧使は斬刑に処された。

朝鮮時代に済州に流された人物のほとんどは済州の三邑に分かれて謫居したが、彼らの謫所は守令の監視や統制が可能なところに用意された。囲籬安置のように謫所の垣根をイバラの木で取り囲い、外出を厳しく統制した所もあった。

済州の三邑でも、とくに大静県に謫居した流人が多かった。それは、三邑の中でも同地域が最も陰しい所だったからだ。この地域に來た流人は、ほとんどが節義を重んじ、深い学問を成した学者だった。彼らの中には、常に読書をしながら学問探求に没頭し、進んで地域の後学の養成に貢献した人も少なくなかった。そのため、古くから大静では道義や名分を受け継いだ人が多く輩出された。

流人と済州文化

流人は済州の人文環境に大きな影響を及ぼした。済州島は高麗後期から流人が入り始め、朝鮮時代には「流配一番地」と呼ばれるほどだった。島流しは一度命令が下されれば、政権が変わったり、思いがけない政変が起きない限り終身刑だった。慣れない土地で、自分の生活基盤をすべて失ったまま生きていくのは大変な苦痛だった。そのような絶望の中で現実逃避の思考も生まれた。しかし、多数の流人はそれを克服して現実を受け入れ、当地に適應する時間を送った。読書や詩作活動などで自分だけの時間を過ごすこともあれば、余った時間を後学の養成や済州島民の教育に投じていた。

済州島民も、流人の厳しい暮らしを助けていた。土着民から習得する食べ物、気候や風土、植生などの周辺環境に関する情報は、慣れない土地で生きていく流人にとって大きな力となった。済州島民にとっても彼らから多くのことを学び取る契機となった。中央から遠く離れた絶海の孤島で、流人から当代の深い知識や多様な文化を吸収し、済州社会の知的文化のレベルを引き上げることができた。流人と済州島民のこのような関係は、互いにシナジー効果をもたらし、済州の人文環境のレベルを上げた。

済州に流された人物に出会う

グァンヘグン 光海君

光海君は、宣祖の妾である公賓・金氏の実子で、文禄の役があった1592年に跡継ぎとして冊封された。

1602年、宣祖の後妻になった仁穆王后が1606年に永昌大君を産む。1607年に宣祖が突然死亡すると光海君は1608年、朝鮮15代王に即位した。その後、仁穆大妃と永昌大君は王権を脅かす勢力と見なされた。

1613年(光海君5)、徐羊甲など7人の庶子が永昌大君を擁立しようと謀逆を謀ったという、いわゆる「7庶の獄」が起きる。この事件で永昌大君は庶人に降格し、江華島に流された。

翌年の春、江華府使だった鄭沆は謫所を燃やして永昌大君を殺し、光海君の支持勢力は仁穆大妃まで廃位させた。光海君は母を廃位させ、弟を殺したという、いわゆる「廃母殺弟」の弱みを握られる。そして、これは儒教倫理を損ねた君主の駆逐という名分にされ、1623年に在野の西人勢力が仁祖反正を起こすことになる。

王位を追われた光海君は初めは江華島に流され、その後15年間、数回にわたって謫所を転々とし、遂に1637年に済州へ送られた。

当時の済州牧使だった李時昉は、仁祖反正の功臣であり、光海君に厳しく対することもできた。しかし、李時昉牧使は光海君を虐待するどころか手厚く待遇した。光海君は李時昉牧師の助けを受けながら済州で過ごし、1641年に67才で病死した。

光海君が死亡すると仁祖は3日間朝廷を停止し、素饌で弔意を表わしたという。そして、礼曹参議の崔有後を送り、護喪を受け持たせた。光海君は京畿道楊州に埋葬された。

ソヒョン 昭顯世子の三人の息子

昭顯世子は仁祖の長男だった。慶長の役(1636)で、弟である鳳林大君とともに清国に人質として捕えられ9年間の人質生活の末、1645年2月に帰国した。彼は、清国で知り合ったドイツ人神父のアダム・シャル(Schall, J. A.)から受け取った天文、数学、カトリック書籍および輿地球、マリア像などを朝鮮に持ち帰った。しかし、朝鮮朝廷では慶長の役の屈辱を晴らすための北伐論が主流を成しており、昭顯世子の行動は否定的に捉えられた。そればかりか、世子一行が北京から持ち帰った西洋文物や書籍に対し、仁祖は大変憤った。予想もしなかった父親王との葛藤により、同年4月に病床に伏した昭顯世子は4日目に突然亡くなった。

1646年に仁祖は、昭顯世子の嬪であった姜氏が謀逆を謀ったとして毒薬を飲ませ、翌年には自分の孫である昭顯世子の息子3人を済州に島流しにした。この時、長男の石鉄は12才、石麟は8才、末子の

ソッキョン

石堅は4才だった。島流しから1年後、長男の石鉄が風土病で亡くなり、二か月後に次男の石麟も病死した。その後、末子の石堅は江華・喬桐などに移され、10年後の1656年(孝宗7)に島流しが解かれて帰京したものの、1665年(玄宗6)に22才の若さで病死してしまう。

ギョドン

ヒョソン

ヒョソソ

ギョソアングン

イ ホン イ ファン

昭顯世子の三人の息子の悲劇はさらに続いた。末子の石堅(慶安君)には李焜と李焜という二人の息子がいた。二人も1679年(肅宗5)に10才を越えたばかりで済州に送られた。江華島の築城将のイ・ウから送られた無名の投書に、昭顯世子の孫を先頭にし、謀逆を企てる勢力があると書かれていたためだ。二人は1684年に赦免令が出され、帰京した。このように済州は、昭顯世子の子供と孫の2代にわたる流刑の地になった。

スジジョン

チュンナム ギム ジョン

冲菴・金淨

ホンムングァン

1486年(成宗17)に生まれた冲菴・金淨は、1507年に科举(試験制度)に首席で及第し、弘文館・副提学、大司憲などを経て1519年(中宗14)に34才で刑曹判書に任命された。彼は趙光祖とともに士林派の代表的な人物で、王道政治の実現に向けた改革政治を行った。代表的な政策は、賢良科の実施、迷信打破、郷約の施行などだった。

プジェハク

デサホン

ジュンボン

ジョ グァンフ

しかし、1519年に勲旧勢力の反発で己卯士禍が起き、趙光祖は毒薬を飲ませられ、金淨は忠清道錦山に幽閉される。錦山へ向かう途中、病床の老母に立ち寄って見舞いをしたらしい。それが問題になって1520年にソウルへ強制連行され、鞫問を受けて今度は済州島に流された。済州での生活が1年余り過ぎた頃、彼の配所離脱問題が再び議論され、結局、流刑の地であった済州で毒薬を飲ませられて亡くなった。

グムサン



冲菴・金淨の謫廬碑

金淨は島流しの間に『済州風土録』を執筆したが、この本は16世紀前期の済州の詳しい実情を伝える歴史地理書であり、非常に貴重な資料とされている。

月日は流れて1578年(先祖11)、済州判官の趙仁後が金淨を悼むため

ジョ インフ

チュンナムサ

に冲庵祠を建てた。その後、冲庵祠は1682年(肅宗8)、金淨の他に宋麟寿、金尚憲、鄭蘊をさらに迎

ソン インス ギム サンホン ジョン オン

ギョルリムソウォン

えて橋林書院へと昇格し、1695年

ソ^{ソン} ショ^リル
には宋時烈を奉享し、五賢を祀るようになった。しかし、橋林書院はゴ^ンフン ソ^ン デウ^ンゲン
1871年(高宗8)、興宣大院君の書院撤廃で取り壊された。

ギ^ム ヒ^ジョン
1892年、済州儒生の金義正が中心となり、橋林書院の跡地に五賢の志を賛える俎豆石を立てて祭壇を築いた。これが済州道記念物第1号に指定された五賢壇だ。今でも境内には五賢の位牌を象徴する高さ43～45cm、幅21～23cm、厚さ14～16cmの俎豆石がそれぞれ33～35cmおきに並んでいる。



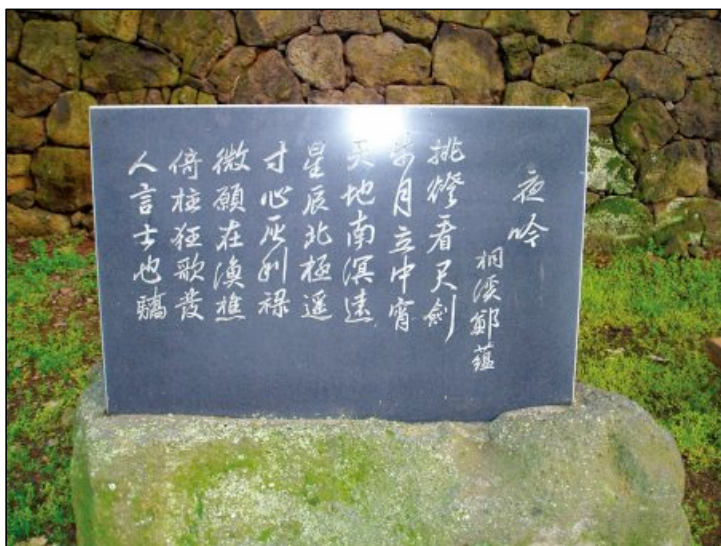
五賢壇の俎豆石

チ^ョルソ^ン ホ^ン キ^ョンソ^ブ
俎豆石のすぐ右側の岩壁には、1856年(哲宗7)、判官洪敬燮の時に立てられた「曾朱壁立」の磨崖銘がある。これは「曾子と朱子が壁のように立っている」という意味で、孔子儒学の正統を引き継ぐ弟子(曾子)と、新儒学である性理学の完成者(朱子)を崇めるという意味だ。この筆跡は宋時烈のもので、ソ^{ソン} ショ^リル
ソ^ンギ^ョング^ンァン
ウルの成均館近隣にも刻まれている。恐らく洪敬燮が成均館近隣の宋時烈の字を拓本し、これを済州の橋林書院内に刻んだと見られる。

ドン^ゲ ジョ^ン オン 桐溪・鄭蘊

1569年(宣祖2)に生まれ、1610年(光海君2)に文科に及第した桐溪・鄭蘊は司諫院の正言を歴任した。

鄭蘊は、1614年に永昌大君が江華府使だった鄭沆によって殺害されると、激しく上疏臣下が自分の考えを書面で王に伝える制度し、鄭沆の処罰と、当時騒がれていた廃母論の不当さを主張した。これに激怒した光海君



鄭蘊の詩碑「夜吟」

が鞠問を命じ、さらに済州島へ島流しにした。

鄭蘊は、仁祖反正(1623)で島流しが解かれるまでの10年間、済州で読書生活に一貫するなど学問を怠らなかった。鄭蘊は済州に来る時、多くの本を持参した。そのため、当時の大静県監が謫所に二間の書室を作るほどだった。鄭蘊の著書を集めた『桐溪集』の「桐溪先生文集年譜」付録には当時の状況が次のように伝えられている。

県監が先生のために二間の書室を造ったが、書室のそばの西側垣根の前の橘の森と向き合っていた。先生は毎日、ここに住まい、数百冊の經史子集を棚の上にのせて10年間、繰り返して読んでいた。…夜が更けると床につき、明け方には服を整えて端正に座り、読んで覚えることを休まなかった。

1682年(肅宗8)、済州牧に橘林書院が建てられると、鄭蘊を配享して「五賢」の一人として迎えた。

イ ウォンジョ

1842年(憲宗8)には済州牧使だった李源祚が当時、大静に島流しにされた秋史・金正喜の建議を受

ソンジュクサ

け、鄭蘊の流刑地に「桐溪鄭先生遺墟碑」を立てた。翌年には祠堂を建てて松竹祠と名付け、鄭蘊を配享した。松竹祠は後日、松竹書院へと昇格したもの、1871年に取り壊されて今はない。

ウアム ソン ショル 尤庵・宋時烈

ギム ジャンセン

1607年に生まれた尤庵・宋時烈は、金長生を師に性理学と礼学を学び、27才で科挙に首席で及第し、官職に就いた。

1636年、慶長の役で王が恥辱を受けると、10年余りの間、田舎で学問だけに専念した。1649年に孝

宗が即位し、斥和派や在野学者などを大勢起用し、宋時烈も官職に就くが、1659年に玄宗が即位した後は職を辞し、在野に身を引いた。肅宗の時代である1689年、

ジャン ヒビン

張禧嬪の息子(景宗)を世子に冊封することに反対する上疏を上げ、済州へ島流しにされたが、島流しから3か月後、再びソウルに呼ばれ、

ジョンウプ

帰京の途中、井邑で毒薬を飲まされて亡くなった。

宋時烈の学問は、全的に朱子の学説を継承し、一生涯『朱子大



宋時烈の詩碑「海中有感」

全』と『朱子語類』を研究して関連著書を多く残した。1787年(正朝11)、彼の文章をすべて集めた『宋子大全』が刊行された。宋時烈が慕った朱子に肖り、文人らが宋時烈を崇めるという意味で名付けたものだ。

ユン ゲドウク

宋時烈が済州に流されたのは83才の時、済州城内の尹継得の家で100日余りを過ごただけだった。しかし、当時、中央政界を主導していた老論の領袖である宋時烈が流刑に処され、済州の儒者は大きな衝撃を受けた。1694年に死後の名誉回復を遂げ、済州儒者の金聖雨の上疏により、それまで四人の先賢を奉っていた橋林書院に配享された。

キム・ソンウ

ジャン インシク

1850年(哲宗1)には、済州牧使の張寅植が「橋林書院廟庭碑記」を作って碑を立て、宋時烈を次のように讃えた。

尤庵・宋先生は…かつて王室を崇めて蛮夷を追い払うことを自らの責務としたが、これは朱子の方法だった。ゆえに、かつて「朱子は孔子以来最高の人物だ」といった。これに対し私は、「尤庵先生は朱子以来最高の人物だ」と言いたい。…我が尤庵・宋時烈先生は、栗谷・李珥と沙溪・金長生という二人の先生の正統継承者だ。…先輩たちがいわゆる、「尤庵先生は我が朝鮮の儒学を集大成した」という言葉は、真に正確な論評だ。

ユルゴク

サゲ

チュサ・ム・ジョンヒ 秋史・金正喜

イエサン

朝鮮後期の文臣であり、書画家、金石学者として名高い秋史・金正喜は、忠南礼山で1786年(正祖10)に生まれた。かつて北学派の第

パク ジェガ

一人者である朴齊家の目にとり、彼の弟子になった。1819年(純祖19)に文科に及第して官職生活を始めたが、1830年(純祖30)に父親の金魯敬が、尹商度の獄死を陰で操ったという疑惑で古今島に流され、金正喜も官職から退いた。その後、父親の島流しが解かれ、1836年に兵曹参判、成均館・大司成などを勤めた。しかし、1840年(憲宗6)に尹商度の獄死が再論され、済州島の大静

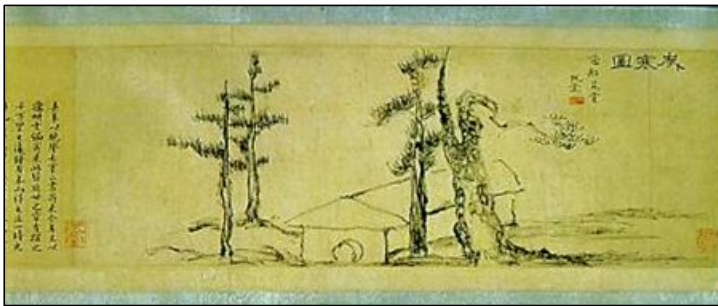
コグムド



秋史の謫廬遺墟碑

県に流された。金正喜は、1848年までの9年間でここで過ごした。謫居は、最初は大静県の校吏
ソン ゲスン ガン ドスン
宋啓純の家だったが、後ほど今の秋史の謫居が設けられている姜道純の家に移った。

金正喜は24才の時、中国の燕京に留学し、当代有名だった儒学者の阮元、翁方綱、曹江などと交遊し、彼らから金石文の鑑識法と書道史および、書法に関する全般的な教えを受けた。特に、翁方綱の書体を習ってその根源を遡り、趙孟頫、蘇東坡、顔真卿などの書体も習得した。さらに遡って漢・魏時代の様々な隷書体に書道の根本があることを見抜き、これを習うのに心血を注いだ。これらすべての書体
チュサチエ
の長所に基づいて独創的な道を創り出したのが、まさに奥ゆかしい秋史体なのだ。



「歳寒図」

秋史体は済州島での流刑期間に完成したが、これには一定の法式にこだわらない金正喜ならではの気品が
ヨンアム バク ジウオン
うかがえる。燕巖・朴趾源の孫で秋
バク ギュス
史と同時代を生きた朴珪寿(1807～1876)は『朴珪寿全集』の「ユ・ヨソンが所蔵した秋史遺墨に付して」で、秋史体の形成と変遷過程について次のように伝えている。

秋史の書体は、幼いころから老いるまでその書法が何回も変わった。幼いころは、董其昌だけに関心を持ち、燕京から帰った後は翁方綱に習って、熱心に彼の字を身につけた。(そのため、この頃の秋史の字は)肥沃過ぎて、画が厚く骨気が少ないという短所があった。その後は蘇東坡と米芾に習って李邕に変わり、さらに力強くて新鮮になり、…いよいよ欧陽詢の神髄を得た。晩年に(済州流罪)海を渡り、戻った後は、拘ってまねる傾向が見えなくなり、多くの大家の長所を集めて自ら一法を成し遂げた。神が降りたようで、氣を得たようで、海の潮が押し寄せるようだった。

秋史が残した作品の中で最も有名なのは、国宝第180号に指定された「歳寒図」だ。歳寒図は1844年、秋史の年齢59才、済州に送られて5年が過ぎた時に制作された。この水墨画は訳官である彼の弟子
ウソン イ サンゾク
子藕船・李尚迪に画いて与えたものだ。李尚迪は、師である秋史のために1843年に桂馥の『晚学集』と惲敬の『大雲山房文藁』、翌年には賀長齡の『皇朝経世文編』を燕京で求め、直接済州に持ち帰り、贈った。李尚迪のこのような誠意に秋史は感激し、彼の変わらない師弟の情に感謝する意味で、「歳寒図」を画いて跋文を書いて渡した。跋文は次のとおりだ。

世の中は流れる水のように、ひたすら権力と利益だけを求め、願うのが常だが、あなたは苦勞をやっと手に入れたこの本を、権勢家に寄贈せず、海の外にいる憔悴でみすばらしい私に贈ってくれた。…孔子が「歳寒くして然る後に松柏の凋むに後るを知るなり(歳寒然後知松柏之後凋)」とし

だが、あなたと私の関係は、昔も流人になった今も変わることがない。…ああ、一人うら寂しいことよ

李尚迪は、金正喜から跋文の付いたこの水墨画を贈られ、とても喜んだ。同年10月、清国に行く冬至使の李晟応について燕京に「歳寒図」を持って行った。翌年の1845年1月、李尚迪は清国の友人の呉賛の宴会に参加したが、この時参加した潘曾瑋、章岳鎮、張曜孫など清国の儒学者16人が秋史の「歳寒図」を見てそれぞれ詩文を付けた。これが歳寒図についている「清儒十六家」の題讃だ。

チウサ キム、ジョンヒ

秋史流配址と済州秋史館

西帰浦市の大静邑城東門跡の中に位置する秋史流配址は、秋史・金正喜が流刑生活をした所だ。金正喜はここで秋史体を完成し、「阮堂歳寒図」をはじめとする多くの書画を描き、済州地方の儒者に学問と書道を教えていた。

秋史流配址には、秋史が流刑生活をした4軒の茅葺きの家がきれいに整えられ、2010年5月、秋史が島流しの間に済州で成し遂げた業績を記念して「済州秋史館」が開館した。秋史記念ホールと3か所の展示室には秋史の詩書画など作品100点余りが展示されている。

ジョン ナンジュ

丁蘭珠・マリア

ファン サヨン

ジョン ヤクギョン

ジョン ヤクジョン

ジョン ヤクボン

ジョン ヤクギョン

丁蘭珠は黄嗣永の夫人であり、丁若鉉の娘であり、さらに丁若銓、丁若鍾、丁若鏞の姪だ。

丁蘭珠は、1801年(純祖1)に「黄嗣永白書事件」にかかわって済州に送られた。そして37年間、大静県の官婢で流刑生活を送り、亡くなったが、ソウルのおばあさんという別名で村の人々に讃えられた。

夫の黄嗣永は、1801年に辛酉迫害が起きると忠清道提川のベロンに身を隠した。そこで、辛酉迫害で打撃を受けた朝鮮教会の惨状と教会再建策を北京主教に訴える長文の手紙を書いた。これが「黄嗣永白書」で、長さ62cm、幅38cmの白い絹に黒い墨で一行に110字ずつ121行、合わせて1万3千字余りがびっしりと書き込まれている。これを



丁蘭珠の墓域

1801年10月に出発する北京冬至使一行に託して密かに送ろうとしたが、事前に発覚して逮捕された。黄嗣ゴジエド永はソウルへ強制連行された後、処刑され、母は巨済島、妻の丁蘭珠は済州島大静県、息子は湫子島チュジャドへそれぞれ島流しにされた。

「黄嗣永白書」はその後約100年間、義禁府に保管されてきたが、1895年に朝鮮教区主教だったミューテル(Mutel)に渡された。そして1925年7月5日、ローマで朝鮮殉教福者79位の列福式が挙行されたが、その時法王に伝えられ、今はローマ法王庁に保管されている。
丁蘭珠は済州に流された最初のカトリック教会信者だ。1994年にカトリック済州教区が丁蘭珠の墓を見つけ、カトリック大静聖地として聖域化した。

ハンジュク シン イム 寒竹・申鉦

1639年(仁祖17)に生まれた寒竹・申鉦は申命圭の息子だ。申鉦は、1680年(肅宗6)に庚申換局で西人が執権すると、南人への弾劾で済州に島流しにされた父親の悔恨を訴えて放免させた。
1722年(景宗2)に辛壬士禍が起きると、少論(西人の分派)を批判し、世弟の弟である延祢君(英祖)を保護する上疏を上げ、84才の高齢で済州島大静県柑山里に圜籬安置された。こうして、済州は、申命圭・申鉦の親子2代にわたる流刑地になった。申命圭は1674年に大静県・猊来村に島流しにされたが、ここで後学の養成に相当な心血を注いだ。彼に修学した弟子の呉廷賓は旌義県の出身で、ソウルへ留学して文科に及第した。それ以前は旌義県出身の及第者がいなかったため、村の人々が彼を誇らしく思ったという。

ソジェ イム ジンハ 西齋・任徵夏

西齋・任徵夏は1687年(肅宗13)に生まれた。1725年(英祖1)に英祖の蕩平策党派間の勢力均衡を図る不偏不党の政策に反対する上疏を上げて王の怒りを買ひ、平安道順安に幽閉された。1727年に済州島大静県に移され、圜籬安置された。
済州に流されて2年後、彼は謀逆の罪で再びソウルへ呼ばれ、鞫問を受けたが、最後まで王の覚醒を促しながら抵抗し、獄死した。
任徵夏はかつて済州牧使を勤めた任弘望の孫であり、島流しの間も人々から尊敬と待遇を受けた。任弘望は1681年(肅宗6)8月から1682年12月まで済州牧使を勤めたが、在任中済州島民の賦役を公平にし、無名税を廃止して称賛を受けた。

サンスホン グォン ジンウァン
山水軒・権震応

1711年(肅宗37)に生まれた山水軒・権震応は、宋時烈ソン ショルの弟子だった韓元震ハン ウォンに学んだ。1771年(英祖47)に英祖の蕩平策に反対する上疏を上げ、これによる弾劾を受けて大静県倉川里チャンチョンリに流された。倉川では姜弼発ガン ビルバルの家に留まり、その家を「滄洲精舎チャンジュジョンサ」と名付けて済州の儒者を教えた。滄洲は朱子の雅号であると同時に、彼が晩年に建て、儒学の聖賢を迎えて祭礼を行った建物の名前だ。ここには朱子の精神を継承しようとする彼の志が盛り込まれている。宋時烈が済州にいる間に留まった家屋を見て回り、地方の儒林に遺墟碑を立てさせ、碑文を書いた。その碑が「尤庵・宋先生遺墟碑」であり、今は済州市五賢壇に残っている。

ジョ ジョンチョル ギム ユンシク
趙貞哲と金允植

趙貞喆は1777年の正祖の時、王弑逆の陰謀にかかわって26才で済州に流され、1805年までの30年余りをここで過ごした。1781年に済州牧使として赴任してきた少論ギム シグの金著耆と、老論の趙貞喆家とは仇敵だった。趙貞喆を殺す名分を探していた牧使は、趙貞喆の恋人である洪允愛ホン ユンエ(洪娘)を捉えて拷問を加えて獄死させ、この事件で金著耆は罷免された。その後、趙貞喆は島流しが解かれ、官職に登用されたが、1811年に自分が島流しにされた済州に牧使として赴任し、洪允愛の怨霊をなだめて碑石を立てた。金允植は開化期の穩健開化派であり、外務大臣などを歴任したが、1897年、「閔妃殺害陰謀」を傍観したという理由で済州に流された。済州に着くと同時に牢に閉じ込められるなど、当時の牧使だった李秉輝イ ビョンヒの迫害を受けた。しかし、1898年朴用元パク ユンウォンが牧使として赴任し、待遇が変わった。金允植は牧使の手厚い待遇を受け、自由に行動しただけでなく、済州で優秀な文人を集めてたびたび詩会を開くなど、文学活動を主導した。



濟州歴史の中の香り

イム ジェ

朝鮮の天才詩人、林悌の濟州遊覽

ベクホ

イム ジン

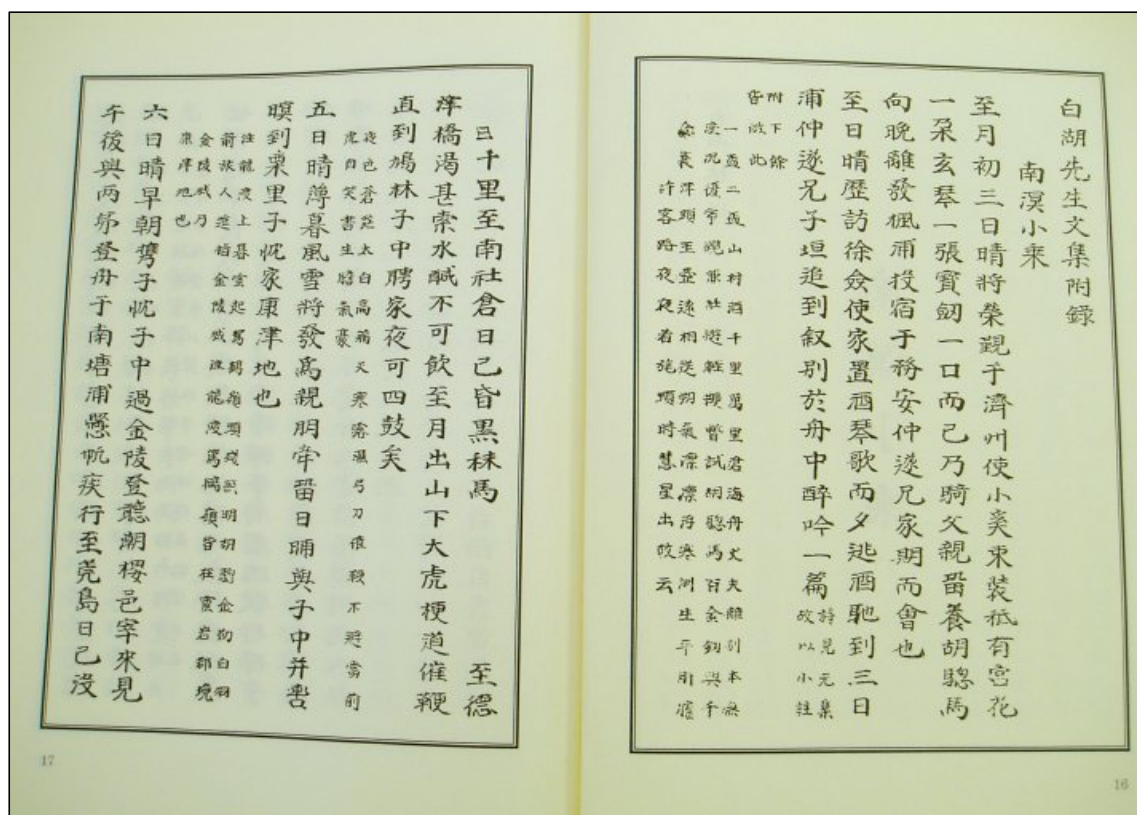
白湖・林悌は1549年(明宗4)に林晋の5男3女の長男として生まれ、39才の若さで亡くなった天才詩人だ。1577年(宣祖10)に文科に及第した後、同年11月3日、濟州牧使だった父親に会

ナジュ

いに故郷羅州を出発して濟州へ向かった。当時、29才だった林悌は1578年3月3日までの4か

ナンミョンソスン

月間、濟州を旅しながら日記体で著書を残したが、それを『南溟小乗』と名づけた。



『南溪小乗』

1577年11月9日に済州に到着した林悌は、父親に会ってから10日間、済州城内の名所古跡を見回った。そして、11月22日から27日まで6日間にわたって済州を遊覧したが、海岸線に沿って一周する旅程だった。さらに、翌年2月10日から16日まで7日間、済州の激しい風が吹く冬の悪天候にも屈せず、漢拏山に登った。済州一周と漢拏山登頂を成し遂げた林悌は、2月晦日ビョルドボに別刀浦から済州を離れ3月3日に故郷に帰った。4か月にわたる林悌の旅が終わったのだ。

済州海岸を一周する

林悌の済州一周は、あらかじめ計画して進めたわけではなかった。父親について済州城内を見回るうちに、突然、歩き回って見物したいと思い、急いで支度をして旅立ったのだった。林悌が済州城を中心に東側から始め、西側に戻ってきた6日間の旅程は次のとおりだ。

- ・11月22日：済州城東門出発。 朝天観→金寧浦→別防城(1泊)

- ・ 11月23日：城山島・牛島探査、旌義県(1泊)
- ・ 11月24日：旌義県監と余興、西帰防護所(1泊)。以上、済州東側海岸地域の遊覧で3日経過。残りの3日間は済州西側海岸地域の遊覧日程
- ・ 11月25日：現在の西帰浦と大静一带を見回る旅程。白湖の済州紀行中最も慌ただしい日程消化。天地淵滝→高監司の家の跡地→天帝淵滝→山房窟寺→大静県(1泊)
- ・ 11月26日：松岳山→財岩(翰林邑・挾才窟)→明月防護所(1泊)
- ・ 11月27日：明月防護所→涯月防護所→済州市西門到着

このルートを分かりやすく現在の地名で表わせば、ドンムン ジョチョン ギムニョン グジャ ハド
 済州市東門→朝天→金寧→旧左(下道)→
ソンサン スサン ウド ソンウプ ホンノチョン チョンジョン ヨンブンドン
 城山(水山)→牛島→城邑(旌義県)→西帰浦(洪炉川)→天地淵滝→西帰浦(竜興洞)→西
ガンジヨンドン チョンジエヨン アンドク チャンチョン サゲ ボソン サンモ
 帰浦(江汀洞)→天帝淵滝→安德(倉川)→安德(沙溪)→大静(保城、大静県)→大静(上幕)
ハンリム サンミョン ヒョッジェ ミョンウォル エウォル ウェド ソムン
 →翰林(上明)→翰林(挾才)→翰林(明月)→涯月→済州市(外都)→済州市西門になる。



牛島

この遊覧中、林悌は城山日出峯と牛島を探查し、その景観に感嘆する名文を残した。特に、悪天候にも関わらず牛島に入って海岸洞窟まで見回っており、探景を好む彼の性格が汲み取れる。林悌が城山日出峰と牛島を見回り、感激して書いた文が印象的だ。

城山島に到着した。それはあたかも一輪の青い蓮が波間から浮き上がったようだ。上部は石壁が城郭のように取り囲み、その内側(噴火口)は広く平らで草木が育っていた。外側の下の部分の曲がった岩は奇怪だ。帆柱のようでもあり、堅穴のようでもあり、日傘をさしたようでもあり、獣のようでもあり、あらゆる形状をすべて記録することはできない。

牛島はその形状があたかも牛が横たわっているようだ。南側の崖に虹のように開いた石門があり、帆を広げても入ることができる。その中の窟は天然の要塞のようで、黄竜船20隻ぐらいいは隠せるほど広かった。窟の終わりにもう一つの石門があるが、船一隻がやっと通過できるほどで、狭かった。櫓を漕いで入ると、シラサギかと思われるの数百羽の不思議な鳥が群がって煩わしく飛び回る。窟が南向きで風もなく暖かいので、海鳥が生息しているのだろう。内側の窟は外側の窟に比べて少し小さいが、はるかに奇怪なうえに水の色は玄妙で、鬼神が現われるかのようだった。上を見ると、月のように丸くて白い石が薄い光彩を放つ。その白い石は碗のようでもあり、盃のようでもあり、ガチョウの卵のようでもあり、弾丸のようでもあるが、空の星のように入り交じっていた。窟の中は暗く、青黒いので白い石が星や月のように見えた。試しに笛を吹いてみると、初めはかすかに聞こえたが、すぐにごうごうたる音になり、あたかも波が振動して山が崩れるようだった。背筋が寒くなって長く留まることはできなかった。

すでに果樹園になってしまった高監司の家の跡地をすぎる時は、中国の名勝に喩えてその感想を述べている。

ゴドゥクジョン

高監司とは、漢城府判尹を勤めた高得宗(1388～1460)をいう。済州の人である高得宗は、1413年(太宗13)に親孝行が称えられ、薦挙されて直長になった。翌年に謁聖文科に及第し、1438年に戸曹参議として明に渡ったことがある。1439年には通信使として日本にも行ってきた。文章と書道に優れ、「夢遊桃源図」には彼の詩が載っている。また、済州牧官衙の「弘化閣」の字を書いた。

その「高監司の家の跡地」は今の西帰浦市竜興洞にあった。林悌は、当時果樹園だったそこを「みかんのある洞庭湖と梅のある西湖の景色をともに見ることができる所」として紹介している。

高監司の家の跡地を見回った。今は大静県の果樹園になっている。みかんと柚子が森を成し、千株にもなりそうだが、地に落ちた実はあたかも黄金が積まれているようだった。梅は枯れ木になって、あたかも虯竜が横になり、また立ち上がっているかのように、無数に道を挟んで並んでいた。大晦日

まではまだ遠いが、氷を含んだ花のつぼみが今まさに咲き始めていた。私は冗談のように「洞庭湖にはみかんがあって梅がなく、西湖には梅はあってみかんがないというが、ここは洞庭湖と西湖の興味が同時に目前に迫る。恐らく神霊が私の好奇心を知って(みかんと梅を)1か所に移しておかれたのだろう」とつぶやいた。

430年前の漢拏山はどんな姿だっただろうか

海岸に沿って済州を見回った林悌は、翌年の1578年2月10日に漢拏山へ向かう。林悌の漢拏山登頂は7日間だったが、事実上の登頂は2月15日と16日の二日間だった。2月10日に済州ソンジャアム邑内を出発して尊者庵に到着し、2月11日は尊者庵付近の五百將軍洞、すなわち靈谷を見回った。林悌はここが済州一番の景勝であり、神仙が生きる洞天だと描写している。そして、中国漢の田横と五百義士の故事を引用して「五百將軍洞」の漢詩を作った。

五百將軍洞は別名で靈谷ともいう。重なりあった白い峰が、美しい玉の屏風を開いたように取り囲んでいる。三筋に流れる滝が一つの谷へ流れ溢れる。真にこの島で一番の洞天といえよう。また、その奇岩はあたかも人のようで、溪谷と山の上に数多く立ち並び、数え切れないほどだ。五百將軍洞という名は恐らくここから付けられたのだろう。時間が経つのも忘れて鑑賞し、尊者庵に戻った。…靈谷から戻っても神仙の興趣を押さえきれなかった。

林悌は済州の五百將軍洞について、漢の高祖に臣従することを拒んだ田横に従い、自決した500人余りの志士の魂が済州に入り、醸し出した景観だと喩え、漢詩を詠んでいる。

五百將軍洞

昔漢有天下
田横入海島
相隨五百人
勁氣摩蒼旻
漢欲王侯横
横死雒陽道
客在海島中
聞之当若為
雄心共激烈
一死酬相知
精靈恥漢土
被髮翩然東

オベツジャングンドン

五百將軍洞

昔、漢が天下を治め
田横は海島に退いた
田横に従う五百人の義士は
強い気概で蒼空を席捲した
漢は田横を呼び王侯としたが
田横は洛陽の途中で命を絶った
島に残った五百人の義士が
この知らせを聞いてどうしただろう
英雄の心とともに激し
死で知己に報いたという
その精霊が漢にあっては恥辱であり
髪を振り乱して東に赴いた

仙洲化為石	仙洲に着くや石に変わり
屹立滄溟中	青い海の真中にそそり立った
萬古一片心	一片丹心は遠い昔から
碧海孤輪月	海の上の侘しい月を見よ
客到起遐想	旅人が遙か遠くを思うとき
英風吹鬢髮	英風が後れ毛をかすめる
一語慰幽冤	今一言で恨霊を慰めよう
韓彭亦鉄鉞	韓信・彭越、其方も死を選んだのか

林悌は2月12日から14日までの3日間は天候に恵まれず、尊者庵に留まった。山中での退屈な時間をつぶそうと尊者庵の清淳僧侶と話を交わす中で、老人星の話を聞いて詩を作った。

世伝老人星	世の人々が老人星の話を言い伝えている
乃在天南極	はるか遠くの南の空にあるという
登茲山可望	この山に登れば見えるというが
大与月輪敵	その大きさは丸い月ほどだという
今聞長老言	今、老人の話を聞いてみると
前後無所覩	未だ見た人はいないという
我欲掛之天中央	私がその老人星を北の空にかけ
坐令四海為寿域	天下を長寿の世にできないものか

老人星はカノープス(Canopus)ともいうが、シリウス(Sirius)の次に明るい星だ。中国と韓国では南極星、南極老人星、南斗星、寿星などと呼ばれる。中国の古代天文学では人の寿命を受け持つ星とされ、この星を見れば長生きすると信じられた。韓国では漢拏山頂上と西帰浦でしか見られないという。

2月15日、空も晴れ、林悌の登山が始まった。林悌は尊者庵から霊谷を経て、山房山と松岳山を見下ろすことができる済州西南側の裾に沿って頂上に登った。今でいうなら、霊室コースを通り、ウィッセ・オルムを経て頂上へ向かったようだ。彼の表現によると、「至ところが仙境で、一步踏み出すごとに奇観が広がる(行行仙趣 歩歩奇観)」登山だった。頂上に登って

ベンノクダム

白鹿潭を鑑賞したが、天気はまさに快晴だった。林悌は空と海が続いた水平線まで視界がひらけたとし、頂上で感慨にふける。

頂上に着くと、そこには大きくぼみがあり、池(白鹿潭)になっていた。石峰に囲まれた周りは7～8里ほどあった。岩に寄り添って下を見下ろすと、水はガラスのようにきれいで深さを測ることはできなかった。

た。池の周りの白い砂に香りの良い蔓が伸び、塵一つない美しさだった。人間世界から3千里も離れているので、鸞の洞簫の音が聞こえるようで、神仙の馬車が見えるようだ。…四方の視野は、太陽と月があまねく照らす所から、船や車では行けない所まで眺めることができる。しかし、人間の視野には限界があり、空と水の間に留まることが恨めしいばかりだ。

ドクタサ サンゲアム

ところが、山の下りは容易ではなかったようだ。頂上から南に下りて頭陀寺と双溪庵に着く下山だった。崖で道が切れたり、腰まで積もった雪道をかきわけて、衣服が濡れる煩わしさの中をひたすら歩いたと記している。林悌の表現によると、「串に刺した魚のように一列に並んで降りて行く」急な下り道だった。双鶏庵につくと、疲れて横になり、起きることができないほどだったという。双鶏庵を流れるせせらぎに明るい月が映る美しい夜の情景を傍に、林悌は、一杯の酒とともにその景勝を鑑賞できなかったことが嘆かわしいと記録している。

林悌の「登漢拏山記」は、漢拏山登山に関して、これまで伝わる資料のうち最初の記録だ。もちろん、これ以前にも漢拏山登山とその記録を残した人がいただろう。しかし、登山道を詳しく



尊者庵址

記録した資料は林悌の書が最も古いものだ。したがって『南溟小乗』に記録された彼の漢拏山登頂は、朝鮮王朝あるいはそれ以前の先人の漢拏山登山道を示唆しているといえよう。

漢拏山登頂を終えた林悌は、2月晦日に済州を離れるまで13日間済州牧に滞在した。海を渡

ヨンドゥアム

るために順風を待たなければならなかったのだ。その間、林悌は済州城周辺の竜頭岩、

ヨンヨン

モフンヒョル

竜淵、毛興穴などを見回って漢詩を残した。

龍頭岩

海畔嶺岼石
龍頭謾説名
洪涛日夜撃
猶作風雷声

ヨンドゥアム

龍頭岩

海辺にそびえるあの岩
徒に龍頭と名付けられた
大波が昼に夜に打ち付ける
その音はまるで雷のようだ

翠屏潭

城南只数里
有峽清而奇
石為白玉屏
潭作青琉璃
岸上幾叢竹
蕭蕭海風吹
扁舟倚桂棹
吟玩歸遲遲

ツイピョンダム

翠屏潭

城の南の数里辺り
清らかで奇異な峽谷がある
岩は玉の屏風のように取り囲み
池の水は青い琉璃のようだ
丘の上には草むらと竹やぶが
海風に吹かれ物寂しい
一葉扁舟の艚に身をゆだね
ゆっくり詠い楽しんで帰ろう

毛興穴

昔有三異人
湧出於茲島
古穴余鼎分
埋没生春草
奇蹤問未能
日暮牛羊道

モフンヒョル

毛興穴

大昔、三人の異人が
この島から湧き出たという
その三つの穴が残り
春の草に埋まっている
奇異なその跡を尋ねる所もなく
牛と羊の通る道に日が暮れる

ギム マンドク

「ノブレス・オブリージュ」の実践者・金万徳

金 万徳(1739～1812年)は、朝鮮時代後期の済州島出身の女性商人だった。男性中心の朝鮮社会で、なおかつ、済州島民出陸禁止令が下された状況で、女性として、多くの富を築いた商人だった。また、その富を凶年に飢えた済州島民と分かち合った義を重んじる人物だ。

ギム ウンヨル

金万徳は、1739年(英祖15)父金応悦と母高氏の間に、2男1女の一人娘として生まれた。



1750年(英祖26)12才で両親がなくなると済州牧の妓女遊女の養女となり、18才に妓籍妓生の身分に入る。23才に前後の事情が考慮され養女に復帰した。その

ゲッジュチブ

後、済州牧の東門外に客主家商品売買の仲介をしたり商人に宿を提供する店を構えた。馬尾、ワカメ、アワビ、ヤンテ、牛黄など済州特産物をソウルなどへ売りさばき、

ヤンパン

両班層の婦女子の布、装身具、化粧品などを供給し、大金持ちになった。

1790年(正祖14)から5年間続いた凶年で、済州の人々は飢餓にあえいだ。特に、甲寅年の凶作は、済州の人々を死に追いやった。これを受け、商売で集めた財産1千金を出し、船を用意して陸地に渡って米と穀物を買付け、10分の1は家族や親戚、世話になった人々に与え、残りの450石はすべて官家へ送り、救護米として使えるよう寄付し

た。

当時済州牧師が、この事実を朝廷に報告すると、正祖は金万徳に内医院医女班首という官職を与えた。金万徳は58才だった1796年に正祖に謁見し、領議政蔡濟恭と宣恵庁の配慮で、朝鮮の名山である金剛山を遊覧した。その後、金万徳は一生独身で暮らしながら、慈善事業を行い続けた。島民の尊敬と愛を受け、「万徳おばあさん」と呼ばれた金万徳は1812年(純祖12)73才で没した。

金万徳の善行に蔡濟恭は「積善之家必有余慶：善を施した家庭は必ずめでたいことがあふれる」と書いて下賜した。1840年代に流刑に処され済州島に留まった金正喜は金万徳の養子のギム・ジョンジュのために「恩光衍世：恩恵深い光が色々な世代につながる」という文を書いた。

金万徳の精神は今日、厳しい環境を開拓し、新たな人生の目標を成し遂げた朝鮮時代の女性最高経営責任者として評価されており、下賤な身分から商人へと成長し、経済的な富を蓄積し、その富を社会的弱者のために活用したノブレス・オブリージュ (Noblesse Oblige)の实践者として称えられている。



金万徳記念館(沙羅峰・慕忠祠所在)



恩光衍世(秋史・金正喜の文)



濟州歴史の中のエピソード

朝鮮時代の濟州を世に知らせた外国人

16 53年(孝宗4)8月、オランダ人のハメル(Hamel, H.)が乗った商船が難波し、濟州南西側の大静県の海岸に着く。ハメルは当時朝鮮だった韓国で13年間過ごした。そして、1666年9月に同僚とともに脱出し、日本を経てオランダへ帰ることになる。その後、ハメルは『ハメル漂流記』と呼ばれる『蘭船濟州島難破記』を書いて初めて西欧に韓国と濟州島を知らせた。

1901年6月、ドイツ人のジークフリート・ゲンテ(Siegfried Genthe)は済州を訪問し、西洋人としては初めて漢拏山に登り、その高さが1,950mだということを明らかにした。そして、ドイツに戻って自分が勤める『ケルン新聞』に韓国と済州島を紹介する文を連載(1901年10月13日～1902年11月30日)した。この連載内容をもとに1905年には『ゲンテの済州旅行記』がドイツで出版される。

1902年から1915年までの13年間、済州島西帰浦地域でカトリック神父として布教活動をしたフランス人のタケ(Emile Joseph Taquet)は、済州の植物を採集・調査して多くの標本を西欧の学界に送ることで、済州島の植物を全世界に紹介した。特に1908年4月に観音寺付近で採集したソメイヨシノ標本(番号4638番)は、済州島がその自生地だということを世界に広く知らしめた彼の成果だった。

オランダ人、ハメル

1653年(孝宗4)8月16日、オランダの貿易船スペルウェル(Sperwer)号が難波したまま済州島大静県遮帰鎮管轄の海岸に着く。オランダの東インド会社所属のこの船は、台湾を経て長崎へ向かうところだった。しかし、激しい風浪のため難波し、船員64人のうちハメルをはじめとする36人だけが生き残り、済州南西側の海岸に上陸した。

ハメル一行は直ちにソウルへ護送され、以後は全羅道などに分散収容された。そして、13年後の1666年にハメルを含む8人の船員が日本への脱出に成功する。その後、ハメルは東インド会社に、その間の未払賃金を請求するため、『ハメル報告書』を提出することになる。この報告書が『欄船済州島難破記』、別名『ハメル漂流記』だ。この書が西洋で出版され、韓国と済州島が西欧に初めて知られるようになった。

オランダの貿易船スペルウェル(Sperwer)号がハメル一行を乗せてオランダから出発したのは1653年1月10日だった。船は6月1日、東インド会社の東アジア本拠地を持つインドネシア、ジャワ島のバタビア(Badavia)を経て6月14日、台湾の安平に着く。そして、7月30日に日本の長崎に向かって出港した。しかし、風浪が激しく、8月11日になってもスペルウェル号は台湾海峡を抜け出せなかった。結局、8月16日に済州島大静県大也水海岸で船が難波してしまった。

64人の船員のうち、済州島に上がった生存者36人は直ちに済州牧に移送された。言葉が通じなかったので、通訳のためにソウルからベルテブレ(J.J. Weltevree, バク ヨン 韓国名朴淵)が済州に派遣される。

ベルテブレもオランダ人で、25年間韓国に住んでいた。彼は1627年(仁祖5)9月にウウェル・ケルク(Ouwer Kerk)号で長崎へ向かう途中、水を得るために済州に上陸したところ、官員に捕

えられた。その後、ソウルに護送されて名前も朴淵に改名し、訓練都監で銃砲製作などに従事して過ごしていた。

ハメル一行は済州牧からソウルに護送された。朴淵はハメル一行と3年間ともに過ごし、彼らに朝鮮の言語と風俗を教えた。

1656年3月にハメル一行は全羅道兵營に移されたが、その間14人が亡くなり、生存者は22人に減った。1663年に彼らは再び麗水・南原・順天に分散して収容された。ハメルが抑留生活をしたところは全羅道・麗水の左水營だった。

1666年(玄宗7)、抑留された生存者数は全部で16人だったが、ハメルを含む8人だけが同年9月4日、脱出に成功する。そして、長崎を経由して1668年7月にアムステルダムに帰還した。

『ハメル漂流記』は1668年にアムステルダムで出版され、1670年にはフランス語版、1671年にはドイツ語版、1704年には英語版が出版されるなど、西洋の数か国で刊行された。韓国についての情報が殆どなかった西欧社会に、韓国を知らせる最初の著書だったのだ。

同書は1934年、『震檀学報』1～3号に李丙燾が英訳本に翻訳して転載した。その構成は第1部が難破と漂流に関する記録、第2部が「朝鮮王国記」になっており、韓国の地理・風



復元されたハメル商船

土・産物・政治・軍事・風俗・宗教・教育・交易などを紹介している。

1980年10月12日、韓国とオランダは友好増進のために、当時の難破上陸地点と推定された西
サンバンサン
帰浦市安徳面沙溪里の山房山海岸丘に高さ4m、幅6.6mのハメル記念碑を立てた。そして、
2003年8月16日に西帰浦市はハメル漂着350年を記念し、ハメル記念塔が立てられた丘の下
ヨンモリ
にある竜頭海岸にハメル商船展示館を竣工・開館した。「ハメル号」と名付けられたこの展示
館は、難波したスペルウェル号を再現しており、内部には関連資料が展示されている。

1696年(肅宗22)に著述された済州牧使李益泰の『知瀛録』には、「西洋国漂人記」という題
イ、イッテ
名でハメル一行の済州漂流と関連した内容が記されている。その最初の文章は次のとおりだ。

イ・ウォンジン 当時の牧師は李元鎮、判官は盧錠、大静県監は権克中だった。癸巳年(1653、孝宗4)7月24
ノ、ジョン 日、西洋国の蛮人ヒンドウクヤムシン(ハンドリク・ハメルを指す)など、64人が乗った一隻の船が大
クォン、クワジン 静県遮帰鎮の大也水延辺で難波した。溺死者26人、病死者2人、生存者は36人だった。…南
蛮西洋などの国の人と推定して朝廷に申し上げると、まもなく南蛮から漂流してきた朴淵(ペルテブレ)
を派遣した。

この記録によれば、ハメル一行が乗った船が難波した地域は遮帰鎮大也水延辺だという。大
イ ヒョンサン
也水とはどこだろうか。1702年の李衡祥牧使の『耽羅巡歴図』によれば、大也水浦は山房
ゴサン
山の方でなく高山地点と記録されている。大也水浦は高山里「ハンジャンデムル」の漢字表
記だ。したがって、『知瀛録』の記録が正しいならばハメルが難波した地点は高山里のハン
シンド
ジャンと新島2里の間の浜辺と推定される。

ドイツ人、ゲンテ

火山の頂上は、溶岩の塊りが積もった円錐形の峰なのに四方はなめらかで、一定の急傾斜を成してい
る。頂上に登ると、四方に広がる雄大で幻想的な風景が一望できる。島を越え、遠く海の彼方に限り
なく広がるパノラマだった。…このように言葉では言いようのないほど、膨大で感動的なパノラマが済州
の漢拏山のように繰り広げられる所は、地球上でそれほど多くないだろう。漢拏山は海の真ん中に位置
し、あらゆる大陸から100km以上離れ、傾斜が急で海水面からほぼ2,000mの高さにある。ここに登
ると、四方の海水面が開け、私たちの目の高さまで押し寄せるかのように湧き上った。

1901年6月、ジークフリート・ゲンテが漢拏山頂上に上って述べた感想だ。そして彼は直ちに
二つのアネロイド気圧計を取り出して漢拏山の高さを測定した。その結果、噴火口の一番端の

高さは標高1,950mだった。参考にするために取り出したイギリス製の気圧計も6,390フィートを示した。彼は噴火口も測定し、直径400m、高さが70m程度だということを明らかにした。ゲンテは、「白人がまだ一度もしていない漢拏山頂上への登頂は、私の生涯における最高の光栄」と感慨に浸る。

1870年にベルリンで生まれたゲンテは、マルクブルク大学で地理学の博士号を取った後、ケルン新聞に入社した。ゲンテは1898年にアメリカのワシントン特派員を始め、中国など当時、ヨーロッパの関心地域を取材していた。中国を経て韓国に留まった期間は、1901年6月から11月までの6か月間だ。短い旅程だったが、韓国の江原道、ソウル、済州を訪ねて旅行記を残した。彼の旅行記は「韓国、ジークフリート・ゲンテ博士の旅行記」としてケルン新聞に連載され、1905年には彼の同僚記者だったヴェーゲナーが『ゲンテの済州旅行記』という題名で出版した。

ゲンテはソウルでアメリカ人のセズ(Sands)に会い、済州に関心を持ち始めた。セズは当時の朝鮮皇室顧問で、1901年に済州で発生した「李在守^{イ・ジェス}の乱」を鎮めるために済州に入っていた人物だ。ゲンテはセズから済州に関する情報を得、済州への旅行を決心した。当時、済州牧使李在護^{イ・ジェホ}と親密な関係を結んでいたセズはゲンテのために親書を書き、ゲンテは皇室商船「顕益号」^{ヒョンイクホ}に乗って仁川を出発し、済州に到着した。

当時の済州は、李在守の乱が鎮圧されたばかりで、民心は陰悪だった。済州牧使はゲンテを保護するための護衛兵を付ける一方、漢拏山を測量するために外国人が済州に入ってきたということをすべての官衙に知らせた。ゲンテは、護衛兵と通訳官、道案内者など合わせて11人の一行とともに、済州城西門からかつての霊室登山道を利用して漢拏山に登った。

フランス人、タケ

韓国でチョウ博士として広く知られている石宙明^{ソク ジュミョン}は、「タケは宣教師だったが、むしろ済州島の植物採集調査家として有名だった」とし、1942年に『文化朝鮮』の済州特集欄で次のように伝えた。

西帰浦から北側へ2里離れた所に住んでいたタケ神父は、機会さえあれば漢拏山に入って植物標本を採集し、これを欧州の学界に送っていた。1908年4月14日、神父は観音寺付近(標高600m)でひと株の桜に咲いている花を採取し、自分の採集(標本)番号4638号を付けて欧州に送った。

タケは1908年4月14日、済州島の観音寺付近で採集した桜の標本を西洋に紹介し、これをドイ

ツのケネ(Koehne)博士が「ソメイヨシノの変異種であり、新しい分類群」だと発表した。こうして自生ソメイヨシノの最初の標本が報告され、ソメイヨシノの自生地は済州島だという学説が立てられた。タケはこのように済州の特産植物をたくさん採集して西欧の学界に知らせたが、彼の名を取って作った済州の植物標本学名は13種にのぼる。

タケは1873年10月、フランス・ノルドゥ(Nord)州で生まれた。1897年、パリ外邦宣教会大の神学校を卒業して神父に任命され、初めての任地となったところが韓国だった。タケは1898年1月ホグンドンにソウルに到着し、1902年4月には済州に赴任して西帰浦・好近洞にあるハノン本堂につい

ソホンドン ホンノた。ここにしばらく居住した後、同年6～7月に今の西帰浦市・西洪洞一帯の烘炉へ移る。タケは1915年まで13年にわたり、多くの期間をここ(福者修道院・ミョヒョンの家)で過ごし、布教活動とともに旺盛な植物採集を行った。タケが滞在した烘炉本堂は、済州の布教史だけでなく、済州近代植物研究に大変重要な足跡を残した空間でもあるのだ。

タケの済州布教活動時期は、韓国植物分類学において画期的な業績が積まれた時期だった。タケが採集した多くの標本がヨーロッパに送られて専門家たちの研究対象となり、その標本をもとに数多くの論文が世界各地で発表された。

タケの植物採集調査活動は、済州島の植物が全世界に広く知られる契機になったが、その反面、漢拏山の植物はもちろん南海岸や白頭山の植物など、韓国の植物資源がヨーロッパへ流出してしまったという否定的な見方もされている。



濟州歴史の暗い記憶

傷と渴望が産み出した平和の島

濟 州島は、古代から北東アジアを結ぶ海上交通の要衝だった。朝鮮半島、中国大陸、日本を結ぶ三角地点にあるという地政学的な位置により、平和な時期には多様な文化の交差点となった。しかし、対立の時期にはその地政学的地位が平和を脅かす重大な要因となった。

サンビョルチョ

13世紀後半、世界帝国モンゴルとの戦いを名分に、三別抄が濟州島へ入り、全島が高麗・モンゴル連合軍との戦場と化した。高麗時代半ばから朝鮮時代に至るまで断続的に続いた倭

寇の略奪も済州島民を苦しめた。このような倭寇の侵入を防ぐため、海岸沿いを中心に
ファンヘジャンソン
環海長城を築造し、3城9鎮25烽燧38煙台という独特な防御システムが築かれた。

また、帝国主義勢力の利害関係が衝突するとき、済州島は大陸勢力と海洋勢力間の激しい角逐の場となった。その様相は20世紀に入り、さらに深刻になった。特に、1941年12月から1945年8月までの太平洋戦争下の済州島は、日本の軍国主義によって全島が要塞に変わった。世界史を揺るがした太平洋戦争の嵐が済州島を襲ったのだ。当時、済州には7万5千人の旧日本軍が駐屯していた。旧日本軍は日本本土を防御するため、海岸沿いから中山間地帯及び漢拏山の高地帯に至るまで軍事飛行場や格納庫、地下陣地地下壕などを造った。

日本統治から独立した喜びもつかの間、済州には韓国現代史における最大の悲劇ともいえる済州4・3事件が起きる。日本統治時代に済州島民を強制動員し、構築した地下陣地は、済州4・3事件で虐殺に利用され、見る者に歴史の悲劇を感じさせる。

済州島に点在している戦争遺蹟と防御遺蹟は、済州が経験した苦難や悲劇の歴史そのものであり、辛かった済州の人々の暮らしを伝え、平和の大切さを語りかけている。



アルトゥル平原の航空写真、左端にアルトゥル飛行場の滑走路が見える

済州ならではの防御遺蹟を築く

済州島は「城郭の島」といっても過言ではない。済州島には済州邑城、旌義県城、大静県城の3城と、9鎮城、25の烽燧、38の煙台が残っている。さらに、高麗時代に海岸沿いに築造された環海長城と、三別抄が高麗・モンゴル連合軍に対応するために造った
ハンバドゥリソン 缸波頭里城(国家史蹟第396号)がある。

3城9鎮25烽燧38煙台の本格的な築造は朝鮮時代に入ってから始まった。防御施設の大々的な整備は、済州都按撫使の韓承舜が1439年(世宗21)に、倭船が停泊しそうなところに防御対策を立てることを建議し、本格化した。以後、中宗王時代の三浦倭乱(1510年)、明宗王時代
ウルミョウエビョン 乙卯倭変(1555年)、ソンジョ 宣祖王時代の文禄の役(1592年)を経、築造が続けられた。海岸沿いを囲むように置かれた
ファブク 禾北鎮、ジョチョンジン 朝天鎮、ビョルバンジン 別房鎮、エウォル 涯月鎮、ミョンウォル 明月鎮、チャギジン 遮鼻鎮、ソギ 西帰鎮、スサンジン 水山鎮など3城9鎮25烽燧38煙台体制は、王朝時代、済州の地形的条件を考慮して造られた独特な防御システムだ。

別防鎮

9鎮城の一つである別防鎮城(済州道記念物第24号)は、海女の村で有名な旧左邑下道里の
ビョルバンジンソン 海岸にある。別防鎮城は、1510年(中宗21)に済州牧師長林によって築造された。

別防鎮は済州東部地域最大の防御施設だった。城郭は周りが1,008m、高さは3~4m程度で楕円形に築造された。別防鎮は付近の烽燧と煙台を管轄し、有事に備えた。

倭船の停泊地が牛島付近にあったので金寧防護所をここに移し、城を築いて別防と名付けた。別防とは「別途の防御施設」あるいは「特別防御施設」を意味するという。以後、別防鎮は1848年
ジャン・インシク (憲宗14)に張寅植牧使が重修した。別防鎮は、朝鮮時代済州東部地域の最大の防御施設だった。東門、西門、南門と甕城3か所、雉城7か所が作られ、主な施設は鎮舎、客舎、使令房、武器庫などがあった。別防鎮内には「東別倉」という凶年に備えた穀物倉庫まであったという。

別防鎮管轄の烽燧は、旧左邑漢東里の
ハドンリ 往哥烽燧と金寧里の
ワンガ 笠山烽燧2か所、煙台には旧
イッサン



別防鎮城

ビョンデリ イッドウ ジャガ ウォルジョンリ ムジュ
ソナムル

左邑坪垈里の笠頭煙台と漢東里の佐哥煙台および月汀里の無住煙台があった。

別防鎮城は日本統治時代に崩れ始め、永らく放置されてきた。現在の城郭の一部を整備し、廻郭道などを設置したが、昔の趣きを失っている。門の上に楼閣があった東門、西門、南門も取り壊されたまま村の道として利用されている。別称、成内の水と呼ばれた井戸も今は埋められてしまった。

別防鎮城のかつての趣きは、西門址と南門址の間にある西側の耕作地に残っている円形の城壁に感じられる。数十メートルの長さの城壁区間が3～4mの高さで囲まれており、築城当時の姿をありありと伝えている。朝鮮時代濟州東部地域の最大の防御鎮地だった歴史の息吹がそのまま感じられる。

別防鎮の築城当時の逸話も伝えられる。当時は厳しい凶年がつづき、食糧が底をついていた。そのため、築城に動員された人々は人糞を食べながら城を築いたという。

別防鎮と夫氏宗家に関する伝説もある。「別防鎮が取り壊されれば夫氏宗家(下道里ソガルム)も衰える」という言葉が伝えられるが、これは、西洞から北方向に、海を守る別防鎮が取り壊されれば、北側が脆弱になり、良くないということだ。事実、日本統治時代に別防鎮が取り壊されると、夫氏宗家の子孫が死んで家勢が傾き始めたという。

戦争の傷跡に苦しむ済州

済 州島は世界的なオルム則火山王国だ。漢拏山を中心に360余りのオルムが分布している。このうち、100以上のオルムに太平洋戦争下の旧日本軍の軍事施設として地下坑道陣地などが構築された。

旧日本軍はどうして済州島を巨大な戦争基地にしたのだろうか。

1941年12月7日、旧日本軍は奇襲的な真珠湾攻撃で太平洋戦争を引き起こす。しかし、

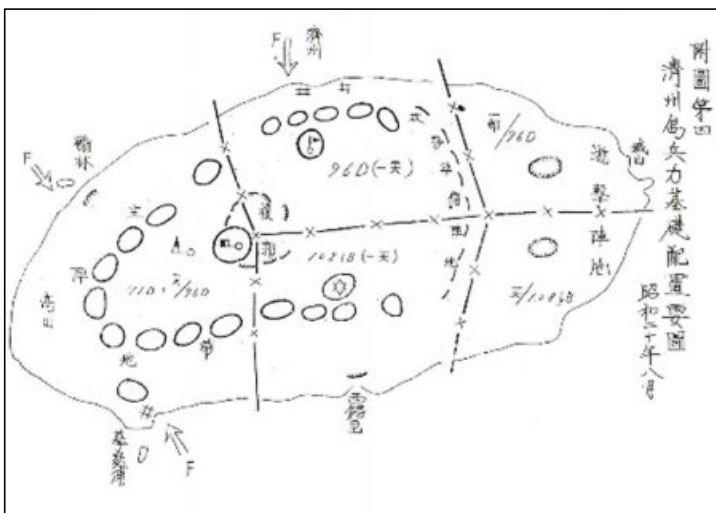
1944年10月のフィリピンに続き、1945年3月に硫黄島に米軍が上陸して敗戦の危機にさらされ、日本本土での決戦が避けられない状況になった。

当時、旧日本軍は中国大陆と朝鮮半島、日本を結ぶ済州の地政学的重要性に注目し、米軍が済州島に上陸すると判断し、その時期は1945年8月以後だと予測していた。このような状況判断により日本防衛総司令官は1945年2月9日、各方面軍の司令官に、6月をメドにした日本本土決戦作戦、すなわち「決号作戦」の準備完了を命じた。

決号作戦とは、アメリカなどの連合軍の攻撃から日本本土を防御するための第1号から第7号までの作戦をいう。決1号作戦は北海道天島方面、決2号作戦は東北方面、決3号作戦は関東方面、決4号作戦は東海方面、決5号作戦は中部日本方面、決6号作戦は九州方面、決7号作戦は朝鮮方面(済州島方面)だった。



済州島内の陣地構築の状況が表示された「第58軍配備概見図 済州島」



旧日本軍師団駐屯地が表示された「済州島兵力基礎配置要図」

決7号作戦に向けた旧日本軍の済州島進駐兵力も急増した。済州に駐留した旧日本軍は、1944年6月までは守備隊など300人に過ぎなかったが、1945年8月の終戦が近づくと、7万5千人余りに急増する。

旧日本軍は、1945年4月に編成された第58軍司令部配下に第96師団、第111師団、第121師団、独立混成第108旅団など3師団1旅団および直轄部隊などで編成され、済州島各地に配置された。

第111師団は済州南西部地域に、第121師団は済州北西部地域に、第96師団は済州中央部に、独立混成第108旅団は済州東部地域にそれぞれ駐留した。また、58軍司令部は御乗生岳に置かれ、111師団は安徳面ウォンムルオルム一帯、121師団は涯月邑ノッコメー一帯、108旅団は朝天邑ゴムンオルム一帯に司令部を置いた。駐屯地を中心にオルムには、「偽陣地」「前進拠点陣地」「主抵抗陣地」「複郭陣地」の4種類の陣地が作られた。それだけではない。美しい景観を誇る海岸には自殺特攻基地を構築していた。特攻基地は済州の北側の犀牛峰、西側の水月峰と松岳山、東側の城山日出峰、南側の三梅峰海岸など5か所で確認できる。

当時、済州島に駐留、または駐留予定の特攻部隊は蛟竜、海竜、回天、震洋などだった。そのうち、震洋部隊は城山日出峰海岸と三梅峰海岸および高山里に配備された。

日本は、陸上と海上での陣地構築とともに済州島の4か所に軍事飛行場を建設する。現在の済州国際空港は太平洋戦争当時の済州西飛行場(別名、ジョンドウル飛行場)で、最初に造成されたものだ。朝天邑ジンドウルには済州東飛行場(別名、ジンドウル飛行場)が、橋来里には特攻用秘密飛行場が作られた。慕瑟浦アルトウル平原には「済州島航空基地」、別名アルトウル飛行場が造成された。

旧日本軍軍事施設は、日本によって強制的に動員された済州島民の苦痛の産物だ。「日帝強占下強制動員被害真相究明委員会」によれば、4万人余りの済州島民が様々な労働に動員されている。当時、済州島の人口が21万人程度だったことを考えれば、その実状が推察できる。

今日、海岸やオルムなどに残された戦争の傷跡は、これらの旧日本軍が残した暗い歴史の残滓だ。オルムごとに少なくとも2～3か所、多い場合は20か所を超える地下陣地が構築されている。長さも数十メートルから長くて2km以上に達するものもある。

このように当時の済州島は、旧日本軍の巨大な戦争基地だった。アメリカ軍が済州島に上陸していたら、「第2の沖縄」になっていたことは火を見るより明らかだ。

済州に散在する旧日本軍軍事施設のうち、現在13か所が国家近代文化遺産登録文化財に登録されており、日本軍国主義の侵略の野望を知らせる歴史の現場になっている。

野外戦争博物館を連想させるアルトゥル

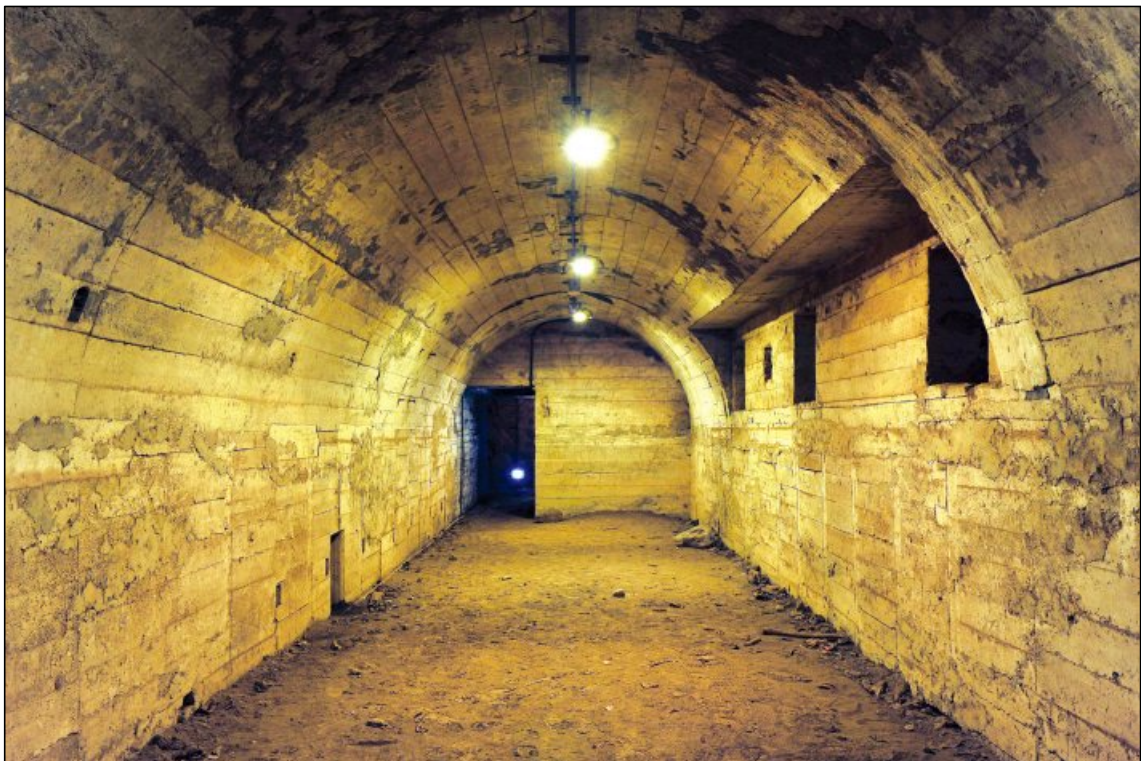
済州西南部である大静邑慕瑟浦のアルトゥルは済州島で最も広い平原といえる。天気の良い日にここを訪れると、日を浴びて灰色に光るの構造物が目に入る。太平洋戦争下の旧日本軍の飛行機を隠して置くための掩体壕、すなわち格納庫だ。アルトゥル平原には19基の格納庫が全て残っている。格納庫は幅20m、長さ10m、高さ4m程度のコンクリート構造物だ。

アルトゥル平原は日本統治時代に中国大陸攻撃のための軍事飛行場として造成され始めた。

アルトゥル飛行場の造成計画が初めて構想されたのは1926年のことだ。最初は中日戦争に備え、中国大陸攻撃のための渡洋基地として活用する目的で長期計画が立てられた。その後1931年から1936年まで続いた第1次工事で、滑走路1400m×70m規模、およそ60万㎡の飛行場が完成した。

第2次拡張は、1937年に中日戦争が勃発するとすぐに始まった。当時の日本は、中国の南京および上海を攻撃するために長崎県の大村航空基地をアルトゥル飛行場に移した。そのため済州島航空基地は一時「大村飛行場」と呼ばれ、はなはだしくは慕瑟浦一帯が「大村部落」と呼ばれることさえあった。

アルトゥル飛行場は、第2次工事(1937～1938年)でおよそ132万㎡に拡張され、実際の中国



アルトゥルバンカー内部

大陸攻撃のための海洋爆撃拠点として活用された。アルトゥル飛行場から中国の南京空襲は36回、年間600基、投下爆弾は延べ300トンにのぼった。

1944年10月に入り、飛行場規模をおよそ220万㎡に拡張する第3次拡張工事が始まる。現在、アルトゥル飛行場に残っている格納庫施設などは、この時に作られた戦争遺跡だ。ここにはゼロ戦と艦攻および中攻などが配備される計画だった。アルトゥル飛行場が大村海軍航空隊練習飛行場として活用されたため、別名「トンボ飛行機」と呼ばれる練習用「赤トンボ」飛行機も配置されたという。

アルトゥル平原に飛行場を造る過程で村が消えることもあった。この一帯にあった「アルオルムドン」など6か村が収用された。そして、そこに済州島民を動員し格納庫や滑走路などを造った。このようにアルトゥル飛行場は植民地支配の典型的な象徴物だ。

アルトゥル平原の旧日本軍の軍事施設は多様だ。有蓋格納庫19基だけでなく無蓋格納庫や地下バンカー、高角砲陣地、弾薬庫、飛行場滑走路、長さが1kmに達するセダルオルムの巨大地下壕、松岳山海岸の自殺特攻基地などが半径1km以内に造成された。

アルトゥル平原は、20世紀の世界史を揺るがした大事件である太平洋戦争に関連する巨大な「野外戦争博物館」といえよう。

ソダルオルムの旧日本軍弾薬庫跡が虐殺の場に変わる

日本の軍事施設はそれ自体が植民地期の暗い歴史だ。日本の敗戦後、地下陣地は再び悲劇的な空間に変わる。独立後の空間に吹き荒れた済州4・3事件で、無辜の住民が殺される日常的な虐殺の場と化してしまったのだ。

ソダルオルムでの虐殺の悲劇は、1950年の朝鮮戦争で発生した。ソダルオルムは、松岳山向い側の北に低くそびえている三つ峰のうち一番西側のものをいう。ソダルオルムの頂上に2か所の高角砲陣地が造られ、オルムの地下にはアルトゥル飛行場と関連した爆弾庫(弾薬庫)が構築された。

ソダルオルム爆弾庫は、日本の敗戦直後である1945年9月末から10月初めに米軍の武装解除チームによって爆破された。その過程で大きな陥没部ができたが、それから5年後、その場所では虐殺が行われる。朝鮮戦争の真っ最中だった1950年7月と8月、警察と軍人(海兵隊)により、予備検束者として名指しされた民間人200人余りが、この大きなくぼみの中で銃殺された。

第1次銃殺は1950年7月16日から20日までの間に、第2次銃殺は1950年8月20日(旧暦7月7日)に発生した。これがソダルオルム予備検束虐殺事件だ。「真実和解のための過去史整理委員会(真実和解委員会)」が2007年に発表した犠牲者数は218人にのぼる。

真実和解委員会によれば、事件の発端になった警察の「予備検束」は、独立後に廃止され



ソダルオルム虐殺場と慰霊碑

政府が公式に施行しない制度だった。ところが、朝鮮戦争が勃発すると済州の警察は、内務部治安局の指示により、法令や規定の根拠もないまま予備検束を実施した。

予備検束による犠牲者の大部分は、済州4・3事件や左翼活動と直接関連していないにも関わらず、警察の恣意的な基準で分類された。その中には無辜や密告、警察との対立、個人的な争いなどで予備検束された者も多かった。犠牲者は20～30代が77%、男性が96%を占め、教師は11人、公務員5人、村の有志が5人など社会的地位のある人物も含まれていた。

ソダルオルムの犠牲者は、虐殺された後も苦難を強いられた。犠牲者の遺体は、事件の発生からおよそ6年後の1956年3～4月に、軍当局の許可を得て収拾された。しかし、収拾があまりにも遅かったため、身元確認が困難なばかりか、遺骨を合わせることもできなかった。遺族たち

サゲリ

ベッゾイルソンジ

は遺骸132具を収拾して沙溪里共同墓地に移葬した。現在の「百祖一孫之地」(百祖父の一子孫)墓地はこのようにして造成された。

濟州島の香り、文化の物語



口承する / 神話

伝説

民謡

濟州の方言

風習で伝える / 巫俗信仰

歳時風俗

暮らしで伝える / 石文化

海女の文化

地場産業

衣文化

食文化

住文化



神話

一万八千の神々の故郷

済 州島は1万8千の神々が宿る神の国だ。それほど多くの数を誰が数えたのだろうか。
「1万8千」は一々数えた数字ではなく、「それほど多いこと」を意味する象徴的な数字だ。

済州の人々は、天も地もできていなかった混沌の時代に、天を開いて世の中をつくり、人間世界を設けたのも神々で、人間の生を司るのも神々だと信じた。神というからには神通力は当然あるだろうが、人間と大きく変わらない優しい神もいれば、悪どい神もいて、また見守ってくれる神もいれば、意地の悪い神もいた。グツを行って招けば、やって来る神もいれば、山にも海にも野原

にもいた。村々に宿る神もいれば、家のあちこちに宿る神々もいた。済州の人々の想像力が「1万8千の神々の物語」を作り出したのだ。済州島の神話は済州のグッを通して伝えられてきた。済州の人々は神話を「ボンプリ」という。これは「本を解くこと」を意味する。

「ボン」は「神の根元」、「グッの原理」を意味し、「プリ」は「解く」「開く」という意と「ハンプリ」という「解冤」の意味をも含んでいる。

済州島のボンプリ、すなわち神話の中には天地創造の物語である「開闢神話」もある。韓国で開闢神話を持つところは済州しかない。さらに、世界中を見渡しても開闢神話は珍しい。

済州島の神話はその数が多いばかりか、独特で、生き生きとして興味深い。済州島は「神話の宝庫」なのだ。



巫神図

済州の神話に会う

チョンジウァン

宇宙を創造した天地王

天地王は開闢神話の主人公だ。最初の世は「真っ暗闇」だった。神の中で最も大きな神、天の玉皇の天地王が一番最初に取り組んだ仕事は、その「真っ暗闇」を分けて世の中をつくることだった。その次には星をつくった。そして、明け方をつくって昼と夜を区別し、人々が昼間は仕事をし、夜は眠るようにした。

ナヨンミョンブイン

しかし、この世とあの世、人と鬼神、善と悪などに分ける仕事は一人でできず、地の聡明婦人と婚姻する。そして、天父地母、つまり天の天地王と地の聡明婦人との間に二人の息子が生まれる。兄の大別王は心が優しく、弟の小別王は性格がよくなかった。

天地王は大別王に現世を、小別王には冥土を治めさせた。ところが、小別王は悪知恵を働

かせ、自分が現世を占有し、善良な兄には冥土を与えた。天地王の計画が逆になったのだ。そのため、不幸にもこの世は無秩序な悪の世界になり、あの世はきれいで公正な善の世界になった。

ソチョングクとグムベッジュ

ソチョングクは狩猟神で、グムベッジュは農耕神だ。

漢拏山から湧き出たソチョングクは、グムベッジュと結婚して息子18人、娘28人をもうける。グムベッジュは着る物をくれ、飯をくれ、乳をくれとねだる子供たちを育てるために、ソチョングクに農作を薦める。

ある日、しばらく畑を耕していたソチョングクに、通りがかった僧侶が昼御飯を分けてくれといった。適当に食べるだろうと思っていると、食べ尽くして逃げてしまった。

お腹がすいたソチョングクは、自分の畑を耕していた牛を打ち殺し、焼いて食べ、さらには他人の牛まで食べた。その後、自分の体にすきを縛って畑を耕した。腹が立ったグムベッジュは一緒に暮せないと言い、別れて暮そうと迫る。つまり離婚をしたのだ。家族を離れたソチョングクは、下の村に行って妾を得て狩猟をしながら暮した。

ソチョン花畑の花監官ハルラッグンイ

ハルラッグンイの父はサラドリオン、母はウォンガンアミだ。ハルラッグンイが母の胎内にいた時、父はソチョン花畑の花を管理する花監官になってほしいという玉皇上帝の命を受ける。夫婦はソチョン花畑に向かう。しかし、道がとても遠くて険しかったので、ウォンガンアミは身ごもった体でついて行くことができなかった。夫婦はクシを半分に分けて片方ずつ取って別れ、サラドリオンは一人でソチョン花畑に向かい、ウォンガンアミはジェインザンザという金持ちの家で下働きをすることになる。

ウォンガンアミは、ジェインザンザの家であらゆる辛酸をなめながらハルラッグンイを産み、育てた。母に下心を抱いたジェインザンザと、それを逃れようと苦勞する母を幼い頃から見て育ったハルラッグンイは、十五才になった時、父を探して家を出る。

ソチョン花畑へ行く道には膝まで浸る水、背中まで浸る水、首まで浸る水が順に待っている。ハルラッグンイがその水を全て渡るとソチョン花畑が現れた。

ソチョン花畑の入口にはきれいな池があり、女官が水汲みに来ていた。ハルラッグンイは指をかんて赤い血2～3滴を池に落とす。すると池は汚れ、あっという間に水が乾いてしまった。女官は花監官に行き、ある若い男が不思議な行動をしたため、水が乾いてしまったと報告した。こう

して、ハルラッグンイは花監官に会うことになる。

ハルラッグンイは母からもらったクシの片方を取り出して花監官に見せた。花監官は自分が持っていたクシと合わせ、息子だということを確認する。さらに、ハルラッグンイが来る途中で渡った水で、母がジェインザンザに3度の拷問を受けて死んだことを知らせた。

父はハルラッグンイをソチョン花畑に連れていった。花畑には人をわけもなく笑わせる笑い花、むやみに戦わせる戦い花、人を滅亡させる悪心花、死んだ人を蘇らせる転生花など多くの花があった。父はハルラッグンイに花を一つ一つ説明しながら、母を蘇らせる方法を教えた。

ハルラッグンイは、花を種類別に取り、父と別れて母と暮っていた所に降りてきた。

ジェインザンザは帰ってきたハルラッグンイを殺そうとした。ハルラッグンイはジェインザンザの親戚を全て呼び集めて、笑い花をばらまいて皆を笑わせ、さらに戦い花をばらまいて互いに戦い合うようにした後、悪心花をばらまいて一族を殺した。幼い娘一人だけ生かし、死んだ母親を捨てた場所に案内させた。母親の頭は切られて青竹畑に、背中では黒竹畑に、膝は茅畑に放り投げられ、骨だけが散乱していた。ハルラッグンイが母の骨を集めて転生花をばらまくと、母は「ああ、長い春の昼寝をしたものだ」といいながら生き返った。ハルラッグンイは母とともにソチョン花畑に入って父の後を継いで花監官になった。

3千年を生きたサマン

家が貧しいうえに幼い頃両親と死別したソ・サマンは、村の大人たちの助けで妻をめとる。サマン夫婦は、針仕事の腕のよい妻の針仕事でやっと食べて暮らしていた。しかし、子供たちが一人、二人と増えると暮らしが次第に苦しくなった。

ある日、妻は長く垂れている自分の髪を切って夫に渡し、市場でこれを売り、子供たちに食べさせる米を買ってくるように頼んだ。しかし、サマンは鳥銃を買って帰ってきた。

その日からサマンは銃を持って狩猟に出た。毎日のように山に登り、あちこちをさ迷い歩いても一匹のノロジカも捕れなかった。

山中をさ迷っていたある日、暗闇がかかる山道を歩いていると、左足が何かに引っ掛かった。草の葉を掻き分けてみると、百年もたったかと思われる骸骨がごろごろしていた。家を守る先祖なのかもしれないと思ったサマンは、この骸骨を大切に、家に持ち帰った。そして、倉の大きな甕に入れ、祭祀や祝日ごとに供え物をして先祖のように大切にした。

その後、狩猟に行くとノロジカやシカが多く捕れ、サマンは瞬間に金持ちになった。ある日の夢で、白髪の老人が倉から出てきて、サマンを呼んだ。

「サマンよ、どうして平気で眠っているのか。おまえの寿命は33才で、満期になった。冥土のえ

ん魔大王が、おまえを捕まえに3人の差使を送るだろう。明後日の夜に差使が来る。おまえの名前を書いて祭祀の膳に貼っておきなさい。夜が明けたらグッをして、えん魔に冠帯3着、帯3本、履き物3足、上等の米を入れた大きな甕を捧げ、さらに牡牛を捉えて厄よけをしなさい」

サマンは、白髪の老人が言ったとおりの供え物をそろえ、百歩外側にひれ伏していた。

夜になると、3人の差使が降りてきた。差使は食膳を見ると、空腹に堪えられず、これを食べ尽した。満腹になった差使が膳の下を見ると、「サマン」という名が書かれていた。食べ物をただで食べてサマンを捕まえるわけにはいかなかった。

差使が「サマンよ」と呼ぶと、百歩外側で「はい」と答え、顔を上げた男はサマンに違いなかった。

差使はサマンについて家に入った。家ではグッをしていたが、その誠意は大変なものだった。手厚い接待を受けた差使は冥土に帰り、サマンに与えられた寿命を延ばそうと話合った。そして、えん魔大王がグッを受けに人間世界へ降りている間、サマンの寿命帳簿に書かれた「三十」の「十」の上に線を引いて「千」にしてしまった。こうしてサマンは3千年も生きようになった。

運命の神、ガムンジャンアギ

上の村にはガンイオンソンという男の乞食が住み、下の村にはホンウンソチョンという女の乞食が住んでいた。

凶年のある日、2人の男女は各々に向こうの村が豊作だという噂を聞き、物乞いに行く途中、中間地点で出会って夫婦になった。

しばらくして子供が生まれたが娘だった。貧しい夫婦を助けるために、村の人々が銀の器にご飯を盛って食べさせ、育ててくれた。そのため、この子の名前は「ウンジャンアギ」になった。夫婦はさらに娘を産んだが、今度も村の人々が助けてくれた。しかし、長女の時ほど誠意はなく真鍮の器にご飯を盛って育ててくれた。そのため、次女の名前は「ノッチャンアギ」だ。夫婦はさらに、娘を産んだ。この3番目の娘もやはり村の人々が助けてくれたが、誠意は冷めてしまい、木の器にご飯を盛って与えたので、名前は「ガムンジャンアギ」になった。

3人の娘が育つ間、不思議にも運が良くなり、夫婦は大金持ちになった。そして、乞食生活をして暮した頃のことは忘れてしまい、次第に傲慢になっていった。

歳月が流れて娘たちも15才を超えていた。ある日、退屈だった夫婦は3人の娘を呼んで「君たちは誰のお陰で暮しているのか」と尋ねた。

すると、ウンジャンアギもノッチャンアギも「神様、地下様のおかげです。お父様、お母様のお

かげです」と答え、夫婦を喜ばせた。ところが、末っ子のガムンジャンアギはあまりにも堂々と「神様、地下様、お父様、お母様のおかげでもあります、私のヘソの下陰部のおかげで生きています」というのではないか。あらゆる贅沢をさせて育てたが、そのような不屈な話をするとは!怒った夫婦は親不孝もはなはだしいとし、ガムンジャンアギを追い出してしまった。

ガムンジャンアギが家を出て、さびしくなった夫婦は、ガムンジャンアギがご飯でも食べに来るように、長女のウンジャンアギに言い伝えさせた。ウンジャンアギは嫉妬し、踏み石に上がって大声で「お父さん、お母さんがあなたを殴りに来るから、さっさと行きなさい」と叫んだ。姉の下心を見抜いたガムンジャンアギは、「ムカデにでも生まれ変わってしまえ」とつぶやいた。そのため、ウンジャンアギはムカデになって踏み石の下へ入ってしまった。

待っても末娘と長女が来ないので、夫婦は次女を呼んでガムンジャンアギを連れて来るように言った。ノッチャンアギは門の外に出て堆肥の上に上がり、やはりウンジャンアギと同じように叫んだ。ガムンジャンアギが今度は、「キノコにでも生まれ変わってしまえ」とつぶやくと、ノッチャンアギは堆肥に根をおろしたキノコになってしまった。

3人の娘が帰らないので、不吉な予感がした夫婦は急いで門を押し開け飛び出したが、扉に目をぶつけて盲人になってしまった。その日から財産はどんどん減ってしまい、夫婦は再び乞食になって物乞いに歩きまわるようになった。

一方、ガムンジャンアギは優しい男性に巡り会い、金持になって豊かに暮らすようになった。彼女は自分が家から追い出された後、両親が盲人になり、再び乞食になったことをよく知っていた。両親に会いたくなり、夫と話し合って100日間の乞食の宴を開くことにした。乞食になった両親が必ず訪ねてくると考えたのだ。宴が始まってうわさにうわさが広がり、多くの乞食が集まったが、両親の姿は見えなかった。

いつのまにか、100日が過ぎて祭りを終える日になった。ガムンジャンアギは集まった乞食たちを焦るような思いで見守った。日が暮れる頃、見覚えのある乞食夫婦が現れた。ガムンジャンアギは広間にむかえ、テーブルの足が折れるほどの食べ物と並べ、貴重な薬酒で接待した。

わけも分からずあたふたと食べた乞食夫婦は、生きてきた話をし初めた。物乞いをする間に出会って夫婦になった若い頃の話、ウンジャンアギ、ノッチャンアギ、ガムンジャンアギを産んで一躍富豪になり、贅沢をした頃の話、ガムンジャンアギを追い出してから盲人になり、再び乞食になった話などを長々と続けた。涙を流して聞いていたガムンジャンアギが「お母さん、お父さん。私がガムンジャンアギです」と叫ぶと、びっくりした夫婦が「なに、おまえがガムンジャンアギかい」と言いながら盃を落とし、その瞬間、目が開いた。

ヨンドゥン

風の神、燃灯ハルマン

燃灯ハルマンが済州を訪ねる経路は、シベリア季節風が吹いてくる風の道だ。したがって、燃灯ハルマンの済州来訪は、済州島の旧暦2月の歳時風俗であり、2月の天気予報を神話で聞かせるものだ。

ハンリムウプ グイドッリ

燃灯ハルマンは旧暦2月の燃灯月になると、一番先に翰林邑帰德里「ボットツケ」という入り江から入ってくる。漢拏山を回りながらモモやツバキの花見をし、野原には五穀の種をまいて、海^{ウド}辺には海草の種をまき、さらに村々に種をまいて牛島から済州島を離れる風の神だ。こうして燃灯ハルマンが去ると、済州にも新春がやって来る。

燃灯ハルマンが済州に留まる半月の間、予測できない気まぐれな天気と厳しい寒さが続く。済州の人々はこの時期に雨が降れば、「燃灯神が雨具を着けてきたので雨が降る」といい、天気が暖かければ、「偽の燃灯がきた」という。燃灯ハルマンは風の神なので、強い風を連れてくるが、偽の燃灯は粗末な姿でやって来るので、天気が暖かくて風に備えなくても良いという。燃灯ハルマンが娘を連れてくる時は、娘とは仲が良くて暖かい天気が続くが、嫁を連れてくる時は、嫁とは気が合わないの、気まぐれでくずついた天気が続くという。



燃灯祭

セギョン

ジャチョンビ

美しい世経神、自請妃

「世経」は土地を意味し、「農作をする」、「地中に埋められる」という意味を含んでいる。そして農地、陰宅という意味も含み、土地を「世経の土」、あるいは「世経ノブンドウル」と呼ぶ。世経神は土地を守る神、農作業を助ける農耕神である「セギョンハルマン世経婆様」、すなわち自請妃を指す。

上世経はムングッソンムンドリョン、中世経は自請妃、下世経はジョンイオシンジョンスナムと呼ぶこともある。農耕神である「自請妃」は、彼女自身が天に求めて女として生まれた神だ。両親からすれば、仏を供養して得た子供だった。

自請妃神話は、天から降りたムンドリョンに、水の器にヤナギの葉を浮かして恋心を伝える話で始まる農耕神話だ。

自請妃は蓮華池に洗濯をしに行き、天から勉強しに来たムンドリョンを見て、恋に落ちる。男装をしてムンドリョンについて行って勉強した。鈍いムンドリョンは自請妃に気付かずだったが、天にいる父に呼ばれ、ソス王の姫と婚姻するため天に戻ろうとするが、その直前に事実を知る。しかし、ムンドリョンは去ってしまい、ムンドリョンを待つ自請妃は下人だったジョンスナムの誘惑に苦しめられる。ジョンスナムが寄ってくるたびに優しくなだめていたが、結局、自分の膝に頭を乗せて横にさせ、サルトリイバラを折って耳を刺し、殺す罪を犯してしまう。

自請妃は紆余曲折の末、天に昇ってムンドリョンに会ったが、難しい試験が待ち受けていた。積極的で賢い自請妃はすべての試験に合格し、ソス王の姫を抜いてムンドリョンと婚姻し、天上で幸せに暮らした。

ある日、天上で大騒ぎが起きる。その騒ぎを鎮めた自請妃に玉皇上帝が国を与えるという提案するが、これを拒み、代わりに五穀の種をもらって7月15日にムンドリョンとともに人間界に降りてきた。そして、ムンドリョンと自請妃は百姓の農作業を助ける農耕神になり、ジョンスナムは牧畜神になった。

自請妃は多様な能力を持った美しい女神だ。女性英雄神、知恵の神、生産と豊穡の神、愛とロマンの神だ。

ドケビ神話

ヨンガム

ヤンバン

「令監ボンプリ」では、ドケビを「令監」と呼んでいる。この令監はソウルの両班で、各地域の名山を有している山の神だ。漢拏山を取りに来た末っ子令監は、「酒が好きで、唄も上手な」道化師のようだったので神として優遇される。この神話の令監ドケビは道化の神、踊りの神、芸術の神だ。

「乞食姿のみすぼらしい姿」の令監をなだめてご馳走し、一方ではからかって追い出すユーモアと風刺は、「令監ノリ遊び」を作った。

現実の両班は乱暴かつ貪欲で、収奪と悪事に明け暮れる貪官汚吏型の人物だ。両班によって強いられる挫折や人生の苦難は民衆を苦しめるが、酒を飲んで踊りを踊り、両班の虚像をからかいながら、病苦から解放される民衆の情緒は、神聖な空間で神人同楽の平等と解放、そして自由を勝ち取る。これが芸術の根源となる力を創造する動力だ。これは令監神が芸人道化であり、創造の力、蘇生の力、不生不滅の力を駆り立てる「踊りの興」を持っているためだ。

令監ノリは船王グッ、堂グッ、病治療グッで行われていたが、令監神の性格は特に病氣治療グッ(別名、踊るグッ、ドウリングッ)で行われる。

耽羅の開国神話

大昔、三人の神人が漢拏山の北方の麓の地から現われた。彼らが出てきた三つの穴を
モフサンヒョル サンソンヒョル ゴウルラ ヤンウルラ
「毛興穴」というが、これは現在の三姓穴だ。三神人は出てきた順に高乙那、梁乙那、
ブウルラ
夫乙那といった。容貌が端正で気品があって度量は広く、闊達で、普通の人間とは違っていた。彼らは革衣を着て狩猟をしながら暮らした。

ある日、漢拏山に登って東海を眺めると、紫色の霧の中に木箱が浮かび、海辺に流れついた。三人の神人が行って箱を開くと、中には冠帯を整えて紫色の服を着た男が卵形の玉函を守っていた。玉函を開くと、中には15～16才ぐらいと見える、青い服を着た三人の娘が並んで座っていた。美しい顔に奥ゆかしくて慎ましい気品が感じられた。玉函の中にはまた、小牛と小馬そして、五穀の種子もあった。

玉函を守っていた男が三人の神人に話した。

「私は東海の壁浪国の使者です。私どもの王様には三人の娘がいましたが、嫁入りする年齢になっても配偶者を求めることができず、嘆いて数年を送っていました。ある日、紫宵閣に上がって西側の海を眺めると、紫色の氣勢が空につながり、きらびやかな曙光が漢拏山の高い峰に立ちこめていました。そこから高・梁・夫の三人の神人が出て、国を建てようとしているが、配偶者がいない。神人に三人の姫をお連れしろと命じられ、やって参りました。須く、婚礼を挙げ、大業を成し遂げて下さい」

話を終えた使者はその場を去った。三人の姫を乗せてきた箱が着いた温平里海岸を「ファンノアル」という。ここは、姫が「花箱」から出できた入り江という意味で「ファソング」と名付けられたと言われる。



婚姻池

三人の神人はすぐに天に祭祀を捧げ、「ホンインジヒンジユク」で婚礼を挙げた。人々は高・梁・夫の三人の神人が婚姻した池を婚姻池と呼んだ。

彼らは水があって土地が肥沃なところを探し、各々弓を撃って居住する土地を仲良く分け、一徒、二徒、三徒と名付けた。それから五穀の種をまいて農作業を行い、家畜を育てた。日増しに豊かになり、ついに人間世界の「耽羅国」を築いた。

三人の神人が弓を撃った所を「サルソンディワツ」といい、矢が打ち込まれた石を「サンサソク三射石」という。三射石は、朝鮮時代の牧使だった金浄が収拾し、今の済州市禾北洞の一か所に集めて三射石碑を立てた。三射石には当時金浄が作った次のような詩が刻まれている。

毛興穴古	遠い昔の毛興穴
矢射石遺	射られた矢が刺さった石が残る
神人異迹	三神人の奇異な痕跡
交映千秋	月日が流れて今も輝く



伝説

痩せた土地を耕した島の人々

済 州島の伝説は自然伝説、歴史伝説、信仰伝説に分けることができる。
自然伝説は、済州の地理的条件を語るのが主流だが、自然の由来、その自然とともに生きなければならなかった人々、そしてその人々が耐え忍んだ暮らしの歴史と方式を垣間見ることができる。

歴史伝説は、歴史的人物や事件を形象化した話だ。力強い力士など優れた能力を持つ特異な人物が世情のために挫折したり、あるいはそれに適応して生きていく話を中心だ。済州の歴



史伝説は、朝鮮半島に比べ、没落や挫折の様相が強調されず、悲劇的な傾向は強くない。これは伝説の主人公が実在した人物だったため、その事実を語ろうとしたからだ。

信仰伝説は、風水に関するものが多い。これは不毛地を切り開いた島の人々の暮らしと文化を伝えている。

済州自然の二つの顔と悲劇の人物

済 州島の自然は、美しすぎて畏敬の念を抱くほど神秘的だ。しかし、済州の人々は済州自然が持つもう一つの顔を暮らしの中で体験し、そのために挫折と苦痛を味わってきた。海の真ん中に孤立したこの火山島は、生活の基盤とするにはあまりにも厳しい所だったのだ。

済州の自然が持つ二つの顔に畏敬と葛藤を抱いて生きた済州の人々は、それを伝説として創り直した。

一つが足りず

ヨンシル

霊室は奇岩怪石の絶壁に囲まれている。千態万象の奇異な怪石群は將軍のようでもあり、仏のようでもあり、五百將軍、または五百羅漢という名を持つ。だとすればその数が500のはずだが、伝説の中の数字は一つが足りない499だ。

畏敬の念を抱くほど美しく、神々の部屋と呼ばれる霊室には、悲しい伝説が伝えられる。

五百將軍の母ともいい、済州島を造った女神とも言われるソルムンデは、他人の服は作っても自分の下着は作ることができなかった。あまりにも巨大なソルムンデの下着を作るには100巻の生地が必要だったが、それほど多くの生地を手に入れることができなかったからだ。ソルムンデは済州の人々に生地100巻を集めれば、済州島と陸地をつなぐ橋を造ると約束する。ところが、済州の人々が集めた生地は99巻しかなく、ソルムンデは橋をかけるのを止めてしまった。済州市の朝天里と新村里の沖から北に伸びた、済州の人々が「ヨ」と呼ぶ岩の並びがその跡だと伝説は伝えている。一卷の生地が足りなかったため、済州は永遠の島にならざるをえなかったという。

済州島に猛獣がいない理由もやはり「一つ」が足りなかったためだという。これは九十九谷の伝説が伝えている。本来は百の谷だったが、一つの谷が虎のような猛獣を全て集めて消えてしまった。そのため、九十九谷になってしまい、済州は猛獣がいない島になったという。

この島の血脈を切ってしまうと…

済州は地下水が休みなく湧き出る水の豊富な島だ。しかし、上水道が開発されるまで、済州は水が貴重な島だった。その理由を伝える代表的な物語が胡宗旦の伝説だ。この伝説から済州の人々の風水観念を知が窺える。

王侯の地である済州に、中国の秦始皇が風水師の胡宗旦を送り、水脈と地脈をすべて切ることを命じたという。水神が守っていたので、胡宗旦が水脈の切断に失敗したという「ヘンギムル」物語は、済州のあちこちに伝説として残り、その内容も似通っている。

胡宗旦の地脈切断を素材にした済州の伝説からは、荒れはてた不毛の地だったこの島を理解し、乗り越えようとした済州の人々の心性が読み取れ、原初への回帰、樂園への復帰の可能性を余白に盛り込んでいる。

このような風水素材は、良い土地を使うことによって偉大な人物の誕生を祈願し、人が死亡すれば、良い陰宅地を選んで子孫の開運を祈ることも、同じ視点から解釈することができる。済州の人々は、自分たちが生きている土地と水が風水的に吉祥の地であることを強調し、後代に立派な人物が誕生することを願っていた。

地相師が葬式の場所を選んで、葬式を執り行う方法を教えたのだが、神聖な地域を表わす石があり、その石を掘りおこすやいなや禁葬地になり、湧き水が出てきたという陰宅風水の伝説は全島に伝わっている。

非凡な人物の悲劇的な結末

風水伝説には、力強い力士など非凡な能力を持つ人物が登場することが多い。済州島での暮らしは絶え間く労働力が求められ、力が大きな比重を占めたためだ。このような念願が込められた力士の物語は悲劇的に終わる。これは済州の人々が体験した限界を物語っている。非凡な能力を持って生まれたがゆえに、当代を生きていくことのできなかった特異な人物の話を通じて現実を批判し、または風刺しようとしたのだ。

ある若い夫婦に双子が生まれた。ところが、赤ん坊のわきに翼が生えていたので、夫婦は大変心配する。赤ん坊に翼があるということは、力強い力士になるだけでなく、立派な人物になる兆しでもあった。しかし、翼のある赤ん坊が生まれたことを官衙に知られれば、逆賊として捉えら

れ、3代が減びるかも知れず、夫婦は思い悩んだ。

夫は父の墓地が「将軍対座型」であるのが原因だと考え、墓を移葬することにした。墓を移葬しようと土を掘り起そうとしたとき、その中の大きなコウノトリが後ろに足を立て、翼を広げたかと思うと、そのままがっくりと倒れて死んでしまった。移葬を終えて家に帰ると、子供たちはすでに死んでいた。

済州には赤ん坊力士に関する伝説が少なくない。これは、力強い力士に象徴される非凡な人物が生きていけなかった現実を描写している。

力の強い力士であり、学識もある李座首の物語は、正義漢ではありながら、権力によって挫折する抵抗的人物として描写される。腐敗した役人たちの横暴に立ち向かい、官の腐敗を告発する、または正義に満ちた座首の姿としても現れる。

ジン ジャス
翰林邑明月里出身の秦座首

と呼ばれる人物の物語も伝え

グク テ
られる。彼の実名は国泰で、朝鮮英祖の時代に座首の職を勤めたという。

グムヌン
秦座首が金陵に学問を習いに行く途中、美女に化けたキツネが玉を口にくわえて現れ、秦座首の口にもくわえさせ、血を吸った。この事実を知った秦座首の師は、玉を口にくわえたら、天と地と人を見てその玉を飲み込めと教える。しかし、秦座首は玉をくわえて慌てたあげく、人だけを見て天と地を見るのを忘れてしまう。その結果、秦座首は人に対しては立派な名医になったが、天と地については精通できなかったという。



ギム・トンジョンが済州の人々のために造ったというジャンスムル長寿水



民謡

山を越え、水を渡った済州女性のハンプリ恨の解消

済州には数多くの民謡が伝えられてきた。済州の民謡は、遊びながら唄う遊戯謡より労働謡が多い。いや、ほとんどの民謡が労働謡だといえる。済州地域での遊戯謡は、城邑地域を中心に官辺ギセンの妓生によって伝えられ、民間に伝播した唱民謡が残っているだけで、集団遊戯謡や踊りのための舞踊謡などは見られない。

済州島の労働謡の中で高い割合を占めるのは、女性たちが仕事をしながら唄う女性労働謡だ。これらの唄には女性たちの情緒が繊細に表われている。畑に行って草取りをしながら唄う畑作唄、海女が海女漁をしながら唄う海女唄、さらにムギなどの穀物をメットル碾き臼とバンア搗き臼で挽きながら唄うメットル・バンア唄は、済州女性の情緒を最もよく表している。碾き臼を回すことは、時間はかかってもきつい労働ではなかったのも、自分の情緒を表現しやすかった。



メットル・バンア唄の試演

男たちがまげを結っていた時代に両班が使った冠や宕巾、帽子、網巾などを編みながら唄う冠網労働謡も女性たちの唄だった。冠網を編むことは、禾北、朝天、道頭などの入り江を中心にした近隣の村で盛んだったが、それも主に女性の仕事だったためだ。済州の女性は、労働謡の歌詞を通じて苦難を乗り越えようとする強い意志を積極的に表わしてきた。

粘り強い生命力で伝えられた唄

済州に伝わる民謡のいくつかは「済州民謡」という名で、国家指定重要無形文化財第95号に指定されている。それらは、オドルトギ、サンチョンチョモク山川草木、ボンジ歌などの唱民謡と、ひき臼唄である「ゴレゴヌウンソリ」だ。

特に、唱民謡の3曲は朝鮮朝500年にわたり、旌義県の県庁所在地所属の官妓によって伝えられた唄が民間に伝えられ、広がった唄だ。

「オドルトギ」は、全島に広がる済州の風景と、その中で生きた人々のロマンチックな情緒が一層明るく元気なイメージで唄われる。オドルトギは、グッゴリジャンダン 韓国の伝統的なリズム、拍子に杖鼓や水瓶を伴奏道具にして唄う。パンソリの「フンプ歌」と「ガルジギ・タリョン」にもオドルトギの冒頭に似た辞説があることから、全国で唄われていた唄が済州島に残ってその原形が維

持され、済州化したと推定されている。

サンチョンチョモクは、春の景色を唄う。万物が蘇る春の景色の中で、男性が女性を誘惑する辞説になっている。ボンジ歌は、表善面城邑里で唄われる唱民謡だが、一幅の繊細な韓国画を見るようだ。

済州道無形文化財第1号に指定された「海女唄」は、海で海女漁をしながら海女が唄い、伝え



海女漁に出る海女

られた原始漁業労働謡だ。この唄は船の櫓を漕ぎながら、テワク海女漁をするとき使う浮きに頼って漁に出る時、また漁を終え、興に乗って遊ぶ時も唄っていた。特に、船で沖へ出る時や、済州島の外へ出家ぎに行く時に櫓を漕ぎながら唄った「ヘニョノジョッヌンソリ海女の櫓を漕ぐ唄」が海女唄の代表格といえる。

済州道無形文化財第9号である

「バンアッドルグリヌウンソリ碾き臼を転がす唄」は、馬を使う碾き臼の上石と下石を山や海辺、野

原、川辺などで製作し、数人の住民が村へこれを運ぶときの運搬労働謡だ。

済州道無形文化財第10号である「メルチフリヌンソリカタクチイワシ漁の唄」は、カタクチイワシ漁の作業過程で唄う漁業の労働謡だ。歌詞には、カタクチイワシ漁の作業がありありと再現されている。

ジェジュノンヨ

済州道無形文化財第16号に指定された「済州農謡」は、畑を踏む唄である「バッポリヌンソリ」、草取り唄の代表格である「サデソリ」、穀竿で穀物を叩きながら唄う「叩き唄」の3類型だ。

エウォルウア

済州道無形文化財第17号である「ジンサデソリ」は、涯月邑の中山間地帯を中心に伝えられる民謡で、済州の他の土俗労働謡に比べて美しい旋律や優雅な旋法を特徴とし、土俗的な芸術美が感じられるという評価を受けている。

その他にも、下貴2里の「燕麦・大麦農作業の唄」である「堆肥踏む唄」、「ドッゴルムボリヌン唄豚糞堆肥を踏む唄」、「荷物を積んで行きながら唄う唄」など、牛馬を引きながら唄った独特の民謡が伝えられてきた。



濟州語

韓國人も不思議に思う独特な韓国語

韓 国で話される言葉を韓国語という。韓国語は地域によって、または話す人によって多少の差があるが、これを方言的な相違という。

濟州語 濟州の方言とは、昔から濟州の人々が濟州地域で使い、現在も使われている言葉を指す。

濟州語は間違いなく韓国語だ。したがって、音韻や語彙、文法などは、韓国語とそれほど差



济州語を使った商号が増えている

がない。差があるとすれば、方言的な差があるだけだ。ところが、韓国の人々も济州語を不思議に思う。通常は理解できず、一瞬外国語のように聞こえるともいわれる。どうしてだろう。

济州語には韓国語の過去が残っているからだ。さらに、济州語には現代韓国語の他の方言にはない独特の音韻、独特の語彙、独特の語尾が使われている。

現代济州語には韓国語の古い語彙が多く残る。そのため、韓国語学界では济州語を貴重な学術資料として評価し、济州島を韓国語の宝庫だと呼んでいる。

济州語は济州人の思想と情緒をそのまま反映しており、济州文化の精髓を理解する原形とされる。

独特の音がある

現代济州語の音韻は、現代韓国語または現代韓国語の標準語と大きな差はない。差があったら、かつて使われた一部の音韻が現代標準語では使われず、現代济州語では依然として使われていることだ。この音韻のために、他の地域では使われない独特の語彙が存在し発話される。

現代济州語の音韻の中で独特なのは、「ㄹ」が使われていることだ。この音は「오[オ]」でもなく「아[ア]」でもない。「하다」と「하다」は現代韓国語の標準語の「하다[為]する」と「많다[多]多い」に対応する。「돌」と「돌」は現代韓国語標準語の「달[月]」と「돌[石]」に対応する。「말」と「말」は現代韓国語標準語の「말[馬]」と「말[言]」に対応する。

「ㄹ」は中世韓国語では一般に使われた音で、一部地域で近代韓国語を経て現代韓国語でも使われた。しかし、今日の現代韓国語と現代韓国語標準語ではこの音が使われてい

い。現代韓国語標準語では、中世韓国語で「ㄹ」が発音されたものが初音でほとんど「ア」に変わり、一部の韓国語方言では「オ」に変わった。ところが、現代済州語では「ㄹ」の音をそのまま使うことがある。

独特に分化した語彙

現代韓国語の地域方言は地域ごとに差があるが、語彙によってはある地域だけで独特に使われるものもあり、多数の地域で共通して使われるものもある。

中世韓国語では、家の主な出入口である門を意味する言葉として「오래ㄹ」が使われた。この「오래ㄹ」は、時間の経過とともに家とその周辺が変わり、韓国のある地域では使わなくなって消滅し、また、ある地域では形態変化または、意味変化や分化をして使われている。

現代韓国語の標準語で「오래ㄹ」は、村にある数軒の家が路地で区画された場所を意味する。ハムギョンド咸鏡道では「오래ㄹ」が「마을村」を意味し、また近所を意味する。さらに、家族や近い親族で成り立った共同体である一族も意味する。これらの地域では、中世韓国語の「오래ㄹ」が形態変化はせず、意味分化だけを起こし、今日まで使われている。

しかし、現代済州語では形態変化を起こして「올래올레」になった。もちろん意味分化も起きた。「올래올레」は、村の通りから済州の民家の庭につながる狭い道などを意味し、今も使われている。

現代韓国語の標準語で「팽나무ペンナム、エノキ」というニレ科の落葉広葉喬木がある。その実を「팽벤」というが、「팽벤」が実る木という意味で「팽나무ペンナム」と呼ばれているのだ。現代済州語ではこの木を「곶낭[곶낭]ボンナン・곶남[곶남]ボンナム」とし、実を「곶보ク」という。ところが、「곶낭ボンナン・곶남ボンナム」を漢字では「彭木(팽목ペンモク)」と書いた。したがって、「エノキ」に対応する現代済州語「곶낭ボンナン・곶남ボンナム」は、独特に分化した語彙の一つといえる。

独特に作られた語彙

現代韓国語の標準語である「마늘マヌル、ニンニク」は、中世韓国語で「마늘・마늘[蒜]」などとされたが、現代済州語では「마늘マン」に分化した。現代済州語「마늘マン」は、他の言葉と結合して言葉を分化させた。現代韓国語標準語「파파、ネギ」または「쪽파チョッパ、ワケギ」、「줄파ジュルパ」に対応する現代済州語は「페마늘ペマン」だ。「페마늘ペマン」は現代韓国語「파파」に対応する現代済州語「페페」と「마늘マン」を複合した語彙だ。

また、現代韓国語「마늘マヌル」に対応する独特な言葉として、「대산이デサンイ」または「궤

대산이^{ゴブデサンイ}・궂대산이^{コブデサンイ}」がある。「대산이^{デサンイ}」は、대산^{デサン}という漢字語の大蒜の後に「-이^イ」を付けた言葉で、「궂대산이^{ゴブデサンイ}・궂대산이^{コブデサンイ}」は「대산이^{デサンイ}」の前に「마늘^{マニク}」を意味する濟州語「궂(궂)ゴブ、궂(궂)コブ」を付けた言葉だ。

現代韓国語「달래^{タルレ、ノビル}」に対応する現代濟州語は、「뽕마농^{クオンマノン}」または「드룻마농^{ドウルマノン}」だ。「뽕마농^{クオンマノン}」は、野原韓国語でドウルに棲むキジ韓国語でクオンが食べる「마농^{マノン}」という概念からできた言葉で、「드룻마농^{ドウルマノン}」は、野原現代韓国語でトウルで採れる「마농^{マノン}」という意味でつくられた言葉だ。

現代韓国語でセミ科の昆虫の総称として、一般に「매미^{メミ}」が使われる。この言葉は中世韓国語「미미^{ミエミ}」が変化した言葉だ。現代韓国語の地域方言で「매리^{メリ}」、매롱^{メロン}、미암^{ミアム}、매아미^{メアミ}などが使われるが、「미미」や「매미^{メミ}」の変音といえる。ところが、現代濟州語ではこれに対応する変音を確認することはできない。ただ、独特の語彙である「재열^{ジェヨル}、젤^{ジェル}、재^{ジェ}、자^{ジャ}、자리^{ジャリ}」などが確認されている。これらの濟州語は他の地域では確認されていない。

韓国語の古語の多くが残る

鬼神に仕えて吉凶を占い、グツを職とする人を「シャーマン(shaman)」というが、現代韓国語では「무당^{ムダン}」または「당골^{タンゴル}」という。しかし、濟州語では「심방^{シムバン}」という。この「シムバン」という言葉は、中世韓国語の「シムバン」だ。『楞嚴經諺解(1462)』を見れば、漢字語の巫は「女シムバン」と翻訳され、漢字語の祝は「男人シムバン」と翻訳された。これを見れば、中世韓国語で確かに「シムバン」という言葉が使われ、それが濟州語にそのまま残って伝えられているのが分かる。しかし、濟州語以外の他の韓国語では、「シムバン」という言葉を確認できない。

地球上で陸地を除いた部分で、塩水が溜まった部分を現代韓国語で「바다^{バダ}(海)」という。この「바다^{バダ}」に対応する中世韓国語は「바당^{バダッ}」と「바를^{バル}」、「바랑^{バラッ}」などが確認されている。「바다^{バダ}」に対応する古代韓国語は漢字借用表記で「波珍(파진^{パジン})・波珍(파진^{パジン})」と表記されたが、これは「바를^{バル}」という表記で再構成された。

ところが、現代濟州語では「바다^{バダ}」に対応する言葉として「바당^{バダン}」と「바르^{バル}」が使われている。「바당^{バダン}」は古代韓国語「바들^{バドル}」と中世韓国語「바당^{バダッ}」につながり、「바르^{バル}」は中世韓国語「바들^{バドル}」と関連している。しかし、現代濟州語を除いた韓国語では変音「바다^{バダ}」だけが残っている。

文章構造は現代韓国語と変わらない

現代済州語の文章構造は現代韓国語と大きく変わらない。ただし文章構造に現れる、一部の音韻と語彙、文法形態素などにおいて方言的差が反映される。そのため、済州の人が話す文章の意味が外部の人にはわかりにくい場合が多い。

現代済州語「하영복서^{ハヨンボプソ}」と「쉬영갑서^{シイウォンガプソ}」に現れる「하영^{ハヨン}」または「쉬영^{シイウォン}」は、現代韓国語の標準語で「多い」または「休んで」に対応する言葉だ。ところで、「하^ハ-[多]」についての「영^{ウォン}-」は副詞的な機能をし、「시^シ-[休]」についての「-ウォン」は、時間的前後関係を現わす連結語尾として機能している。「복서^{ボプソ}」と「갑서^{ガプソ}」は、現代韓国語標準語で「보십시오^{ボセヨ}」または「보세요^{ボセヨ}見なさい」、「가십시오^{ガセヨ}」または「가세요^{ガセヨ}行きなさい」に対応する言葉だ。「복서^{ボプソ}」と「갑서^{ガプソ}」は、それぞれ「보^{ボー}」[見]と「가^{ガー}」[去]に、丁寧な命令を現わす終結語尾である「-하^ハ서^ソ」が加わった言葉だ。

現代済州語「왕 뽕 강 줄읍서^{ワンバンガンゴルプソ}」は、現代韓国語標準語で「와서 봐서 돌아가서 말하십시오^{ワセバセドゥラガセマハシプシオ}来て見て戻って話して下さい」という意味を持つ言葉だ。「왕^{ワン}」と「뽕^{バン}」、「강^{ガン}」はそれぞれ「오^{オー}」[来]と「보^{ボー}」[見]、「가^{ガー}」[去]に、時間的前後関係を現わす連結語尾「-양^{ヤン}」が加わった言葉だ。「줄읍서^{ゴルプソ}」は、現代韓国語「말하다^{マハダ}話す」に対応する古語で、済州語の「줄^{ゴル}」の活用型「줄^{ゴル}」に丁寧な命令を表わす終結語尾「-(으)하^ウ서^ソ」がついた言葉だ。

以上のように、現代済州語の文章構造は現代韓国語と差はないが、昔から伝わる固有語彙がそのまま残って使われたり、特異に分化した語彙や語尾が使われている。そのため、済州出身ではない人々は、このような言葉を聞き取ったり理解するのに苦労する。



臥屹本郷堂

巫俗信仰

済州文化の根

済 州は巫俗がよく保存・伝承されている地域だ。早くに仏教と儒教が入ったが、その威勢に押されず中心的な位置を守ってきた。大きな対立なしに仏教は受け入れた一方で、儒教は済州へ影響力をおよぼすことが容易ではなかったようだ。18世紀初め、「堂五^{ダン}百^イ、寺五百の破壊」で象徴される李衡祥牧使の大々的な儒教化政策が実施されたものの、まもなく元に戻ってしまったようだ。

18世紀末から19世紀初め、済州の巫俗は大きな節目をむかえる。本郷堂を中心にした村祭りで営む祭祀が巫俗から儒教式に代わって酺祭になった。巫俗の村祭と併行し、男性中心の酺祭が同時に行われることも多かったが、儒教式の儀礼が民間に浸透していった。19世紀半ば、身分制が崩れる時期に、個人儀礼である儒教式の先祖神への祭祀も普遍化したものとみられる。

そして、20世紀初めの日本の侵奪により、村の共同体を支える村祭が弾圧され、危機に直面した。19世紀末から20世紀初めにかけて済州に入ってきたキリスト教の影響で、巫俗が排除の対象になることもあった。

20世紀以後、キリスト教が勃興し、済州の西側地域の巫俗は弱まった。1948年の済州4・3事件で中山間の村の堂が破壊され、村の信仰とともに打撃を受けた。最も大きな影響を与えたのは、1960年代セマウル運動と迷信打破運動だ。

多くの困難もあり、巫俗信仰の本領である本郷堂が毀損された所もあるが、それでも村の信仰は守られた。もちろん、シムバン(巫の済州の方言)はその数が劇減した。近代教育を受けた若年層は巫俗を不信し、彼らの両親の信仰を世襲しなくなったが、済州の巫俗はそれなりの伝統的な地位を守ってきた。

近代化の旗を掲げた疾風怒涛の時期が過ぎると、巫俗も伝統文化の一部として保護と保存の対象になり、国から無形文化財に指定された。最近ではユネスコが指定した世界無形文化遺産(済州チルモリ堂燃灯グッ)に登録され、文化遺産としての重要性が広く知られている。

済州の巫俗を知る

済州には今でも360余りの神堂が村のあちこちに残っており、巫俗信仰の粘り強い生命力が垣間見られる。済州の村堂は村の守護神が鎮座する「神の家」であり、石垣を囲い、堂の境界を明確にしていること以外は、一概に説明できないほどそれぞれ個性を持っている。大別すると、形態によって岩陰に位置したひつ型、石垣で囲まれた石



城山七日堂

垣型、建物を建てた堂屋型などがある。その中に鎮座した神の職能により、本郷堂、七日堂、
ヨドゥレッダン ヘシンダン サンシندان
 八日堂、海神堂、山神堂などに分けられる。さらに、一つの神を祭る単独型もあれば、二つ以上
 の神を祭る統合型もある。ほかにも、夫婦神がそれぞれ別居したり、村が分かれて同じ堂がもう一つ
 新たに作られる分離型もあり、数か所の村で一つの本郷堂を共有する集中型もある。

ボンヒヤンダン

本郷堂

本郷堂は村で最も重要な堂だ。村の生産、物故、戸籍を司る神が鎮座しているためだ。歴
グァンヤンダン チャギダン
 史書には光陽堂と遮帰堂などが紹介されている。全島の神堂は光陽堂を祖宗とすると記されて
ソンダン
 いるが、今は松堂を祖宗としている。松堂ベクジュットの18人の息子が済州市の周辺に鎮座し
 たという。済州市の多くの本郷堂は松堂から分かれた堂だ。

地から出てきたソロソチョングクは、江南天子国の金の砂場から出て済州に入ったベクジュットと
 婚姻し、多くの子供を授かった。狩猟で暮らすことができなかったベクジュットは、夫に農作を薦
 める。ソチョングクが畑を耕していたところ、僧侶が空腹だというのでご飯を出したが、九瓶のご
 飯と九瓶の汁を食べ尽くしてしまった。そのため、ソチョングクは畑を耕していた牛を殺して食べた
 が、それでも満腹にならず、近所の牛まで殺して食べた。これを知ったベクジュットは別れたいと
 言った。しばらくして二人の間に生まれたムングッソンは、父に乱暴をふるって追い出され、銑鉄
 箱に入れられ海に捨てられる。ムングッソンが入れた箱は東側海の竜宮へ流れ、ムングッ
 ソンは竜王の3番目の娘をめとる。ムングッソンは大食家である父のソチョングクの血を引く大変
 な大食家だった。そのため、竜宮を追い出されて江南天子国に到着する。そこで混乱を鎮めた
 後、3千の兵士を率いて済州島に戻る。それを聞いた両親は自ら退き、ウッソندان上の松堂とア
 ルソندان下の松堂の堂神になった。神々の世代交代が行われたという話だ。

ビョソンミョン

松堂神話に出てくる18人の息子は済州島の全域、特に済州市から表善面に至る東部に主に
 祭られている。

ワフル ボンヒヤンダン

臥屹本郷堂

朝天邑臥屹里の人々を見守る本郷神を祭る堂(済州道民俗資料第9-3号)。大きな二本のエノキの枝の下に
 広い祭場を設けている。村共同体の聖所であり、定期的な堂グツを通じて共同体の絆を確認する機会を提供
 する。ここで祭る堂神は村全体の安寧を守り、生業や産育、治病などの祈願を聞き入ると信じられている。
 臥屹本郷堂ではハロサントとソジョンソンの娘を祭る。ハロサントは本郷神であり、山神であり、ソジョンソ

の娘は産育神であり、治病神だ。職能が異なる男女の神が祭られている。臥屹本郷堂は松堂本郷堂から分かれたものとして伝承されている。これはハロサントが松堂本郷堂のグムベッジュツの11番目の息子だということから具体化される。この堂では年に二度、大きな堂グッを行う。旧暦正月14日に神過歳祭、7月14日にマブルリム祭を行う。メインのシムバンがグッを専属で担当する。臥屹里では儒教式の村祭を別途に行わず、堂グッが唯一の村祭である点、さらに男女共同の村祭という点で注目に値する。

イルレッダン

七日堂

七日堂は、祭日が7の日(7日、17日、27日)であることに由来している。産育と治病を司る神が鎮座しており、子供が病気の時に祈れば効験を得るというが、特に皮膚病治療に効果があると伝えられる。土山の七日堂系列が有名で、その系列に約90の堂がある。

松堂のグムベッジュツとソロソチョングクとの間に息子が生まれたが、その子供が無作法だったので追い出された。石函に入れられ死ぬところだったが、函が東海の竜王国に漂着し、竜王の末娘の助けで生き返り、末娘と婚姻して松堂に戻る。両親に挨拶して戻る途中、末娘は喉が渇き、豚の足跡に溜った水を飲んだ。豚毛が鼻に入ると、これを焼いてにおいをかいだ。夫は妻が豚肉を食べたと思い、穢れたと言って馬羅島へ流罪に処する。その間、妻は息子7兄弟を産んで育て、夫は新たに妾をめとったが、本妻に罪がないことを知り、連れ戻して一緒に暮らす。本妻は七日堂神になって子供の病気、特に皮膚病を治療する神になった。

ヨドゥレッダン

八日堂

八日堂は、祭日が8の日(8日、18日、28日)であることに由来している。この堂は、蛇神を祭る堂だ。堂グッは概して6月8日に盛大に行う。

ナジュ グムソンサン

ジョンノ

蛇神だった羅州金星山の神は、イ牧使に殺されて基石に変わり、ソウル鍾路の街に飛んで行った。済州から献上に行ったカン氏・ハン氏・オ氏刑房が、この基石を拾って済州に戻る途中、必要ないと思って捨てた。すると、大きな風が起り、航海できなくなったが、すぐにグッをして危難を解決した。基石は船底についていた。船が城山の温平里に着くと、基石は女性に変わって陸に上がってきた。その女性は本郷堂神である猛虎夫人に挨拶し、下土山里に行って堂神として鎮座した。ある日、サンマンオリ池に洗濯に行き、悔しくも倭人に殺されたが、

ガシリ ガンダンジャン

オンビョンリ

ゴルは、蛇神だったこの下土山里の堂神を大事に祭るようになったという。

この堂神はダンゴルの娘に付いて回り、祭ることを怠れば害を与えるといわれ、済州島の男たちは土山堂ダンゴルの娘をめとることを疎む風俗が生まれた。しかし、済州全域に嫁入りしたダンゴルによって八日堂信仰が広がった。

ヘシندان

海神堂

ヨンドゥン

ドンジッ堂、ゲ堂、燃灯堂ともいう海神堂は、漁師と海女の海上安全と豊漁を司る堂だ。「ドンジ」は水辺の丘で、「ゲ」は浦の意味だ。男女神(夫婦神)が一緒にいる場合、ゲ婆様(ドンジ婆様)、ゲ爺様(ドンジ爺様)

という。

海神堂は、済州全島の海岸の村にはほとんどある。ご飯は米の飯、モチは蒸し餅とトルレ餅、魚はタイ、果物はミカンとリンゴとナシ、酒は甘酒と焼酎、つまみは卵、ペベック幣帛は韓紙などを供える。個々に供え物をかごに入れて堂に捧げる。決まった席はなく供え物を捧げた順に神堂の近くに並べる。



月汀里ベロンゲ海神堂

ダン

どんな堂グッがあるか

堂では、村の無事安寧と生業の豊穡を祈る堂グッが行われる。村堂専属のメインのシムバンが堂グッを受け持ち、村堂神の子孫であるダンゴル、すなわち村人が参加する。

本郷堂では年に4回定例の祭儀が行われる。本郷神に新年の挨拶をする旧暦1月の神過歳祭、燃灯神をむかえて農業や漁業など、生業の豊穡を祈る2月の燃灯祭、梅雨の勢いを退け、穀物の豊穡を祈る7月のマブルリム祭、収穫の喜びと感謝を伝える10月の新万穀大祭だ。現在この4大祭儀を全て行う堂は多くない。多くは最も重要に思う神過歳祭を中心に儀礼が残っている。

シマンゴク

シンガセジェ

神過歳祭

新年を迎える新年祭で、旧暦の正月初めから15日の間に行われる。一年の村の安寧と豊穰、家族の健康と繁盛を祈り、一年の運勢を占って厄運を避ける。

ヨンドゥン

燃灯グッ

燃灯神は旧暦の2月1日に済州に入り、15日に出て行くと考えられる。そのため、燃灯神を迎える歓迎祭と送る送別祭をして一年間、風による被害を減らそうと考えた。この燃灯神は風の神だけでなく、海の幸の豊穰も司る神だ。

燃灯グッは、村のダンゴルである済州島の海女が力を合わせ、海産物をたくさん取り、豊かな暮らしになるように祈る村のグッだ。神過歳祭グッととも今日まで最も活発に受け継がれているグッだ。



燃灯グッ

マブルリム祭

マブルリムとは、梅雨の湿気やかびをはらい落とす夏の祭儀ともいい、馬の増殖を祈るグッともいう。百中祭ともいわれる。百中祭は概して旧暦の7月中旬前後に行ったが、仏教の百中という儀礼が普遍化し、マブルリムを百中祭とも呼んでいるようだ。

シマンゴク

新万穀大祭

万穀とは、多くの穀物の収穫を意味するので、秋に穀物を刈り入れてから行う感謝祭の形式といえる。一年の豊作を祝う楽しく意味深い祭儀なので大祭といった。主に旧暦の9月から10月までの一定の日を定めてこのグッを行う。

グッの絶頂、グッノリ巫祀

グッの本質は祭儀というのが、実際には祭儀とノリ遊び、神聖性と娯楽性がともに共存する。したがって、神と人間がともに交わって遊ぶ場面、神を楽しませるために神をからかう場面がグッの絶頂を構成する。神に祈る祭儀性と、神と人間がともに楽しむ神人和楽の娯楽性が強く表れる。済州のグッノリは戯曲的(演劇的)要素に優れたものと評価されている。

セギョンノリ世経遊び

農作業の豊穡を祈る儀礼だが、性行為を露骨に表わしていて衝撃的だ。ある女性が野原で性的暴行を受けた後、ペンドルという子を産んで育てるが、この子は農作業が上手で、豊作を迎えたという内容だ。ペンドルは学問はせず、ただ「ご飯! ご飯!」と叫び、その姿は目も鼻もない滑稽的な姿に描かれ、大きな笑いを誘う。人間世界の性的行為が自然世界の豊穡をもたらすという類感呪術、すなわち類似したものは互いに影響し合うという原始的事由が含まれている。豊作を祈る人々に大きな茶碗を提供することで、朗らかな笑いを誘う総合芸術的な儀礼だった。

ジョンサンノリ前世遊び

ジョンサンとは、前世という仏教的な用語からきたようだ。前世の業を賢明に乗り越え、現世の福を呼び入れる祈願の意味を持ち、さらに現世で徳を積み、来世の福を祈る意味も加わっている。ガムンジャンアギの神話を演戯で見せる。貧乏から金持ちに、金持ちから乞食に、再び棄児と貧乏から金持ちになる運命的転換が繰り返され、演戯の中の主人公は運命の神として鎮座することになる。人々に、自主的に努力すれば縛られた運命を取り払い、福を呼ぶことができるという道理を悟らせ、運命克服のメッセージを強く伝えている。ジョンサンノリの最後の場面は、乞食夫婦が杖ですべてのジョンサン(運命)を家の外に追い出す場面が演出される。現在の私たちが体験するすべての厄運を払い、新しい運命を迎えるように除厄招福している。

ヨンガムノリ令監遊び

ヨンガムノリは、戯曲的に構成された巫歌だといえる。このノリの主人公は、ヨンガムと呼ばれるドケビ神だ。

済州島のヨンガム神は、ドケビ神でありながら火の神であり、船の神、豊穡の神、病気の神でもある。ドケビ神は自分の要求を受け入れてくれる人には福を与えるが、自分の気に入らない人



ヨンガムノリ

には病魔をもあたえる。そのため、漁師には魚を追い込んでくれる豊穡の神でもあるが、このノリでは意地悪をする病の神として登場する。一方、鉄を溶かして器を作る済州のブルミ作業では、ヨンガム神を祭っているが、このような性格が拡大して火を司る神としても崇められる。善悪を同時に備えた原始的な神の姿を見せる。

サンシンノリ山神の遊び

済州の中山間の上には山の神を本郷神として祭る村が多い。中山間の村には本郷神が軍卒を率いて漢拏山で狩猟をしているときに、気に入った村を定めて本郷神として鎮座したというボンブ
ワサンリ ワフルリ フェチョンドン
 リがある。これまで臥山里、臥屹里、回泉洞などの地域でサンシンノリを行っている。

このノリはまず、二人のシムバンが砲手の役割を受け持つ。頭にひもを巻き、棒に紐を結んで作った銃を取って猟師に扮装する。先に一人が祭場に横になって寝たふりをした後、目を覚まして夢の話をする。狩猟に出れば収穫が多いだろうというものだ。互いに交わす会話の内容には性的な表現が多く登場する。そして狩猟の前にともに祭祀を営み、狩猟に出る。一人が先に鶏を取って祭場の外に出て歩き回る。もう一人はその後を追いかける。鶏は獲物なのだ。祭場に返って銃を撃つふりをする。互いに自分が先に獲物の鶏を捉えたと争う。その時、首シムバンの仲裁で和解をし、獲物を公平に分け合って終わる。サンシンノリが終わった後、鶏を料理してシムバンに分け与える。

星への信仰

済州は北斗七星と縁がある地だ。17世紀、李元鎮の『耽羅誌』によれば、七星図が登場するが、「石を積んだ古い跡地がある。三姓が初めて出てきた時、三徒に分けて所有したが、北斗星の形を模して台を築き、分け合って居住したので七星図といった」と記されている。北斗星を信仰したことが分かる記録だ。

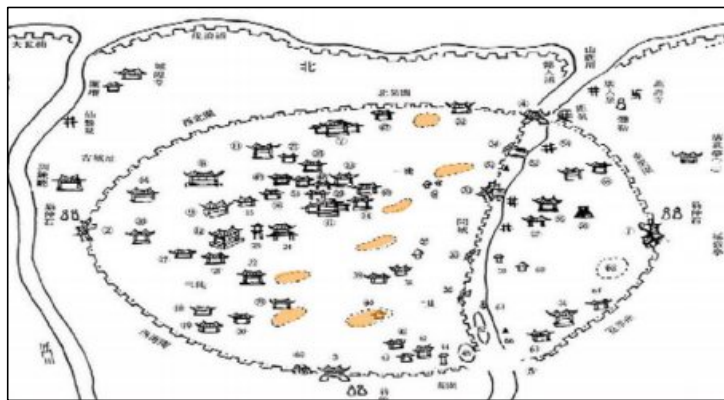
三神人が地から現われ、壁浪国から来た3人の姫と婚姻した後、耽羅国を建設したが、その当時から存在し、王を星主と称したようだ。高麗初めまで耽羅の指導者を星主と呼んだことから、星に関連した信仰は格別だった。

漢拏山の頂きにも七星台がある。金綴ギム、チの「遊漢拏山記」に「修行窟を過ぎて10里余を歩くと七星台に至った。ここから東へ5里ほど歩くと、石壁が切り立ったようにそびえ、柱のように空を支えていた。これがいわゆる漢拏山の上峰だ」という記録がある。漢拏山の頂上まで5里足らずの所に七星台があったとすれば、これもまた北斗星を祭る祭壇だったのであろう。

七星を信仰した風習は非常に古いが、後に蛇信仰が流入し、それを七星神と呼ぶようになった。恐らく高麗時代、全羅道羅州の錦城山に祭られた蛇信仰が済州島に入ってからのことだと思われる。

蛇神の到来については、堂のボンプリにも多く残り、他の神のボンプリにも残っている。七星ボ

ンプリには、「7」という数字が何度も繰り返して出でくる。娘が「七才」になった時、「7日」になった日、「七」人の海女、蛇の子「七」などは「7」と関連して繰り返される。このような理由で北斗七星の「7」と結び付け、七星神といっているようだ。北斗七星を神格化して北斗聖君というが、道教で人間の寿命を司る神だ。『ムンジョンボン



1900年代初期の済州城内古蹟図の七星台

リ』でも異本によれば、七人の息子が北斗七星になったというが、これもまた「七」という数字と関連する。『風俗巫音』では七星壇を築き、七星に祈子して娘を得、「七星の赤子」と名付けたというが、ここでは七星神との関係が明らかになっている。

しかし、道教的な七星富君と済州島の七星神はその性格が異なる。道教では寿命を司る神であり、巫俗では豊穡と子孫の繁盛を司る神として現れる。では、なぜ済州島の巫俗の五穀豊穡神である蛇神を七星神と呼んだのだろうか。道教でも蛇神、中でも白い蛇を崇める慣習があり、その信仰が七星神と関連して後代に影響を及ぼしたのではないかと考えられる。

村々で行われる村祭

済 州島の村祭は、神堂で巫俗式で行う場合と儒教式の酺祭を行う場合の二種類がある。神堂では女性が祭主になって巫俗式で行い、酺祭壇では男性が祭主になって儒教式で行う。両方とも行う所もあり、一種類だけ行う所もある。両方とも行う場合、酺祭を行いながら堂にも簡単な供え物をする場合もあれば、供え物をしない場合もある。臥屹と松堂は、巫俗儀礼だけ行い、涯月邑の信巖、旧巖、光令などは酺祭だけを行う。一切祭儀を行わない村もある。

済州の村祭は本来、村の神堂で男女がともに祭ったが、その形態は当然ながら巫俗グッだった。ところが、朝鮮末期に国家的なレベルでの圧力により、徐々に儒教式祭祀を受け入れるようになった。

イ ヒョンサン

済州は、李衡祥の「堂五百、寺五百」の破壊で分かるように、18世紀初期まで儒教儀礼が普遍化していなかった。李衡祥牧使がソウルへ戻った後、堂と寺は再び復元された。その



法還里の酺祭

後、19世紀を過ぎて朝廷の強力な礼楽政策により、儒教式の村祭が定着するようになったと見られる。これと時を同じくして、家庭でも儒教式の先祖祭祀を受け入れたと見られる。

しかし済州では、神堂で行う村グッを廃棄しなかった。男性は儒教式に酺祭を行う村祭を新しく作り、女性は以前と同じく巫俗で村祭を行っている。一例として、2月の燃灯グッは、海に潜る女性たちが自分の安全と安寧を祈る儀礼で、これを破棄することはできなかつた。当然ながら

ジャムス

潜嫂(海女)グツは持続せざるを得ず、他の村グツにも影響を及ぼしたのだろう。

酺祭は、徹底して男性だけが儀礼を行い、女性の出入りを禁じる。女性は供え物を用意するだけだ。村グツは女性たちが儀礼を行うが、男性の参加が許される。

酺祭は、農作物に虫害が多い時、これを祈り払うために酺神を祭ることをいう。酺神は災害の神だ。本来酺祭は、災害を防ぐための儀礼だった。

特に済州島では、村人が無事安寧、豊作、肉畜の繁殖を望む意味で行う儒教式の村祭祀を酺祭と呼んでいる。主に旧暦の正月から7月にかけて二度行われ、年に一度行う所も多い。

村の人々が祭祀費用を集め、供え物と祭祀に使う豚を用意する。

ナブッリ

涯月納邑里の場合、祭壇が三つなので3頭の豚をまるごと供え物にする。祭られる神は、土神、西神、酺神だ。土神は、村の土地神として村守護神であり、西神は、西側から来た客神を意味するが、紅疫神であり、酺神は農作物に被害を与える神格だが、人間に被害を与える神格の意味も加えて人物災害の神という。本来、災害を予防する酺神の祭祀に、村の守護神格である土神を加え、さらに災害の神の中でも特に、人間に大きな災難をあたえる紅疫神を加えて祭る。

チュジャド

済州島の村祭はムダン巫女グツで行われるが、楸子島では村祭がノンアッデ農楽隊グツで行われ、ノンアッデグツの原形がよく保存されている。楸子島では、旧暦の大みそかから正月3日までゴルグングツの一種を行う。ゴルグンにはプンムルベと仮面をかぶって踊る両班仮面、せむし仮面などがついていき、村人がともに仮面劇を行うが、これが仮面劇の起源だと推測される。朝鮮半島ではその跡を発見しにくい非常に珍しいノリだ。

楸子島のノンアッデグツは、済州の巫女が行う村グツ、村の男性たちによって行われる儒教式あるいは道教式の「酺祭」とも異なるノリで、独自の領域の豊穡儀礼といえる。

家を司る神のためのグツ

定期的な家内信仰

家神信仰の代表的な儀礼として、メンガム祭がある。メンガム祭とは、新年家庭の無事安寧と生業の豊穡を祈る歳時儀礼で、門前祭、ムンジョンジェチオルガリ(門前チオルガリ季節替わり)、メンガムコソ、ヨワン竜王祭などがある。

門前祭は、家庭の除厄招福のための行事で、チオルガリは、バッチルソンを祭るチルソンヌルに新しい穀物を入れ、雨水が入らないようにカヤを取り替える行事だ。この二つを合わせて門前

チョルガリともいう。

門前祭は、「門前ボンプリ」に基づいて上方の一門前神、台所の竈王神、オルレと定柱木

チョクドゥアイン

の柱木神(ジョンサルジシン)、手洗いの廁道婦人、垣根の5方土神を迎える儀礼だ。家のあちこちの神々をあまねく迎える儀礼なので、儒教式儀礼を行いながらも、門前神と同じく重要な神をもてなす膳を準備する。門前チョルガリは、さらに農機具の神であるガルメ神、生命を主宰するサムスンハルマン、先祖霊駕、七星神などを加えて祭る。最近は、農機具の機械化に伴い、農業機械と自動車の安全をガルメ神に祈ることもある。

ジェソク

メンガム祭は、生業の空間によってドウル、山の神、帝釈、竜王のメンガム祭に分けられる。メンガム祭は、生業の中で狩猟を司る山の神を祭るものだったが、狩猟空間が牧畜に変わり、牛と馬を司る牧畜の神格を兼ねるようになった。牛と馬は済州の痩せた土地を踏む主要な手段であり、浜辺の村や中山間の村の畑作地帯でも牛と馬のための儀礼が重視され、メンガム祭は山の神からヨワンと帝釈まで、その職能が拡大したものと見られる。

不定期的な家内信仰

メンガム祭が定期的な家内信仰であるとすれば、不定期的な家内信仰としては、ソングジュ城主ブリ、グイヤン島送りブリ、シワンマジ十王迎え、プダシ厄払い、ノッドウリム招魂の一種などがある。

ソングジュブリは、家を新築する場合や新しい家に引っ越した時にするが、建築に使われた材木の神である木霊を払い、城主神を祭って迎える儀礼だ。今でも済州島民の多くが行っている。ソングジュブリをしなければ他の巫俗儀礼ができないという観念を持つため、儀礼を行う所が多い。

グイヤンブリは、人が死んだ時にする家の巫俗儀礼だ。葬儀を終えて家に帰ってきて行うグッで、亡者のために欠かせないという観念が強く残る家内儀礼といえる。

シワンマジは、亡者の死亡後、3年が過ぎた頃に行う薦導解冤儀礼の性格を持つ。重病を患っている時也行う。グッの規模が大きくて多くの費用がかかるので、家の内でたやすくてできるグッではない。

病グッには、プダシ、ノッドウリムなどがある。ノッドウリムは、子供たちが病気になったり、家族構成員が精神的なショックを受けたとき、村にいるサムスンハルマンかシムバンを訪ね、抜け出した魂を戻し入れるグッだ。

プダシは、長い間、病を患って回復の兆しが見えない場合にするが、吉凶を占って病の原因を尋ねて択日をし、帰った後にシムバンを招いてグッをする。その他、ホガングッは無病・長寿・財福を祈るジェス幸運グッで、数年おきに行う。



歳時風俗

生活リズムと季節情緒が溶け合う

済州の歳時風俗は、他地域とは異なる時間と空間での生活から作られた生活風習であり、済州文化を特徴づける生活様式だ。済州島の自然的・地理的環境要因は毎年、同じ時期に繰り返行なわれた歳時風俗にも重要な影響を及ぼした。したがって、済州島の歳時風俗は韓国の伝統的な歳時風俗と流れをともにしながらも、済州地域の固有の生活文化の特色が加わり、伝承されている。

歳時風俗は、旧暦の正月から12月まで1年単位で時間的周期に従い、繰り返し行われる伝承儀礼だ。時間の周期は太陰暦を基準にして一年を春・夏・秋・冬の四季、すなわち3か月単位で旧暦の正月から3月までは春、旧暦4月から6月までは夏、旧暦7月から9月までは秋、旧暦10月から12月までは冬とし、1年を24節季に分け、さらに1か月を二つの節季に分けて15日おきに一節季を迎える。

歳時風俗の慣行は生活空間と生産活動によって異なる。濟州島の歳時風俗には節季、潮時、隔月など時間の周期により、山間・中山間・漁村という生活空間で農作業・牧畜・漁労・狩猟など、生業を営む生活のしきたりなどが反映された地域的な特殊性が現れる。何よりも濟州島の歳時風俗は、農作業と漁労、儀礼行為などが生活の中で結び付き、持続的に行われている。

先祖と子孫のための祭祀、歳時名節

ソルナル

ハンシク

ダノ

チュソク

ミョンジョル

旧正月、寒食、端午、秋夕は韓国の伝統的な固有の名節だ。

旧暦の正月一日に迎えるソルは、旧年を終えて新年を始める、すなわち一年の最初の名節であり、重要な意味を持つ。

ジョンウォル

濟州では名節を「メンジル」、ソルを「正月メンジル」と言った。この日は親族の家を一軒ずつ回りながら祭祀を行うが、まず宗家、その後序列に従って一番古い祖先を祭る家から回る方

ドジェ

法と、反対に一番新しい祖先の家から回り、最後に宗家で禱祭をする方法があり、家ごとに異なる。ソルの手続きは他の名節と同じく忌祭祀のように、屏風を開いて紙榜を書いて貼り、三献官と二人の執事が立って参神・降神・初献・亜献・終献・添酌・侑食・雑食・徹籩の順に進めた後、お下がりを食べて次の家へ移動する。

ジノベン

ソルには親族が互いに新年の挨拶を交わし、新しい一年を迎えての自分との約束や健康を祈る心が込められている。特に三年喪中の家に魂帛の棚膳があり、喪食を置く場合は、格別にその家を訪ね、亡人にも新年の挨拶をした。このような新年挨拶のことを「喪に行く」という。

寒食は冬至から105日目に祭る名節だ。寒食はソルや秋夕のように祭祀をする家を回らず、家によって「ムンジョンメンジル」といって日が昇る前に簡単に行う。この名節にはすべてのお供えを冷たい食べ物で準備した。前日、あらかじめ食べ物を用意してメゴ飯とゲン汁を冷まして祭祀を行い、お下がりも冷たいものを食べた。

寒食には先祖を祭ったり墓まいりをするが、択日をしなくても「客悪鬼のいない日」なので災厄が

なく、墓まいりや移葬、碑石を立てるなど墓地を整えても良いとされてきた。

一方、清明節と寒食の前後に行う墓祭を時祭ともいう。墓祭は5代孫で止祭になった先祖に対する祭儀で、家ではなく墓地で祭る。墓祭は血縁中心の祭祀なので、同じ祖先を持つ血族集団の多くの親族が参加することで、血縁共同体のきずなを強化する機能をする。

旧暦5月5日は端午名節だ。韓国の伝統社会では月と日が重なる3月3日、5月5日、6月6日、7月7日、9月9日などを陽気が充満した吉日とされてきた。中でも5月5日は陽気が最も旺盛な日だといって大名節とされ、全国で様々な行事が行われた。済州島でもギジュトク起酒餅とゴントクうる米でつくった白い棒状の餅、セミトクそば粉でつくった半月状の餅、果物、肉炙、海魚などの供え物をして端午名節を過ごした。



墓参り

チュソク

日の秋夕だ。済州では「八月メンジル」または「ゴシル(秋)メンジル」と呼ばれた。古代社会の豊農祭に由来する秋夕は、一種のサンクスギビングデーに当たる。一年の農作業を終え、五穀を刈り取る時期であり、名節の中でも最高の名節とされてきた。

済州では秋夕を控えて墓の草刈りをする風習がある。通常旧暦8月1日から15日以までに終える。旧暦8月の節季には何よりも墓の草刈りを重要視した。そのため、済州の人々は子孫を遠くに送ることを敬遠し、遠くいても墓の草刈りを忘れないように教育した。そのため、他の地方に居住する人々も8月初めだけは故郷を訪れ、親族とともに墓の草刈りをする珍しい風景を見ることができる。特に旧暦8月1日はモドウムまとめボルチョンといって、墓祭を行う祖先の墓地に親族が集まって皆で墓の草刈りをする。その時は一世帯当り1人ずつ参加することで、親族間の義理が守られ、のけ者にされない。この墓の草刈りが終わったら兄弟が集まって家族の墓の草刈りをする。何よりも秋夕を祭る前に先祖の墓をきれいに整えることを重視したことがうかがえる。

済州の人々は端午に松かさ、竹の子、黒豆、黒い牛糞などを煮詰めて飲めば、万病に効くと信じた。この時期は万物が蘇り、草木が水分を吸い上げて勢いづく時なので、草の根一本でも薬になるとして始まったらしい。特に5月端午の時期のヨモギは薬ヨモギといって陰干にし、一年中ぶら下げておいて薬剤として利用した。

年中最大の名節は旧暦8月15

神々も新しく始める日、立春

立 春は24節期の中で最初の季節であり、「セチョルドウヌナル新しい季節が訪れる日」といった。新年を象徴する節季であり、新暦で2月4日に当たる。この日は天に上がった神々が地上に降りてきて神や人間ともに新しい生活が始まると考えた。

各家庭ごとに新春を迎えて雑鬼を退ける意味で、白い紙に有難い句を書いたり図を描いた立春祝を門や柱、大黒柱、天井など家の隅々に書いて貼るが、これを「立春祝貼り付け」と呼んだ。

立春祝は貼る場所によって内容が異なる。門には「立春大吉 建陽多慶」を、居間には「和気自生君子宅 勤天下無難事」、「百忍堂中有泰和 一勤天下無難事」と書いて貼った。文字の代わりにドルハルバン石のお爺さんを描いて付けたりもするが、雑鬼を払い、家を守るという意味でドルハルバンに五方神将の青い服、赤い服などを着せた。

立春の日はタブーも多かった。新しい節季が始まる日なので重要視し、農作業の豊穰を祈って家に厄が訪ねてこないように願う心に由来したようだ。女性は外出を慎み、特に他の家を訪問するのを禁じた。女性が他の家を訪問すれば、その家の畑には雑草が生い茂るという俗信のためだ。また、この日に金銭の取り引きをすれば一年中、財が外に漏れてしまうといって金銭のやりとりもなかった。なお、この日に喪主に会えばその年にツキが回ってきて、豊かな暮らしをするという俗説もあった。



立春祝

りもしなかった。なお、この日に喪主に会えばその年にツキが回ってきて、豊かな暮らしをするという俗説もあった。

立春の日、済州では耽羅時代から伝えられたという立春グッノリが行われる。朝鮮時代にも済州牧の官衙で、済州牧使をはじめとする役人や巫女など、官民が一体となって豊作を祈る立春グッ、別名、春耕または立春春耕を大きく行ったという。立春グッノリは日本統治時代に途絶え、1999年に「耽羅国立春グッノリ」として復元され、済州島の代表的な祭りになっている。

立春の日には気象や穀物の形を見て、その年の農作業の豊凶を占う立春占いが行われた。ム



立春グッリ

ない事を占い、一年の豊作を祈る暮らしの様子が生活歳時の中に溶け込んでいる。

ギ根占いは立春の時期にムギ畑に行って、ムギを三本ぐらい取って根があればその年のムギが豊作で、なければ凶作だと信じた。箕占いは、婦人らがかまどの前をきれいに清掃した後、立春に箕を覆い、立春が過ぎた後にこれを取り、アワが数粒あればアワが豊作になると信じた。さらに、立春に風が強ければ一年中風が強く、畑作が厳しいだろうと信じた。このように予測でき

神が留守の間に引越する、新旧間

済州では引越しを新旧間という期間にする習慣がある。新旧間というのは「新旧歳官交承期間」の略語で、大寒の5日後から立春の3日前の期間をいう。この期間には、神々が一年間の任務を締めくりに天に上ると考えられてきた。つまり、人の世を司る1万8千の神々が一年をまとめるために、天に上り、玉皇上帝に報告した後、新しい任務を受けて降臨するまでの期間で、済州の人々はこの期間に神が地上にいないと考える。したがって、普段は控えられる引越しや家の修理、伐採、墓地の石垣の手入れをしても差し障りがないと信じた。特に、便所の修理は新旧間にすれば、災厄に見舞われないと言われ、この時期を待って行われた。このように、済州の人々は、引っ越しのような日常生活でさえ、神と切り離せないものと考えて吉日を選ぶなど、生活歳時に従って常に慎重な生活をしてきた。

新旧間に最も活発に行われるのは引越しだ。一般的に新旧間は引越しの期間と認識されている。済州の人々は今も新旧間に引越しをするが、それまでに引越しができなかった場合は、選ばれた吉日に釜だけに移したり、引越し先でご飯を炊いて食べなければならないと考える。昔はかまどに火をつけ、ご飯を炊いて食べた。このように「火」を移すことは引越しする上で非常に重要な意味を持つのだ。

体を保護する知恵、歳時の食べ物

食 べ物が足りなかった時代、済州の人々は、季節ごとに簡単に手に入る材料で料理をし、体を保護する知恵を身につけていた。

済州には「3月になれば漁村の人々はワラビ炒めを貰いにくる」という言葉がある。ワラビのおかずは春の旬の食べ物だ。祭祀の膳に乗せるワラビは、自分で採ってこそ心のこもったものと言われた。そのため、清明を前後して、「ワラビ梅雨」という小雨の後に柔らかいワラビが生え始めると、婦人たちは野原を回ってワラビを採った。ただ、墓地の上のワラビは、祭祀には使えないとされる。

ワラビが忌祭祀と名節の重要な供え物である理由は、ワラビは繰り返し、九回も採れると言われるため、子孫が繁盛するという意味と、先祖神が祭祀の時食べ残したお供えを、ジゲ背負い籠のようにのびたワラビの三本の枝に挟んで昇天すると信じたからだ。

ゲヨクは、ムギをカマで炒めてひき臼で挽いて粉にしたものだ。通常は5～6月頃ムギ収穫が終わった後、梅雨の雨の日に暇ができると作った。嫁が姑にゲヨクを作ってあげなければ姑は、「麦粉一握りも与えない嫁」だと悪口を言うほど大切な季節の食べ物だった。

旧暦の6月20日は「鶏を食べる日」で、各家庭で鶏を食べる風習がある。春にヒヨコを買って庭で育て、中間サイズの鶏に育ったら食べられる。旧暦6月20日に鶏を食べれば万能薬になるといい、特に女性はオンドリを食べ、男性はメンドリを食べれば、より効果があるとされた。

11月は冬至月といい、冬至は新暦12月22日だ。古くから冬至に赤い色のしるこを食べれば風邪をひかないと信じられた。しるこを食べる前に庭や塀、門口にしるこをばら撒く風習がある。これは赤いアズキは邪悪なものを払う力があるとされるため、厄よけの意味と、さまよう鬼神を宥めて送るという意味から始まった。一方で、冬至が旧暦の10日以前にある年は、子供冬至といってしるこを炊かなかった。

済州では醤油を作ることを大事にした。醤油は旧年に作れば美



ワラビ畑

美味しいとされ、たいてい11月から1月の間に作った。醤油を作る時に守らなければならないことがある。豆をゆでる日から主婦の生气福德に合わせ、リュウ・ヘビ・ネズミ・トラの日は避け、イヌ・ニワトリ・ヤギ・ウサギ・ウマの日は良いとされ、良い日を選んで醤油を作った。さらに、良い日でも家族の干支と重なる日は避けた。そして、メジュ大豆をゆでて固めたものの数は偶数でなければならない、奇数ではいけないとされた。

ナッペンナル

冬至から3番目の末日は臘日といって飴を煮詰めて食べた。一般に冬至に麦芽を入れ、臘日に飴を煮詰めて食べたが、臘飴は内科の病に効果があり、おできに塗れば治ると信じられた。俗説ではあるが、臘飴は冬季に栄養を補充するおやつとして最適の食べ物だった。豚は冠婚葬祭などに使われる大切な家畜だった。正月や秋夕を控えて名節の供え物を用意するために、数人で牛や豚を買って分けた。特に豚肉は村や家の行事で必ず用意する食べ物で、かつてはお金を出し合って買わなければなかなか食べられなかった。

安寧と豊穡を祈る歳時儀礼

済 州島の村は概して半農半漁をして生計を立ててきた。自然環境はこのような生産活動に多くの影響を与え、人々は常に危険な自然環境を乗り越えるために様々な方法を考えて生きてきた。その方法の一つが自然神、先祖神、土地神、海神など多くの神々に絶えず供え物をする事だった。

ボジェ

村人は毎年年初に、儒教式の村祭である酺祭と、巫俗式の村祭である堂グッを行って村や家庭の安寧と和合、生産の豊穡を祈る儀礼を行ってきた。このような周期的な歳時儀礼は、生産共同体でもある信仰共同体を維持する基盤となり、共同体意識を強め、和合を図る重要な役割をした。その他にも生業の形態により、小規模集団の無事安寧と繁栄のためのジャムス潜艘グッ、ヨワン竜王グッ、テウリコソ(百中祭)、グムルコソ(海神祭)、サノンコソ(山神祭)などの儀礼が歳時ごとに行われた。

酺祭とは、男性たちが儒教式祭法に従って行う村祭であり、村の守護神である酺神之位に村の平安と無事、豊穡を祈る祭儀をいう。村によって酺祭の名称は村祭、酺祭、里社祭、洞社祭、ゴリッ祭などと呼ばれる。祭日は上丁日を原則とするが、その日に村や家族に死人が出たり良くないことが起これば亥日に行われる。

祭官は通常12～15人で構成されるが、祭官に選ばれれば3日前に祭庁に入って斎戒をする。

これを「3日精誠」というが、この期間には祭庁の入口と村の入口にクムジュル(出入り禁止の紐)をかけて不浄なものが勝手に入らないように最善をつくす。祭官は犬肉や馬肉などの不浄な食べ物や性行為も控えなければならない。穢れた人々はグムジュルをかけたところに入ることができない。入祭の後に村に死人が出ると、酹祭が終わる前に招魂をしないほど精誠が尽くされる。

一方、新年を迎えると「新過歳祭」といって、各村ごとに本郷堂で住民たちが堂神に新年の挨拶をする堂グッが行われる。本郷堂は各村の生産・物故・戸籍・葬籍を司り、村の人々の暮らしを保護して支える神聖な聖所であり、堂神は村の土主官として認識されている。本郷堂の新過歳祭は最も重要な堂グッなので、村の女性のほとんどが参加する。新過歳祭は概して



新過歳祭

正月一日から15日の間に行われ、村全体の無事安寧と生業の豊穰を祈る季節祭儀だ。また、住民は個人的な祈りもするが、家庭の安全と生業の繁盛を祈る。

海岸の村で行われるジャムスグッは、海女の無事安寧と海産物の豊穰を祈り、共同体の絆を確かめる巫俗儀礼だ。通常、毎年旧暦の1月～3月の間に行われるが、村により祭儀の時期は異なる。

祭儀の手続きは大きく、サムソク響き、初監祭、竜王迎え、ジドウリム、シジョム、厄除け、ペバンソン送神、ドジンに分けて進められる。この中で最も重要な部分はシドウリムとシジョムだ。

シドウリムは、元気で潜水技量が優れた50～60代海女が受け持つ。シドウリムをする人々は「シメントン」というものにアワを入れて祭棚の前で楽しく踊り、海辺を自由に歩き回り戻って種をまいて祭庁に戻る。祭庁に帰ってきて思い切り遊んでから、ゴザを広げてシムバンが、捕りたいアワビ、サザエ、トコブシの種をまくと歌いながら、アワ種をゴザにばら撒く。アワの密度を見てシムバンは海女の収穫を占うことになるが、これを「シジョム種占い」という。

ジドウリムとは、海を司る竜神と家族の中に海で死んだ先祖の神々に1年間、海での安全を祈り、供え物を紙に包んで海に投げる行為をいう。供え物を白紙に少しずつ包んだものを「ジ」といい、これを海に投げる行為を「ジドウリム」という。



ジドゥリム

済州の牧畜は、牛馬を一年中牧草地で放牧するもので、自然環境に依存していた。特に降水量、日照り、大雪、伝染病などは牛馬の飼育に大きな影響を及ぼす要因だった。牧畜をする村では旧暦の7月14日に牛馬の一年間の繁殖と無病を祈ったが、これを「百中祭」という。この祭祀をテウリコソ、モシユイメンジル、テウリメンジルなどとも呼んで、牛馬を育てる人々が家でする名節といえる。

一生の通過儀礼

済州の人々は、子供が生まれば7日間炭と真っ赤なトウガラシをつけた紐をかけて不浄な人々が出入りしないようにした。さらに産神に対する感謝の気持ちを込め、部屋のすみや押し入れの上にサムシンハルマン棚を整え、誠を尽くして祈祷し、子供が健やかに成長することを祈った。

子供が育って成人になれば婚礼を行う。婚姻の手続きを簡単に見ると、仲人を通して新婦と新郎を求め、相性を占い、新郎側が択日をして新婦の家に知らせる。その後は婚礼日の決定、

ガムンザンチ

納幣、豚を捌く、家門祭り、婚礼式の順に進められる。

婚姻が決れば日を選び、財力に合わせて婚礼に必要な結納と食材を新婦の家に送る。婚姻の前日には親族が集まる家門祭りを両家でそれぞれ行う。新郎の家ではホンセハムを用意する。これは禮狀(婚書)を入れた函で、赤い風呂敷で包み風呂敷の結び目の上を「上封」と書かれた紙で封印する。これを新郎と上客一行が新婦の家に持っていくが、これを「納幣」という。新婦の家では礼狀を綿密に検討してから新郎を迎えた。新郎と上客一行が新婦の家で食事を終えると、新婦を御輿に乗せて新郎家に連れていき庭で婚礼式を行う。

子供たちは両親が還暦を迎えると真心を込めて食べ物を用意し、還暦のお祝いをした。他の地方に比べて非常に質素だが、家族皆が集まり、子供たちが両親に拝礼をした後、食べ物を分けて食べた。

寿命が尽きれば、まず、死亡を確認し、故人のホッジョツサム^{一重}のチョゴリで遺体を覆ってしばらくした後、それを持って屋上に上がり、北に向かって住所、名前、年齢を呼んで故人の魂を招く。

^{ゴボク}

この^{ゴボク}阜復招魂が終わると喪主は親戚と知り合いに喪を知らせる。この時、喪主の姻家はしるこを作って持っていき、喪主と葬式を準備する人々を迎える。択日した日と時間に合わせて故人の身を洗い、寿衣を着せて入棺した後、喪主は喪服を整えて成服祭を行う。成服祭の前には弔問を受けないのが原則であり、出棺前日に日脯祭を行って弔問客を受けた。

棺を乗せて埋葬地に移す輿を済州では「センイ」とも呼んで、これを保管する家を「センジプ」といった。輿は村ごとに契を組織して運営したが、契員は葬儀があると仕事を休んで必ず参加し、輿を担いで埋葬地まで運んだ。葬儀が終われば3年後に大祥を行うまで部屋に魂帛と魂帛棚を祀る喪庁を用意し、喪食を上げるなど礼を尽した。

祭祀は、命日前日の夕方に供え物を並べ、子の刻に祭祀を行うが、本祭の前に門前に供え物をし門前祭を行う。祭祀の手続きは家ごとに多少の差がある。



石文化

ありふれているが、蔑ろにできない石

済 州文化の重要な基層を支える石文化の基底には言うまでもなく、石資源という中核的な要素がある。済州文化の根幹を成す石資源、その中でも済州島に最も多く分布しており、また最も多く活用されているのは玄武岩だ。

今日も活用されている玄武岩の用途は、大きく一般的な利用法と特殊な利用法に分けることができる。さらに、一般的な利用というのは建築用、生産用、生活道具、信仰生活用、碑石用、遊びの道具として使われることで、特殊な利用というのは通信・防御用、境界用として使

われることをいう。

詳しく見てみると、玄武岩の用途は驚くほどたくさんある。

例えば、一般の家庭で使う生活道具であるジョンガレ、プルガレ、ヤッガレといった挽き臼、石火鉢、かまど、ソジュツドル焼酎を作るときの器具、石棒、石灯火、ムルフアク洗濯用の桶、水桶、石洗面器、石臼、石水桶、搾め木だけでなく、小規模な部落単位で、あるいは村全体で利用する入り江や、奉天水・湧泉水の泉を整備する石垣、神堂を保護するための石垣、魚を取る

ために海底に積む石垣(ウオンタム)、牛馬に引かせて穀物を挽く臼の研子磨、地域の掲示板
バンムンソク ソンドクビ コンドクビ
の役割をした榜文石、旧灯台のドデブル、頌徳碑・功德碑のような碑石としても使われてきた。さらに、石垣は装飾や区画をする機能もあり、農家やその周辺ではウルタムまたはチュクタムと呼ばれ、庭先の菜園ではウオンタム、豚小屋の境界石はトンシッタム、大通りから家までの狭い路地を区画すればオルレッタムになり、山野の耕作地の境界はバッタムまたはジャッタムと呼ばれた。そして、中山間地域の牧場の境界石はジャッソン(下ジャッソン、中ジャッソン、上ジャッソン)と呼ばれるなど、その使い道は無限だ。

それだけでなく、暇を見つけて遊ぶときも、石を活用した。子供はお手玉や石蹴りなどをするとき、大人は力石を持ち上げて力試しをするときなど、玄武岩で作った遊び道具を活用した。

また、墓地の境界を表す石垣のサンタムや、その内部を飾る童子石、文人石、望柱石まで、済州の人々は死んだ後も石を必要とした。

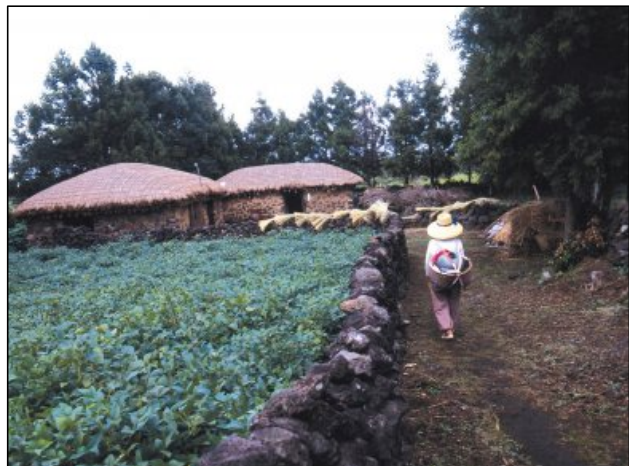
このように、玄武岩の使い道は多種多様だった。先史時代から有史時代以降、玄武岩が利用されてきた過程の中には、済州の人々の生きる苦悩や知恵が反映されているのだ。

石文化の化身、石垣

石垣は済州の石文化の根幹であり、化身だ。石垣は済州の石文化を象徴するシンボルにふさわしいからだ。

石垣は済州のどこでもよく見掛ける。それほど済州島の特性と火山活動の歴史をそのまま映し出しているのだ。

石垣は「特別な目的を持って自然資源である石を積み上げた垣根」だ。石垣は所かまわず無造作に積み上げられたものではない。必要な場所にそれなりの目的を持って人の手で積み上げたものだ。しかし、その目的は場所によって異なるため、一概には言えない。それだけに石垣の種類も様々だ。



ウルタム

ウルタムの役割には、境界線の機能以外にも外部からの視線や雨風を遮ったり、よその牛や馬などが勝手に宅地に入ることを防ぐ機能もある。

外部からの視線を遮るウルタムのおかげで、特に暑さが猛威を振るう夏から初秋まで、住民は家の中で気楽に生活できる。また、強風や台風の多いこの島で、ウルタムは、雨を伴った風によりホコリやゴミが家の中に吹き入れるのを防ぐ。

ウルタムの高さは地域によって異なるが、一般的に1.2～2m程度だ。季節風や強風の影響を多く受ける地域であるほどウルタムの高さが高い。

バツタムは畑の周辺に巡らす石垣で、高さは地域によって異なるが、一般的に1～1.5mほどだ。バツタムは個人が所有する耕作地であることを意味する境界線の機能以外に、牛や馬の侵入を防ぎ、風で畑の土が飛ばされるのを防止するうえ、作物を保護する機能も兼ね備えている。



バツタム

済州島の数多くの石垣のうち、最もよく見かけるものは、ウルタム、バツタム、そしてサンタムと呼ばれる石垣だ。

ウルタムは各住宅の周辺を囲む石垣だ。ウルタムの主な役割は根本的に宅地の内外を区分することで、言わば境界線の機能を持つ。

境界線の機能は、他の種類の石垣にも基本的にある。言い換えれば、石垣そのものが内外を区分すると同時に、その中にある要素や対象を保護するために設置されるのだ。

サンタムは朝鮮半島ではなかなか見られない珍しい石垣だ。サンタムはまず、死者の空間を意味する境界線の機能がある。また、牛馬や山火事などから墓地を守る機能もある。

サンタムの高さは30cmから120cmまで様々であり、一重に積まれた石垣と二、三重に積まれた石垣がある。一重に積む場合の高さは一般的に50～60cmを越えない。サンタムはその形態によって大きく二つに分けられる。全体的に楕円型で、前方

が直線型の前方後円形(円形含む)と、四角形だが、辺の長さが前方より後方が短い不等辺四角形(四角形含む)がそれだ。円形は前方後円形の変形であり、四角形は不等辺四角形の変形だと考えられる。

濟州石文化の鑑賞ポイント

濟 州石文化の象徴的なイメージは多孔質玄武岩の黒色、荒い質感、風穴、直線と曲線、絵画のような作品、濟州らしさ、濟州先人の知恵などにまとめられる。

まず、「黒色」のイメージは濟州石文化の材料である石資源の外形的な色彩を強調するキーワードだ。黒色と濟州石文化は切っても切れない必要不可欠な関係にある。

「荒い質感」というイメージは多孔質玄武岩が与える質感と触ったとき手に伝わる触感を表すキーワードだ。濟州の人々は日常生活の中で、荒い多孔質玄武岩を活用してあらゆる生活道具を作り、必要なとき、その機能が発揮できるように、石に命を吹き込んだのだ。

「風穴」はウルタムやバツタムなどを積み上げる過程で石と石の間にできた隙間を象徴するキーワードだ。玄武岩の石垣の風穴は意味がないのではない。風の一部が通り抜けることで、ウルタムやバツタムが崩れないようにする自然の装置だ。

「直線と曲線」のイメージは特に石垣から思い浮かぶキーワードだ。ウルタムとウルタムが会い、またバツタムとバツタムが出会って作る直線と曲線の石垣は、自然の中に濟州の人々が作った芸術作品のようだ。

「絵画のような作品」のイメージは、石垣が限りなく続く様子、あるいは一か所に群れを成す形から感じられるキーワードだ。野原やオルムの斜面に群れをなすサンタムから、限りなく続くバツタムから、途切れそうに続くオルレッタムや村の石垣からも絵画のような作品のイメージが連想される。

「濟州らしさ」というイメージは火山活動によって作られた溶岩大地の上に、漢拏山、オルムが広がり、黒い石垣が調和をなす風景から連想されるキーワードだ。さらに、春の花、夏の緑、秋のススキ、冬の黄金色に熟したミカン、白い雪など、四季折々の色が加われば、濟州らしさというイメージはより重層的に感じられる。

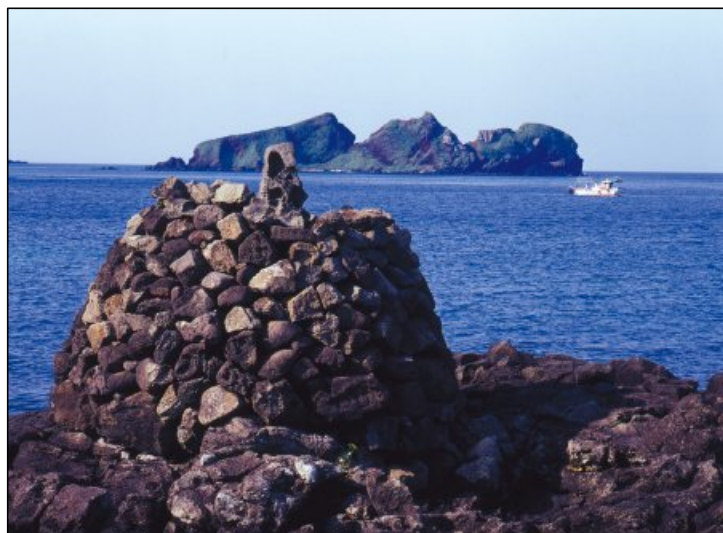
「濟州先人の知恵」は濟州石文化の根本を問う象徴的なキーワードともいえる。日常生活で使った様々な生活道具や農機具をはじめ、野原のバツタムとサンタム、宅地内のウルタムとオルレッタム、ウヨントム、また海のウヨントム、ドデブル、村に立てられた防邪塔に至るまで、このような石の用途を考えれば、濟州先人の知恵には脱帽せざるを得ない。

濟州石文化の精髓を知る

パンサタブ 防邪塔

防邪塔は「邪惡なものを防ぐ塔」だ。濟州島には昔から、村の風水が悪い所や惡鬼のある所に石塔を立てる風習があった。石塔を立てて邪惡なものの侵入を防ぎ、村の平安を祈ったのだ。

インゾンリ



防邪塔

仁城里には3基の防邪塔があるが、そのうち、2基の塔の上部には人間の頭像が置かれている。残りの1基の上部には両手を腹部に添えた上半身の石像が立てられている。防邪塔の全体的な形態は上部に上がるほど、幅が狭くなる円塔型で、塔の高さは2～2.3mだ。

ヨンスリ

竜水里の防邪塔は村の入り江を挟み2基が海に向かい立てられている。塔の上部にはそれぞれ鳥のくちばしをかたどった石が一つずつ置いてある。これらの防邪塔は溶岩流の岩盤の上に積

み上げられているが、塔の形態は円錐型で、北のセウォン塔(1号)の高さは2.1～2.7mで、ファソンムル塔(2号)は2.7mだ。

シンファンリ

新興里には防邪塔が5基もある。防邪塔の多いことも珍しいが、5基のうち、3基は潮水の押し寄せる浅瀬に位置しており、興味深い。

シンファンリ

新興里の防邪塔は元々東西南北と中央にそれぞれあったという。中央のクンゲ塔を中心に、北にはオダリ塔、南にはゲモル塔、東にはダブル塔、西にはダリッゲ塔があった。理由は分からないが、クンゲ塔とオダリ塔だけが残され、残りの3基は2000年代に入り復元されたものだ。

ハガリ 下加里の石垣

ボンチョンス

下加里は茅葺きの伝統家屋、石垣道、オルレ、雨水などを貯めておく奉天水、蓮花池など、暮しの遺跡が残っている村だ。特に、村ができた頃の石垣道が残っており、濟州の古い村の風情が満喫できる。

石垣のほかにも、国家指定文化財の馬の挽き臼のジャッドンネマルバンアと、地方文化財である茅葺きの伝統家屋の村でもある。

済州石文化公園

ジョチョンウプ ギョレリ

済州市朝天邑橋来里にある済州石文化公園は、済州の石文化の醍醐味を味わえるところだ。

敷地の面積は約3,270㎡で、広大な面積の石をテーマにした韓国でも珍しい公園だ。

済州石文化公園は大きく室内展示館と野外展示場に分けられるが、室内展示館はメイン展示館である済州石博物館をはじめ、石文化展示館、ソルムンデハルマン展示館、五百將軍ギャラリーなどで構成され、野外展示場は茅葺きの伝統家屋、済州の古い村の姿を再現した空間、石文化の野外展示空間、橋来自然休養林などが設けられている。



済州石文化公園のドルハルバン

ドルハルバン公園

ジョチョンウプ プクチョンリ

済州市朝天邑北村里にあるドルハルバン公園は、済州の代表的なシンボルの一つであるドルハルバンをテーマにした公園だ。空ギャラリー、体験工房、アートショップ、コーヒーショップなどの室内空間、再現展示空間、技能展示空間、創作展示空間などの室外空間がある。ドルハルバン公園の室内外に展示された様々な石は、すべて個人の努力によって集められたもので、石の風変わりな魅力が感じられる。



北村ドルハルバン公園



海女の文化

海を生活の基盤としたエコフェミニスト

済^{ヘニョ}州の海女は何の装備もつけずに、身一つで海の生態環境に適応し、素潜りの技術と知識を発達させ、家庭経済の主體的な役割を果たしてきたエコフェミニストだ。

済州の海女の暮らしと文化の焦点は、身一つでする「ムルジル素潜り」にある。海女は海中で大きな波に身を任せ、浮力と目の前の変化に適応し続けなければならない。海女的水中作業である素潜りは高度の技術を要するが、息をこらえて水深15mの海中で1分以上作業するその技術は、まさに超人的だ。

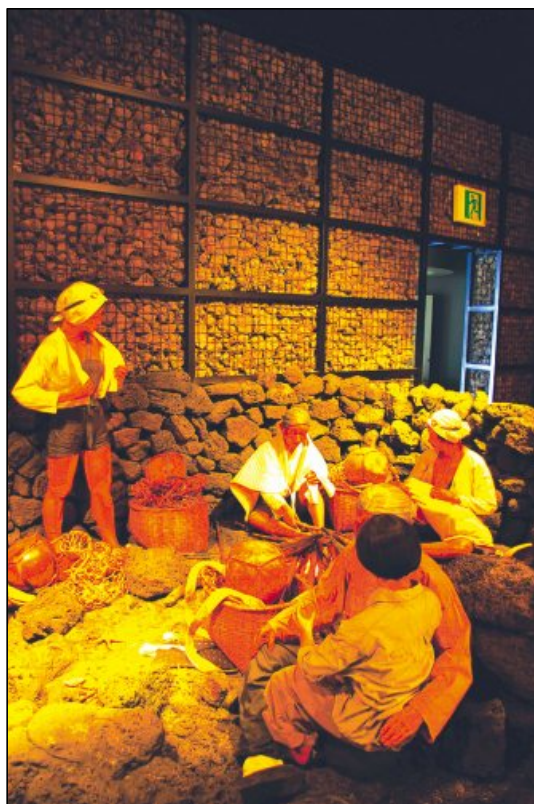
海女を称する呼称は「海女」以外にも「^{ヘニョ}ジウムニョ」「^{ジウムス}潜嫂」がある。「海女」は韓国では一般化された呼称だ。済州では主に「^{ヘニョ}ジウムニョ」と呼ばれたが、朝鮮時代の古文文献には「^{ジャムニョ}潜女」と記されている。朝鮮時代は海女漁における性別役割分業が行われたと考えられる。
「^{ボジャク}鮑作」と呼ばれた男性は主に深い海の中でアワビを採り、「^{ジャムニョ}」と呼ばれた女性はワカメやミルなど海藻類を採ったと見られるが、17世紀後半に入ってから素潜りは、女性の仕事として定着したようだ。^{ジウムス}潜嫂という呼称については、1953年に水産業法を改定した当時の自由党の水産分科委員会により「裸潜業」が指定され、行政文書などで「潜嫂」という用語が使われるようになった。

古文文献に現れる済州の海女

済 州の海女に関する記録は古文書にたくさん残っている。
高麗時代以前の記録は、海女が採取した真珠やアワビなどの貢ぎ物に関する資料がほとんどだ。『三国史記』の高句麗本記の文咨王13年(503年)の記録にある「珂則涉羅所産」の「珂」は済州の真珠または貝類だったと推定されている。

『高麗史』には「文宗33年(1079年)に耽羅^{タムナ}の勾当使である尹^{ユン・ウンギユン}応均が大きな真珠2点を高麗に送ったが、その形が星に似ており、人はそれを夜明珠と呼んだ(耽羅勾当使尹^{チュンヨル}応均献大真珠二枚光曜如星時人謂夜明珠)」と記されている。さらに、忠烈王2年(1276年)には「元国が林惟幹および回回人である阿室迷里を派遣し、耽羅の真珠を採らせた(閏三月丁酉元遣林惟幹及回回 阿室迷里来採珠于耽羅)」という。

『朝鮮王朝実録』の世祖6年(1460年)の奇度牧使に関する記録は有名だ。彼はアワビを採る



海女博物館内のブルトクの再現

海女の労苦を知り、済州に滞在する間はアワビを食べなかったと言われる。

イ・ゴン

ジャムニョ

李健は『済州風土記』(1629年)で「ワカメを採る女を潜女と呼び、2月から5月まで海で作業する。ワカメを採るときは裸のジャムニョが鎌を持って海底にあるワカメを刈り、引き上げる。男女が一緒に働いているのに恥かしく思わない様子を見ては驚かすにはいられない。アワビを採るときも同様である」と伝えている。

イ・イクテ

李益泰は『知瀛録』(1695年)で「ワカメを採るジャムニョが多くて8百人はいるが、深い海中まで潜り、ワカメを採るのは採鰻女と変わらない。慣れないという理由で危ない仕事を避けようとしている。このジャムニョたちの苦労はそれぞれ異なる。将来、アワビを採る者がいなくなるのではと懸念され、均役賦役を均等にすることをしようと考えている。アワビ採りを身につけるよう奨励するため、ワカメを採るジャムニョに槌引鰻干しアワビを配って決めた」とされており、女性に海女漁が転嫁されたことがうかがえる。

イ・ヒョンサン

ジャムニョ

李衡祥の『耽羅巡歴図』の「屏潭泛舟編」には海女の潜る様子も描かれている。潜女と書かれた文字とともに、テワク・マンサリと呼ばれるスカリのついた丸い浮き球と、ソジュンイと呼ばれる磯着を着た6～7人の海女の作業する様子が具体的に描写されている。

済州伝統文化を収める器

済 州の海女は超人的な裸潜水作業、海女漁の技術、潮の干満の利用など独自の技術と知識体系を蓄積し、継承してきた。また、生業とともに神に頼る生活から生まれた巫俗信仰、労働歌、言語、共同体生活から生まれた社会組織など特有のユニークな文化を作って受け継いできた。

海女は10才頃から海辺で泳ぎを習い、16才になると潜水技術と漁場の地形を覚え、一人前の海女になる。そして30～40才になれば、漁場の地形を熟知し、岩礁のような地形物の特性を掴み、海産物の生態による生息地も把握できるようになり、アワビなどの居場所も直感で分かるようになる。

海女の作業日程は普通、潮時という潮の干満の差を利用して決められる。地域によって多少異なるが、済州市は「ジョグム」から「ヨソツムル」(旧暦7～14日、23～29日)まで作業する。この期間は潮の干満の差が少ないため、潮流の流れが作業の妨げにならない時期だ。

海産物の採集時期は産卵期を避けるなど海産物の生態的な特性を考慮して決められるが、これは海女の経験から得た生活知識だ。海産物の生態により、細かく作業が調整され、例えば、サザエの採集禁止期間は6月1日から9月30日までで、アワビは10月1日から12月31日までだ。

伝統作業服である「ムルオツ磯着」、アワビを岩から剥ぐときに使う磯ノミ、浮力を活かし獲物の重さを支えながら、移動にも使うテワク、獲物を種類ごとに分類して入れるマンサリスカ、海藻類を刈る鎌やホミなどの道具の利用は、海女漁を効率的にしようという意思と民俗知識の産物といえる。

海女が作業をするとき着る服を「ムルオツ磯着」と言うが、「ソジュンイ」と「ムルジョクサム」で構成されている。ソジュンイには脇明きがあり、脱ぎやすい上に、体重の変化や体格に合わせて調節できるようにになっている。ソジュンイは腰と胴体を包む機能があり、普段でも下着の代わりに着用していた。そのほかにも、頭を包むタオル、サメやイルカなどを追い払うために額に結ぶイモンゴリがある。

磯ノミは「ビッチャン」といい「アワビを採る槍」という意味をもつ、長さ30cmぐらいの鋭い鉄製道具だ。海女が移動したり、水上に上がり休むときに使うテワクはフクベで作られた。マンサリは植物を使い網の形に編んだもので、獲物を入れるのに使う。

1900年代初、日本から入り、使うようになった磯メガネは、収穫面での画期的な変化をもたらした。海女は湿気で磯メガネが曇るのを防止するために、ヨモギでガラスの部分を拭いた。

そのほかにも、テワクが潮水に流されないように、マンサリに適当な大きさの石を入れて錘として使った。また、息が苦しくなって採れなかった海産物を再び潜って採るための標識として「ボンジョゲンイ貝殻」を使ったりもした。

海女共同体の象徴ともいえる「ブルトク(カマド)」は海辺に石垣を積み上げて風や人目をさけ、着替えをしたところだ。ここで、海女は情報交換をし、互いに協力し、意思決定を行う。また、



城山日出峰のウムッゲで素潜りに出る海女たち

素潜りの学習の場としても活用される。

漁村契相互扶助の集まりの漁場規約や海神堂の巫俗儀礼も海女共同体が存続するための重要な役割を果たした。規約には海女会の構成と運営、海産物の採集禁止に関する事項、漁場の漁業権、境界指定などが含まれている。

済州海女の舞台は済州の海だけではなかった

済

州以外の地域に移動し潜る海女を「出稼ぎ海女」という。

出稼ぎ海女が現われたのは、日本の潜水器漁船の濫獲で漁獲物が減り、一方で外部世界とのネットワークが形成されたためだと思われる。

済州の海女が、初めて出稼ぎに

ギョンサンナンド

出たのは1895年、慶尚南道だっ

ガンウォンド

ダドヘ

た。以来、江原道、多島海、

ギョンサンブクド

ハンギョンド

慶尚北道、咸鏡道など朝鮮半

島だけでなく、日本の東京、大

阪、中国の青島、大連、そして

ロシアのウラジオストクなど各地へ

出稼ぎに出たが、特に日本への

出稼ぎは盛んだった。



昔の素潜りを再現する海女たち

歴史の自尊、済州海女の抗日運動

19

20年代の半ばに入ると、日本帝国の略奪が本格化し、また済州島司が海女漁業組合長を兼任するようになり、横暴は激しくなった。

グジャ

ウド

海女たちが抗日への意志を持ち、組織化した背景には、旧左、牛島を中心とする知識人階

層の「革友同盟員」という団体があった。この組織は1930年3月1日に結成され、後日、独

シン ジェホン

ガン グァンソン

ムン ドベ

オ ムンギユ

ギム スンゾン

立有功者になった申才弘、康寛順、文道培、呉文奎、金順鐘を中心とした抗日秘密決死団

体だった。

彼らは、日本の植民地略奪政策により生存権が脅かされた海女たちの抗日意識を高める一方、夜学で海女に学習させるなど組織的な抗日運動のために、背後で動いた。

ハド ブ チュンファ ギム オクヨン ブ ドクリヤン ゴ スンヒョ
革友同盟傘下の下道講習所の1期卒業生である夫春花、金玉蓮、夫徳良、高且童、
ギム ゲソク
金啓石の5人の海女の代表は夜学で民族教育を受け、青年民族運動家と連携した。最初は生存権闘争から始まったが、この運動は後の抗日運動の拡大に貢献した。

ハドリ
1931年12月20日、下道里海女デモを決意し、最高指導者の3人と代表委員10人を選出し、要求条件と闘争方法を決めた。その後、舟で済州邑の海女漁業組合の本部に行って抗議闘争を展開しようとしたが、気象条件が悪く、失敗に終わってしまった。
1932年1月7日、下道里の約
セファリ
300人の海女が細花里の市場の立つ日に本格的なデモを展開した。海女漁業組合のある済州



ハンスプル海女学校の海女像

グジャミョン
邑に向かって行進し、海女漁業組合旧左面支部長から海女の18か条の要求項目を解決するという約束を取り付け、解散した。

グジャミョン ハドリ セファリ ジョンダルリ ヨンピョンリ
1932年1月12日、旧左面の下道里、細花里、終達里、演坪里と現在の城山邑である
ジョンイミョン オジョリ シファンリ
旌義面の吾照里、始興里の約1000人の海女が集結し、デモを展開した。海女は細花里駐在所を巡視していた済州島司を包囲し、激しく闘争した結果、要求条件8項目を2～3日以内に解決するという約束を取り付け、万歳を叫んで解散した。

済州の海女の抗日運動は日本帝国の経済略奪に対抗した生存権守護闘争であると同時に、日本帝国の略奪政策に積極的に抵抗した女性抗日運動として評価されている。

海女文化との出会い

ギムニョンリ

金寧里の海

旧左邑には現在、済州島全域の邑面のうち、最も多い約1000人の海女がいる。

旧左邑金寧里は8か所の自然部落で構成されている。漁場ごとに生産される海産物の種類や量が異なるため、東西の各村の漁村契の所得源の公平性を考慮し、交代で海女漁が行われた。海にはサザエ、アワビ、タコ、ナマコ、ウニなどが

チョンチョ

豊富で、天草と呼ばれるテングサも

たくさん採れた。金寧里の海女の年齢は他の地域と同じく、60～70代が90%を占めている。

海女の社会を維持し、海女の信仰共同体を代表するのはジャムスグッだ。特に、金寧里は済州島の海女村の代表とされるほど、海女の活動やジャムスグッなどの海女文化を



潜嫂グッ

よく残している。金寧里のセギアルという海辺で毎年旧暦3月8日にジャムスグッが行われる。供物など儀式にかかる費用は海女会から共同で捻出される。

城山日出峰のウムッゲ

城山日出峰に上ると左側に美しい海が広がる。そこがウムッゲだ。海が深く入り込んでいるため、潮の干満の差が小さく、海藻類など海産物が豊富な恵まれた漁場だ。

美しい景色にふさわしく漁場の名称もゴムドレギ、チャンゴム、ケッド、オットク(オジョンゲ)、ヨンダン、ヨンチョルリ(ヨンコリ)、プヌンチェゲなど様々だ。済州の固有語を使い、海の神である「竜王」または類似した地形にちなんで付けられたと思われる。

日出峰に象徴される城山の海女の活動は、他の地域に比べて情熱的だ。作業に参加する海女は約90人で、ジョグム旧暦9日、24日からヨルドルムル旧暦2日、16日まで9日間働く。テングサやヒジキなどの海藻類は共同で作業し、収入も均等に分ける。

ウムッゲでは潮時に関係なく、1日2回海女唄公演と海女漁の試演が行われている。ウムッゲ海女小屋は



城山日出峰のウムツゲ

海女が採った海産物を販売する食堂兼直販場で、アワビの粥、サザエ、アワビ焼き、ナマコ、タコ、ホヤなどを味わえる所だ。

ボプファンドン

西帰浦市法環洞のジャムニョ村

ボムゾム

手の届くほどの近い沖合に虎島が広がる法環洞は、多くの海女が盛んに作業をしているところだ。

ソホンドン

ホクンドン

ソホンドン

ここでは海女漁を「バルチル」という。西烘洞、好近洞、西好洞、法環洞の海女が法環洞漁村契を構成しており、漁場は西烘洞の地境の「ウェドルゲ」、その他に法環洞の地境の「ドラガントク」、好近洞の地境の「ガリンニョ」、西好洞の地境の「ソコル」、法環洞の地境の「ジンモフル」、「イルレンイ」、「マンダリ」、「ドリムルコジ」、「ベヨムジュリ」、「クンモク」、江汀洞との地境である「ドウムニムル」などだ。

現在、60～70人の海女が作業をしているが、「ジョグム」から「ヨソツムル旧暦15日、1日」まで行う。虎島の周辺の漁場は波が荒いため、普通は2か月に1回、「ハンムル旧暦10日、25日」から「ドムル旧暦11日、26日」まで天気に恵まれた日を選び、アワビ、サザエ、ウニなどを採る。

ハンスブル海女学校

ハンリムウプ ギドク

翰林呂帰徳2里の漁村契所属の30人の海女が先生として活躍している。2008年から始まった海女学校は、毎年5月から8月の毎週土曜日に授業を行っている。その内容は海女の道具の使い方、潜水法、呼吸法、泳ぎ方、採集といった海女漁の実習が中心だ。これまで、第4期151人を輩出しており、卒業生のうち、12人が海女として活躍している。

海女学校の設立目的は、季節を問わず、海に屈することなく闘いながら、海産物を採り続けてきた済州の海女の知恵と強靱な開拓精神を継承し発展させることで、済州の海女文化の保存に貢献することにある。

2012年からは学校施設を拡充し、観光客や希望者を対象にした海女体験場も開設され、海女の日常や海女の食べ物などを体験できるようになった。

海女博物館

済州のオルムと海女の道具のテワクを模した海女博物館は、その外観が目を引く。

第1展示室は、済州漁村の様子をそのまま復元し、四季折々の漁村の日常を背景に海女の生活、信仰、農耕生活に関する遺物や、サザエ、アワビ、ウニなどを使った様々な食べ物の模型、生活道具などを展示している。

第2展示室は、潜るときに着替えたり、暖を取りながら会話を交わしたブルトクカマドの原型を再現し、済州道の民俗資料第10号に指定されたビッチャン磯バミ、テワク丸い浮き球、マンサリスカリなどの海女の道具や海女の磯着である「ソジュンイ」など15点を保存・展示している。そして、海女抗日運動に関する歴史資料や当時の夜学堂の様子を再現するなど、済州海女抗日運動の歴史的な事実をリアルに表現してい

る。ここでは出稼ぎ海女に関する話にも接することができる。

第3展示室は海女の作業場、漁師の暮らしと漁労文化を展示している。テウ伝統的な漁で使われていた舟を利用したスズメダイ取り、カタクチイワシ取り、全国唯一の岩塩田の模型を展示しており、海女にまつわることを紹介している。

そのほかにも、子供たちが済州の伝統文化や海女の生業と文化を学習・体験できる子供の海女体験館もある。



海女博物館



カッの展示

地場産業

自然順応型の産業

済 州は自然資源が限られた火山島であるため、地場産業の発達には限界があった。にもかかわらず、人々の日常生活や農業・畜産業・漁業の活動に必要な製品が生産され、地域内に供給されたり、一部は朝鮮半島の他の地域に売られることもあった。牧場地帯で育てられた牛馬やきれいな海で採れた水産物、そして、カッ笠などが他の地域に搬出された代表的な製品だった。その他、鋳物、甕器、冠帽なども生産された。こうした済州の地場産業は、火山島という環境と、限られた自然資源を反映しつつ、不毛の地

と広大な海を背景に生まれたのだ。また、済州の地場産業は、規模は小さいものの、土地を背景にした農業と牧畜業、海を背景にした漁業、済州の日常生活に欠かせないものを作る製造業に分けられる。

ゴムンシエ

中山間草原の産物、済州馬と黒牛

牧 畜業は済州の自然環境の産物ともいえる。火山活動で形成された済州島の標高200m～600m一带には草原地帯が広がる。ここが、済州の地場産業の中でも最も大きな比重を占める牧畜業を産み出したところだ。

済州は、昔から名馬の産地として知られている。1400年代から1800年時代までの朝鮮時代の済州地域の草原には、国馬場が設置されていた。当時、済州島の牧場は大きく十所場と山馬場に分けられていた。



済州馬

朝鮮初期の中山間の草原を10か所の牧場に分けた十所場の^{ゴドクジョン}登場には、済州出身の高得宗が重要な役割を果たした。同氏は世宗に、放牧された牛馬による農作物への被害の防止と、体系的な牛馬飼育および安定した確保のための国営牧場の必要性を訴えた。

朝鮮中期以降は、「献馬功^{ナモョンウブ ウイギリ}臣」として有名な南元邑衣貴里^{ギム マンイル}出身の金万鎰の後孫によって山

馬場が運営され、朝廷に御乗馬を献上した。

国営牧場は、今日の憲法に当たる『経国大典』に基づき、馬監、群頭、群副、牧子(テウリ)からなる馬政組織によって運営された。そのうち、特に牧子は、牧場で牛馬の飼育に関する実質的な責任を持ち、16才から60才まで牛馬の生産と管理に従事した。一度牧子になれば、子供にまで世襲され、転居や転職は許容されなかった。各牧場で生産された優秀な馬のうち、1年におよそ500頭が朝廷に献上された。朝鮮王朝の500年間、約25万頭以上が朝鮮半島へ搬出されたことになる。

済州地域の牧畜業の象徴的な存在は、チョランマルでよく知られている済州馬と済州ではゴムンシェと呼ばれる黒牛だった。

済州産の黒牛は朝鮮時代に朝廷に献上され、宮廷の様々な儀礼で用いられてその名声を博した。そのため、当時の済州牧師は、黒牛の安定した供給と管理のために、毛洞場、モドンジャ、サンミジャ、ファンデジャン、川尾場、黄泰場などを作り運営した。

済州馬放牧地

済州馬は、体格は小さいものの、持久力と病気に強いという特徴を持っている。標高600mの犬月岳の麓にある済州馬放牧地は、済州馬の血統保存と増殖のために設置された牧場で、1986年には天然記念物第347号に指定された。済州馬として登録され、同牧場で育てられる馬は、固有の血統を保存するために、登録されていない他の馬との交尾を禁止し、伝染病の予防接種を持続的に実施するなど徹底的に管理される。

済州馬は、冬季には種牡馬、種牝馬、育成馬、雌馬などを隔離し、中山間の村である海安洞にある放牧場で飼育する。夏期には済州馬放牧地で放牧するが、青々とした草原に戯れる馬の風景は、済州の十景として知られている「古薮牧馬」を思い起こすほど、観光客の目を引いている。

苦痛の特産物、ミカン

済州のミカンはいつから栽培されたのだろうか。様々な主張が提起されているが、『高麗史』(1052年)の「耽羅で歳貢として献上されてきたミカンの量を1百袋にする」という内容から見ると、高麗初期にすでにミカンを栽培していたことが分かる。

朝鮮時代に済州で生産されたミカンは献上品だった。そのため、官庁が管理する果園が作られた。李元鎮の『耽羅志』(1653年)は、中宗21年(1526年)に済州牧師の李寿童が造成しはじめたと伝えている。西帰、別防、水山、東海、明月の5つの防護所に果園を設置し、ミカンの苗木を植え、軍人に果園を守らせた。

献上用のミカンは果園だけで栽培されたわけではない。一部の家庭でもミカンの栽培が行われたが、官庁の厳しい監督下に置かれた。官庁の過度な干渉に加え、献上品のミカンの生産は難しく、ミカンの木をわざと枯死させることも頻繁だった。朝鮮時代のミカンの生産は済州人にとっては苦痛にほかならなかったのだ。

ボスブ

済州式農機具、犁先

済州は、韓国で最も降雨量の多い地域だ。しかし、土を少し掘れば、すぐに基盤岩が現れる土壌で、天は湿っているが、地は乾きやすい、いわば「天湿地乾」の土地ともいわれる。

さらに、済州の人々から「浮いた土地」と呼ばれる火山灰土が風に吹き飛ばされる場合が多く、農作に問題が多かった。このため、夏季に農作物の種を蒔いた後、牛馬を利用し、土壌を踏み鎮圧農法が登場した。

ボスブ

このような、自然環境の中で農業を営むには「犁先」と呼ばれる犁の刃が必要だった。

ギム サンホン

金尚憲は『南槎録』(1669年)で「田畑を耕す者を見ると、農機具が子供のおもちゃのようだった。

住民にその理由を聞いたところ、2〜3寸ほど土の中は岩と石だらけだと答えた」と伝えている。

ボスブ

少し土を掘っただけで岩が現れる地質条件により、農機具が小さくなったのだ。「犁先」と呼ばれる犁先も朝鮮半島のそれと比べれば、当然小さかった。

ドクス

徳修のブルミ工芸

アントクミョン

済州島で犁先が生産された代表的な村は、安徳面徳修里だ。徳修里のブルミ組織が生産した犁先は全島に売っていったという。この村は今もブルミ工芸の文化を残している。

「ブルミ」はふいごを意味する済州の方言で、鉄を焼いたり溶かしたりするのに必要な風を起こす器具だ。

伝統社会で徳修の村人は、铸铁で犁先などの農機具と釜を製作し、収入源とした。ブルミ工芸はブルミマダンと呼ばれる所で行われた。

ブルミマダンとは犁先、犁のへら、釜などを大量に铸造する空間であり、10人ほどの職人が働いた。ブルミマダンの構成員は、ブルミマダンの主人であるウォンデジャン(1人)、ブルミマダンを総括するアルデジャン(1人)、溶かした鉄を穴に注ぎ入れるジェッデジャン(3人)、溶鉱炉で鉄を溶かすドゥクデジャン(1人)、鋳型を作るジルモクデジャン(1人)、作業員(4人)などがいる。徳修里のブルミ工芸は、数人の職人が各生産段階ごとに分業化・専門化し、犁先を生産した。ブルミマダンでは、手ふいごでは鉄を焼いた後、刀、ホミ、鋸などを作り、たたらではドゥク(溶鉱炉)で溶かした鉄を「デンイ(器本、鋳型)」に注ぎ入れて釜と犁先を作った。

そのなかでも、特に犁先は、徳修里のブルミ工芸を代表する製品だった。



徳修のブルミマダン

活発な生産活動の舞台、海

済 州で生産活動がもっとも活発なところは海だ。済州の海は、済州の人々にとって、新たな生活の基盤であり、機会の場だった。

済州の海は、暖流の黒潮の影響で、1年を通して漁労作業が可能で、昔から海女と漁師が魚など海産物を取りながら生活を営んだ。

海の女王である済州の海女は、潮間帯にある村の漁場に近い海でワカメ、アワビ、サザエなど海産物を採った。素潜りをする海女は、時折水面に顔を覗かせ一呼吸するが、その時の磯笛は済州の海岸ならではの風景だ。

海女は作業能力によって上軍、中軍、下軍に分けられる。2011年現在、済州の海女は計4,881



伝統船のテウ

人だ。人数が多いようではあるが、そのほとんどは60代以上で、高齢化が進んでおり、遠からず海女がいなくなる危機にさらされている。

潮間帯の海ではワカメを保護するために、成長期である12月から3か月ほど採取を禁止し、その後、3月15日に一齐に解禁する「ワカメの解警」が行われる。

遠くの海では漁船を利用した漁師の漁業活動が行われた。漁師は主にブリ、タチウオ、スズメダイ、アラ、カタクチイワシ、アマダイ、イシモチなどを取った。

ソグムバツ

塩田とソグムバチ

済州は干潟がなく、曇りがちで雨の日も多く、塩田が形成されにくい所だった。そうした自然環境下で、済州の人々は塩が十分に供給されなくなると、馬、馬尾、海産物を売り、朝鮮半島から塩を購入して利用した。

済州ではいつから塩を生産したのだろう。

塩田という名称が紹介されている資料としては『南槎録』（1602年）、『南宦博物』（1702年）が代表的だ。

イ ヒョンサン

『南宦博物』（1702年）には、済州牧師の李衡祥が朝鮮半島から搬入した鉄4000斤で3つの鉄の釜を制作し、済州牧に二つ、大静県に一つを配分し、塩を作らせたという記録が残っている。

『南槎録』には現在の旧左邑下道里一帯の別坊から旌義県までの海岸に塩田があり、海岸に沿って7か所の塩盆があったと書かれている。また、『南槎録』には次のように記されている。

かつての『沖庵録』（1520年）には、黄海のように塩を得ようと海水を汲んできて蒸発させ、塩づくり

ガン リョ

を試したが失敗したので・・・、済州牧師の姜侶は海辺の鹵地を見ては、済州人に朝鮮半島で

ジンド ヘナム

の塩の作り方を教え、塩を作らせた。不足分は南海岸の珍島、海南などで購入した。

済州島では塩を作る人を「ソグムバチ」といった。塩を生産した村の一つである旧左邑終達里は日本統治時代に名声を振った塩の生産地だった。

『韓国水産志』（第3集、1911年）は「終達里は有名な塩の生産地で、認可353号のうち、塩の生産に従事する者が160人に上り、釜は46個があった」と伝えている。この村には1945年

ガマンチブ

から1950年頃まで、塩をつくる「釜の家」が9か所あった。古く塩を生産した所は田畑になってしまったのだ。

グオム

旧巖の岩塩田

旧巖里は昔から塩を作る人が居住した村という意味で「巖蔵伊」とも呼ばれた。この村では海岸に位置する岩盤を利用し、太陽熱で海水を蒸発させて塩を生産した。その岩盤を村人は「ソグムビルレ」と呼んだ。

岩盤地帯で生産された塩は、粒が大きい天日塩だった。その塩は生産にかかわる人に少しずつ配分された。塩の生産が経済的な利益を保障したため、塩田は相続が可能

ギム、サンスン

で、売買することもあった。この村の金相淳氏は1953年旧暦5月6日に作成された「塩田売渡証書」を保管している。



グオム

再現された旧巖の岩塩田

オンギ

済州の土で甕器を生産

19 60年代まで、甕器は済州の人々にとって欠かせない生活用品だった。済州地域の

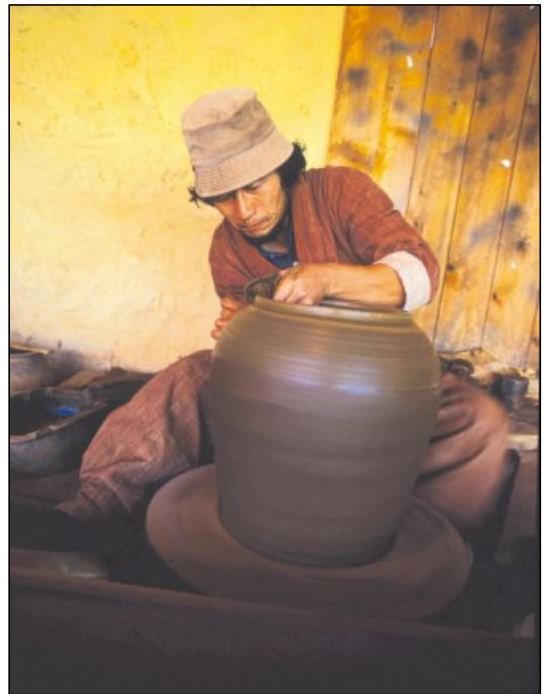
ゴサンリ

甕器は良質の泥の多い翰京面高山里と造水里、そして大静邑新坪里一帯で生産された。

ジョスリ

シンピョンリ

甕器を焼く窯のことを済州では「グル」という。窯には一般的に午後から火入れを始め、5～7人が交代しながら2～3日間作業をし続けた。火力の強いクヌギとマツを薪として使った。生産された甕器は甕器商によって舟や馬車で運搬され販売された。



甕器を作る様子

済州産の馬尾でカッを生産

『**顕宗**実録』5年3月条には「済州の風習で、女性ならだれでもカッ笠を作り、朝鮮半島へ売り、家計を支えた」という記録が登場する。

朝鮮時代の済州島では馬がたくさん生産されたため、馬尾である「マルチョン」でカッ、タンゴン宕巾、カッという被り物の下に被る物、マンゴン網巾、帯状の被り物を作り、朝鮮半島地域へ売った。このうち、カッは馬尾と竹で作った。

こうした伝統手工芸品は、主に済州市禾北洞、朝天邑咸德里、新興里一帯で生産された。

いずれも済州島と朝鮮半島を結ぶ山地浦、別刀浦、朝天浦など北の港と近い村だった。

済州にはカッの材料である竹が豊富だった。不足した場合は慶尚南道下東、晋州一帯で粉竹を購入して作ることもあった。

1925年当時、済州島内でカッ生産に従事した戸数は1万3,700号で、1930年に生産されたヤンテつばに当たる丸くて広い部分は17万5,600個、カッは8万3,770個だったのを考えると済州でどれほど活発に生産が行われたかが分かる。



カッづくり

商業中心地、五日市場

済州の五日市場の始まりは、1906年郡守の尹元求ユン・ウォングの赴任がきっかけだったという。同氏は済州の人々が物資を円滑に流通できるよう、済州邑内、梨湖、外都、涯月、イホ ウェド エウォル三陽、朝天、金寧、細花、西帰浦など9か所に五日市場を開設するようにした。サムヤン ジョチョン ギムニョン セファ ソギボ

そして登場した五日市場は、済州島の農漁村まで商取引が活発に行われるきっかけになった。済州の人々に自ら生産したものを販売できる機会や、生必品を購入できる機会を提供したのだ。済州地域の五日市場は、人口の増加を反映し1970年代末には一時25か所まで増えたが、1980年代からは衰退の一途をたどっている。済州道の五日市場は1992年14か所から2006年現在、済州市、西帰浦、中文、細花、翰林、大静、古城、城山、表善の9か所に減った。ジュンムン ハンリム ゴソン ビョソン済州島内の最大の五日市場は、済州市民俗五日市場だ。都市化が進む中でいろいろな所を転々としたが、1998年に現在の位置に定着した。2と7のつく日に市場が開かれる。

済州・西帰浦の五日市場

長い歴史を持つ伝統的な市場の中で代表的なのは五日市場だ。済州道内の最大規模の五日市場は、済州民俗五日市場だ。この市場は、都市化の過程で何度も場所を転々とした。観徳亭の前と塔洞周辺(1910年代～1960年代)に立った五日市場が、1998年に現在の済州市道頭1洞1212番地に移転し定着した。現在の済州民俗五日市場の面積は6,700余㎡であり、洋品店、鍛冶屋、食堂、花屋などの空間で構成されている。2と7のつく日に市場が開かれる。

西帰浦郷土五日市場も都市化によって移転を余儀なくされた。1995年10月、ソホンドン西烘洞ソムバンチョン付近から、現在ドンホンドンの東烘洞779-3番地一帯に移転した。農水畜産物をはじめ、衣類や靴、食品加工、家庭用品などが販売されている。店舗数は約500にのぼり、敷地面積は43,500㎡だ。お正月など書き入れ時には2万人以上が訪れる山南地域最大の伝統在来市場だ。4と9のつく日に市場が開かれる。



済州五日市場



東門在来市場

く、野菜類と衣類はそれぞれ36店舗で8.3%を占めており、食堂は31店舗で7.1%、精肉店は16店舗で3.7%の順だ。

西帰浦毎日オルレ市場

西帰浦毎日オルレ市場は、オルレギルのトレッキングが人気を呼び、西帰浦毎日市場から名前を変更した後、訪れる人が増え、全国の在来市場からの視察が後を絶たない。低迷の一途をたどっていた西帰浦毎日オルレ市場が目立つようになったのは、済州オルレ6コースと連携し、オルレクンオルレのマニアの足が自然に向くようにしたことが大きく作用した。また、中小企業庁と市場経営振興院から「行きたい在来市場50選」に選定され広報が行われたのも一つの理由だ。

西帰浦毎日オルレ市場は大幅な改修が行われ、海産物通り、雑貨通り、青果通り、食べ物通りなどに区画



西帰浦毎日オルレ市場

ドンムン

東門在来市場

東門市場は、(株)東門市場、東門在来市場、東門公設市場で構成されており、済州特別自治道で最も長い歴史を持つ在来常設市場だ。

現在の東門公設市場の規模は、敷地2,802㎡、建物面積3,940.98㎡で、4階からなっている。総店舗数は約960店舗にのぼり、従事者数は約2,700人と推定されている。

業種別に見ると、魚類を扱う水産市場は175店舗で、全体の40.4%と多

されている。市場の中には済州オルレ・インフォメーション・センターがあり、案内とともに土産も販売している。

最近では、中国の杭州市市場協会と海外姉妹関係を結び、現在まで活発な国際的な民間交流を推進している。また、スマートフォンから簡単に市場の案内情報を得ることのできる最先端の在来市場を実現させるために、近距離無線通信(NFC)技術ベースの在来市場の活性化にも力を入れている。

済州陶芸村

済州陶芸村は、西帰浦市大静邑
ヨンラクリ

永楽里に位置する済州伝統甕器生産メーカーだ。1960年代に消滅した石窯を復元し、伝統甕器と磁器などを生産、普及するために設立された。1997年に、済州島の伝統的な窯や陶器を研究する研究者と地元の「ホボク入り口の狭い水を入れる甕」を生産する職人たちが力を合わせて陶芸村を開設した。2000年には済州道無形文化財第14号に指



済州陶芸村

定され、ホボク職人の申昌鉉とともにノラングル黄色い窯の復元に成功した。ホボク職人は済州陶器を代表する「ホボク」を作る職人のことで、ホボクは、十分な飲み水が確保できなかった時代に、済州の女性たちが飲み水の運搬用に使った甕器のことだ。

カッ展示館

カッ展示館は、カッづくりのうち、ヤン
テツばに当たる丸くて広い部分の技能保有者
ジャン スンジャ

である張順子氏が、伝統文化を後
ギョレリ

世に伝承するために寄付した橋来里457-1番地の敷地に済州特別自治道が建設したものだ。規模は敷地面積2645㎡、建物建築999.21㎡、地下1階、地上2階建てで、2009年5月に開館した。

展示館は、高句麗時代のカッから時代別の流れが分かる様々なカッを展示する展示室、カッづくりを直接体験できる体験室、カッづくりの過程



カッ展示館

程に関する映像物を上映する映像室、カッづくりをする工房などで構成されている。観光客に見どころと文化体験型観光を提供するだけでなく、重要無形文化財伝授会館の役割も担っている。観覧時間は午前9時から午後6時までで、毎週月曜日は休館する。



衣文化

一切れの布も無駄にできなかった

農 地が火山島だという地理的・自然的条件を持つ済州の人々にとっては、食べていくのに精一杯で、盛装したり、着飾るほどの余裕がなかった。しかし、与えられた環境に屈することなく、最大限の知恵を働かせ対応する前向きな姿勢を貫いてきた。そうした環境と状況が衣生活に影響を与え、済州ならではの特有の生活文化を育んできた。ありふれた草でも使う分だけを採った。その背景には「過ぎたるは猶及ばざるが如し」という生活

の哲学がある。実用性、利便性、そして多様性を念頭に置いて工夫し、一切れの布も無駄にできなかった。古くなって使えなくなっても捨てるのではなく、リフォームして使った。

服は物理的なものではあるが、着ることによってその人の魂が宿ると信じられた。そのため、元気な人や福相の人のお下がりをもらって着せようとした。また、人が死ぬとその人の服をむやみに捨てずに、燃やして一緒に冥途に送る習慣があった。

服装において現在は他の地域と

あまり変わらないが、ホサンオツ寿衣とカルオツ柿渋染めの服だけはその伝統が受け継がれている。



伝統衣装

濟州島の衣文化を知る

ボッディチャンオツ

ボッディチャンオツは昔の濟州の人々の産着だ。「ボツ」は胎盤を意味する濟州の方言だ。「赤ちゃんが生まれて着る大きな服」という意味を持っている。

濟州の人々は生まれて3日目に新生児の生命の無事が確認されると、母親と新生児はヨモギ湯で体をきれいにし、子を見守ってくれるという産神のサムシンハルマンに祭礼を行い、新生児にボッディチャンオツを着せて初乳を飲ませた。

この服は他の地域のベネッチョゴリ産着とは異なる。ボッディチャンオツは体を保護するという意味よりも、赤ちゃんがすくすく育つことを願う呪術的な意味を持っている。素材も他の地域で一般的に使う綿ではなく、季節を問わず麻布を使った。

事前に服を作ろうと騒ぎ立てると凶事が起ると信じ、新生児の無事を確認してはじめて服を作った。子孫



ボッディチャンオッ

が少なかったり、元気でない子供のいる家庭では、無病長寿で福相のおばあさんの下着をもらって作って着せたり、元気な子供の服のお下がりをもって着せた。その服には福があるため、ほかの人に貸しても必ず返してもらった。

済州の人々は衣服にその人の魂が宿っていると信じた。そのため、いくら着物が無いからといってあれこれお下がりをもって着せず、子供の幸せを願いながら着せたのだ。

ソジュンイ

今日の女性用の下着に当たるもので、実用性と利便性を兼ね備えている。



ムルソジュンイ

ソジュンイは他の地域では見かけないユニークな服で、形は海女が潜るときに着るムルソジュンイに似ているが、上着が、胸元まで上がるタイプではなく、腰部分を紐で結ぶタイプだ。裁断は一切切れも無駄にしないよう、平面裁断で作るが、尻当ではパイアスを取っており、体の動きが自由な上に、体にくっつかず風通しもよい。

頭巾とゴヌンデグドク

外出するとき、男性はカッスを被り、女性は頭巾を被ってはじめて礼を重んじた正装になる。

1960年代まで、普段の外出ではゴヌンデグドク竹籠をハンドバックのように脇に挟んで持ち歩いたり、距離が遠い場合は背中に担いだ。

頭に頭巾、脇にゴヌンデグドクを挟んで持ち歩く姿は済州だけで見かける風景だった。

「サドングドク」という名称もあった。「サドン」とは婚家を指す言葉で、婚家に慶事や弔事のあるとき、ゴヌンデグドクに米や餅を入れて訪問したことに由来する。一般的に一斗ほどの大きさで、現在も結婚式のときに婚家に食べ物を入れて送る。

ムルオッ

済州島の労働服は、利便性、丈夫さ、実用性を兼備しており、厳しい労働環境を乗り越えられるよう、工夫されている。

ムルオッは海女漁のときに着る労働服であり、専門作業服だ。ムルソジュンイ下着とムルジョクサム上着、ムルスゴン頭巾になっている。最初はムルソジュンイだけを着たが、その後ムルジョクサム、ムルスゴンを着用し、1970年代からはゴム素材のウエットスーツを着るようになった。

伝統的なムルオッは自ら作って着用した。上着はぴったりと体に密着するタイプで、下着は尻当てはパイアスで伸縮性があり、二重になっている。

脇明きがあり、屋外で着替えるときも全部脱がずに、片腕を外せば着替えられるようになっている。特に、ソジュンイは妊娠などでサイズが小さくなったり、出産後に大きくなったりしても着られるように、ボタンをはめるボタンホールを大きくして調節を可能にした。

カルオッ

済州島は土地が荒れているため、休みなく働かなければ生活できないと言われてきた。そのため、仕事着を脱ぐ暇さえなかったという。夏は蒸し暑いので、物が傷みやすく、水不足の地域なので洗濯もあまりできなかった。そうした生活環境や自然環境を乗り越えるのにうってつけの服がカルオッだ。

カルオッは柿渋で染めた服で、農民・漁師が労働服、普段着として着た服だ。「カルオッ」という名称は、「柿渋で染めた服」または「褐色を帯びている服」ということから由来したと言われる。

カルオッは風通しがよいだけでなく、糊付けした服のように肌触りがパリッとしている。また、汗や水に濡れてもべたつかず、乾きやすい特性を持つ。イバラやドゲなどにも引っ掛からず、引っ掛けても破れない。これは柿渋染めにすると強度が高まり丈夫になるからだ。そのため、服が古くなると再び柿渋染めして着たりもした。麦ぬかなどがくっつきにくく、くっついても振り落とせばとれるので、労働服としてうってつけなのだ。

カルオッの色は済州の土の色に似ているため、汚れても目立たない。また、柿渋染めで生地がコーティングされているので、汚れにくく、汚れても水洗いして干せば、またすぐに着られる。

さらに、汗に濡れた服をそのまま放置しても悪臭がしないのは、化学染料で染めた服に比べて抗菌性にすぐれているからだ。また、紫外線防止効果も高い。

雨装

他の地域は肥沃な土地に恵まれ、古くから水田農業が行われてきたため、藁で生活用品を作って使用した。一方、済州島では山野で得られる草を使った。雨装もその一つだ。

雨装は寒いときは防寒服として、雨のときは雨具として、野宿するときは布団として、牛馬のための祭礼を行うときはござとして使われた衣服であり、生活用品としての様々な機能を持っていた。

形はマントに似ているが、長さは膝までである。素材は「ミ」と呼ばれるススキの若葉と茅葺き伝統家屋に使われる「茅」だ。茅は藁にくらべて防湿効果が高い。雨の多い済州島の自然環境にうってつけの素材なのだ。

ホサンオッ

済州では寿衣のことを「ホサンオッ」または「ジョスンオッ」といい、最高のものを用意しておいた。男性の場合はドポと呼ばれる服を、女性の場合は結婚式に着たジャンオッ、ウォンサムを寿衣として着ることもあった。

ホサンオッの生地は、他の地域では麻布を用いたが、済州では紬を使った。病気を患っている人は、事前にホサンオッを作っておくと寿命が長くなると言われ、一般的に閏月や還暦の年に作った。

ホサンオッには死者のあの世での幸福を願う思いと、残された子孫の幸福を願う思いが込められており、今までも受け継がれている。



食文化

長寿の島、済州の料理

済 州は韓国で100才以上の高齢者が最も多い「長寿の島」だ。
 済州人の長寿に関する記録は朝鮮時代の様々な文書にも紹介されている。

16世紀の林悌による『南溟小乗』には、30世帯が住む小さな海岸の村を訪問したとき、100才以上の老人7人に会ったと記されている。17世紀初めの李衡祥牧師による『耽羅巡歴図』の「済州養老編」には、済州に住む80才以上高齢者を招き、宴会を開く様子が描かれている。

李元鎮は『耽羅誌』で、済州の人が長生きする理由について述べており、注目を集めている。「済州の真ん中には漢拏山があり、南海の毒気は山に塞がれ、北風が湿気や熱気を追い払うからだ。そして、島内でも漢拏山の南の方より、北の方がさらに長寿の条件をそろえている」と述べている。それは長寿に関する自然環境的な要因を強調したもので、涯月、翰林、翰京などの現在の長寿地域とも一致している。

済州は実に健康のためによい地域だ。

一般的に健康の三要素といえば、身体活動、休息、食生活を意味する。済州では女性が長生きするが、済州のおばあさんたちの旺盛なる活動に勝るものはない。一生、子供に頼ることなく、自ら積極的に働きながら、独立した生活を営む。睡眠の質は休息の基本だ。引退せず、生涯現役で活躍している済州のおばあさんは快適な睡眠をとっている。食べ物は豊富でなかったが、隣人とともに働き、分かち合いながら心の豊かな共同体を構築してきた。このような済州のおばあさんたちのライフスタイルが済州を長寿の島にしてきたのだ。ライフスタイルのうち、特に食生活は長寿に大きな影響を及ぼす。

長寿の源、済州の食文化

韓 国の生物種のうち、40%以上が済州に分布する。多様な生物種を抱えている島だけに、済州の伝統食品はなんと500品もある。他の追随を許さないほどの数だ。済州の長寿の秘訣は代々受け継がれてきた済州風の食文化にある。

済州の伝統的な食生活は朝鮮半島のそれとは大きく異なる。

済州の食卓の特徴は素食であり、共に食べる習慣にある。ご飯は「ナンプニ大鉢」に盛り、汁はそれぞれ器に盛る。しかし、朝鮮半島では済州とは逆に汁物を真ん中に、ご飯はそれぞれ器に盛る。いつ、だれが訪ねてきても一人分の汁を出せば一緒に食べられるのが済州の食卓だ。

他の地域とは違い、済州は畑作が盛んに行われた。そのため、麦、粟、蕎麦、豆など様々な雑穀が生産され、これで体に必要な炭水化物を取った。四季を問わず暖かくて、青々とした野菜を手に入れるため、新陳代謝の調節に重要なビタミンやミネラルを取ることができた。四面を海に囲まれた済州において、海産物は重要なたんぱく質の供給源になった。

また、済州の人々は豚を飼育したが、家ごとに便所兼豚小屋である「ドットンシ」に豚を一頭チュリョムずつ飼った。貧しい時代には、数人の人が豚を畜殺して豚肉を分かち合う「豚肉の出斂」で、良質のたんぱく質を取った。動物性たんぱく質摂取のためのチュリョム文化は、共同体の分かち合う食文化を作り上げた。栄養学では、美味しいたんぱく源を分かち合う食文化を持つ集団に長寿者が多いと言われている。

至るところにある豆の畑は済州の秋の風物詩になっている。済州料理の基本の味付けは、醤油

ではなく、豆味噌だ。この豆味噌で冷や汁やスズメダイの水なますを作って食べてきた。キュウリや海産物を生味噌と混ぜて水を入れ、冷や汁を作った。醤油や塩がなくても味噌のコクが楽しめるうえに、減塩食にもなる。

また、生豆を粉にして野菜とともに煮た豆の汁は、おぼろ豆腐のようで、一食に何度もお代わりした。そのほかに、豆粉を粥にしたり、固い海水豆腐を作った。

さらに、豆の若葉にご飯を包ん

で食べた。このような多様な豆の食べ方は、豆の摂取量を最大化できる済州ならではの長寿の食事法だ。



ナンプニのご飯

長寿料理の秘訣、家庭菜園のウヨンバツ

済州の伝統家屋には、ウルタム家の回りを巡らした石垣の中に低い石垣を積み上げて作った家庭菜園がある。台所に近い所に甕を置く台を設け、そのとなりの空間で旬の野菜を栽培した。済州ではその空間を「ウヨン」、主穀を栽培するところを「田」と呼んで用途と名称を区別した。

ウヨンは食事するたびに、遠くの畑まで行かなくても目の前で取れたての野菜が楽しめた。季節によって、ダイコン、ハクサイ、サンチュ、エゴマの葉っぱ、キュウリ、ニンニク、ワケギ、ネギ、トウガラシ、ニラといった野菜を作った。これらの野菜を、済州で生まれ育った人は「ソンキ」と言った。ソンキは汁の材料、キムチの材料、熟菜、生菜そして味付けの材料として使われた。済州のバツがエネルギーを生産し、体に供給する発電所ならば、ウヨンはビタミンやミネラルを一年中生産・供給するバイオ食品工場に当たる。

ビタミンや無機質は新陳代謝の調節には欠かせない必須栄養素だ。必要なとき、必須栄養素が供給されないと生体リズムが壊れるため、健康が維持できなくなる。また、野菜に含まれるビタミンは、収穫後時間が経てば経つほど破壊される。

しかし、ウヨンで栽培した野菜で用意する済州の食卓はそのような心配はない。ウヨンは台所のすぐ隣にあり、旬の取れたての野菜が供給できるからだ。そのため、済州の食卓にはビタミンとミネラルが豊富だ。長寿と食生活は密接な相関関係にある。済州の伝統的な食生活はウヨンから始まって台所へ、そして食卓まで続く。済州の長寿の源はまさに「ウヨン文化」にあるといえるだろう。

海が好き、ヘルシー汁とヘルシー粥

朝 鮮半島では魚をチゲ鍋にして食べる。その一方で、済州の人々はチゲ鍋よりも汁物にして食べる。島外の人に魚の汁物を出すと、魚の臭いがするかと心配し、躊躇するが、一度食べたら、その考えは変わる。済州では捕れ立ての魚ではないと汁の食材として使わないからだ。そのため、季節によって汁の材料も変わってくる。春にはイシモチの汁、カタクチワシの汁、夏はボマル（巻貝の一種）の汁、イサキの汁、ノミノクチの汁、秋はタチウオとカボチャの汁、マアジの汁そして、冬はアマダイの汁、ウニの汁、メバルの汁を食べる。

魚の汁物は グラグラと湯が沸騰してきたら、魚の切身を入れ、そこに野菜や海藻類などを加えれば完成する。済州で生まれ育った人はあまり臭いのしないアマダイ、メバル、ノミノクチなどの白身の魚類やウニ、ボマルなどの貝類などにはワカメ、ダイコンを入れる。その反面、臭いのするタチウオ、マアジ、カタクチワシなどの魚類にはハクサイを入れる。この伝統は今も守られており、長期間に渡って済州の人々が作り上げた「食材の相性」の調理科学ともいえる。

済州の人々は粥をよく食べる。粥の種類は50品もある。粥は穀物で作る料理の中で最も原始的な料理だ。済州料理に粥が多いのは、調理法が簡単で、少ない穀物で作れる救荒食物だからだ。

アマダイの汁

済州ではアマダイのことを魚と言い、他の魚は魚の固有名をつけて呼ぶ。魚の王様はアマダイだと考えるため、魚の汁とは、アマダイの汁を意味する。

アマダイの汁はアマダイにワカメやダイコンを入れて煮た汁だ。済州ではワカメのことを「メヨク」という。それで、ワカメを入れて煮た汁を「オクドムメヨククック」と言う。

チュサ

祭祀のとき、供える汁物である「ゲングク」もアマダイの汁であるが、冷めないように祭祀を行う直前に供える。それは、汁物を好む済州の祖先ための子孫の配慮から生まれた慣習だ。

ウニの汁

ウニの汁はウニとワカメを入れて煮た汁物だ。ウニは、済州の海の岩盤の隙間に群を成して生息する。海女は岩盤の隙間から黒紫色のとげのある大きなウニを採る。

済州では古くから慶事や弔事などにウニの汁を用意して客をもてなした。黄色い色彩とおぼろ豆腐のような柔らかいウニが、ウニの汁を格別なものにする。濃い黄色のメスのウニは苦味があるため、ワカメの汁に使い、薄い黄色のオスのウニは粥や惣菜として使う。



ウニの汁

タチウオとカボチャの汁

タチウオとカボチャの汁は、秋を代表する魚の汁物だ。タチウオにカボチャとハクサイを入れて煮る。

秋になると、済州の海でたくさん捕れる魚がタチウオだ。新鮮で銀色に輝くタチウオを商人は銀タチウオと呼ぶ。アマダイと異なり、タチウオは鱗がなく、良く捕れるため、祭礼などの特別な儀礼用料理としてでなく、旬の家庭料理として楽しむ。



タチウオとカボチャの汁

ボマルの汁

ボマルコンダカガンガラ、巻貝の一種の汁は、ボマルを煮込んだ汁にワカメを入れた汁物だ。

済州の人々は、陸地の土地だけでなく、海にも畑があると考えた。古くからボマルがたくさん取れるところを「ボマルの畑」といった。

済州のことわざに「ボマルも魚だ」という言葉がある。ボマルはありふれた小さい貝にすぎないが、魚の代わりの栄養補給には役に立つという意味だ。言い換えれば、些細なボマルでもおろそかにせず、食べ物として大事にしろという意味だ。

アワビの粥

アワビの粥は、米にアワビの身と内蔵を入れて煮た緑色の粥だ。他の地域のアワビの粥とは違い、済州では必ず内蔵を入れるため、内蔵の濃い緑色を帯びている。



アワビの粥

済州島の海岸地域では民間療法として離乳期の赤ちゃんや妊婦にアワビの粥で栄養を取らせた。「海女の赤ちゃんはアワビの粥で生きる」という言葉は、赤ちゃんの離乳食としてアワビのお粥が一番だという意味だ。また、食欲のない患者や癲癇患者のたんぱく質の補給のための食餌療法としてよく食べられた。現在も、両親の体の具合が悪いときなど、アワビ粥を作って食べさせる習慣が残っている。

カニの粥

カニの粥は済州の海に生息する「ボグギンイ小さなカニ」を入れて煮た粥だ。カニは春と夏にかけて引き潮のとき、海辺で簡単に捕れる。

カニを水で洗って汚れを落とす。「ドルドゴリ石桶」に入れ、トンドロンマケすり棒の一種で砕いたあと、水を入れ、布に包んで水切りした後、固い殻を取り除けば、緑色の汁が残る。この汁に米を入れて、弱火でじっと煮ると緑色の粥になる。

カニの粥は、作業で疲れた海女の足の痛みに効くと言われ、民間療法として広く親しまれてきた。

アマダイの粥

アマダイの粥はアマダイの身を米とともに煮た魚の粥だ。

アマダイは冬と春の間によく取れるが、済州の近海で捕れるアマダイは赤い色を帯びて美味しい。それは豊富な餌が豊富で、荒い波のため運動量が多いからだ。

民間食餌療法では患者の回復食としてアワビの粥とともに親しまれている。

夏の食欲をそそる料理、スズメダイ

夏に済州島の近海でよく捕れる魚はスズメダイだ。スズメダイの料理の中で一番はスズメダイのムルフェ水なますで、スズメダイの塩辛は、済州の食卓によく上る惣菜だった。他の地域に住んでいる済州出身の人は初夏になると、スズメダイの料理が恋しくてホームシックになるほど、スズメダイは地域のアイデンティティを代表する魚だ。

ボモクドン モスルボ

西帰浦市甫木洞と慕瑟浦は、済州島でスズメダイの主産地として知られている。スズメダイは岩礁域に生息する。スズメダイの韓国語の名前は、生息地からあまり離れないことから韓国語の席にちなんで「ジャリ」と付けられた。スズメダイが群をなして生息するところを「ジャリバツ」といい、そのジャリバツは今もあまり変りはない。

済州の人々は、地元のスズメダイが最高だと考える。「甫木の人が慕瑟浦に行ってスズメダイのムルフェ

モスルボ



スズメダイの商人

を自慢するな」という言葉がある。他の地域で地元のスズメダイを自慢すると喧嘩になるほど、プライドを持っているという意味だ。

一般的に、摹瑟浦のスズメダイは大きいので焼き魚にし、甫木のものは骨がやからかくて美味しいので刺身やムルフェに、そして飛揚島のものは塩辛用にするのがいいと言われる。

スズメダイは捨てる部分のない魚だ。そのため、済州の人々はスズメダイの塩焼を丸ごと手に取り良く噛んで食べる。箸で食べるのを済州の人に見られたら、よそ者扱いされるかもしれない。

八転び九起き、子供の手に似たワラビ

済 州のことわざに「ワラビは八回折っても九回生える」という言葉がある。この言葉はよく済州の女性の人生を喩えるときに用いられる。八回転んでも、九回立ち上がるという八転び九起きのワラビのような精神は、済州の女性を象徴する。済州の女性は、荒れた土地、気まぐれな天気、荒波の大海といった自然環境に向き合い、海女漁や畑仕事をし、生計を支えて生きてきた。また、歴史のあらゆる風波にも屈せずに済州島を守り続けてきた。

同様に済州の女性によってワラビの食文化も受け継がれてきた。朝鮮時代には、しばしば訪れる凶年のため、食べ物が不足し、ワラビの根っこまで掘り取って救荒食物として食べた。日本統治時代にも食糧供出で穀物が不足したが、そのときもワラビの根っこから澱粉質を取りだし、ボムボク材料をもち米粉などと一緒に粥状に煮込んだものを作って食べた。

済州の女性が採ったワラビのナムルはグツ巫俗儀礼、祭祀などの供え物として欠かせない。ワラビは生命力が強くて折れてもまた生えてくる。そのことから代々子孫が繁栄するようにという願いを込めて供えたのだ。

墓地の上に生えたワラビは祭祀のナムルとしては使わず、食べることもない。若いワラビは子供の手に似ていることから、墓地に生えたワラビは生命の誕生、つまり子孫の誕生を意味するからだ。

中山間の村では祭祀のとき、ワラビを溶き卵につけてワラビのジョンお好み焼きに似たものを供えることもある。神が降臨するとき、手に似たワラビの若葉を頼って降臨し、祭祀に参加し天に上ることから由来する。そして、祭祀が終わって天に昇るとき、ワラビのジョンに食べ物を包んで昇りなさいという意味もある。そのため、これを「包みのジョン」とも呼ぶ。

こうした理由で、祭祀用のワラビはワラビの若葉を取らずに用意した。それは三本に分かれた若葉の形からしよいこのようにも考えたからだ。

エコリサイクリングの豚の国、豚肉料理

19 70年代の半ばまで、済州の農家では在来種の黒豚を飼っていた。豚小屋は石垣を囲って空間を作り、便所を兼ねた「ドットンシ豚小屋」を作った。豚に最適の空間を提供したわけだ。

豚は雑食性動物だ。そのため、人間の食生活の中で発生するあらゆる副産物を食い尽くす。そうした豚の特性は家を綺麗にし、さらには村の環境を保護するのに貢献した。また、豚は農業に必要な肥料だけでなく、食材を提供してくれる家畜だった。

豚は生活廃棄物を高たんぱく質と脂肪に転換させる能力に優れている。昔の済州の生活環境を見ると、炭水化物はそれほど不足していなかったが、高たんぱく質と脂肪は常に不足していた。豚肉は他の食べ物とは違い、簡単に手に入る肉類だった。他の地域では肉類といえば牛肉を指すが、済州では豚肉を意味する。

村全体の祭りや慶事、弔事するとき、豚を屠殺して分け合った。済州の豚肉は儀礼用の料理にはなくてはならない食材だ。済州の儀礼用の料理は豚肉に始まり豚肉で終わると言っても過言ではない。「アガンバル(豚足)」、内蔵などすべての部位を使う。済州の5大豚肉料理は「ドムベゴギ」、「モムグク」、「ドッスエ」、「ドッセキフェ」そして豚肉入り温そうめんだ。

ドムベゴギ

「ドムベ」は、まな板を意味する済州の方言だ。「ドムベゴギ」は鍋に豚肉が浸かるほどの水を入れて焚き火で煮込んだ豚肉をいう。ドムベゴギは煮込んだ豚肉をまた板の上で切って食べるという意味から由来した名称だ。煮込んだ豚肉は塩または醤油に付けて食べる。慶事や弔事するとき、豚肉を煮込むことを担当する人を「ドガム」という。ドガムには、一頭の豚肉を一人一皿の原則に基づき、訪問客に均等に分ける責任がある。



ドムベゴギ



モムグク

女性の仕事だった。

ドッスエ

「ドッスエ」は、スンデを意味する済州の方言だ。豚の腸に豚の血液、そば粉、麦粉、ニラ、ニンニク、塩などを詰めたものを、煮込んだ豚肉の汁で茹でたものだ。他の地域では、スンデの結着力を高めるために、もち米を使うが、済州では主にそば粉を使い、中身がしっかりしているのが特徴だ。



ドッスエ

モムグク

「モムグク」は豚肉を煮込んでできた汁に、済州の方言で「モム」と呼ばれるホンダワラを入れて煮込んだ汁物だ。済州の人々に親しまれたホンダワラは3～4月に沿岸で採り、家に持ち帰って干す。それを必要なときに食べた。豚肉の汁にそば粉を入れてどろどろに煮込むので、海藻類の渋みと豚肉の臭みがなくなり、だれもが楽しめる味になる。豚肉の手入れや煮込む作業は主に男性が担当し、煮込んだ汁で料理するのは

ドッスエには3種類がある。腸の部位によって「ジャンベソルスエ(小腸のスンデ)」、「フルゲンベソルスエ(大腸のスンデ)」、「マクチャンスエ(直腸のスンデ)」、「チャンドルム」などと呼ばれる。「チャンドルム」(長さ25～30cm)で作ったマクチャンスエは厚い上に、透明な脂肪層が形成されており、歯応えがよく、おいしいので、最上品とされている。

豚肉入り温そうめん

豚肉入り温そうめんは、茹でた乾麺に温かい豚肉の汁を入れ、煮込んだ豚肉を乗せたそうめん、小麦粉の乾麺が登場してから開発された。

朝鮮戦争の当時、朝鮮半島から済州へ避難してきた人は豚肉の臭みのため、豚肉入り温そうめんより、イリコだしそうめんを好んだが、済州の人々は豚肉入り温そうめんを大変好んだ。1969年に「家庭儀礼準則」が法律で定められてからは、慶事や弔事で

もてなす料理が格式料理ご飯から略式料理そうめんに代わった。韓国では結婚式のことを「そうめんを食べる日」という言葉でも表現するが、こうしたことから朝鮮半島ではイリコだしそうめんを、済州では豚肉入り温そうめんをもてなす習慣がある。



豚肉入り温そうめん

苦難と試練の克服、馬肉を食べる文化

馬 肉を食べる文化は、たいていモンゴルの遊牧文化から由来したものだ。13世紀の末、済州にモンゴル牧場が新設され、馬の生産が大幅に増加した。これにより、利用価値の低い馬を食用として活用しはじめたが、それが文化として広がったのだ。

朝鮮時代、毎年冬になると、済州では宮廷の儀礼用に馬の干し肉を作り献上した。馬の供給が減ると、馬肉摂取禁止令を下し、馬の畜殺を厳格に禁止したが、馬肉を食べる習慣は容易にならなかった。しかも、済州には自然災害が多く、凶年が頻繁に訪れたため、生命を維持する必須栄養素のたんぱく質が絶対的に不足した。危険を犯してでもたんぱく質を取るためには馬肉を食べざるを得なかった。こうした中で、済州の人々は民家に数人が集まり、馬肉を切り分けて食べた。

セジョン
朝鮮時代の世宗のときのことで、馬の密殺が横行し、朝廷では馬肉を食べた人を含めた650人 ピョンアンド を平安道に強制移住させたことがあった。その中には、済州の風俗に従い、本人所有の馬肉で祭礼を行い、その馬肉を食べた人まで含まれ、異郷での生活を余儀なくされた人も多かつ

た。済州のことわざに「馬肉を煮込んでいるところには行くな」という言葉がある。馬肉を煮込んでいる所をうろつけば、官員に密殺の濡衣を着せられるという憂慮を表わした言葉だ。

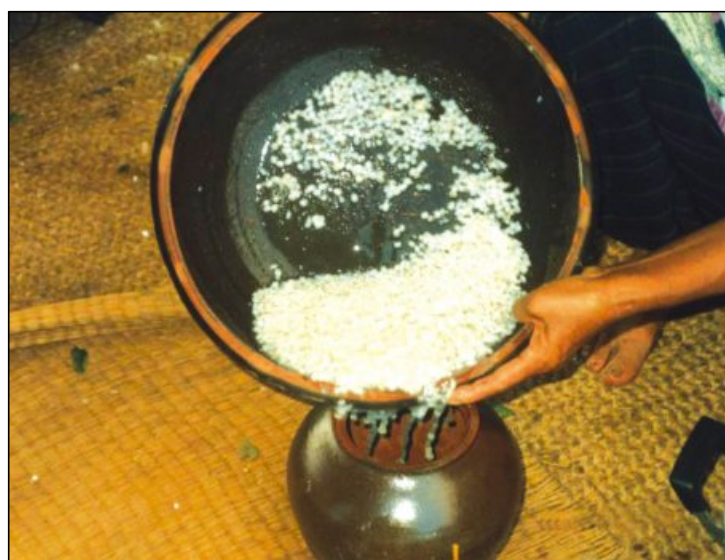
また、「馬を畜殺する畑に行った人のように」という言葉もある。使いに送った人や、会う約束をした人が時間になっても来ないことを皮肉った表現だ。これは、馬を畜殺するところをたまたま通りがかった人が、馬肉ひと切れでも食べようと、そこで油を売ることを意味する。

馬の腸はそのまま茹でて塩に付けて食べたり、汁物にして食べる。馬肉の汁物は大きめに切ったダイコンを入れ、そば粉でとろみをつける。

渇きの解消、エネルギーの補給… 伝統的な飲み物

済 州には酒以外にも庶民に親しまれた飲み物がある。そのうち、「スندگان」は夏、喉を潤すのにうってつけだ。スندگانは冷めた麦ご飯に荒く砕いた麴を入れて、水で溶かした後、甕器などに入れて常温で発酵させたものだ。

スندگانは甘酸っぱい味がする。麴のカビ酵素が澱粉をブドウ糖と麦芽糖に変えるため、甘みがする。同時に乳酸菌がブドウ糖を分解し、有機酸を作るため、酸味もある。スندگانが最も美味しいの



スندگان

デンユジチャ

「唐柚子茶」は、食餌療法に使われた伝統的な茶だ。古くから寒い冬を凌ぐために、家庭でデンユジチャを入れて飲む習慣が受け継がれてきた。各家庭では裏庭に生った唐柚子を取り、麦を保管

は、麦ご飯の粒が潰れて発酵したときだ。麦のスندگانは、吸収しやすい糖分と有機酸を多く含んでいるため、喉の渇きの解消だけでなく、エネルギーが補給され、心身の疲れが取れる。さらに、スندگانには生きた乳酸菌が丸ごと入っている。1コップのスندگانを飲めば、4～5千の乳酸菌を一気に飲むのと同じ効果がある。そのため、夏にスندگانを飲む人は腸が丈夫になる。西洋に腸を守るヨーグルトがあるとすれば、済州にはスندگانがあるわけだ。

する壺の中または木の陰に藁で覆って貯蔵する。これを祭礼用、または、風邪薬として用いた。唐柚子を「デンユジ」または大きな柚子という意味で「デュジ」と呼び、一般的な柚子は「ソユジ」と呼んで区分した。南海岸地域で生産される柚子とは異なり、酸っぱくて強い香りがするのが唐柚子の特徴だ。

お酒の熟成する町、城邑…オメガ酒、ゴソリ酒

城 邑は標高125mの中山間の村だ。朝鮮前期(1423)に県庁が設置されて以来、朝鮮末まで約500年間続いた旌義県の所在地で、中山間地域の食文化をよく残している。周辺の平地には耕作地があり、昔から粟を栽培した。

オメガ酒は餅粟を粉にしてオメガ餅を作り、これに麴を入れて発酵させた粟の酒だ。米で強飯を作り、粒の形のまま麴を入れて発酵させる他の地域の穀酒とは異なる。

オメガ酒が発酵すると上の層は清酒になり、下の層は濁酒になる。清酒の量は少ないため、大切にされた。昔は、官衙を中心に様々な郷校祭礼および酺祭などの儒教儀礼で使われたり、県監や官婢が周辺のオルムで花見を楽しむときに飲んだりした。一般の庶民は神堂、グッなど巫俗儀礼や冠婚喪祭の供え物として使った。一方、量の多い濁酒は庶民が日常の酒として楽しんだ。

ゴソリ酒は雑穀を発酵させた濁酒を蒸溜容器で蒸溜し、アルコールの純度を高めた焼酎だ。ゴソリ酒というのは、蒸溜器であるゴソリに由来する。ゴソリ酒はゴソリから汗のように出てくるというので、「汗酒」とも呼ぶ。済州島は高温多湿なので醸造した穀酒が変質しやすく、昔から主に蒸溜酒を製造していた。ゴソリ酒は半永久的に保管することができるため、主に慶事や弔辞があるとき、訪問客のもてなし用として作った。また端午の節句には、西帰浦地域のオルムの周辺に生える百種の薬草を採取して、ゴソリ酒に入れて、薬用酒を造ったとも言われる。芽生えたばかりの新芽には「気」が生きているとし、薬酒の最高品として評価された。



ゴソリ酒を作る様子



城邑民俗村

住文化

独特の暮らしの空間

単一の建築に限って考えると、建築の基本は、無形の空間(生活空間)と有形の空間(視覚的な伝達意味)を合わせたものといえる。無形と有形の結合過程の中で、地域の気候条件、生産しやすく手に入れやすい材料、そして家族制度など様々な人文社会的な要因と物理的な環境が互いに影響を与えることによって、地域性の反映された建築物は誕生する。

済州は朝鮮半島から遠く離れた島であり、おのずと伝統的な建築においても朝鮮半島のそれと

は異なる独特の空間と形を形成してきた。

しかし、1960年代から始まった開発により、済州の伝統建築の持つ地域性や文化的な価値に関する研究と評価がされないまま、住居環境と集落構造の改善と近代化という名のもとで、済州の伝統的な住居様式は消えていった。

1970年代に入り、産業化・都市化が進む一方で、済州の茅葺きの伝統家屋が消えることを憂慮する声が高まった。これを機に済州の伝統建築の持つ価値と意味が再評価されるようになった。

ソナウブ

城邑民俗村はそうした流れの中で、その歴史的な重要性が認められ、1980年に済州道の地方民俗資料に指定された。その後、1984年には国家指定文化財の重要民俗資料に昇格した。城邑里は海岸から約8km離れている中山間に位置しているため、開発の影響から逃れることができた。そのおかげで、伝統的な邑城の形や民家、民俗的な資料がたくさん残っている。城邑民俗村を見回れば、済州の人々が作り上げた独特の住居文化を垣間見ることができる。

済州の伝統文化をそのまま残す城邑民俗村

城 邑民俗村は朝鮮時代に済州地域に設けられた旌義県の邑治であり、城郭都市だった。元々は現在の城山邑古城里に設けられたが、地理的な問題と牛島からの頻繁な倭寇の侵入のため、1423年(世宗5年)に現在の位置に移った。

旌義県城の内部には各官衙や客舎などの官庁施設と、教育施設である郷校があり、村が形成されていた。正確な記録はないが、幸にも済州島の宝物である『耽羅巡歴図』には記録が



城邑民俗村の全景

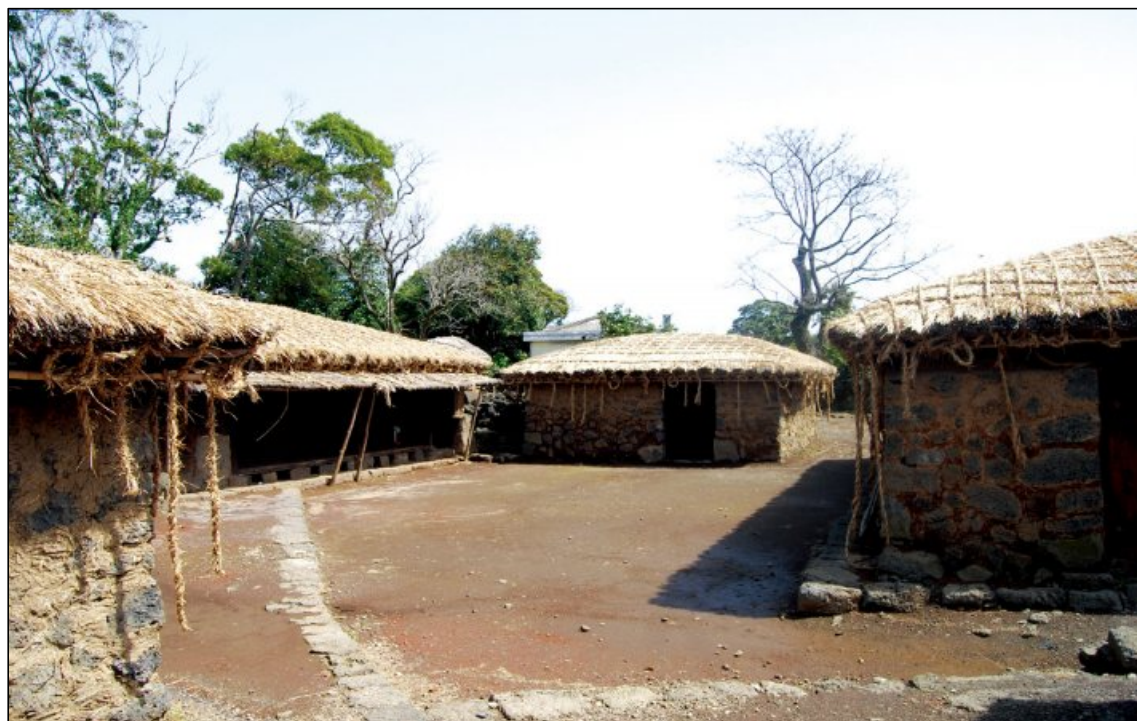
残っており、概略的な村の規模が把握できる。民家1,436号、駐屯軍人664人が居住し、田畑140結、馬1,178頭、黒牛228頭の生産資源を備えていたと推定され、相当な規模の城郭都市だったに違いない。

多彩な風景のある村

基本的に済州の伝統建築は、遠くに漢拏山の霊峰が見え、海の水平線が広がる「遠風景」、村の入り口から見えるしなやかな曲線の茅葺き屋根が重なる「中風景」、そしてオルレから感じられる緩やかな曲線と高い石垣の中の家の「近風景」から構成されている。城邑民俗村の内部を歩けば、邑城、茅葺きの伝統家屋の石垣、そして回りのオルムと調和する風景を見ることができる。

また、済州ならではの暮らしの文化は建築様式にもよく反映されている。家屋の配置は「二」字のタイプと「ㄱ」字のタイプの二種類があるが、「ㄱ」字のタイプが多い。

済州の伝統建築の際立った特徴は、宅地の空間構成、つまり建築物の配置にあると言える。一つの垣根の中で親と子供の2世帯がそれぞれの独立した生活を営む。そのため、建築物を二棟、別々に配置するが、母屋を「アンコリ」といい、離れを「バッコリ」という。このような配



城邑民俗村の茅葺きの伝統家屋

置は済州民家の基本形態だ。

垣根の内部は、家族関係を堅持しながらも、中庭を中心に世帯を分離するアンコリとバッコリという空間的階層化を実現している。また、進入路は誘導空間である「オルレ」、転移空間である「オルレモク道が続いて急に曲がる部分」、主空間である「中庭」という三つの空間から構成される点が大きな特徴だ。

城邑民俗村の中には国家指定の重要民俗資料に指定された民家5戸16棟がある。最近では文化財保護という概念から積極的な活用という概念に変わり、民家の外観を残したまま、内部が現代的な生活空間に最小限改善され、体験空間として活用されており、大人気を博している。

済州の伝統的な村はどうだったのか

韓 国の村は典型的な「背山臨水」の原則により、河川を前方に、山を背後にして村を形成した。しかし、済州島は地形的な特性上、朝鮮半島の風水論をそのまま適用しにくかった。そこで、基本的に風水形局論による「左青竜・右白虎」の盆地状地形の配置に従った。

済州の村形成に影響を与える重要な要因は、地質学的な特性上、飲み水を確保できるかどうかという点、また、痩せた土壌で生産性が確保できるかどうかという点だった。

済州は海岸地域、内陸地域、山南地域、山北地域によって集落形態が異なるが、一般的に、集村、疎状集村、散村に分けられる。

集村は山北地域の海岸地帯から山南地域の西部に多く現れる集落形態で、不規則に、塊のような形で集団をなしている塊村の形が一般的だ。

済州島は地質学的な特性のため、水が地下に流れ込み、それが海岸で湧き水になるが、この地域を中心に漁村が自然に形成された。ほとんどが標高約200m以下の地域に集中的に点在している。海と内陸に隣接する地理的な条件により、漁業または半農半漁の生活を営んだ。

疎状集村は世帯密度が集村より低く、集村と散村の中間形態で、山南地域の東部に発達している。この地域は他の地域に比べて、水の確保が難しく、家に植えてある木に藁を結び、その下に瓶を置いて滴る雨水を貯めて生活用水にした。そのため、できるだけ敷地面積を大きく取り、木をたくさん植えたほうが有利だったのだ。したがって、海岸地域の集村とは違い、世帯数が少なく、集落形態も分散している。

最後に、散村は中山間地域の内陸に点在する集落形態で、標高300m以上の地域に形成され、半農半牧の生活を営んだ。



済州民俗村の全景

済州民俗村

済州民俗村は、1890年代を基準年代とし、済州島の文化と歴史を原型のまま再現した済州の民俗文化の空間だ。100棟にのぼる伝統家屋は、済州の人々が実際に生活した家や石、柱などをそのまま移し、完璧に復元したもので、済州島の山村、中山間村、漁村をはじめ、巫俗信仰村、済州官衙などを見ることができる。

済州の伝統的建築の民家だけでなく、木工芸、書道、書刻、鍛冶屋、革筆工芸など伝統民俗工芸房もあり、当時の暮らしふりとともに伝統工芸品も体験できる。

済州島あれこれ



気候と土壌

人口と集落

産業経済

近代芸術活動

テーマで体験する済州



気候と土壌

一つの島、いろいろな表情

済 州島を一周してみると、漢拏山を中心に北の済州市、東の城山浦、南の西帰浦、西の高山の間で天気が微妙に異なることに気が付く。

さらには、同日同時刻なのに、済州市は冴えわたるような青空なのに、西帰浦では傘をさすほどの雨で、高山では服が飛ばされるほどの風が吹くなど、地域によって天気が違い、空模様も瞬時に変わる。

このように島の所々で異なる空の表情は、島の人々の生活にも影響を及ぼし、それが生活文化の差を生んだ。

また、済州島は地域によって天気が異なるだけではない。火山島であるため、土地のほとんどは石か火山灰土に覆われている。これを詳しく分類してみると、火山灰土である火山灰の土壌と、火山砕屑物でできた非火山灰土である風化土壌に分けることができる。これをまた土色で分けると、暗褐色非火山灰土、濃暗褐色火山灰土、黒色火山灰土、褐色森林土になる。こうした土壌は分布する地域や土地の肥沃さが異なるため、農業生産力における地域の差を生み、済州の文化と風習にも大きな影響を及ぼした。

なぜ地域によって天気が異なるのか

済 州では、漢拏山の存在が非常に大きな意味を持つ。その麓は済州の人々の日常生活での拠り所であり、その峰は、霊的な崇拝の対象であり、心理的な癒しの対象になってきた。

しかし、高い山が島の真ん中を占めているため、気候は山の南と北で著しく異なり、済州の人々の生活に大きな違いをもたらした。

漢拏山が持つ地形的特性と夏と冬に吹く季節風の影響で山北地域と山南地域では、気温と降水量そして風速に大きな差がある。

山北地域は気温が低く、強い風が吹き、降水量が少ない。一方、山南地域は気温が高く、暖かい。一年を通して風が弱く、降水量は山北地域よりはるかに多い。

詳しく見ると、夏は高温多湿な南東季節風が漢拏山に遮られ、山南地域に多量の雨を降らす。一方、冬は北西方向から吹いてくる冷たい季節風が漢拏山にぶつかりフェーン(Föhn)現象を起こすため、山南地域は比較的暖かい天気が続く。

山南と山北だけが異なるわけではない。漢拏山の西側の高山は、他の地域に比べて降水量は最も少ないが、風は最も強い。そして東側の城山浦は、山北地域に比べて降水量は多く、風は弱い。

こうした気候要素の違いは、海から吹いてくる南東と北西の季節風と、周期的に発生する夏季の梅雨と台風によって大きく左右されるといえる。

風に敏感な島

済州は風の多い島だ。終始吹くだけでなく、強くて速い。韓国で最も速い平均風速を記録している。

済州の風は吹く方向によって、山北地域と山南地域で対照的な曇りと晴れの天気をもたらす。



風力団地

例えば、北西季節風が吹く冬には、西帰浦市の方が晴れる日が多く、南東季節風が吹く夏には、済州市の方が晴れる日が多いのだ。

絶えず吹く風は、済州ならではの独特の生活文化を生み出した。茅葺きの伝統家屋は朝鮮半島のそれとは異なり、屋根のヨンマルム藁葺き屋根や土堀の上に覆うので『へ』の字の形に藁で編んだものをなくし、屋根全体を綱で碁盤の目のようにしっかりと結

び、家屋の前面には、「ブンチェ」という独特の風避け装置を付けた。

今日も吹き続く済州の風は、公共資源として活用される新たな時代を迎えている。風力エネルギーを得るための資源として活用されているのだ。1997年8月から2012年7月にかけて、済州島の数か所の海上と陸上に約70基の風力発電機を設置するプロジェクトを進めているが、すでに設置されているところもあり、新設を控えているところもある。

火山と天候のため、地域によって異なる土壌

済 州島の土壌は基本的に火山活動によって作られた。火山活動によって吹き飛ばされた様々な火山砕屑物と浮石(軽石)、火山灰などで構成される火山灰土でできているのだ。

火山灰土は、済州のような雨の多い地域では塩分が少なく強い酸性を帯び、リン酸が欠乏した土壌の特性を持つ。こうした土壌では作物の発育が悪く、実の量や質にも影響を及ぼす。

結局、済州島の土壌の70%以上を占める火山灰土は、農業生産活動に限界をもたらした。

火山灰土のもう一つの特徴は、非常に軽いので、簡単に風に削られる上に、雨がたくさん降るときは、簡単に流されてしまう。昔から済州の人々は、この火山灰土を少しでも肥やすために、昔からあらゆる方法を駆使してきた。その中で最もユニークなのは鎮圧農法だ。春と秋に麦、粟、陸稻、稗などの種を蒔いた後、土や種が風に飛ばされないよう、人、牛馬または「ドルテ」や「ナムテ」と呼ばれる伝統的な農機具を使って畑全体をまんべんなく踏み、押さえた。一部の農

家では、「ソムピ」と呼ばれる木の枝で編んだ農機具を人が引いて土を覆うこともあった。

火山灰土を肥やす方法はまだある。海岸で採取したカジメなどの海藻を畑の肥料として使ったり、有機質の肥料であるドッグルム豚糞とソゴルム牛糞を、畑を耕す前に撒いた。中山間地域では、麦の種をドッグルムに混ぜて撒くところもあった。

土壌によって異なる文化

濟州島の土壌は土色によって、暗褐色非火山灰土、濃暗褐色火山灰土、黒色火山灰土、褐色森林土に分けられる。そのうち、暗褐色非火山灰土が最も肥沃で、農業生産力が高い。これは玄武岩が風化した土壌で、他の土壌に比べて形成時期が長く、形成過程で多くの有機物を含んだからだ。そのため、農作物を栽培するのに非常に有利だ。

この暗褐色非火山灰土は、山北地域の北西部海岸地域と南西部の海岸地域に比較的広く分布しており、その他の地域では、ごく一部に分布している。そして、濃暗褐色火山灰土は、東部地域を除いたほとんどの中山間地域と一部の山間部に分布し、黒色火山灰土は、東部沿岸地域と中山間地域をはじめとする一部の山間部に局地的に分布する。褐色森林土は、国立公園地域を中心に高い山間地域に主に分布するが、その面積は黒色火山灰土とあまり変わらない。

結果的に土色による濟州島の土壌の中で最も農業生産力の高い暗褐色土は、昔から麦、粟、豆、菜の花、サツマイモなどの食糧作物や換金作物を生産するのに適した環境を提供してきた。したがって、この暗褐色土を帯びる農耕地は農地を売買するときも有利な要素となり、家族構成員の多い家庭では、肥沃度が高い暗褐色土の農地を所有することが何よりも重要だった。

土色による農業生産力の差は、かつての濟州文化と風習に大きな影響を及ぼした。

火山灰土の地域では、生産性が低いため、草取り唄も繰り返しが長く呪術的で、悲しい音律の「ジンサデッソリ」を歌った。また、財産(土地)を相続するときも兄弟が全員で分け合うと、皆が貧乏になるため、長男だけに財産を譲る代わりに祭祀義務も負わせるという独特の文化を生み出した。

一方、相対的に土地の生産性の高い非火山灰土の地域では、非常に陽気な草取り唄である「チョルルンサデッソリ」を歌い、財産も兄弟で均等に相続し、祭祀も分かち合っていく風習が受け継がれてきた。

さらに、土壌の特性は、昔の村の形成にも影響を与えたと見られる。村の存在した証拠であるドルメンと遺跡地も、主に非火山灰土が分布する北西部地域でのみ発見され、火山灰土の地域である東側、南側の地域では、ドルメンと遺跡が発見されたことがない。



人口と集落

歴史の浮き沈みの中で

済 州には、現在55万人に近い人々が住んでいる。在外の済州道民まで合わせると、100万にのぼると言われ、「100万済州人」という言葉もよく耳にする。それほど、多くの済州出身の人が国内外を問わずたくさんいるという意味だ。

済州島の人口について記録が具体的に登場したのは高麗時代だった。元国(モンゴル)が済州を直轄領にするやいなや民心を懐柔するために、民に穀物を支給するよう、高麗に命じたという記録を見ると、当時済州人1万223人に穀物を配ったという内容がある。それより前に、元国は
サムビョルチョ
三別抄に賛同した一部の済州人を朝鮮半島に移したという記録もあることから、当時済州の人

口は1万数百人に達したと見られる。

その後、元国による済州統治期の100年を経、高麗末期から朝鮮時代を経て近代に至るまで、済州島の人口は、不規則な変化を重ねてきた。

済州に人が住みはじめてから形成された集落はどうだったのだろう。

古代の遺物と遺跡が発見された場所を中心に済州島の集落分布を見ると、済州市と翰林邑間の海岸と山間地域に集中していることが分かる。これは、この地域が漁撈活動に適し、簡単に飲み水が手に入るなど、原始集落の形成条件を備えていたからだ。

古代から耽羅時代までの海岸地域に集落を形成した済州は、高麗時代には山間地域まで拡張され、朝鮮時代を経て近代に至るまで、さまざまな変貌を遂げてきた。

済州の不規則な人口変化と集落の変貌の過程には済州が経験した歴史の浮き沈みがある。

揺れ動いた朝鮮時代の済州の人口

朝鮮時代の人口推計の基礎となる戸口調査は、正確な人口を把握するためというより、住民の身分を把握し、様々な力役と公納を課するための基礎資料として作成された。当時の戸籍は、国が必要とする労働力と兵士の数を把握し、各種の租税を収めるための基礎資料を確保することが基本的な目的だったため、戸主はできる限り壮丁の数を減らして報告し、特に男子の報告が多く脱落していた。そのため、学者は、朝鮮時代の戸籍上の人口を全体の50～70％程度に相当すると見ており、済州島も例外ではない。

出陸禁止令、数万人が島を離れ

世宗時代と成宗時代の記録を参考に、済州島の人口を分析すると、世宗1年(1419)の3,576戸から世宗16年(1435)には9,935戸に急激に増加したことが分かる。1419年の人口が賦役、軍役などの義務対象者である成人男性を中心に人口を把握したものとしても、世宗時代までは朝鮮半島から人口が流入し続けたと見られる。

これは、高麗時代に元国の兵士と牧胡モンゴル出身の馬牛飼イなど、多くの元国の人がすでに流入していた上に、朝鮮が建国される過程で、流人や政治的な亡命者の流入が影響を及ぼしたからだ。この時期に韓国の代表的な金、李、朴という苗字を持つ多くの人が済州に入り、定着した。

しかし、人口増加は長くは続かなかった。特に、15世紀半ばから17世紀末までの約200年間、済州島は著しい人口減少を経験する。その原因は感染症や飢餓などの自然災害も深刻だったが、官による過度の賦役と献上品の要求、地元の土豪と管理による横暴で多くの人々が済州

を離れてしまったからだ。済州を離れた人々は全羅道、慶尚道、忠清道など、朝鮮半島の海岸地域に定着した。

このような理由で、朝鮮前期に調査された済州の人口は6万人程度だが、調査方法上の問題を考慮すれば、約10～12万人程度だったと推定される。そのうち、成宗時代以降の持続的な出陸で、2～3万人程度が済州を離れたと想定すれば、文禄の役前後の済州の人口は、8～10万人程度だったと推定される。

200年間にわたって数万人が済州島を離れ、人口が減少すると、朝鮮朝廷は住民の生活の質の向上や居住環境の改善など抜本的な解決対策を打ち出すのではなく、むしろ済州の人々の島外への出入りを全面禁止する「出陸禁止令」という強力な統制政策を打ち出した。

200年間続いた人々の済州離れに加えて、200年間人を束縛した出陸禁止は、いずれも済州の人々を苦しめた代表的な政策だったが、朝鮮半島の他の地域の文化との接触を遮断することで、皮肉にも韓国で最も独特な文化を残すことになった。

出陸禁止令が効力を発揮したかは不明ではあるが、朝鮮後期の済州の人口はそれ以上減らなかった。その後、18～19世紀にかけて徐々に増加し、比較的安定した状況が続いた。

注目すべき点は、開港直前の1873年(高宗10年)に87,927人だった人口が日韓併合後の1910年には12万6,028人と、急速に増加したということだ。これは、従来の戸口調査で相当数の人口が脱落したということを意味する。

最初の近代的人口センサスともいえる1925年の調査では、済州の人口が20万人を超えている。これを基に、朝鮮後期の済州の実際の人口を推定すれば、12万～16万人程度だったと考えられる。

人口が半減した日本統治時代

『全羅南道済州郡勢一斑(1914年)』と、1937年と1939年に出版された『済州島勢要覧』などで日本統治時代の済州島の人口を見ると、1925～1949年までは約20万人前後で横ばい状態が続いたが、1930年代にはやや減少する傾向を見せる。これは、済州の人々の済州離れが日本統治時代にも続いたからだ。ただ、朝鮮時代の人口移動は、主に朝鮮半島だったのに対し、日本統治時代には、その移住先が日本にまで拡大した。

済州の人々の島外移出は、1922年12月に自由渡航制が実施されてから活発になったが、1930年代半ばには、済州島内の居住人口の25%に当たる5万人が済州を離れた。1940年以降、済州島の人口は太平洋戦争で再び急激な減少に転じる。第二次世界大戦で、5万人の済州人が徴兵と徴用により、日本に強制連行されたためだ。これにより、1945年の解放当時の

在日済州人は10万人を超える程度だったと推定される。

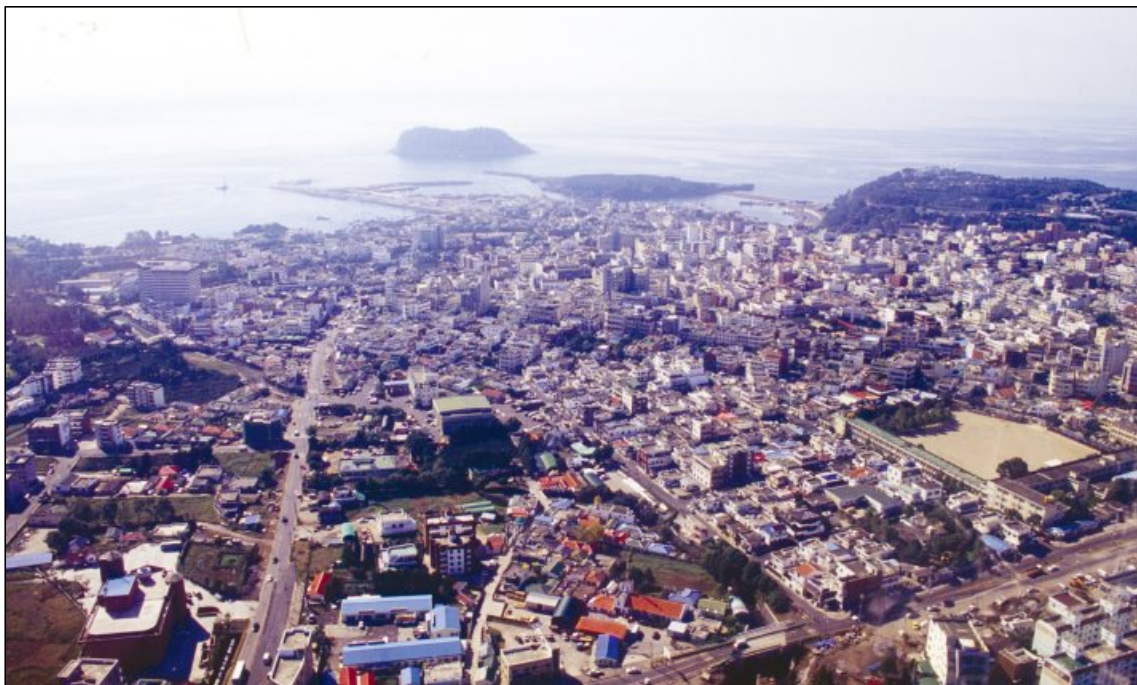
当時、済州を離れた人口の特徴を見ると、そのほとんどが生産年齢人口であり、男性人口の移出割合が高かったという点が挙げられる。若い男性を中心とした移出は、済州の人口性比の不均衡をもたらし、女性人口の割合が高まる原因になった。これは、結婚適齢期を遅らせた上に、出生率の低下をもたらした。また、男性不在の家庭では女性が生計を立てなければならず、女性は働かざるを得なかった。

人口成長が始まる

済州の人口は、1970年代に入り急激に増加しはじめた。ミカン果樹園の開園により、労働力が吸収され、本格的な観光開発が開始されるなど、社会的増加が主な原因だった。

それと同時に、済州の人口は、1970年に36万3千人、1975年には40万人を超え、さらに1990年には50万人を超え、2011年現在約58万人に達するなど徐々に増加傾向にある。

済州島の人口の年齢別構造を見ると、15歳未満の年少人口は、1995年に11万8千人から、2010年には10万人に減少しているのに対し、65歳以上の老年人口は、1995年に3万3千人から2010年には6万7千人と2倍近く増加し、今後高齢化が急激に進むものと考えられる。



西歸浦市の全景

年齢別、性別の人口推移は、人口の最も高い割合を占める生産年齢人口(15歳以上64歳未満)の性比は、男性の割合が増加している。特に65歳以上の老年人口の性比は、2倍近く増加する傾向にあり、済州の人口の構造的特徴である女性人口が多いという現象も変化しつつある。

済州道の人口分布を行政区域上の洞、邑、面地域に分けて見ると、最も大きな特徴は、済州市・洞地域への人口集中現象だ。済州市・洞地域が1985年20万人から2010年32万人に1.5倍以上増加した一方で、西帰浦市・洞・邑・面地域の人口は減少し、全体的に済州市・洞地域への人口集中現象が現れている。特に、済州市と西帰浦市の人口格差が広がっており、西帰浦市の人口の済州市への集中現象が顕著になっている。

特に、邑、面地域の人口は、1985年に20万人、全体人口の41.6%から2010年には13万人、25.2%へと急激に減少したが、そのうちのほとんどが済州市・洞地域に移動し、洞地域の人口は、済州道の全体の人口の60%を占めるようになった。

歴史とともに発達した集落構造

済州で自然に発生し、最も長く続いた集落は、古代から海岸地域に形成された集落だ。高麗時代には村県集落、浦口集落、鎮集落が形成され、朝鮮時代には邑城集落、院集落が成立した。

高麗時代には、貴一、高内、月汀、帰徳、明月、新村、咸徳、金寧などに東西の都県が設置されて村県集落が発達し、主な浦口(入り江)の明月浦、月汀浦、北浦(禾北浦)、咸徳浦、朝天浦、遮帰浦(高山)、兎山浦などには浦口集落が発達した。海岸からの外敵侵入を防御するために鎮を設置した朝天、金寧、都近浦(外都)、涯月、遮帰(高山) 明月、西帰、吾照などの浦口集落には、防護および水戦所が設置され、鎮集落を形成した。

朝鮮時代には、行政中心地として、済州邑城、東部の旌義県、西の大静県が設置され、邑城集落が発達した。また、特殊集落として果園集落、烽火集落、浦口集落、鎮集落、院集落が形成された。

果園集落は、旌義県と大静県を中心に果園を開き、ミカン、梅、柿、柚子などの果実を栽培し、献上しはじめてから発達した。

烽火集落は、軍事上の目的で烽火祭を行い、倭軍の侵入に備えるとともに通信網の機能を担当した。

院集落は、邑城村と邑城村を結ぶ道路交通の要所に形成された小規模の交通集落だった。

官吏の公文書の伝達、官物の輸送、官吏の出張時の宿泊を担当し、当時の交通手段である馬を管理するなど、管吏に便宜を提供するために形成された。西帰浦市の上孝、中文サンヒョ ジュンムンなどに院が設置され院集落が発達した。

日本統治時代には、地方行政の中心集落が発達した。

日韓併合後も三郡制が維持され、1914年に大静郡と旌義郡が済州に統合された。1915年には島制と面制が実施され、面が地方行政を担当した。

島制を実施した当時の面の所在地は、涯月、明月、大静、西広、中文、衣貴、旌義、古城、坪岱、朝天など、朝鮮時代に官道が通る中心集落に位置していたが、1917年に自動車中心の陸上交通のための一周道路が開通し、一周道路の中心の集落が発達した。

朝鮮半島と日本を結ぶための港湾施設が築造され、これらの集落は、水陸交通の利便性と地方行政の中心地の機能をベースに新たな集落に発達し、隣接する地域の人口を吸収し都市化しはじめた。

都市化する

日本統治時代前は、市街地の範囲が済州邑城内に限定されたが、1920年から山地港が築造され、徐々に拡大しはじめた。

済州島、朝鮮半島、日本を結ぶ関門である山地港を中心に、外部との交易が行われ、ここを中心に公共機関、酒精工場、船舶工場、商業施設など都会的な機能要素が集中すると同時に都会的な景観も造成されはじめた。

1950年に入り、朝鮮戦争による避難民の流入で人口が増え、道庁の庁舎は、今日の済州市庁舎の位置に附属機関と関連機関が移転し、同時に都市から外郭に向けた空間拡大が本格的に行われた。この時期に行われた都市化は、中央ロータリー～済州市庁を結ぶ都市化だったが、徐々に周辺地域と連担化2つ以上の都市が互いに膨張しながら、一つの大都市になる現象し、全体的に済州市はT字型の市街地形態を整えるようになる。

1960年代～1980年代には、T字型市街地の空白地帯である南東側と南西側の都市化を進めた。1960年代は第2地区(三徒洞)、三姓穴地区で土地区画整理事業が本格化し、1970年

代には、第3地区(西沙羅ソサラ)と新済州1,2地区(蓮洞新市街地)が、1980年代には禾北地区が開発された。また、1990年代には二徒地区、老衡地区、三陽地区、外都地区などが開発され、都市が外延的に拡大された。

西帰浦市に住居地が形成されはじめたのは、1439年に西帰鎮が築造され、鎮集落が登場し



1960年代初のゲンヤンボル(現済州市庁の前)の様子



1978年の新済州市街地の造成事業

てからだ。それ以降、日本統治時代に警察駐在所、郵便局、道支庁などの行政官署が入り、本格的に実質的な中心機能を備えるようになった。

1960年代～1970年代に第1横断道路(5.16道路)が開通した。済州市へのアクセスが容易になって観光客が増え、様々な観光サービス施設が立地し、都市化が促進された。その後、中文面が西帰浦市中文洞に統合され、都市の範囲が拡大した。そして、新市街地が建設され、西帰浦市庁、警察署、郵便局などの主要な公共機関が入り、新しいビジネス地区に浮上した。また、中文観光団地の開発と国内所得の増加による観光需要の増加で、中文地区の都市化と西帰浦市の西部地域を中心とした都市機能の外延的な拡張をもたらした。

水に沿って村が形成

世 界のどの国でも水のある所を中心に人々が集まり住みはじめ、村が形成されて文化が育まれてきた。済州の村の形成も水(湧泉水、奉天水)の存在と不可分の関係にある。

済州では、地層の中を流れる地下水が地表の地層や岩石の隙間から湧き出る湧水を中心に村が形成された。特に、湧水が密集している海岸を中心に村が形成されたことは、湧水が村の立地に最も重要な要因であることを証明している。

湧水は飲み水だけでなく、生活用水、畜産用水、農業用水などに用いられた済州の人々の生命水だった。村人が湧水を共同で利用する中で、おのずと水の保存と利用に関する連帯意識が生まれた。「ムルホボク水瓶」、「ムルグドクムルホボクを担ぐとき、ムルホボクを入れる籠」、「ムルパンムルホボクを置く岩」という済州の独特の水利用の文化が芽生えるきっかけにもなった。つまり、済州の湧水の歴史は、済州の水の歴史であり、済州の村の歴史でもある。



ムルホボク

村のムルトン

村で共同で利用した水場を済州では「ムルトン」と呼んだ。

湧水が湧き出るムルトンは、主に海岸村に集中している。中山間の村には湧水のムルトンもあるが、ボンチョンス広く深く掘った窪みに貯まった地表水を使う奉天水と呼ばれるムルトンがほとんどだった。

湧水は、流れの最上部は飲み水用として、中間部は野菜を洗う用途に、下部は洗濯や風呂用に区分して使った。奉天水も飲み水用と生活用に区分して使った。

湧水は、湧き出る位置、量、用途によって名称が異なる。

岩間から流れ出たり、地中から湧き出る湧水は「トンムル」という。浜辺や川辺の大きな岩の下から湧き出る湧水は「オンムル」または「オンドクムル」という。

岩石の隙間や地の窪みから湧き出る湧水は「ゴマンムル」、雨の多い日だけ湧き出る湧水は「グミョンムル」という。

「クンムル」は湧き出る量が多く、占める面積が広い水、または、村で最大規模の水のことをいう、逆に湧き出る量が非常に少ない水は「センイムル」と呼んだ。「センイ」は、鳥を意味する済州の方言だ。鳥が飲む程度に、ちょろちょろ流れることからセンイムルと呼んだのだ。

「ジョルムル」は寺の周辺や寺の中で湧き出、寺で利用する湧水を指す。そして、神仏に祈願するときに利用する水は「ハルマンムル」と呼んだ。



高内里海岸の「小川」の湧泉水

水の貴重な島、済州

上 水道が開発される前の1960年代までは、済州は水が貴重な島だった。済州の三災とされる旱災、風災、水災はいずれも水と関連する災害だが、特に、毎年のように訪れる干ばつは済州の人々を最も苦しめた自然災害だった。ほとんどの村は水が湧き出る所を中心に形成された。特に、海岸沿いの村は、海辺から湧き出る湧水を利用した。しかし、泉のない村も少なくなかった。泉のない村では、窪みを掘って雨水を集める「グルンムル」を利用した。また、茅で作られた漏斗を介して木から滴る水を瓶に集めて使うこともあった。さらに、付属島などでは、海の岩盤の水溜まりの水を布にふくませ、それをホボク水瓶に絞って使うこともあった。飲み水のほとんどは、女性がムルホボクに汲みとり、それをムルグドクにいれて背負って運んだ。家のムルハン水を貯めておく水瓶に水がないと怠けものだと言われ、非難された。水の汲み取りは女性の仕事だと考えられたため、ムルハンの水がなくなれば、いくら疲れていても、真夜中でもムルホボクを担いで水を汲みに行った。

韓国の名水100選のうち、八つが済州名水

消えていく我々の「清くて美味しい水」を見つけ出し、子孫に伝えるための作業として、1987年に韓国自然保護中央協議会と京郷新聞社が共同で、「韓国の名水100選」を調査・選定した。全国的に①源流、溪谷、滝の44か所、②泉(泉、井戸、薬水)の46か所、③湖沼・池の10か所などが「韓国の名水100選」に選ばれた。そのうち8か所が済州地域にある。源流、溪谷、滝の部分で済州市道頭同のオレムル、西帰浦市の天帝淵滝とドンネコが、泉チョンジェヨン(泉、井戸、薬水)の部分で済州市健入洞のグムサンムル(当時の資料では我羅洞所在になっていたが、我羅洞にグムサンムルはない)、涯月のハムル、外都洞のスジョンバムル、西帰浦市西烘洞のジジャンセミ、安德面の山房窟寺の薬水が選ばれた。

済州初の水道

最初の水道は、日本統治時代の1925年5月に湧水を自然流下式で送り、西帰浦地域の一部の家庭に供給した正房簡易水道だという記録が残っている。1927年7月には「ジョルゴクジムジョンバン」を水源として西好・好近簡易水道が、1932年7月30日には「ドンネコムル」を水源として吐坪・下孝・新孝簡易水道が完成した。西好・好近簡易水道の施設を記念するための記念碑が西好里に保存されている。吐坪・下孝・新孝簡易水道については、ドンネコ水源地の北側の岩壁に当時の水道施設工事に関連した内容が刻まれている。

実質的な意味の済州初の水道は、済州市内の10か所の共同水場だろう。1957年6月24日夕方、済州市内10か所の共同給水栓からきれいな水が湧き出ると、その前に集まっていた人々は歓声を上げたという。

そうした歳月を経て、今は広域上水道システムが備わり、苦勞せずに水を使えるようになった。現在は、済州の水を国内外に輸出する「ブルーゴールド」の時代を迎えている。



産業経済

数値で見る済州経済

20 11年末現在、済州地域の経済活動人口は、29万6千人であり、そのうち就業者は29万1千人だ。

産業構造は、2010年を基準に、サービス業が68.3%で大きな比重を占めており、農林漁業も17.7%と他の地域に比べて高い割合を占めている。製造業の割合は4.2%で他の市道に比べて非常に低い数値だが、これは2005年の3.1%に比べると1.1%の高い数値を示している。

産業別就業者数を見ると、2009年の農林漁業分野の就業者数は5万5,800人で、SOCおよびその他のサービス分野は22万1,800人で、全体就業者の76.8%がSOCおよびその他のサービ

ス部門に従事してる。職種別就業者数を見ると、事務職が3万7,400人、専門・技術・行政官僚組織が4万100人、技能・機械操作・単純労務職が9万1700人だ。農林漁業就業者数は4万9,400人だ。

2010年の済州の地域総所得は9.6兆ウォンで、全国の0.8%を占めている。済州道民1人当たりのGRDPは1,758万ウォンで、全国1人当たりGRDPの73.1%に当たる。

全国を席捲する農産物

済 州の農家人口は1985年に18万5,339人だったが、2009年には10万4,802人に減った。これは深刻な離農現象が反映された結果だといえる。済州の総人口に対する農家人口構成の割合は、2009年現在19.2%で、全国の6.6%の約2.8倍だ。

済州の農家1戸当たりの農家所得は1993年以来、おおむね全国平均を上回ったが、ミカンの価格が大幅に下落した1997年と1999年には全国平均よりも低かった。1戸当たり農外所得は1993年以降、1997年を除いて全国平均より高い水準を維持している。

農産物市場開放が本格化した1990年以降、済州道の農作物の栽培面積の変化を見ると、これまで、栽培の比重の高かった麦類、雑穀、豆、サツマイモ、菜の花、ゴマ、一部の野菜類の栽培面積が大幅に減少した。その反面、ミカン、ジャガイモ、花卉類とともにニンジン、ニンニク、タマネギ、ネギなどの越冬野菜の栽培面積は小幅増加にとどまり、年間の作物総栽培面積は1990年の6万7,065haから2008年には5万4,361 haに減少した。

2008年の粗収入の構成比を見ると、果樹類が56.2%と最も高く、次に野菜類27.9%、食糧作物9.1%、特用作物4.6%、花卉類2.2%だ。品目別から見ると、ミカンが54.1%と最も高く、次にニンニク7.7%、ジャガイモ5.6%、ニンジン3.6%、タマネギと花卉2.2%、豆1.8%、ゴマ1.3%、キャベツ1.1%の順だ。

1999年以降2010年まで済州で栽培した野菜生産量は、品目別に多くの変化があったが、乾燥トウガラシ、ダイコン、ニンニク、キャベツ、ハクサイの生産量が増加した一方で、スイカ、タマネギ、ニンジン、ウリの生産量は減少した。

全体面積が朝鮮半島の1%にしかないこの島で、2009年にニンジンは全国生産量の72.3%を、キャベツは42.1%を占めており、菜の花は44.3%を占めた。

FTAの波にさらされる済州ミカン産業

ミカン産業は済州地域における第一次産業総生産のうち、1/3以上を占める非常に重要な産業

だ。ミカンの生産量は韓国の果樹の総生産量の1/4以上を占めている。

1998年以降、減少傾向にあるミカンの栽培面積は、2008年には済州総耕地面積の37%に当たる2万937haとなった。ミカン栽培農家数は済州地域の全体農家数の89.6%に当たる31,027



済州ミカン

号だ。ミカン農家の1戸当たりの平均栽培面積は0.67haで、家族農の適正規模とされる2ha以上の農家の割合は3.6%にとどまっている。

ミカン産業の粗収入は、1996年産に6,079億ウォンを記録して以来2002年産まで減少しつづけているが、ミカンの価格が大幅に下落した1999年産から2002年産までの4か年の平均は、3,436億ウォンで、ほぼ半分に下落した。しかし、2003年からミカン流

通調節命令制の実施とミカンの品質向上、1999年から2002年までのミカン価格暴落で大規模な閉園を実施するなどミカン生産量を調整した結果、2003年産は4,704億ウォンに増加し、2004年産6,105億ウォン、2005年産は6,006億ウォンと回復傾向を見せている。しかし、2007年産は過剰生産と品質の低下などの理由で4,318億に減少したが、2008年産は6,313億ウォンと、再び回復した。

日増しに成長する観光産業

自 然観光の中心である済州観光は、従来の自然資源のうち、漢拏山、拒文岳溶岩洞窟系、城山日出峰が世界自然遺産に指定され、自然資源を保護し、イメージを強化した結果、その波及効果は日増しに拡大している。

現在、済州地域には、政府が管理する43か所の観光地がある。その内訳は、道が管理する12か所の観光地(民俗自然史博物館、万丈窟、樞子林など)、済州市が管理する8か所の観光地(竜淵・竜頭岩、ジョルムル自然休養林など)、西帰浦市が管理する23か所の観光地(ソブジコジ、松岳山など)だ。

私設観光地は計46か所がある。済州市に19か所、西帰浦市に27か所の観光地が分布している。附属島の観光地としては、加波島、馬羅島、牛島、飛揚島、楸子島があり、海水浴場は計10か所で、済州市で6か所(梨湖、三陽、挾才、郭支、金寧、咸徳)、西帰浦市で4か所(中文、新陽、和順、表善)が運営されている。

済州で行われている観光開発事業の現況をみると、観光団地としては国際的な総合観光の拠点地である中文観光団地が持続的に開発されており、国際海洋観光団地として城山浦(ソブジ

コジ)海洋団地と、神話・映像・世界料理のテーマパークである神話歴史公園団地も開発されている。また、家族単位の総合休養団地としてパムパス総合休養団地が開発されており、グマク オラ ボンゲ今岳、吾羅、奉蓋、石文化公園など17の観光地が、女性テーマパーク、家族連れ観光、石や伝統家屋体験観光、海洋レポーツ、温泉観光、レジャーレクリエーションなどのテーマで開発されている。



竜頭岩

観光客1千万人の時代に向かって

済州では2004年以後、持続的に観光客が増加している。2005年に観光客500万人時代を実現し、2008年には580万人を誘致し23,736億ウォンの観光収入を記録した。2010年に750万人、2011年は870万人と徐々に増加していることを考えると、遠からず観光客1千万人時代を迎えるだろう。済州地域の内国人観光客の増加率を見ると、2004年460万人から2011年769万人に67.2%が増加し、外国人観光客は、2008年が54万人、2010年77万7千人、2011年104万5千人で、2010年に比べて2011年は34.6%が増加した。特に中国人観光客は、2010年406,164人から2011年570,247人に40.4%増加した。

濟州の産業経済を知る

一年中休みなく働く濟州の農家

濟州島の伝統農家では、4月下旬に陸稲の種を蒔く。ほとんどは中山間の焼畑を耕し、そこに種を蒔き、牛馬の蹄で踏む。

ワラビ狩りもこの時期に本格的に始まる。濟州島の名物のワラビは、清明(4月5日)から生えはじめ、ワラビ梅雨の時にピークを迎える。

熟していない麦を食べたり、海藻類、木の根っこなど、俗に言う食べられないもの以外は全て食べた、食糧難に苦しんだ時期があった。ポリッゴゲで良く知られる春の端境期がそれだ。この



加波島の麦農作業

時期は、麦畑の草取り、様々な作物の種撒き(サツマイモ苗床づくり、カボチャの育苗、ジャガイモ播種)、畑の砂利を除く、石垣の整理、牛馬に烙印を押す、家畜の管理といった作業に奔走した。

麦の収穫は通常6月上旬から下旬までだ。麦の収穫は、麦を刈り、畑で一、二日乾燥させた後、藁の紐で束ねて牛や馬で家まで運ぶ。家に運ばれた麦を庭に広げて脱穀する。

サツマイモの植苗作業は、梅雨時期の6月中旬から7月上旬に行われる。前もって苗床で育てたサツマイモの茎を切ってサツマイモ畑に移し植える。

6月下旬に麦の収穫が終われば、粟を播種する。尿を混ぜた灰に粟の種を混ぜて蒔き、牛、馬、または人が踏む。これを「ジョバッボルリギ」という。6月上旬から7月下旬まで休耕地や麦を収穫した畑に豆の種や小豆の種を撒き、それをすき返した。

化学肥料が普及する前は、連作すると地力が落ち収穫量が減ったため、秋の収穫後、すぐに畑を耕さず、1年間畑を休ませることが多かった。休耕した畑に麦を栽培するためには、畑を2回耕す必要があるが、その1回目を「チョボルガリ」といい、7月上旬に行く。

蕎麦は普通、焼畑に牛の冬の餌であるクサネムの種を蒔いて2年間それを刈り、その後、畑を耕して2年間蕎麦を栽培する。2年ずつ交代で連作するのだ。そのほかにも、茅畑を耕して蕎

麦を栽培するが、それを「チョブルボンする」という。

粟の種や陸稲の種を蒔いた後、1か月ぐらい経つと草取をする。これを「チョブルゴムジルメギ1回目の草取り」という。チョブルゴムジルメギは、スヌルム協同作業、助け合いで、多くて20～30人が「サデソリ労働歌」を歌いながら作業する。この時期にはジャガイモの収穫もしなければならない。チョブルゴムジルメギから2か月後には「ドゥブルゴムジルメギ2回目の草取りを行う。

8月下旬には蕎麦の種を灰に混ぜて三回耕した畑に万遍なく蒔いた後、牛にまぐわを付けてひかせる。また、この時期には、カルオツを作るために柿渋染めが行われる。

9月上旬のクサネム刈りを皮切りに、冬季の牛の餌である飼い葉刈りが始まる。

10月に入ると、粟をはじめとする陸稲、大豆、小豆、サツマイモなどのゴスルコジ(秋の収穫)が始まる。粟や陸稲は牛で運び、ヌル(積みわら)にして保管する。粟は穂を鎌で刈り、馬が引く石臼で脱穀し、陸稲は千歯扱きで脱穀する。また、大豆や小豆の庭に広げて穀竿で脱穀する。

11月には蕎麦を収穫するが、蕎麦を刈って筵の上に広げ、穀竿で脱穀する。こうして蕎麦の収穫が終われば、秋の収穫が完了するが、この時からドッゴルムバツハギが(ドッゴルムネギ)が始まる。

ドッゴルムバツハギは麦の種まきに必要なドッゴルム豚糞を畑に運ぶ作業だ。一年間牛舎の牛や馬から得たソゴルム牛糞をドットン豚小屋兼便所に保管しておく。そして、晩秋の麦の種まきをするときにその堆肥を掘り出し、少し厚めに広げて麦の種を撒き、くわで土をよくほぐしてから、牛や馬に踏ませる。その堆肥を畑全体に万遍なく撒けば、麦の種まきは終了する。

麦の種まきが終わると農閑期が始まる。済州の伝統的な農村で「農閑期」というのは麦の種まきが終わった12月中旬から翌年の農作業が始まる4月までの期間をいう。この時期には畑仕事をしないだけで、翌年の農作業に備えて農機具の手入れ、農機具の製作、家事、薪の用意などで忙しい日々を送る。

農繁期より忙しい農閑期

済州では農閑期に炭を焼くことで忙しかった。炭を作ることを済州では「炭を焼く」または「炭を埋める」と表現した。炭焼きの時期になると、農家では小さな釜や鍋などの簡単な調理器具を持って漢拏山に登り、通常1泊2日間野宿しながら炭を焼いた。

焼いた炭を背負って家に帰る途中で背中に火がついたり、他人の炭をこっそり盗んでくる途中にお尻に火がついたりするなど、笑えないエピソードもあった。

農閑期にはまた農作業に必要な筵、編み袋、かますなどを編むのに忙しかった。筵や編み袋は、陸稲の藁で編むが、人に頼まれたときや穀物と交換するために編んだ。炭袋を編む場合は、陸稲の藁より硬いススキで編んだ。

農閑期のとき、済州の農家では男性はかますを編み、女性は、木綿の機織りに余念がなかった。



炭焼き窯跡

とで、ペナルギは、糸の太さによって経糸を何本にするか決めることだ。そしてペメギは糸を張ることでベチャギは木綿を織ることをいう。普通、春に機織りをした。

昔は、家ごとに織機があり、綿を栽培して木綿を織り、その木綿で家族の服の生地に使ったり、市場で売って家計を支えることもあった。木綿の製作過程を見ると、シポoggi、ソムテウギ、ゴチマルギ、シルジャggi、ペナルギ、ペメギ、ベチャギの順で行われる。シポoggiとソムテウギは種を分けて器具を利用し綿を柔らかくする過程、ゴチマルギは板の上に広げて棒で押し伸ばすことをいう。シルジャggiは糸車で糸を紡いで巻くこ

済州経済生活の基盤、海女の「ムルシル海女漁」

海女がムルシルで稼いだ収入は、近代の済州経済の最も大きな変動要因であり、済州の経済発展を牽引してきた。

済州の海女は漁労作業だけをしたのではない。済州地域の伝統的な農村では、農繁期と海産物の

採取期が重なる場合が多く、農作業と漁労活動を両立しなくてはならなかった。その当時の済州の海女の日を見ると、7、8月には早朝2時間ほど畑で草取りをした後、潜りをするために海に向かう。午前の潜りが終わると、家に帰ってきて昼食を食べ、再び畑に行き草取りをし、再び午後4時ごろ、海に行き作業をし、日が暮れると帰宅する。現在、済州に住んでいる80代



海女

半ばのある海女は次のように証言する。

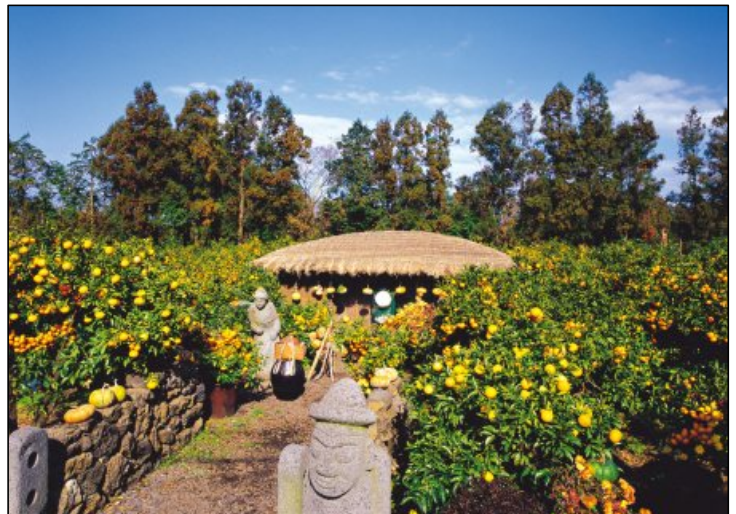
10才から潜りを習いはじめ、17才にすでに上軍になり、二十才で結婚してからもムルシルで家族の生計を支えた。済州島、朝鮮半島だけでなく、東京、対馬、ウラジオストク、天津などへ趣き、出稼ぎ海女としても活躍した。このようにして貯めたお金で99の畑を買った。このうち、3分1の33の畑は済州4・3事件のとき、昼は警察、夜は山人から長男を守るために売った。また、3分1の33の畑は、朝鮮戦争のとき、息子が徴兵を免れるように使った。残りの3分1の33の畑は、済州4・3事件のときになくなった長男の代わりに、孫の大学の学費や結婚させる費用に全部使ってしまった。これからも体力の許す限り、海で海藻類を採りながら暮らしたい。

このように、済州の海女は済州地域の経済活動と済州の歴史の中で依然として活躍している。

ミカン産業が済州に与えた贈り物

1964年2月、当時の大統領の朴正熙は年頭巡視のとき、西帰浦地域を訪問し、「西帰浦の人々が食べていく道はミカンしかない」と、ミカン農業に注力するよう訴え、「済州島は他の地域と環境が違うので、全国共通の食糧事業を適用するのではなく、収益性の高いミカンを積極的に奨励するように」と特別指示を下した。それをきっかけに1965年から栽植ブームが起きた。

1968年、ミカン増殖事業が農漁民の所得増大特別事業として策定され、低金利の融資でミカン果樹園の造成金を支援することになり、1969年から画期的な増殖が行われた。1975年には済州島のミカンの栽培面積が1万haを上回り、その後も増加しつづけた。



茅葺きの伝統家屋とミカン

ミカン農業が拡大し、村には、ミカン果樹園を持つ富裕層がたくさん現れ、済州の農村は豊かになった。その一方で弊害もあった。次第に労働意欲が低下し、節約などの生活意識がなおざりにされた。しかし、その多くは子供の教育に投資したり、健全な資産増殖を図った結果、済州地域の教育レベルが高まった。ソウルや外国で勉強して成功した済州出身者が多いのは、ミカン農業が済州に与えた贈り物といえる。



李仲燮が住んでいた茅葺きの伝統家屋と李仲燮美術館

近代芸術活動

済州の創作舞台

他の分野の活動と同様に、済州の芸術界も時代と密接にかかわりながら変化し発展してきた。

日本統治時代の済州では1919年に朝天で勃発した独立運動、1930年に旧左と牛島で起きた海女抗日運動など、大きな事件が発生する。

時が流れ、1948年には済州の不運な歴史ともいえる済州4・3事件が起き、続いて朝鮮戦争が勃発した。この時期、済州の人々の意識と内面に多くの変化が起こる。朝鮮戦争で多くの

避難民が済州に入ってきたが、避難民の中には芸術家も多数含まれており、済州の芸術界も直接的・間接的に多大な影響を受ける。

さらに時代が変わり、四月革命から約10年間続いた韓国内の多様な変革期に、済州道でも学生によるデモが行われた。3.15不正選挙と関連した事件で韓国全体が混乱に陥ったときは、済州社会でも学生や地域社会全体が混乱に巻き込まれた。

この時期に済州道では大学生を中心とする文学活動同人会が登場し、その他の様々な分野でも小グループの芸術団体が生まれはじめる。その後、済州4・3事件に対する認識が徐々に拡大し、文学分野では済州4・3事件をテーマにした芸術運動が起こる。美術と音楽の分野でもコンペなど活発な創作運動が起こり、また、演劇の分野でも多数の劇団が創立され、済州でも演劇活動が始まった。

1980年代に入ると、光州事件と1987年6月民主抗争に続く民主化運動により社会的に大きな変革の時代を迎える。済州では、済州4・3事件をテーマにした文学作品が発表され、音楽の分野では済州大学に音楽科が新設される。また、済州市には済州市立交響楽団と合唱団が、西帰浦市には西帰浦市立合唱団がそれぞれ創立された。

1990年代には、済州で行われた旧ソ連のゴルバチョフ大統領、米国のクリントン大統領、日本の中曽根首相などの首脳会談をきっかけに、済州は「平和の島」というイメージとして位置づけられた。

1990年代は済州の文人が急成長した時期だ。80人だった文人の数が165人に増えた。急増した文人によって済州文壇の活動が活発になった。1998年には韓国文学作家会の団体が済州でも発足し、済州4・3事件に関連する文学、美術、演劇、舞踊の分野で多くの創作活動が続いた。

文学芸術活動

ギム ミョンシク ギム ムンジュン ギム ジウォン
日本統治時代の済州で文学活動を行った代表的な人物は金明植、金文准、金志遠、
ガン グァンスン
康寛順らだ。

金明植(1891～1943)は朝天里出身で、日本統治時代に発刊された月刊誌である『新生活』に抗日に関する文を掲載し、「ペンは剣よりも強し」を示した文人だ。金文准(1893～1936)が1915年『農林学校会報』に発表した作品「農夫歌」は、近代済州文学に大きな影響を及ぼした。

金志遠(1903～1927)は朝天里出身で、1925年『朝鮮文壇』に「懇願」が、同年11月に「乞食のおばあさん」が当選、文壇にデビューして活動した。

ガン チョル
康寛順(1909～1942)は牛島出身で、康哲というペンネームで活動をしており、1932年の海女事件に巻き込まれ、投獄された。彼が獄中で書いた作品「海女の歌」は、急速に済州全域

に広がった。

解放後の済州文学には日本統治時代の抑圧と困難が続いた。しかし、文学は最高の知性としての誇りを持っていた。1946年に済州でも雑誌『新生』が出版される。1946年5月には涯月面

チェ ギルド イ ヨンボク

人民委員会と青年同盟が共同で『新光』を創刊する。『新生』は崔吉斗、李永福、

ギム ヒョンヒョン ギム イオク

金炳現、金利玉などの詩が掲載された済州初の雑誌だ。

1952年に済州大学が開校し、済州地域の文学に新しい章が開かれる。同大学の卒業生は、教職や文壇で本人の能力を発揮しながら、済州の文学世界の発展に重要な役割を果たした。1957年6月「済州文化」、1958年8月「榧子林」、1959年6月「ハマユウ」、1959年10月「詩作業」などで文学同人が活発に活動した

1959年には済州文学同人会が組織され、続いて全国文化団体総連合会済州支部が結成された。

この頃に文学界は新たな変化と秩序を模索し、四月革命と5・16軍事クーデターが共存する矛盾と葛藤という社会的な問題意識を抱いて出発する。過去の痛ましい歴史を抱えた済州では、現実への参加を促す声が高まり、現実に対し批判的な思潮が登場した。

この時期、同人「崖」が1961年に、「亜熱帯」が1963年に結成された。「崖」は西帰浦の人々によって組織された。1965年に中学生を中心に結成された「人」は、1966年4月に創刊号を出す。1968年には済州大学の学生が中心となった「白波文学会」がプリント版の『白波』を出版する。1969年には「土曜倶楽部」が活動を開始し、済州大学と済州教育大学の学生たちが土曜日に喫茶店に集まり、作品発表と文学討論を行った。

済州道初の文学団体である済州文学同好人会は1956年に組織された。その後、済州文学人協会、済州文学者協会、済州文学協会は、現在の済州文人協会済州道支部に変わる。

済州文人会が、中央の韓国文人協会の承認を受けたのは1968年10月の済州文学協会のときだった。1970年、協会の内部事情により、ほぼ解体の危機に瀕したが、1972年8月30日に再結成され、韓国文人協会済州道支部が発足することになった。文人協会では、毎年『済州文学』を発刊しているが、1972年から現在まで54巻を出版した。

韓国文人協会西帰浦支部は、1987年に発足した芸総済州支会西帰浦分会の文学分科会員で構成された西帰浦文学の中心であり、1993年に韓国文人協会西帰浦支部の承認を受けた。

西帰浦文人協会でも、毎年『西帰浦文学』を発刊しており、第22集を2011年12月出版した。

1987年に民族作家会議が発足したが、これは1974年に創立された自由実践文人協会が1987年に民族作家会議に改編されたものだ。この団体では、『済州作家』が1998年度に創刊されたが、翌年から年2回、発行し、2012年4月に38号を発刊した。

(社)韓国新文学済州支部は『文芸思潮』に登壇した人々の集まりだ。1996年に創立され、

創刊号『ジョスルサリ』が発刊された後、継続的に活動している。2008年4月に東西文学会に改称、『ジョスルサリ』から『東西文学』に改編し、2011年11月に第16集を出版した。

2001年には国際ペンクラブ韓国本部済州地域委員会が結成された。済州時調文学会では、1984年に創刊号『時調文学』を発刊した。その後、『済州時調』に改称し、2011年1月に第18集を出版した。

済州児童文学協会は、1980年2月に創立され、1981年1月の創刊号『夜明け』を出版する。その後、済州児童文学会に、1987年に再び済州児童文学協会に改称し、現在も活動している。2011年11月に『漢拏山のモンセンイ』第30集を出版した。

済州随筆文学会は1994年5月に『随筆文学』を出版し、2011年12月に『済州随筆』第18集を出版した。済州女流随筆文学会は、2002年に設立され、2011年6月に『済州女流随筆』第10集を発刊した。

漢拏山文学会は1987年9月に結成され、同人誌『時間^{ムンソム}を回す』第24集を発刊した。

それほかにも「草葉の音」「三日月」「蚊島同人」「ハンソム文学会」「新世帯」などがある。橋林文学会は1990年5月に五賢高校出身の既成の文人によって結成され、『五賢文学』から『橋林文学』に変更する。2012年2月に第20号が出版された。「目覚めている詩」同人は1991年に発足し、同人誌『老いた炊飯器のために』が2009年2月に出版された。「多層同人」は、1990年に発足され、同人誌『多層人々』第43号を2007年に刊行した。そのほかにも「メッドル文学会」「グルト同人」「プルビツ同人」「鹿潭随筆文学会」「グルバツ同人」「旧左文学会」などの団体が結成され、活発に活動している。

美術芸術活動

日本統治時代に、済州の厳しい経済状況にもかかわらず、美術を勉強するために日本留学の途に就いた人々がいた。

ウォン ヨンシク ギム グァンチュ ゴ ソンジン
元容植、 金光秋、 高成進、
パク テジユン ジャン ヒョク ジョ ヨンホ
朴泰俊、 張喜玉、 趙栄鎬、
ヒョン シジ ヤン イノク

邊時志、梁仁玉などは日本で美術を勉強して帰国し、済州の美術界に直接的・間接的に影



新天地美術館

響を与えた。済州出身の金仁志は朝鮮美術展覧会に三度も入選し、済州出身作家の初の受賞という快挙を成し遂げた。

金光秋(1905～1983)は画家であり、書道家だ。1942年に『アサヒカメラ』誌が主催した写真コンペで、「渡し場」が入選し、済州の写真界の先駆者となるなど、絵画、篆刻、写真、水石などに造詣の深い芸術人だった。

邊時志(1926～)は西帰浦の出身だ。6才のときに渡日したが、1948年に日本光風会展で、23才の最年少で最高賞を受賞して話題になった。1970年に済州に戻り、新しい筆力で済州の土着的な情緒や風土を画幅におさめ、「黄土色の美学」を開拓した。

1970年代に入り、済州美術界では近代的な具象絵画から脱しようとする動きが現れる。1972年に済州大学に美術教育科が設置され、道内の美術分野でも量的・質的な人口が増え、美術の体系的運動が起こる。学生や卒業生は、大学美展、済州道芸総が主催する美術大展に出品することで、本人の業績と成果を確認し、技量を磨いた。「済美同門展」「教授作品展」「学生グループ展」、そして各種サークルの美術展が相次ぎ、済州美術界の全盛期を迎えた。

1980年代に入ってから、民族美術、民衆美術が登場する。1987年夏、済州美術界は大きな事件を経験する。絵画同好会「バラムコジ」の主催で、民衆美術巡回展である「民族解放と民族統一絵画祭り」が、同人美術館と韓国投資信託展示室で開かれたが、そのとき、出品された大多数の作品が国家保安法の規定する利敵表現物と判断され、作品が押収され、作家が逮捕者されたのだ。

この時から済州でも民衆美術運動が起こった。これらの運動は、耽羅美術協議会と「韓国民

芸総済州支部」を創立するのに重要な役割をし、社会運動組織と連携しながら、民衆運動の芸術的な支援を後押しすることになる。

1990年代に済州道文芸会館展示室が開館され、美術界では以前とは全く異なる活動を見せる。大小様々な展示が相次ぎ、様々なジャンルの団体が結成され、交流展も活発に行われた。



済州現代美術館

「4・3美術祭」を耽羅美術協議会が推進し、文学とともに、済州4・3事件の意味を済州の芸術の重要な一部として認識するようになる。

済州韓国画会が1992年に結成され、創立展を開き、毎年活発な活動を行っている。1996年に在京漢拏美術人協議会が結成され、1994年に済州道文化振興院が推進した「済州青年作家展」は、済州の青年作家たちの発表の機会を拡大し、若手作家を発掘する担当している。

1996年、耽羅美術協議会では、『済州美術』という機関誌を発刊する。ここでは主に4・3美術を特集し、済州美術の歴史を振り返る機会を提供した。

済州版画家協会は済州版画芸術の活性化、地域文化芸術の暢達と、会員相互の親睦を図ることを目的に1999年7月に創立された。

済州産業デザイン協会は1995年に創立され、済州の産業デザインの発展に中枢的な役割を果たしている。

ギダン ガン グボム ギダン

1987年7月には寄堂・姜亀範が寄堂美術館を建立し、西帰浦市に寄贈し開館する。これは韓国初の市立美術館であり、西帰浦だけでなく、国内の元老作家や中堅作家などの作品640点を展示している。常設展示館には、現在スミソニアン博物館に展示され、「嵐の画家」として有名な邊時志の作品が展示されている。

また、西帰浦市に李仲燮美術館が2002年7月に開館したが、李仲燮の作品だけでなく、彼の作品世界を鑑賞しようとする人が訪れる名所となった。

2007年9月には済州現代美術館が開館した。済州市翰京面に位置するこの美術館は、済州の西部圏に文化芸術の空間を提供するために設立された。

ソアム

西帰浦市七十里海岸道路の入り口に位置する素庵記念館は、韓国の近現代の書道を導いた

ヒョン ジュンファ

巨匠の一人、素庵玄中和先生の作品を展示している。常設館、特別企画室などがある。

ジャン リソク

2009年6月には済州道立美術館が開館した。展示室、市民ギャラリー、張利錫記念館などで構成された同美術館では、美術史的に価値の高い国内作家の作品を収集、常設展示している。

音楽芸術の世界

日本統治時代に日本に留学した経験を持つ済州人の中には、演奏者として音楽の道に入った人もいる。しかし、彼らが済州音楽界に影響を及ぼした事例は見当たらない。一方、朝鮮戦争のときに済州に入った避難民の中には、国内の有名な音楽人がいた。彼らは済州の音楽に大きな影響を与えた。この頃、済州は西洋音楽に接するようになる。

この時期に、済州中学校の吹奏楽隊の編成が拡充され、1951年には慕瑟浦第1訓練所の軍

楽隊が誕生した。

米国人のギルバート少佐(済州道UN民間協力団体副司令官)が済州保育園の吹奏楽隊を40人に拡大編成したが、これは画期的な措置だった。音楽を専攻したギルバートは、それまで運営していた済州農業高等学校、警察バンド、救世軍鼓笛隊にも支援を惜まず、五賢高校の吹奏楽隊の創設にも多くの支援をした。また、6つの吹奏楽隊を巡回しながら指揮法も指導した。彼の業績を称える意味で、1953年に五賢高校では音楽館を竣工し、その音楽館を「ギル

バート音楽館」と名付けた。

1952年から1953年までは済州女子高、晨星女子高、軍楽隊と道内の学校が参加した合同演奏会があり、軍警を激励する夜の音楽会、五賢高校と軍楽隊との合同演奏会、軍官民による合同演奏会などの公演が活発に行われた。

五賢高校の吹奏楽隊は、1953
ジンジュ
年に慶尚南道晋州市で開催された第4回晋州開天芸術祭の



済州国際管楽祭

吹奏楽部門に参加し、芸術祭の全部門最高賞(開天芸術賞)を受賞し、その後15年間、15連勝という大記録で済州音楽史の金字塔を築いた。

済州道の吹奏楽隊は、ますますその数が増え、済州市内の全高校で活発に活動した。さらに、音楽大学への進学率も増え、道内の音楽専攻者が増えた。

1980年代初め、済州大学に音楽科が新設される。そして、コンサートが増えることで、済州道民の音楽に対する渴求が満たされ、済州の音楽の基盤が自然に築かれた。大学が輩出した学生は交響楽団や合唱団の団員として活動し、ピアノ分野の活動も活発に繰り広げられた。その後、漢拏大学と観光大学に音楽科が設置された。

1988年8月、済州道文芸会館が開館することで、済州音楽の舞台は、新たな時代を迎える。

ハンラ
また、漢拏大学に800席規模の漢拏アートホール、1200席規模の済州アートセンター、済州
アラ
大学に500席規模の我羅ミューズホール、済州女性文化センターに400席規模のソルムンデ会館、済州観光大学に500席規模のコンベンションホールなどの公演場が開館し、済州の音楽活動の舞台は、豊穡の時代を迎えている。

済州音楽協会では、青少年音楽会、新人音楽会、コンクール、耽羅合唱祭など多くのイベントを開催し、済州音楽界の中核的な役割を果たしている。

1994年4月に済州海辺公演場が開館し、済州に新しい音楽活動の舞台が登場する。海辺、つまり野外でも公演が可能となり、夏には絶えず演奏者の公演が繰り広げられている。国際吹奏楽祭が国内外でも名声の高い済州の名物として定着したのは、海辺公演場の存在があったからだ。

演劇芸術活動

1962年1月に韓国文化芸術団体総連合会(略称芸総)が発足し、4月には済州道にも芸総が設立された。演劇界でも演劇協会を組織したが、中央の韓国演劇協会には登録せず、済州道内の演劇同好会にとどまっている。

1962年5月に済州道が主催し、芸総済州道支部の主管で、第1回済州芸術祭が開かれたが、これが耽羅文化祭の始まりだ。第1回芸術祭には演劇協会からも参加し公演した。

済州出身の中には大学で演劇を専攻する人が少ないため、済州の演劇は命脈を保ちにくいのが実情だ。

1975年7月10日、それまで同好会だった済州道演劇協会が中央の演劇協会に正式に登録することで、道内の大学に演劇サークルが結成され、＜ガラム劇団＞が創設される。1978年3月には劇団＜イオド＞が発足する。それ以降、1980年に劇団＜ジョンナン＞が、1988年には劇団＜無＞が創立された。

1991年から済州演劇人の持続的な活動と団結のための＜小劇場演劇祭＞が創設された。

1997年には＜青少年演劇祭＞を創設し、道内の青少年たちの演劇の活性化を図った。

1992年、済州演劇協会が済州道に全国演劇祭を誘致することで、済州演劇界に多大な影響を及ぼした。全国演劇祭は2万人の有料観客を誘致し、済州演劇界の団結により成功した大会として全国に知られ、演劇界は一層活発な活動を行った。

写真芸術活動

済州の写真芸術界は1960年代に入り活発な活動を見せる。済州初の「写真芸術人同好会」は1965年2月に創立された。この同好会は、1年に4回の展示会を開くという計画で出発し、漢拏山積雪雪景色撮影大会を行い、3月には、その写真を集めて写真展を開くなど、その年に3回の展示会を行った。1967年2月に名称を「済州カメラクラブ」に改め、会員たちが全国公募展に入賞するなど、情熱的な活動を行い、済州の写真芸術界の成長の基盤を築

いた。

1967年12月には済州写真作家協会が創立された。2つの団体の創設により、済州道民に様々な写真を紹介する契機となった。

1970年代に入って写真活動は活発になった。「済州建設写真コンテスト」、晨星女子高の生徒で構成される〈晨星写真展〉など、様々な団体展が相次いだ。

以後、韓国写真作家協会済州支部が組織され、済州道と芸総が主催する耽羅文化祭写真部門の展示会を着実にやっている。また、各支部や写真サークルの各団体が特性を活かすための展示や活動をつづけている。



テーマで体験する済州

目で見て、耳で聞いて、心で感じて

国立済州博物館、耽羅人の魂を感じる

先史室、耽羅室、高麗室、朝鮮室、耽羅巡歴図室、寄贈室、特別企画室、常設体験室、屋外石文化などの展示空間で構成されている。

耽羅室では、発掘された遺物から耽羅国の誕生と、周辺国との交流を通して成長過程を知ることができる。高麗室では、高麗と耽羅が一国になる過程と文化の変遷史、陶磁器文化の流入と隆盛した仏教文化、対蒙抗争などの歴史的展開過程が紹介されている。

注目すべき資料である耽羅巡歴図は、済州に赴任した李衡祥牧使が肅宗28年(1702)、済州

牧、旌義県、大静県を巡視しながら、様々な行事の場面を記録した彩色画帳だ。この李牧使ギム ナムギルの指示に従い、絵師の金南吉が描いたもので、全41幅、各幅の下段に行事に関する説明が記されている。耽羅巡歴図は18世紀初め、済州島の官衙の建物、軍事施設、地形、風物、狩猟文化など、済州の歴史を研究するための非常に貴重な資料として認められ、1979年2月、国家指定宝物第652号に指定された。



国立済州博物館

済州特別自治道民俗自然史博物館、民俗遺物と自然史が会う

済州特別自治道民俗自然史博物館は、天恵の秀麗な済州の自然と済州の人々の独特の民俗が調和を成す済州の代表的な公立博物館だ。1984年5月24日に開館した民俗自然史博物館は、済州道内に点在している固有の民俗遺物、動物・植物、地質および海洋植物などの様々な自然史的な資料を調査、研究、収集、展示し、済州地域の民俗自然史教育に貢献する博物館として定着している。2011年12月31日現在の展示および所蔵遺物は、考古民俗遺物9,909点、自然史関連の遺物28,165点、計38,074点だ。常設展示館、世界自然遺産展示館、自然史展示室、海洋総合展示館、民俗展示室と特別展示室があり、屋外展示場もある。



民俗自然史博物館内のエギグドク(ゆりかご)とグムジュール(しめ縄)

る。また、小学生から一般まで幅広い層を対象に社会教育プログラムも運営している。

思索する庭園、農夫の夢が世界を変える

自然はいつも、ありのままの姿で人を驚かせる神秘的な存在だ。それゆえ、我々は自然をありのままに残すことが最高の美徳だと考える。

ここはそういう固定観念を捨てる場所だ。鑑賞しているうちに、この庭園に注がれた汗と努力、さらにその哲学に感動させられる。自然に人の手を加えることで、自然も人も驚く最高の芸術作品を誕生させたのだ。



思索する庭園

庭」、そして、キンカン、ミカンなどの済州の在来ミカンが鑑賞できる「ミカンの庭園」、ほかに、ニシキゴイが泳ぎ、童心の世界へ導く「平和の庭園」と、最高の出会い、イベントのための「秘密の庭園」がある。

オソルロク、済州の澄んだ香りを嗅ぐ

韓国唯一の緑茶博物館だ。済州は水抜けのよい火山灰土の天然岩盤水を有し、中国の黄山、日本の富士山とともに世界3大緑茶産地に数えられる。

博物館の建物は緑茶壺を模り、現代と伝統が調和するように表現された。1階は常設展示館である壺ギャラリーと茶体験室で構成されているが、壺ギャラリーには韓国で茶具として使用された貴重な土器や、磁器約100点が展示されている。三国時代から高麗時代、朝鮮時代に至る

四季折々の景色が庭園芸術の世界へと導くここは、7つのテーマガーデンからなっている。石の上で育つクロマツが静かに迎える「歓迎の庭」があり、済州の石を幾重にも積み上げた石垣と七重の石塔の立つ「魂の庭園」は宴会場として利用される。また、イブキノキと泉を模り、長閑な春の情景を感じさせる「靈感の庭」、さらに、木は人生を、盆栽は哲学を連想させ、瞑想と思索を楽しむ「哲学者の

までの貴重な茶具を時代別に展示し、茶具文化の変遷や茶文化の特徴を鑑賞することができる。中国、日本、ヨーロッパなど世界各国で使用された茶器も展示されており、比較して見る面白さもある。

アホプグッ椅子の村、 天と疎通する

ナクチョンリ

翰京面樂泉里、村に入るとすぐ

に13.8mに達する大和合門の椅子をはじめ、形、大きさ、テーマ、名称がそれぞれ異なる千の椅子が並ぶ椅子公園に出会う。椅子の名称は、2007年から2009年まで3年間の全国ニックネーム公募によって名付けられたもので、2009年7月31日に椅子公園の村を宣布し、全国に知られるようになった。

樂泉里には自然に形成されたチョガルムル、オペミをはじめとするブルミ(濟州伝統の野鍛冶業)に関連する9つの池があり、アホプグッ(アホプは9を、グッは池を意味する濟州の方言)をコンセプトにアホプグッ椅子の村として生まれ変わったのだ。樂泉里という名前も泉が多くて楽しいという意味だ。

人為的に作られた池は、ブルミに必要な土を掘った後にできたものだ。地元の人々は、樂天里がブルミの発祥地だという事実を知らせたかった。土を掘り出したところに水がたまり、長い歳月が経ったが、水はきれいに残っている。この村の歴史性と生態池は、地元の人だけでなく、都市の人々にとっても良い文化資源であるため、アホプグッ(アホプグッは9つのグッド「good」の



緑茶博物館



翰京面樂泉里、アホプグッ椅子の村

意味もある)という象徴的なテーマを持つようになった。

村の優れた資源は9つ以上だ。まず、町の人の人情が厚い。誰が、いつ、どこを訪れても歓迎してくれる。イノシシが好んでやって来たというチョガルムルの池とエノキの木陰は、村人の憩いの場であり、コミュニケーションの空間を提供している。良質の土壌は、ミカン、麦、キュウリ、ミニトマトの味を良くする。そして、この村は、村と村を結ぶ道しるべになっており、椅子の公園は、オルレ13コースを訪れる人々の憩いの場になっている。

コッチャワルの生態体験学習場として利用されているアホプグッ村の森は、訪れる人々に癒しの空間を、山鳥には安全な棲みかを提供する。

オモン アバン ジャンチ

母・父・祭りの村、仙人が風に乗って訪れる

シンアンリ

城山邑新豊里は、その名に新しく豊かな村という意味がある。この町には現在約200世帯600

チョンミチョン

人が住んでいる。町には川尾川が流れ、南山峰、トンオルムがある。

地元の人の悲喜が込められたゴムンデギメルトン、矢場の跡、ドウンデ池、ガシランゴル、ヨングンオルレ、ガルモイ池などを探訪できる。コムンデギメルトンは村の入り江の西側に長く伸びている「ゴムンデギ」という岬にカタクチイワシが集まるところということから名付けられた。



母・父・祭りの村

この村には、済州ならではのオルレ通りから家の門に通じる狭い路地と済州の方言がそのまま残っている。この村を訪問すると、オモン(母)、アバン(父)、ハルマン(おばあさん)、ハルバン(おじいさん)、ドセギ(豚)、ボンナン(エノキ)、クジェンギ(サザエ)、クドウル(部屋)、ジョンジ(台所)、ヤンジ(顔)などの済州の方言を自然に身につけることができる。おそらく80才前後の高齢者が多いため、文化資源がよく保存さ

れている。この村の人たちには仙人のように長生きする秘訣と、仙人とは似つかず、こつこつ働く勤勉さを兼ね備えているのだろう。そうした町の特性を活かした四季折々の文化体験プログラムが設けられている。

ブルタブサ
仏塔寺

ウォンダンボン

済州市三陽洞元堂峰にあった元堂寺は朝鮮中期に廃止され、1950年代以後、寺の跡地に仏塔社が新しく建てられた。仏塔社の境内にある高麗時代の石塔、五層石塔(宝物1187号)は済州島では唯一の仏塔だ。高さは約4mで、基壇は裏面を除く三面に眼象が浅く刻まれ、紋の底線が花模様に見えるよう彫刻されている。玄武岩で築造されたこの塔は、高麗忠烈王の時に元国に貢女とされた後、皇后になった奇皇后によって建てられた塔だと伝えられている。



仏塔寺五層石塔

ヤッチョンサ
薬泉寺

デボドン

西帰浦市大浦洞に位置する薬泉寺は、現在の姿になる前は、長い間命脈だけが受け継がれていた小さい庵だった。1,500㎡ほどの寺の跡地に薬水庵と呼ばれる済州伝統の茅葺きの家だけが合った。本格的に仏事が始まり、寺の規模が大きくなって薬泉寺と呼ぶようになった。仏事

ヤッサム

が終わった現在でも薬水は新しく造った池に注いでいる。

薬泉寺は、ヘインという僧侶が当時、韓国にはなかった雄壮な三階建ての大寂光前鳥瞰図を描き、1991年に大法堂を完成した。1993年に大法堂に毘盧遮那仏を奉安して奉仏拭を行い、1996年に落成式を行った。



薬泉寺

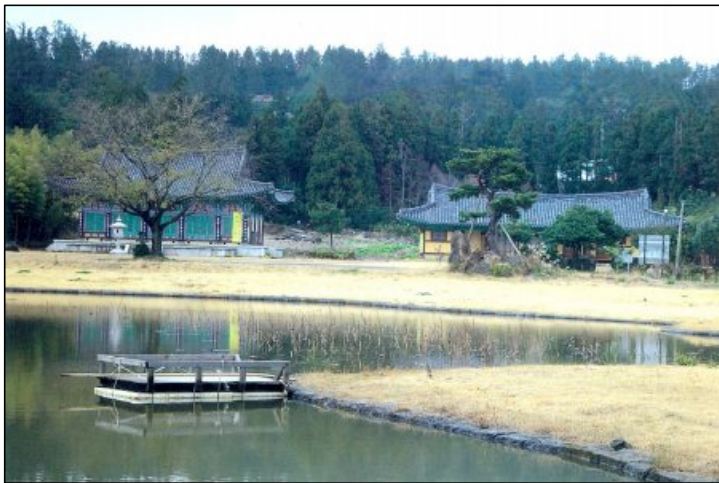
チョンワンサ
天王寺

済州市新市街地から漢拏山の1100道路を進むと、高さ1,176mの御乗生オルムの東側に数多くの峰と谷間が形づくる九十九谷という谷間があるが、天王寺は九十九谷の中の一つであるクムボン谷の下方に位置している。

1955年、今の天王寺の三聖閣の近くにあった土窟で座禅修行していた飛竜僧侶がにより、スヨンサン禅院という名称で創建された。1967年、天王寺に寺名を変更して観音寺の末寺として登録され、1994年4月に伝統寺刹に指定された。

ボッフアサ
法華寺

法華寺は尊者庵とともに高麗の裨補寺刹であり、12～15世紀に済州島で繁盛していた寺だ。朝鮮太宗の時まで法華寺の奴婢は280人余りで、排仏政策により寺を整備した後も30人余りの奴婢を持つ大きな寺だった。



法華寺

12世紀に建てられたと推定される。法華寺で出土した銘文瓦には、高麗元宗10年(1269)に重創が始まり、忠烈王5年(1279)に完工したという内容が書かれている。発掘された竜と鳳凰紋の瓦当は、高麗の王宮址である開城の満月台とモンゴルの王宮で出土したものとよく似ている。特に、瓦は王室の建築だけに使われたものだった。したがって、元の朝廷や王室と関わりのある元の寺刹であったと推定される。規模が非常に大きく、当時は済州島の3大寺刹の一つとされる重要な遺蹟だった。

李元鎮(1651-1653)の『耽羅志』には「県の東側の45里にあったが、今はない。今は数間の茅葺きの庵が残っているだけだ」と記されている。今の建物は1987年に新しく建てたもので、現在の法堂の位置で金堂址とみられる建物の跡が発見された。前面5間・横面4間、面積がおよそ330㎡の大規模な建物であったことが分かる。

出土した陶磁器や瓦片から10 ～

サンチョンダン

山川壇

アラドン

済州市我羅洞に位置する山川壇は、漢拏山神祭を行う祭壇で、真夏でも日が当たらないほどうっそうとした森の中にある。ここには天然記念物160号に指定されるクロマツが自生しているが、高さが19m～23mに達し、樹齢が500～600年と推定される韓国で最も古い老木として知られている。

森のトンネルを通れば松葉の間をかすめる風の音が聞こえるが、空に突き上がって枝を広げたクロマツの下シダの生えた祭壇は、静寂の中でも数百年の歴史を語る。木の間に座れば神祭を営んだ先人のように清い心の海にひたるようだ。

ジョルブアム

節婦岩、夫を待つ哀切な愛に会う

ヨンスリ

済州市翰京面竜水里の入り口にマサキ、タブノキ、ツバキなど暖帯植物が群落を成していると

ジョルブアム

ところに節婦岩(済州島記念物第9号)という岩がある。この石には、漁に出て遭難に合った夫を待っていた妻が、結局自ら命を絶ったという切ない話が伝わっている。

チャギ

ガン サチョル

朝鮮時代末期、遮婦村の高氏は、漁師の康士喆と結婚し仲睦まじい家庭を築いた。ある日、夫は漁に出たが、高波に遇って漂流した。高氏は数日間、海岸を徘徊したが、夫は見つからず、結局、竜水里の浜辺の「オンドクドンサン^シ丘」で首をつってしまった。すると、その木の下に夫の遺体が浮かん^シだ。これに感心した判官慎裁祐が岩に「節婦岩」と刻むように命じ、夫婦を合葬した。そして魂を慰めるために祭壇を用意し、竜水里住民に毎年3月5日に祭祀を営ませた。

シンチャンリ

コサンリ

節婦岩の周辺道路はドライブコースとしても有名だ。新昌里から竜水里を経て高山里に抜ける

チャギド

海岸道路と霧囲気のあるゴクミンド灯台を経て、遮婦島を眺めながら走る海岸道路は済州だけで体験できるドライブコースだ。

ナブプリ

グムサン

納邑里暖帯林(錦山公園)、先人の息吹を感じる

村に隣接しており、天然林がよく保存されている。原植生の遷移過程がよく残され、学術的価値が高いホオノキ、アラカンなどの暖帯性樹種が多様なため、天然記念物第375号に指定

された。

ここは禁山と呼ばれていたが、今は意味が変わって錦山と呼んでいる。約700年前に村を造成するとき、風水地理上、村の厄除けとして森をつくったと言われていた。先人たちの陰の努力でできた森なのだ。そのため、村の災害を防ぎ、森を守るために、いかなる人であろうと木を切ることが禁られ、禁山と呼ばれた。しかし、歳月が流れ、森はますます美しい錦に変わり、錦山と呼ばれるようになった。



錦山公園の暖帯林

ヨミジ

如美地植物園、南国の饗宴を満喫する

約2,000種の植物を展示する東洋最大の温室だ。中央ホールの展望台を基準に円形の室内植物園と野外庭園で構成されている。

高さ38mの展望台に上れば、中文観光団地はもちろん、西帰浦の沖合、遠くに加波島、馬羅島まで一望できる。

室内は、一年中花の散らない

「花の庭」、世界最大のアマ

ゾン産オオオニバスとオニバス、

ホテイアオイなどの様々な水草で

いっぱいの「水生植物園」、

空中で育つピカクシダをはじめ、

熱帯原始林とジャングルの食虫

植物が育つ「熱帯庭園」、バ

ナナ、マンゴーなどの熱帯果実

が見られる「熱帯果樹園」、約130種以上のサボテンでいっぱいの「サボテンの庭園」など

がある。また、温室の中では、モウセンゴケのような食虫植物コーナーや、済州の昔の趣など



如美地植物園

をテーマにした展示会をはじめ、コンサート、多彩な芸術文化行事が行われる。

野外には済州の石垣と野生花で飾られた「済州自生植物園」をはじめ、芝生広場、韓国式、日本式、イタリア式、フランス式庭園がある。

翰林公園、砂畑が植物テーマ公園に変わる

天を突くような勢いで伸びるヤシの道、珍しい植物の王国である亜熱帯植物園、国家指定文化財の天然記念物第236号である挾才・双竜窟の地下世界、世界各国の石と盆栽芸術、



翰林公園

済州の伝統生活を垣間見る
ジェアム
財巖民俗村など見どころが豊富で、四季折々の美しい花の饗宴が楽しめる。

観覧施設には、ヤシの道、盆栽と石をテーマにした5千坪の敷地で約500点の盆栽と、約100点の自然石が鑑賞できる済州石・盆栽園、消えていく済州伝統家屋の茅葺きを保存するため、実際の茅葺を原型そのまま移設、復元した財巖民俗村がある。

ノロジカ生態観察園、漢拏山の主人・ノロジカに会う

ボンゲドン

済州市奉蓋洞に位置するノロジカ生態観察園は、面積52haの飼育棟などノロジカの保護施設と管理・便宜施設を備え2007年にオープンした。約200頭のノロジカが自然の中で自由に戯れるのを観察できる観察路、常時観察園が造成されており、ノロジカの生活をひと目で分かる映像展施設などが揃っている。

天恵の大自然の中で家族とともに済州のノロジカと触れ合うこの公園は、50haの森林と様々な動植物が自然のまま保護されており、自然学習、生態体験、オルムの登山が楽しめる空間だ。

ギム ヨンガブ

金永甲ギャラリー「ドゥモアク」、平和を願望するパラダイス

金永甲ギャラリー「ドゥモアク」は、2002年8月
サムダル
に廃校になった表善面所在の三澁小学校が文化ギャラリーとして生まれ変わったところだ。済州出身ではないが、済州のオルムを一つの写真芸術として昇華させた金永甲作家の作品が展示されている。

フヨ

金永甲は、1957年忠清南道扶余生まれで、1982年から済州島を行き来しながら写真を撮り、1985年に済州に定着した。その後、浜辺、中山間地域、漢拏山、馬羅島などを巡り、オルム、老人、海女、海、雲、風、野原、馬羅島など済州島のすべてを写真に収めた。筋萎縮性側索硬化症という診断を受けても、自分の分身とも言えるフィルムや写真を守るために2001年の冬、廃校を賃貸し、翌年の夏に金永甲ギャラリー「ドゥモアク」を開館した。

それ以降、すべての治療を拒否したまま、自らの自然治癒力に頼り、ギャラリーを守ってきたが、2005年5月29日に自然の懷で永遠の眠りについた。彼の遺骨はギャラリーの彼が好きだった柿の木の下に撒かれた。

展示室では、作家の作品や、生前の研究室、映像などを鑑賞することができ、定期的に作家の撮影地を訪れるプログラムもある。



金永甲ギャラリー内の造形物

日出ランド、天使の笑顔を浮かべる

ミチヨングル

日出ランドは、美千窟を中心に都市では想像できない神秘的な憩いの場として造成された。天然溶岩洞窟である美千窟、済州在来種の樹木、済州の民俗文化を素材にした済州型テーマパークだ。

美千窟は千の美しさを持っているとして名付けられた。1,714mの主洞窟と415mの副洞窟で構成されており、副洞窟は365mまで見ることができる。洞窟の入口には済州の55万の玄武岩をぎっしり積み上げた高さ5～7mの防邪塔と石壁があり、洞窟の内部は溶岩棚や鍾乳石、石



美千窟

並ぶ亜熱帯散策路は、異国的な雰囲気デート場所として親しまれている。様々なサボテンを一堂に集めたサボテンハウスも異色の空間といえる。

筍、多層窟などの美しい溶岩洞窟の特性を有している。

洞窟の周辺は郷土樹種で造林されており、サボテンハウス、亜熱帯植物園、水辺公園、池広場、アートセンター、済州玄武岩盆栽庭園、噴水、芝生広場、民俗遊び体験、みかん農園、散策路など、様々な便宜施設・文化施設がある。特にワシントンヤシ、カナリーヤシ、シュロなどの亜熱帯植物が立ち

済州4.3平和公園、真の和解と共生を念願する

済州4.3平和公園は、1948年に起こった済州4・3事件の真実を究明し、犠牲者の魂を称え、遺族を慰めるための追慕空間を設けることで、真の和解と共生そして人類の平和を念願しようと設立された。

観覧順路は、まず、歴史的事件に沿って済州4・3事件が起こる以前に遡る「歴史の洞窟」、次に、日本統治時代からの解放と自治、米軍政の実施、済州4・3事件の導火線と

なった1947年3月1日の発砲事件と全面ストライキなど緊迫した状況を演出した「動揺する島」、そして、5.10単独選挙に反対し蜂起した済州4・3事件、梗塞している南北関係などを演出した「風に吹かれる島」、さらに、討伐隊と武装隊の鎮圧と攻撃により済州島民が虐殺される過程を描いた「燃える島」、また、済州4・3事件60周年を迎え、真相が究明され



済州4.3平和公園

る過程、4・3特別法の制定と大統領の謝罪につながる「流れる島」、最後に、済州島の村共同体の念願を象徴するエノキを通じて済州4・3事件の記憶を治癒し、犠牲者の魂を慰めながら、新たな和解、平和を念願する「新たな始まり」となっている。

サムダス

済州三多水工場、済州の自然が作った生命水を味わう

済州特別自治道開発公社が運営している済州三多水工場では、1998年発売以来、韓国市場で不動の1位を続ける「済州三多水」を製造している。済州三多水は、巨大な済州島の火山岩盤によって自然にろ過された地下水、つまり純粋な火山岩盤水だ。火山活動でできた数十重の玄武岩層を通過することで、各種の不純物が完全に削除されるうえ、天然ミネラル成分が自然に溶けこんでいるため、のどごしがなめらかなうえ、きれいなのが特徴だ。おいしい水の指標であるO-indexの値(2以上であればおいしい水)が7.81で、国内外の他のミネラルウォーターに比べて高いことと、弱アルカリ性(pH7.1～8.5)だということがそれを裏付けている。このような特性によって韓国ミネラルウォーター市場でシェア1位、選好度1位、満足度1位を継続的に維持し続けており、2009年には50.7%の市場シェアを記録した。売上高(2011年1,452億ウォン)は、毎年上昇している。

済州三多水工場は1996年12月に着工、1998年1月に竣工し、1998年3月に「済州三多水」の市販に入った。同年、米国FDAと日本の厚生省水質検査基準に合格しており、最近では物流システムの改編と米国、中国、日本など海外への輸出にも力を注いでいる。

スマートグリッド広報館、済州の風がスマートなエネルギーに変わる

将来の代替エネルギー源としてのスマートグリッドとは何か、なぜ必要なのかを説明し、再生可能エネルギーの生産から消費までの過程、そして国家のビジョンと実証事業を国民に広報するために設立された。

スマートグリッドは、人類に必要な電気エネルギーを節約し、化石燃料の代わりに風力、太陽光といった再生可能エネル



スマートグリッド広報館

ギーを最大限に普及するための次世代電力網だ。つまり、従来の電力網(Grid)に情報通信技術を賢く(Smart)結びつけ、電気の供給側と需要側がリアルタイムで双方向に電力網の情報を交換することで、エネルギー利用効率を最適化するシステムだ。

ヘンウォン

杏源風力発電団地、風が済州の未来をリードする

韓国初の風力発電団地であり、韓国では最大規模を誇る。風力発電のメカニズムは空気の力学的特性を利用して発電機の翼を回転させ、空気の運動エネルギーを翼の運動エネルギーに変えることで、発電機を稼働させて電気を発生する装置だ。風力、太陽光などの資源を利用し



旧左邑杏源里一帯の風力発電団地

て電気エネルギーを生産することにより、安定した電力供給と二酸化炭素の排出量を画期的に減らそうという国家エネルギー政策が求められた。これを受けて、済州は1995年に済州道のエネルギー計画を策定し、1996年に済州の無限の風力資源をクリーンな代替エネルギーに開発・供給するための風力発電の実用化事業に取り掛かった。

1997年、旧左邑杏源里一帯を風力発電団地事業地に選定

し、杏源地域に600kW級風力発電機1.2号機を設置した。1998年8月から営業運転を開始し、韓国で初めて風力発電の商業化を実現した。その後、2003年4月までに計203億ウォンを投入し、現在、750kW級(柱の高さ45m、翼24m)5基、660kW級7基、600kW級2基、225kW級1基の計15基、10MW規模の風力発電機が稼働している。発電機15基で1万8561MW/hの電力を生産しており、これは7千～8千世帯が1年間使用できる電力容量だ。

済州市環境施設管理事務所、ゴミもお金だ

ゴミ埋立地、生ごみ処理場、市民環境体験場が個別に運用されていたが、2007年に済州市環境施設管理事務所に統合され、管理されている。生ごみ資源化センター、資源リサイクル選別場、廃プラスチック処理場で構成された「資源リサイクル選別場」、ゴミ埋立地と焼却

場、市民の環境体験教育センターなどに区分、運営されている。

生ごみ資源化センターでは、2000年2月から生ごみを処理して堆肥を生産し、農家に供給することで、資源リサイクルの促進はもちろん、農業生産性の確保と農家の所得増大に寄与している。

ゴミ埋立地は、1992年8月から埋め立てを始め、生ゴミを処理している。埋め立ての過程で発生するメタンガスの資源化事業は、悪臭問題の解決、埋立地周辺の環境および嫌悪施設というイメージの改善、気候変動枠組条約に対応する温室効果ガス排出量の削減、資源リサイクルを通じた代替エネルギーの開発、埋立地の早期安定化などに貢献している。そして、埋立地から発生する浸出水を貯蔵する施設では、年間20万1000m³規模の貯蔵・処理が行われている。



エピローグ

風を受けて息づく自然環境の宝庫

済 州は200万年前の火山の胎動から、5000年前の火山活動の終焉までの痕跡が、ありありと残す新しい神秘の火山島である。

この島には数多くの種の生物が生息している。済州島の持つ生物世界は多様かつ独特だ。地理的な位置と高くそそり立つ漢拏山の影響で、この島には寒帯から温帯、暖帯、亜熱帯にいたるまで、あらゆる生物種が生息している。その生物種には南方限界種北方限界種、そして地

地球上で唯一、この島にだけ生息する固有種があり、その多様性をさらに高めている。
濟州は風の島でもある。濟州島が誕生する前にも吹いていた風は、海とともに島が誕生する過程を優しく見守りながら神秘的な自然生態系をつくり上げ、独特な歴史と文化をもたらした。
あらゆる生物種を抱き、風を受けて息づく火山島・濟州の自然と、その中で独自に形成された歴史と文化に触れれば、自然遺産の偉大さを感じ、文化遺産に感動せずにはいられない。また、生命と環境を愛さずにはいられない。
濟州島が生物圏保護区、世界自然遺産、世界ジオパークなど、世界で初めてユネスコ自然科学分野で3冠に輝いた理由はここにある。濟州は世界を感動させ、世界中の人々が大切に保護すべき自然環境の宝庫だ。

濟州生物圏保護区

濟 州は2002年に生物圏保護区に指定された。「生物圏保護区」とはユネスコの「人間と生物圏計画」に基づき、生物多様性の保持と自然資源の持続可能な利用が併行されている陸地および海洋生態系を指す。

濟州島の生物圏保護区には、漢拏山天然保護区域、ヨンチョン 靈川、ヒョドンチョン 孝敦川の二つの河川、ムンソム 蚊島、ソプソム 森島、ボムソム 虎島の三つの付属島が含まれる。そして、互いに関連する漢拏山、河川、島の三つの地域と、その周辺を中核地域、緩衝地域、移行地域に区分されている。中核地域には、高山性灌木林、常緑針葉樹林、落葉広葉樹林、暖帯常緑広葉樹林が分布しており、数多くの絶滅危惧種と固有種の動植物が生息している。中核地域を囲む緩衝地域は国有林のため、山地管理法により、保全山地として保護されている。移行地域では農業、漁業、林業活動が可能であり、住居地としても利用されている。また、持続可能な発展のために様々な機関と団体が活動する区域でもある。

濟州世界自然遺産

ユ ネスコ(UNESCO)は国連を代表する国際的な文化機関だ。ユネスコが主導する代表的な文化事業の一つが世界遺産の指定だ。

ユネスコの世界遺産とは「世界遺産条約に基づいて世界遺産委員会が、人類全体のために保護すべき顕著かつ普遍的な価値を認め、ユネスコ世界遺産一覧表に登録した文化財」をい

う。世界遺産はつまり「世界的な文化財」だ。

世界遺産条約は1972年に世界各国間で結ばれた条約で、全世界から公認を得ている。現在、世界遺産条約に加盟する国は188か国であり、韓国は1988年に102番目の加盟国になった。

ユネスコの他のプログラムはユネスコの各委員会で規定が作られ、運営されるが、世界遺産は「世界遺産条約」に基づく世界遺産委員会が総会を開いて決めるため、ユネスコの他のプログラムより重要であり、その性格も異なる。

世界遺産は文化遺産、自然遺産、複合遺産に分類される。文化遺産は有形の文化遺産であり、自然遺産は自然科学分野の遺産だ。複合遺産は一定の地域内で文化遺産と自然遺産の価値を兼ね備えているものをいう。



白鹿潭

ユネスコ世界遺産の登録にかかわる機関は、世界遺産の登録可否を最終的に決める「世界遺産委員会」と、諮問機関である「国際記念物遺跡会議」、「国際自然保護連合」などがある。世界遺産委員会は文化遺産および自然遺産の保護、世界遺産の登録申請物件の審議・決定などを目的としたユネスコ傘下の国際委員会で、21カ国の委員国からなり、任期は6年だ。

2011年現在、世界遺産には153か国936件が登録されている。そのほとんどは文化遺産で725件にのぼり、自然遺産183件、複合遺産は28件だ。

世界遺産は一覧に登録されれば、それで終わりというものではない。世界遺産条約の当事国は自国内の世界遺産の保護状態や保護活動について定期的に世界遺産委員会に報告しなければならない。この報告によって、世界遺産委員会は遺産の状態を評価し、問題がある場合は、どのような措置を取るかを決める。その措置の一つが「危機にさらされている世界遺産」リストに掲載することだ。危機遺産リストに登録されれば、毎年、保存状況についての報告が要求される。

実際に、現在936件の世界遺産のうち、危機遺産リストは35件(文化遺産18, 自然遺産17)もある。世界遺産への登録も難しいが、管理・保持もそれに劣らない。

韓国では現在10件が世界遺産に登録されている。そのうち、9件が文化遺産であり、1件が自

然遺産だ。済州の世界遺産は韓国で唯一の自然遺産だ。

済州、世界自然遺産への登録まで

済州の世界自然遺産登録に向けた準備は2001年から始まった。その年の1月に済州自然遺産地区など7件を暫定リストとして確定し、本格的な議論を進め、検討を経て、2002年3月からは本格的な取り組みを始めた。

まず、従来の学術調査の内容をまとめ、その年の12月から2003年11月まで済州世界遺産の登録対象地域に関する総合的な学術調査を行った。調査結果をもとに、済州自然遺産地区のうち、世界自然遺産として価値のあるテーマと地域を選んだ。この作業で、済州の様々な火山活動の痕跡と溶岩洞窟の2次生成物などが世界自然遺産としての価値があるとされ、漢拏山、サングムブリ、拒文岳溶岩洞窟系、城山日出峰、柱状節理帯、山房山、水月峰の堆積岩層などが暫定的に自然遺産の登録申請物件に決定された。

ゴムシオルム

ソンサンイルチュルボン

サンバンサン

スウォルボン

1次総合学術調査の資料をもとに、2004年に済州世界自然遺産地区の登録申請の草案が作成され、登録推進委員会、登録推進実務委員会などを構成し、管理計画書などの検討とともに本格的に登録申請書の作成に取り掛かった。

2005年からは世界自然遺産の登録申請書の補完作業と管理計画書の作成など2次作業が進められ、済州自然遺産と世界自然遺産との精密な比較調査、地元の人々との協議を通じて管理計画と自然遺産に関する教育が行われた。

このような過程を経て、漢拏山、拒文岳溶岩洞窟系、城山日出峰が最終的に申請対象地として確定された。

準備から6年が経った2006年1月、ようやく済州世界自然遺産の登録申請書をユネスコに提出した。そして、済州が世界自然遺産の候補地であることを広報する活動に加え、道民説明会などを開き、済州が世界自然遺産に登録されるように、道民の理解と参加を促した。

特に、その年の10月に予定されたユネスコの済州現地調査を控え、8月16日から登録を願う署名キャンペーンが行われ、道民はもちろん、国内外の150万人以上がこれに参加した。世界自然遺産登録への熱烈な支持を表明するこのような署名キャンペーンは、これまで類のないことで、ユネスコの現地調査でも強い印象を与えた。

現地調査以降、2006年12月から始まった1次パネル会議を皮切りに、済州世界自然遺産の登録可否を決定する一連の活動が進められた。2007年に入り、2次パネル会議などでIUCN審査報告書がまとめられ、その年の6月23日からニュージーランド南島のクライストチャーチで開かれた第31回世界遺産委員会クライストチャーチ会議で、全会一致という圧倒的な支持を得、済州の世界自然遺産への登録が最終的に決定した。

世界自然遺産「済州火山島と溶岩洞窟群」

2007年7月2日に登録された済州世界自然遺産の名称は、「済州火山島と溶岩洞窟群(Jeju Volcanic Island and Lava Tubes)」だ。済州に残っている火山活動の痕跡が、こうして世界遺産として認められたのだ。



竜泉洞窟

済州火山島というのは済州の美しい火山地形をいう。溶岩洞窟群は火山活動の産物の中で特に溶岩洞窟の発達が顕著であることを指す。登録された地域は大きくは済州全域だが、3か所の中核地域が指定された。漢拏山、拒文岳溶岩洞窟系、城山日出峰がそれだ。

遺産地区の全体面積は、188.46km²で済州島の全面積の10%に当たる。比較的に面積が大きい理由は漢拏山天然保

護地域のほとんどが含まれているからだ。ユネスコ世界自然遺産は中核地域、緩衝地域に分けられるが、中核地域は94.75km²で、緩衝地域は93.71km²を占める。

済州・世界ジオパーク

ジオパークというのは地質学的・学術的な価値だけでなく、稀少かつ審美的な価値を持つ地質遺産で、文化財として保護される地域をいう。さらに、保全、教育、持続可能な発展という概念が含まれる。

世界ジオパークは地質学的に優れた価値を持つ自然遺産地域を保護し、それをもとに、観光を活性化させ、住民所得を高めることにその目的を置くユネスコのプログラムだ。2004年、ユネスコとヨーロッパジオパークの協力を得て世界ジオパークネットワークが設立され、2011年現在、全世界の26か国が加盟し、78か所が世界ジオパークとして認められている。

世界ジオパークは保全、教育、ジオツーリズムといった三つの目標を追求する。重要な地質学的な特性を保全するために地質遺産の優秀な事例を知らせ、一般人に地質学的な知識と



水月峰の凝灰岩

環境の概念を伝えるために活動要領を作成し、適切な支援をしなければならない。三つ目の目標のジオツーリズムとは観光地のうち、ジオパークの特徴を有する場所を対象にした観光を意味する。

ジオパークの特徴は地質遺産、自然景観、地球科学の大衆化以外にも地域社会の歴史と文化を含むため、ジオツーリズムは次のような点に重点が置かれている。

まず、地球の形成と進化に関する科学的知識をもとに、地質遺産を保全しようとする観光客の意識と能力を高めるために、特別な価値を有する地質遺産を活用することだ。

第二に、美しい自然を楽しむために、ジオパークの景観を利用するもので、奇異な峰、幻想的な洞窟、溪谷と滝、泉、氷河、火山、変化に富んだ山、岩を活用することだ。

第三に、その土地ならではの歴史や文化を十分に満喫しながら観光することだ。

言い換えれば、ジオパークはジオツーリズムを通じて地域の経済活性化や持続可能な発展を促すものだ。

世界でも珍しい済州世界ジオパーク

ジオパークは広い地域を一つのジオパークとして指定する傾向があるため、ジオパーク内に中核地域など、いくつかの地質地域を定め、これを中心に地質学的な価値を説明し、地質観光地として活用している。

済州は2010年10月にユネスコから世界ジオパークに認められた。

多様な火山地形と地質資源を保有する済州は、島全体がジオパークであり、済州のシンボルである漢拏山、水性火山体の代表的な研究地として知られる水月峰、溶岩ドームの典型といえる山房山、済州が形成された当時の水性火山活動の鍵を握る竜頭海岸、柱状節理の形態的な特徴を見せる大浦柱状節理帯、済州の形成とともにできた地層であり、100万年前の海洋環境を残す西帰浦層、堆積層の侵食と溪谷・滝の形成過程を見せる天地淵滝、水性火山体タフコーンの代表的な地形であり、優れた景観を誇る城山日出峰、拒文岳溶岩洞窟系のうち、唯一体験できる万丈窟の9か所の代表的な地質名所が観光客を呼び寄せている。

その一方で、中山間地域の火山平原に連なるオルム、済州の息吹きの源であり、生態系の宝庫であるゴツチャウル地帯、人の足跡の化石地、ユニークな火山地形であるサングムブリ噴火口、牛島、飛揚島など、済州でも重要な地形とされる火山地質学的な資源は世界的にも希少であり、済州のジオパークならではの価値を高めている。

參加者

姜	京	希	康	萬	益	康	文	奎	康	文	七	姜	淳	錫
康	承	鎮	姜	定	孝	康	貞	榮	姜	昌	旻	康	昌	和
高	光	敏	高	基	沅	高	高	榮	高	成	寶	高	時	洪
高	寅	淙	高	熙	松	權	權	烈	金	男	洙	金	東	栓
金	範	勳	金	完	柄	金	金	石	金	俊	澤	金	志	澤
金	贊	秀	金	昌	集	金	弘	洙	文	泰	秀	金	泰	閏
文	泰	一	金	泰	鎬	金	元	久	朴	武	秉	文	素	然
徐	舜	德	朴	商	洙	朴	東	培	安	贊	殖	白	圭	尙
梁	在	哲	宋	時	泰	申	洙	一	吳	雄	山	梁	永	子
吳	種	烈	嚴	相	根	吳	熙	政	尹	順	子	吳	昇	勳
李	榮	周	吳	昌	命	李	芝	三	任	元	洙	李	文	教
張	聖	用	李	允	珩	鄭	求	勳	鄭	英	伊	張	齊	根
趙	惠	連	鄭	光	中	秦	寬	和	崔	尚	倍	鄭	丞	勳
玄	美	影	左	惠	景	玄	靜	徹	玄	榮	根	許	南	春
玄	惠	桓	洪	琦	杓	洪	榮		黃	爽	奎	玄	海	男

翻譯

李礼安

天野陽子

金順任

鄭恩珠

2012 済州WCC生態・文化探訪の道連れ

世界の人々の宝島、済州の物語

印 刷 〓 2012年 8月 日

発 行 〓 2012年 8月 日

発行人 〓 済州特別自治道知事 禹 勤 敏

済州発展研究院長 梁 永 五

発行処 〓 済州特別自治道/済州発展研究院

印刷処 〓 日新印刷社 ☎ (064)758-1500

発刊登録番号 〓 79-6500000-000188-01